

364
534



始



特233
689



東京圍碁研究會編

獨習手ほどきから初段まで

東京泰文館



序

圍碁は、古代より夙に行はれ、職業の差別なく、階級の如何を問はず、あらゆる人士の間に普及して、未だ嘗て盛衰興亡あるを聞かず。是れ其技の高尙にして趣味に富み、精神の陶冶に大なる益を與ふるのみならず、眞に消閑遊樂に適すればなり。而して其技たるや極めて入り易く、手一度碁器に觸るれば其快其樂忘るべくもあらず。然れども對局布陣の方途は多種多様にして、其技の奥は窮め難し、名人上手に至るは幾年の修養研鑽を積むべきことは言を待たず。余多年斯技に親しみ、古今名人の迹を尋ね、自ら研究する所を一書に蒐め本書を編述し以て初心者入門の階梯とし且其研究に資せんと欲す。

本書は本技の起原、碁器の用語より初め、定石、布石の方法、對局實戰の秘訣等に至る迄、あらゆる場合を最も平易簡潔に記述し且つ圖を以て之を補ひたれば、如何なる初心者と雖も、之に依つて研鑽攻究を加へらるれば、其技の理解上達期して待つを得ん。敢へて大方各位に本書を提供すると共に、普く本邦人士の本技によつて高尚なる趣味、娛樂と精神修養に資せられんことを切望して、己まざるなり、卷頭に一言を叙して序とす。

昭和七年夏

編者識

圍碁
習本位

入門から初段まで 目次

圍碁の起原に就いて.....	一
本因坊と四家及び段級の説明.....	三
碁器及用語.....	五
對局作法の説明.....	一六
圍碁必勝十訣.....	二〇
圍碁の極意に就いて.....	二一
圍碁勝負上の要約.....	二五
生死のこと.....	二六
點のこと.....	二八
勝負の事.....	三三
圍碁實戰の準備に就いて.....	三四
定石の事.....	三四

二

置石 <small>＝</small> 相先の基本と變化の打堅等の説明	十三項	三七
第一 小斜走掛	四項	三七
第二 大斜走掛	四項	五四
第三 大々斜走掛	四項	五九
第四 一間高掛	四項	六四
第五 二間高掛	四項	六九
第六 大斜走締打込	四項	七三
第七 大斜走締兩立	四項	七八
圍碁用語解	四十項	八三
布石に於ける 締り及懸り	三十三項	九三
活の研究	八圖	一〇三
攻合の研究	十六圖	一〇五
盤 <small>わら</small> りの研究	八圖	一〇九
應手の研究	八圖	一一一

續 <small>き</small> の研究	八圖	一一三
置碁小斜走掛り	五圖	一一五
置碁井目の石立	卅二圖	一二六
提る手の研究	十圖	一二七
征の研究	五圖	一二九
攻合の研究	四圖	一三一
劫の研究	六圖	一三三
盤の研究	四圖	一三五
路、目、本目、缺目	廿七圖	一三六
活死の研究	二十圖	一四三
詰碁生之圖	十一圖	一四八
詰碁死の圖	十圖	一五一
生死の手筋	十一圖	一五四
持の研究	十一圖	一五四

三

損な打方の研究	十四圖	一五九
寄手損徳の圖	十六圖	一六三
詰碁大點の圖	六圖	一六七
詰碁劫の圖	四圖	一六九
詰碁攻の圖	八圖	一七一
詰碁盤の圖	十六圖	一七三
詰碁追落之圖	八圖	一七七
詰碁の圖	四圖	一七九
詰碁爽の圖	二圖	一八〇
詰碁斷の圖	六圖	一八一
定石の研究に就いて	四圖	一八三
互先の定石	二十六圖	一八四
圍碁上達に就いて		一八八
		二〇三

圍碁の話		二〇九
定石の研究	二十圖	二一五
置碁の打始の注意		二二五
互先の打始の注意		二二六
布石の研究		二二七
九目の布石(井目)		二二七
五日の布石		二二八
四目の布石		二三二
三日の布石		二三六
二目の布石		二四一
互先の布石		二四六
實戦の研究		二五二
布石に就いて		二〇三
四子		二〇四

三	子	三三二
二	子	三三八
互	先	三四四
八段 本因坊秀和 五段 村瀬秀甫 對局			
互	先	三六〇
互	先	三六九
七	子	三七一
二	子	三七三
互	先	三七五
八	子	三七八
五	先	三八〇
五	先	三八二
三	子	三八五

二	子	三八七
四	子	三八九
白初段四子黒			
互	先	三九二
四	子	三九四
四	子	三九六
白初段に凡井日互先			
四	子	四〇一
互	先	四〇二
七	子	四〇四

●圍碁の起原に就いて

碁には天地方圓の象あり、星辰分布の序あり山河羅列の趣あり、風雲變化の機あり
 世道の興廢、人事の浮沈、悉く皆之に寓し居らざるはなし、この故に古支那に於ては
 堯舜を作りて其の子丹朱育均に教へ、之に依りて消閑遊戯の一具に供すると共に多
 大事に資益する所ありしめたり、爾來漸く碁道世に行はれ元の文宗帝の如きは、政
 務の餘暇、名人上手を闔下に延きて、碁を闘はせ、其の經營措置の法、攻守審決の道
 を見て、政令施設の機、軍師練武の法に資する所あり。且つ其の侍從虞集に命じて、碁
 器に銘を撰ばしめ、碁の要天章は嚴徳甫と碁を闘はすの傍、碁經を著はして世に公布
 にし以て世の碁を學ぶものをして指南盤たらしめたり。

我が遣唐使節吉備大臣、孝徳天皇の天平勝寶六年（今より千二百年前）支那より歸
 朝するや、碁器を齎し來る、これ我が日本に碁の傳はれる始めとす、爾後六七百年が
 間は多く行はるゝに至らざりしが、元龜、天正の頃より慶長、元和の時代に至りて本

因坊中村道碩、安江算哲、林元利等の名人上手出で、世に其の技を廣むるに及んで、漸く盛んとなり、徳川幕府は特に本因坊等を優待し、巧手を叙して九等と爲し、其の七を上手といひ、其の九を明手といひ、其の八を間手といふ、本因坊道碩の後は、井上因碩と稱し、代々其の號を襲ぐ、六世因碩は一世の上手と稱せられ、大に碁道を改良せり、爾後盛衰一ならずと雖も、能く其の制を保ち、以て今日に至れり。

碁所は徳川氏に至りて確然設けられたるものなれども其濫觴は既に豊公時代に萌せしものゝ如く又手合の掟も同時に定りたるものゝ如し。

今は昔豊臣太閤の時めきし頃本因坊算砂法印日海は碁うちで名高きものなれば太閤天下の上手などを選びて試みの碁手合せしめけるに本因坊は諸人に優れて勝ちこしたれば其技の妙なるに感じ初めて碁所といふを置き本因坊算砂に朱印の證文をさづけ扶持を加増せられたりとぞ其證文には閏五月十八日とのみ記して年號を記さねば何れの年かさだかならず太閤が治世の間に閏の五月ありし年を推し考ふれば天正の十六年にあり、彼是と考へみれば太閤試みの碁手合は十三年にて碁所の證文をさづ

けられたるは十六年なり、十四年には太閤四國を定め、十五年には九州を一統したりければ關東の北條奥の伊達などは其まゝなれば、大かたは天下定まりたれど、十六年には聚樂第に 天皇行幸を請ひ奉りなどして、今まですたれたる禮樂遊技どもせられなどしければ碁所といふも設けおかれしと見へたり、手合などの掟手この頃よりかたく定まりけるが但仙也は師匠なるがゆへに算砂互先にて打つべしと太閤沙汰せしといふ、素より小技の末事にはあれど師弟の禮を正しをかれたる事として人皆感じいりぬとなん、徳川幕府にては草創より碁所を置かれ、本因坊を首座にて井上因碩、林門人、安川仙角の四家其技の上手としてたてをかれ、寺社奉行支配のもとに明治維新の時まではありとなん。

◎本因坊と四家及び段級の説明

本因坊と云へば一世の碁師中の白眉とも目されて居るから、己れの子に巧手が無ければ、弟子の中から俊才を抜擢して一家の體面を維持して居たが、相續上の争ひ等か

六
 ◎碁を打つには碁石と碁盤との二用具を必要とし、之を碁器といふ、碁石は其の總數三百六十にして、之を白石と黒石とに分ち、各々百八十個宛を具ふ、これ陰陽動靜の理に則りしものなり。

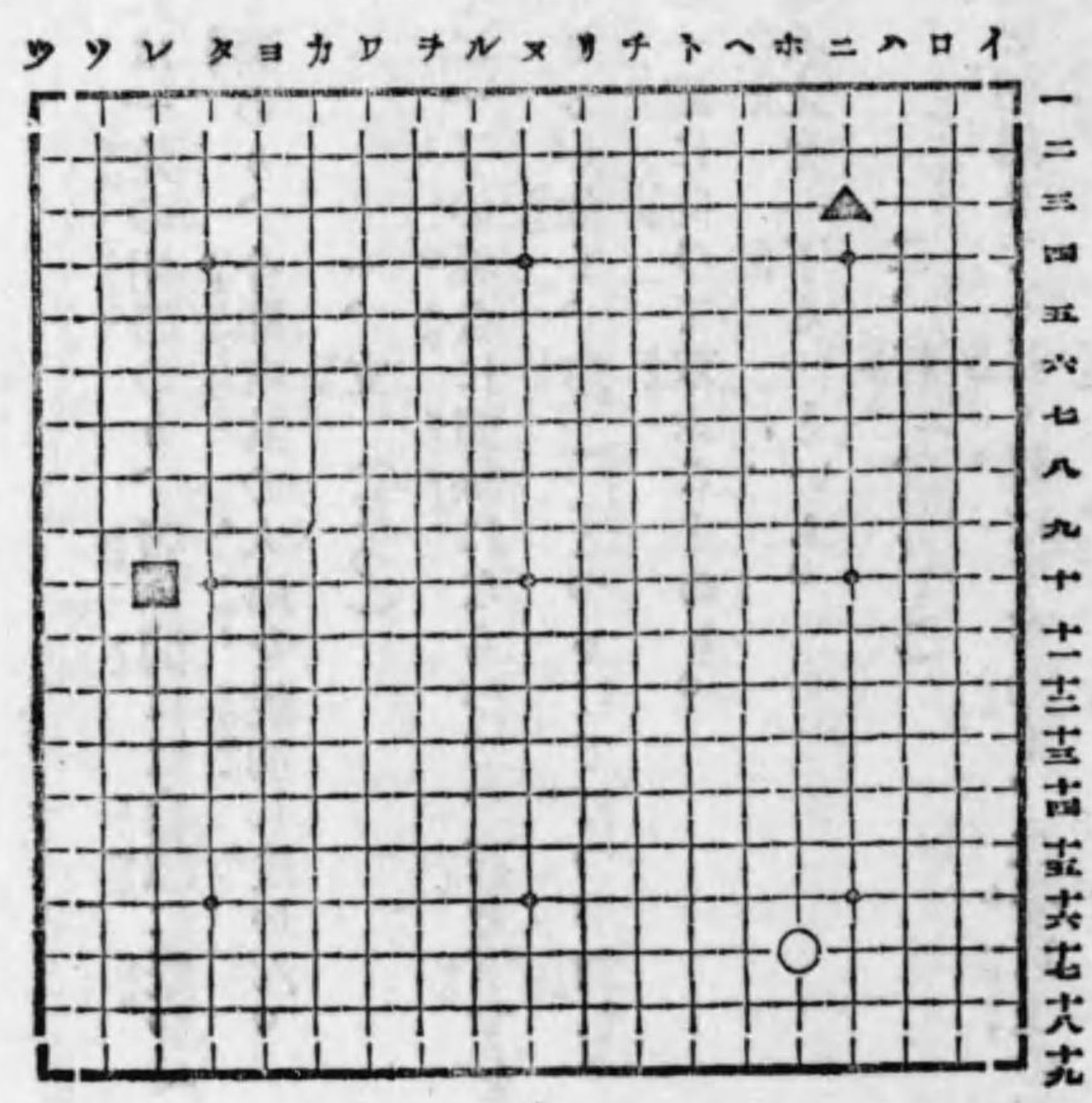
◎碁盤は圖に示せるが如く、縦横共に十九の黒線ありて縦の線と横の線と重り合ひて十字形を爲せる所之を目といふ、目は其の數三百六十一、いずれも碁石を打ち置く所なり、又黒線の上には九つの黒點あり、之を星といひ、自分より上手の人に對して碁石を置く所なり。

◎碁石を入れ置く所の器は、之を碁筭といふ。

碁盤の線を引たる表面を盤面といふ、盤面に石を配置する場合に説明の便を與へんが爲にこゝに示したる圖を基本とすべきが故に今少しく之を説明を爲し置くべし。

此の盤面に示せる十九の縦横は之を右より數へて、イロハニホヘトチリヌルヲワカヲタレソツの名を附し、十九の横線は天を一とし、以下數字の順に數へて、十九までの名を附すべし、之によりて「ニ」の三といへば▲印の所なることを意味し「ホ」の十七

といへば○印の所「レ」の十といへば■印の所を意味するものとなし置かん。



圍碁には一定の用語あり、習ふ間には自然に覺ゆべきものなれども、豫め一むたり辯へ置く要あり、今順次其の大略を説明し置かん。

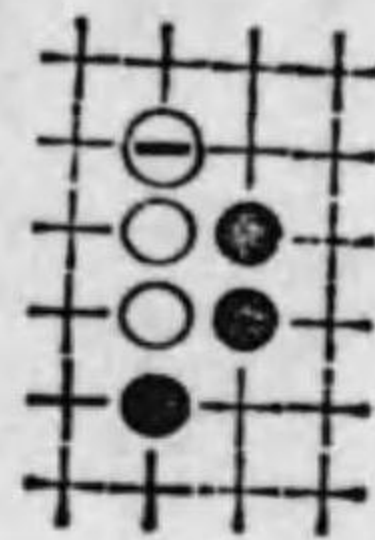
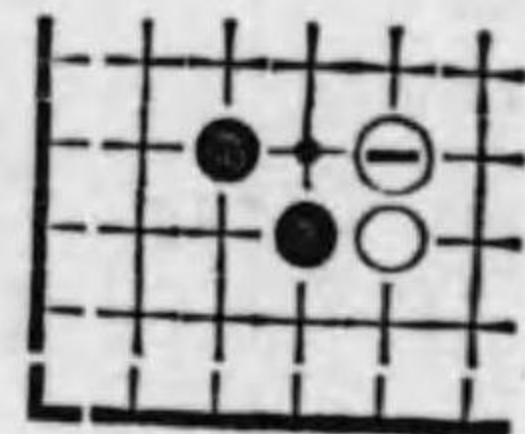
一、立 (たつ)

立つとは一子の場合に同線にならびて、石を下すをいふ、例へば下圖に示せるが如く、白「一」とつけて打つが如し、時として一子より盤の一端に向ひて双ふことあり。

この場合之を「下る」といふ。

二、行 (のびる)

糸の端を何處までも長く延ばすが如く、二子以上の石を同線に双び出づるを行といふ、假へば下圖の白「一」と續くるが如し、行は「一」に「出る」ともいふ。



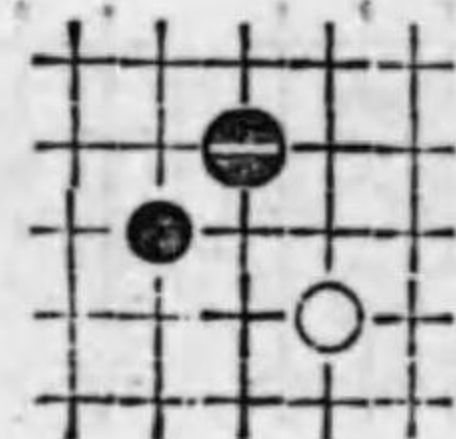
三、斜走 (けいま)

斜走は一に桂馬、又は飛に作る、筋違ひに石を打つをいふ、宛も將棊の桂馬の駒の飛ぶが如き形をなす、斜走を分つて大斜走、小斜走の二つとなす、下圖黒の置石より、一目を隔て、斜に飛び「一」の所に打つを小斜走といひ、更に一間飛び「い」の所に打つを大斜走といふ。



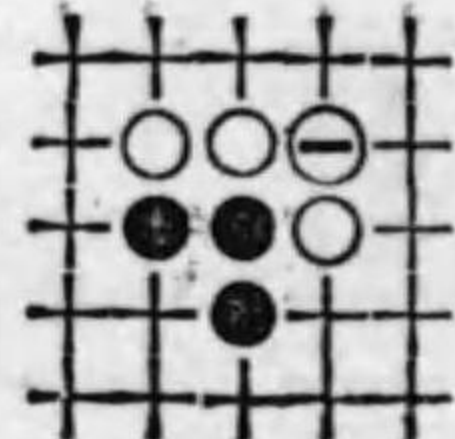
四、尖 (いづむ)

尖とは二目斜に石を双ぶる事にて、下地にある石の目に今打つ石の目とを合せて約やかに打ち、恰も石の形塞るが如くするをいふ例へば下圖黒石より斜に「一」と打つが如し。



五、粘 (つぐ)

敵石を打ちて、我が勢を斷らんとする様子あらば、我は更に石を打ちて連ね續くることをいふ、下圖白「一」と打つが如し。



六、幹 (わりこむ)

敵石の二子の間に己が石を割り込むをいふ、下圖に示せる如く、
黒石の二子の間に白「一」と打つが如し。

七、綽（はねる）

綽るとは我が石を敵地へ打ち込まずして手緩く敵をあしらひ、自然に敵の境を破り收る義にて、例へば下圖黒「一」と打つが如し、綽るは一に芻るに作る。

八、約（おさへる）

約の字、時として抑、捺押などをを用ふる事あり、讀んで字の如く敵の出でんとする抑へ止むるをいふ。

九、關（いつけんといびでる）

俗に一間飛びといふ一間を隔で、打つが故なり、下圖に示せるが如し。

十、沖（つきとほす）

下圖に示せるが如く、白石と白石との間に黒石「一」と割込むをいふ、敵石を兩斷する目的より起るなり、俗に割込といふ。

十一、覗（のぞく）

覗は一に覗に作る、敵の石を兩斷せんとして、先づ其の傍に石を打ち、覗き見るをいふ、下圖の如く白石のある場合に黒「一」と打つ類なり。

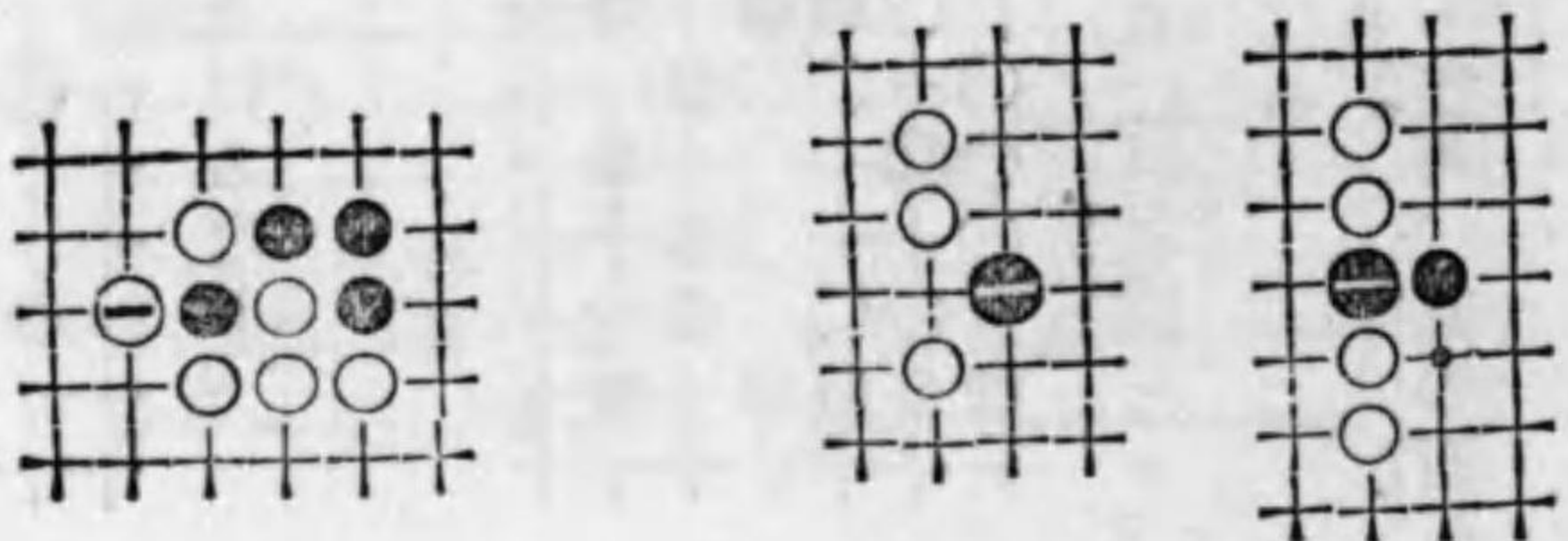
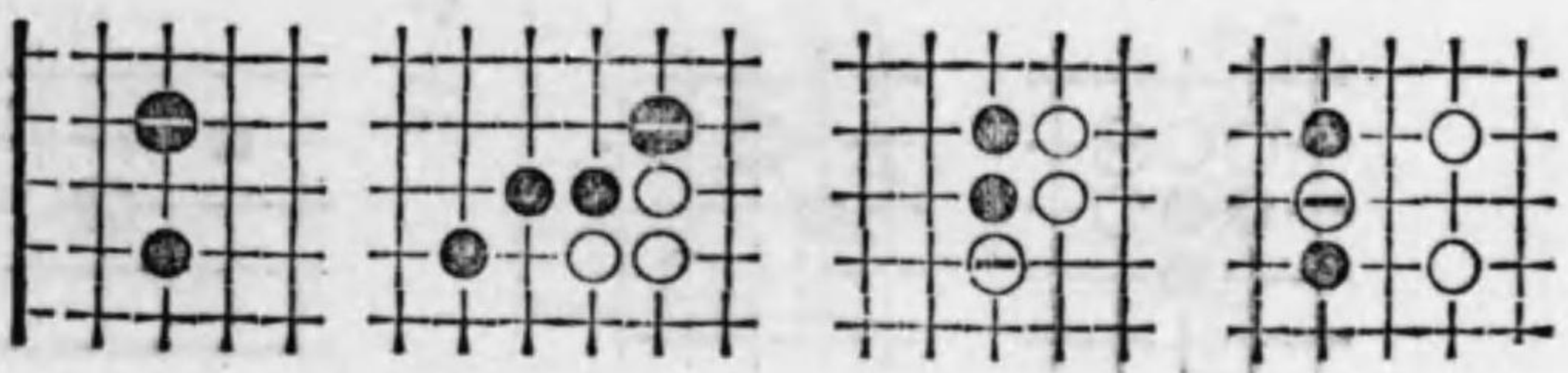
十二、提（とる）

提るとは、敵石を圍みて收り上ぐる義にて、下圖に示せるが如く黒石を三方より圍みて最後に白「一」と打ち、黒石を外に通す能はざる様になし、殺し去るをいふ。

十三、項（つける）

項るとは、敵の石に對し、同線に於て一子を付けて打つをいふ。

十四、門（はかす）



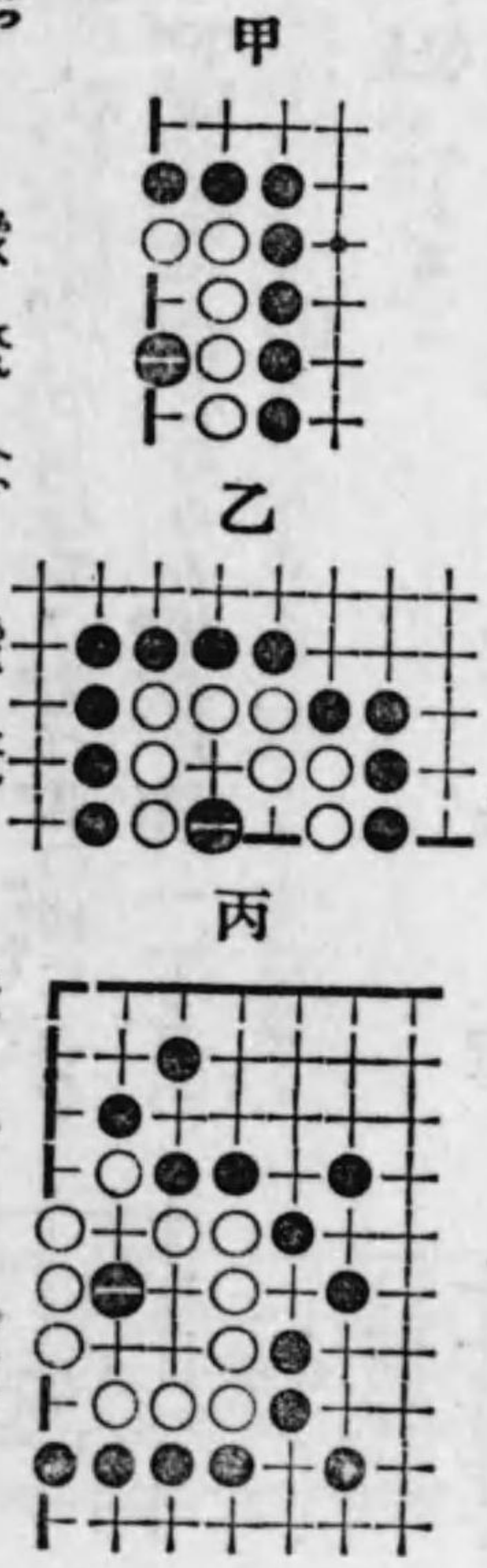
俗に「あした」又は「あしだはかす」といへるものにて一目隔てし所は、一間飛ばして其の出口を止め、二目隔てし所は、二間飛ばして其の出口を止むるをいふ、下圖の甲は、一間飛ばしたる場合、乙は二間飛ばしたる場合を例示したるものにて、共に黒「一」と打ちて、敵の出口を止むるなり。

十五、點 (なかで)



敵の地三目又は五

目の場合に我が敵地に一子を打ち込みて目をつぶし、終に敵を殺すをいふ右圖甲と乙とは三目の點、丙は五目の點にして共に黒「一」は其點なり。



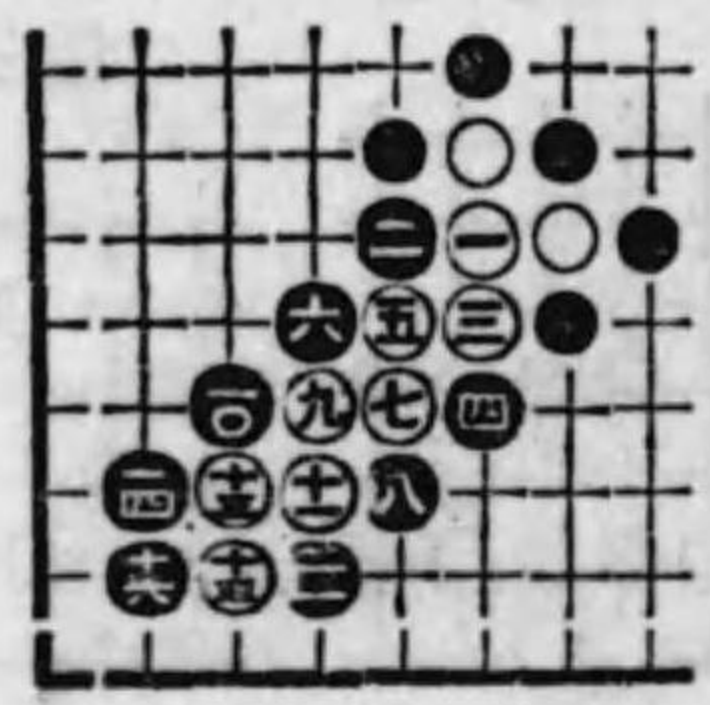
十六、聚 (おほなかで)

聚とは未だ打石の眼の備はらざる時、敵の地中へ幾石も一所に打ち集め、其の石を

敵に收らせ其の跡へ三目五目などを起し、其所へ前項示す所の點を應用する事なり

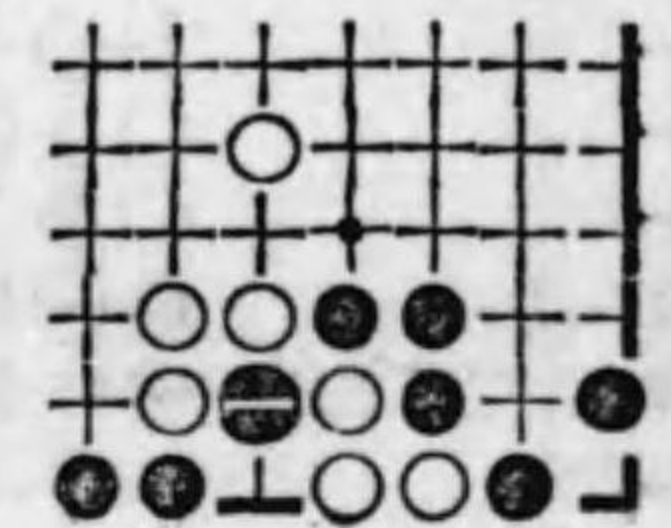
十七、征 (してう)

兩上より敵を逐ひて、左右より挟み撃ち敵をして逃ぐる追なからしめ、敵子出づれば直に追撃して終に死せしむるをいふ、下圖に示せるが如し。



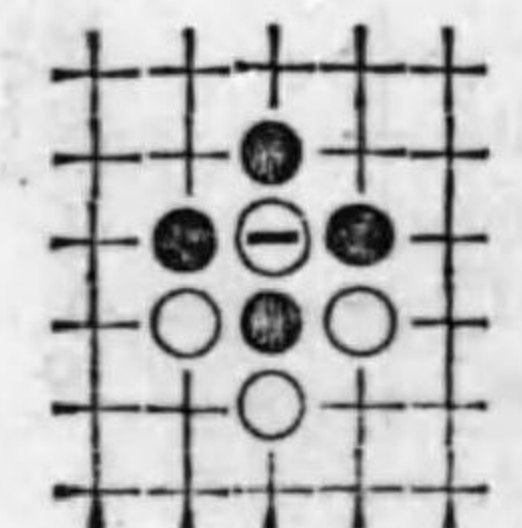
十八、撲 (うつてがへ)

撲とは打つて替へるの義にて、敵の目の中に我が石を投げ込み敵をして之を收めしめ、其の後に於て我が敵の石を收る事なり、下圖の示すが如く黒「一」と打たば、白は之を收らざる可らず、收らば直に前の三目と共に黒に收らるべく收らずして、其のまゝとなし、置くも黒に收らるるなり、故に黒の「一」は即ち撲なり。



十九、劫 (こう)

劫とは奪ふの義にて、我れ一子を收りたる後敵も亦同所にて一子



を収り返へし、互に収り盡し得ざる所をいふ、下圖に示せる白「一」は劫提なり。

二十、勒 (めをか)

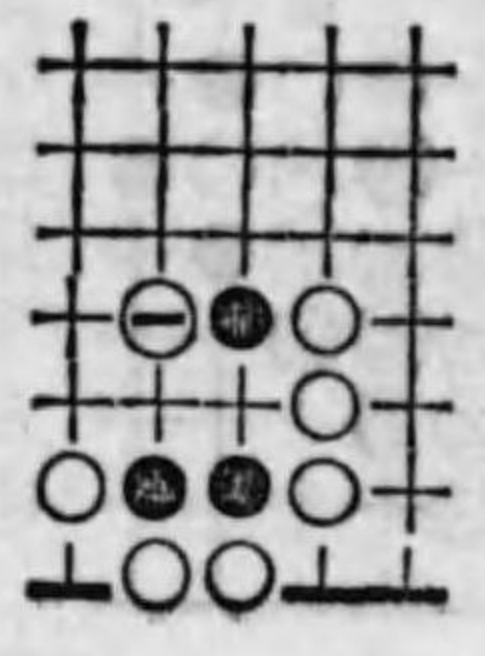
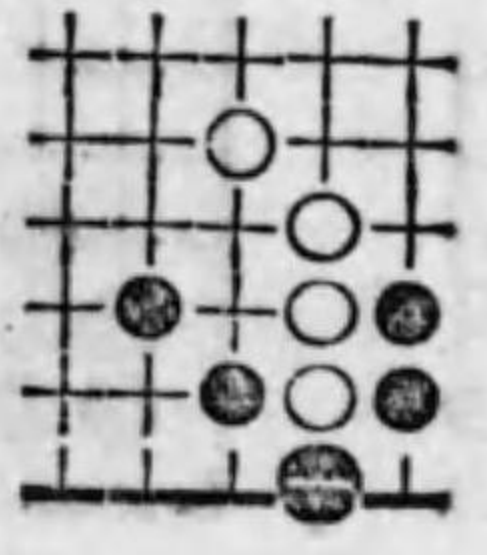
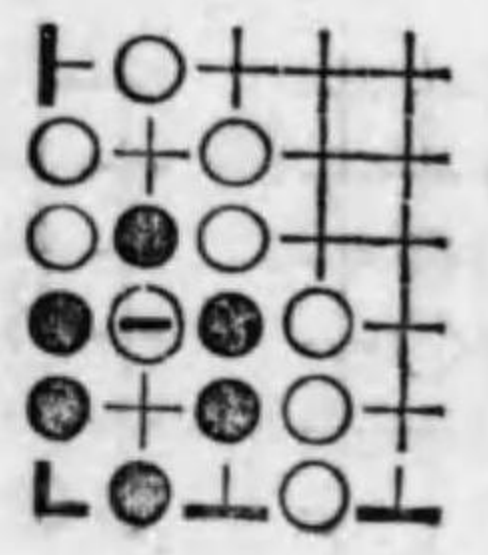
勒の字は、馬に鞭ちて自由ならしむるの義なり、勒とは此の意味より來れるものにて、敵に目を作らしめざる爲に敵地の中に我が石を投げて、敵に之を収らしめ、最後に敵の目を缺きて、無くならしむるものなり、下圖の白「一」は即ち勒なり。

二十一、盤 (わたる)

盤とは我が石左右にある中を、敵に隔てられたる場合に、我が石を連ねんとして、盤の岸に添ふて打つをいふ、下圖黒「一」は即ち盤なり。

二十二、夾 (はさむ)

夾とは敵の一子を我が二子を以て夾むことにて下圖白「一」は即ち是れなり。



二十三、持 (せき)

白石は黒に圍まれ、黒石は白に圍まれて、互に死せず、活きず、兩者相對峙して策なきを持といふ、下圖は持の一例を示したるものにて、此場合黒石「い」に來らば白「ろ」に打ちて四目を握り、生となるべく白より「い」「ろ」の何れに手を入るとも却て三目の點となり死となるべしされば黒も白も互に攻むる能はず、相對峙するより外道なきなり、持には白石にも黒持にも目のなきものあり又互に劫の付き居るものあり、双方茲に一目づゝ持ちて左右にあり、我が石は目なくして敵石の中に夾まれて居るもあり。

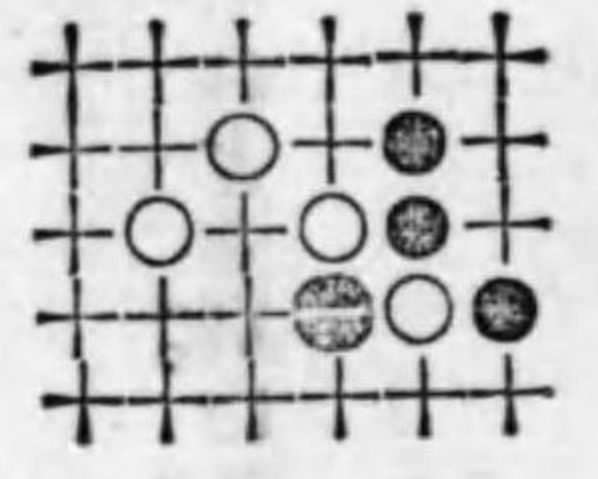


二十四、攻 (せめる)

敵に肉薄して、敵地に攻め寄するをいふ。

二十五、斷 (きる)

續かんとする石を中斷して兩者の連絡を絶つをいふ、例へば下圖の黒「一」は白の連續の道を失はしめたるものにて即ち斷なり、斷は



截又は切の字を用ふる事あり。

以上は圍碁用語の重なるものなり、此の外、生、死、目做等の語あれども別に項を設けて説明すべきを以てこゝには之を略す。

◎對局作法の說明

總て作法と道は或る場合には一致しない事がある。作法が上手でも其道に達せざれば唯だ徒事をして居る様に見へる、例へば茶を點てるといふも四疊半の數寄屋にて茶をたて、呑む作法は誰れにも出来るが、茶の道を悟る事は頗る六ヶ敷ので碁を打つにも碁の技術を辨えると其道を知るのとは幾分違ふ様に見へる、先づ碁として技術に長ずるには碁會所などで頻りに番數を重ねて實戦すれば自から手も見へる様になる、扱て其人が高段の人に稽古してもらふ場合には却て其人より弱いものにも劣る事がある夫れは實地對局すれば技術は至らざる様でも幾分稽古した事のある人は上手に向つては筋道を逐ふて石を下すから全く稽古のしてないものよりは何となく碁の品格が違ふ

て居るのである、そこに自から碁を打つ技術と碁の道を心得ると云ふことに多少趣が違がつて居ると云はねばならぬ、要するに碁は盤面に向つての勝負ではあるが唯敵の落度や悪手を利用して無理に勝つたのでは勝も勝にならない様な事がある、之れに就て面白い一つの咄しがある、夫れは故人秀和と言ふ人と松和と對局した事である、秀和は即ち本因坊の名跡を繼いだ人で八段である、松和は其時七段であつたので手合は一段違ひであるから先々々であつたのである、然るに恰も八段の秀和が先番で七段の松和が白番で對局をした時に結局其碁が持碁になつて居る、其棋譜は棋醇と云ふ碁經に殊つて居るさうである、そこで其棋譜に就て大正の棋客が研究をするに、先番の秀和の手に最初より終局まで之れと指すべき悪手もなければ緩着もない、悪手と緩着とを出さざる先番が八段で七段の白に向ふのであるから道理としては秀和の方に三目なり五目なりの勝がでなければならぬ筈であるに夫れが持碁にをさまつたのは實に不思議と言はねばならぬ、其碁は結局松和の一代の出來として今日賞められてあるのであるが其譯は例ひ相手が本因坊秀和と云はるゝ人であつても不圖した事から悪手があ

り緩着があつて、それで松和が勝もし持碁にもなつたと云ふなら松和の技量を賞める程の事はない、然るに自分より高段なる秀和に指摘すべき悪手や見違等がないのに夫れに對抗して持碁にまでこぎつけたのは實に松和の技術の圓熟して居る證據である

と今日の棋客は賞めたへて居るのである、先づ碁を打つには此松和と秀和の對局を龜鑑とせねばならぬのであつてといつたり段の上な者が先で段の低ひものが白で、其碁が持碁におさまり、相手とも悪手緩着がなくして持碁になりしと云ふ事は一つの謎をみる様な譯で、不思議と言はねばならぬ、夫れで今日の棋客は講評の結果、如何に考へて居ると云ふに秀和が常に先を受けて居るから、常に先の格を外さない、處で其碁が遂に持碁におさまつたのであると云ふて居る、そこで黒の格を守ると云ふ事が碁を打つには必要の事であつて、總て世の中の事も己れを知ることが道徳の本になると云ふ譯で、唯だ勝ちさへすればよいと言ふ考へで、矢鱈に上手に向つて攻勢をとり手段を弄して敵の悪手緩着に附けこみ無理押に勝つことを目的として對局するは技術より言へば勝を制したるに相違なきも、棋道より言へば多少そこに缺點を見出さ

いるを得ないのであるふと思ふ、苟も斯道を好むものは平にして方なる盤と堅くして圓き石の接觸せる間に不可言説の妙味を味ふてほしいのである。

即ち圍碁は各種の娛樂中にて、最も品よき娛樂にて趣味も亦深きものなれば、古より行儀作法を正すこと極めて深く、名人上手といはるゝ人、若くは碁の先生といはるゝ人は碁に對するには、羽織袴を着け、威儀を正し、打始むる前と、打終れる時には、互に禮を交換し、對局中は漫に言語を交へざるを常とせり、されば始めて碁を學ばんとする人は、常に此の心得を以て盤面に對し、少くとも左の數ヶ條は之を守らざるべからず。

- 一、盤に對して行儀正しく、碁笥は膝の前に置き、その蓋は右側に置き、收りたる石は之に入るゝこと。
- 二、先方の石を打たざる間は、己が石を手に收らざる事。
- 三、能く考へて石を打ち、一たび打ちたる石は例へ間違ひなりとも「待つた」をせざること。

- 四、石を手にして後考ふべからず。
 - 五、みだりに盤又は石を弄ばぬ事。
 - 六、上手のものに石を置く事を恥づるなかれ。
 - 七、他人の對局せる間に横合より口を出し、若くは一方の人に助言する事なかれ。
 - 八、苟も「ダメ」を詰むる以上は必ず地を作らざるべからず。
- 以上の諸則を守らずして、互に無作法なる時は終には口論を生じ、争を起し、果ては親密なる友人の間をして、不和に歸せしむる事なしとも限らざるなり、斯くては折角の娛樂も、其の本意を失ふに至るべし。

○圍碁必勝十訣

(一)貪れば勝を得ず(二)界に入るには緩くすべし(三)彼を攻るには我を顧よ、四子を棄て、先を争へ(五)小を捨て、大に就け(六)危に逢ふては棄つべし(七)慎で輕速なる勿れ(八)動すれば相應すべし(九)彼強きときは自ら保て(十)勢ひ孤なるときは和を

收れ、碁には一子を下す毎に皆な定まつた名がある。

○圍碁の極意に就て

一、圍碁の術の千古を通じて變ず可らざる真理あり、然れ共其真理を應用するの定石に至りては時と共に變遷す、圍碁を學ぶ者先づ定石を辨せざる可らず、されど其定石たる以所を究めずして徒に其形のみを記憶したりとて其用をなすものに非ず、實戰に臨んで初め善き形勢も忽然として土崩瓦解する事多し、これ碁は一手の差によりて千變萬化するものなればなり、故に碁は先づ定石を論理的に之を暗んじ、然る後自己の工夫鍛練によりて實際に處するの道を講ずべし然らざれば有力者と角逐する事能はざるべし。

一、漫然子を下して一日に十數番の輸贏を競ふもの其樂や蕩然碁の眞意を去るや遠し、圍碁を學ぶもの須く克く學び克く慮り一着毎に彼我の大勢を觀察し徐に和戰攻防の方針と手段とを案せざる可からず。

一、術に巧妙なるは稱すべし、術に拙劣なるも決して恥づるに足らず、沈着にして遠慮あり、一手々々の着眼公明正大にして敢て奇勝を希はず、奇敗を來さざる之れ碁の正道にして亦樂其裡に在り、圍碁の道は全然敵を殲滅して以て自我一個の天下となすを期するもにあらず、敵も活き我も活きる間にありて唯我一着の先をとりて以て優勝の地を占めんとするにあり、局に當りて惑ふあるは、これ畏怖と貪慾との致す處なり、堂々として正義の旗を翻す處何の畏れか之れあらん、何の惑ひか之れあらん。

一、碁を打ちて雌雄を争ふは之を一面より觀察せば相互勢力の競争なり、故に性燥急にして精力に乏しく短氣なるものは精密に思慮を廻らすの煩に堪えずして敗を取る事多し、精力の剛健なる智慮の周到なる之れ皆勝を制するの大要素なり。

一、常に好んで危険なる打方をなし、一舉して大勝を博せんとする者は勝つと雖も賞す可らず、進取の氣概に乏しく退守之れ事として遂に算の少きを致すものは其技最も拙なりと言ふべし。

二、下手に向つてのみ割合に強きものあり、之れ其掛引の勝れるに因るものにして打方に無理多く大敗を來す事亦多し、決して則とするにべからず。

一、死生既に決し大勢全く定りて最早策を施すの餘地なきに至るも尙戀々として徒に子を弄し敵の見損じにより萬一に僥倖を得んとするが如きは其陋醜唾棄すべきなり敗形全く定るに至らば速に胃を脱ぐを以て紳士の態度とす。

一、一度負けて氣合を損じ再び敗して少しく怒氣を催す者は五度十度に及ぶと雖も遂に連敗を繰り返すのみ、之れ冷靜周密の精神を失ひて怨恨憤怒の念を起すが爲なり豈慎まざるべけんや。

一、碁の價値は蓋し之を嗜む人の用意如何によりて分る而ち之を利用すると之を害用すると之を哲學視すると之を博奕視するとは畢竟碁其物に在るに非ずして其人の精神如何に存す、故に之を學ぶの利害得失も亦相去る事萬里なり。

一、每手必ず己を守るか敵を攻むるか己の繩張を廣むるか敵の地境を侵すかの目的を以て打つべし、即ち一手にして二意三意を兼ぬるを二拍子揃ひ三拍子揃ひといふ、

巧なる者は常に二拍子三拍子又は拍子揃ひの手を打ち、拙なる者は敵の石にも響かねば己の守備にもならぬ、無意味の着を下す、宜なり、五子九子を布くと雖も大敗するに至ること。

一、互先の先着に白の右隅に打たざるを禮とす、之れ白の打ちよき點を讓る意味なり又自己の右隅に打つは謙に過ぐ故に初の一子は必ず白の左隅に打つべきものとす。一、師に就て學ぶ事なく、唯自己の器用と經驗とに因りて打つ者は毎局唯戰を以て勝を制せんとするを常とす、然れども定跡を學んで臨機應變の心得ある者に對しては決して勝つ事を得ざるのみか其技術も亦上達する事少しとす。

一、碁局に氣概なきは多くは軟弱に流れ易く秤上の精神に反戻するものなり、所謂瓦となりて空からんよりも寧ろ玉となりて碎くるの覺悟なかるべからず是れ先輩諸師が吾人の爲に日常教誨せらるゝ處なり苟も斯道を練磨研鑽して他日の上達を期せんとする者は豈反省せずして可ならんや。

一、碁の打方に高尚なる者あり、雄大なるものあり、狡猾なる者あり、卑劣なる者あり、平凡なる者あり、亂雑なる者あり、後四者の如きは言に足らず、高尚にして雄大なるを以て上乘と爲すべし、されば局に對せる時は終始形勢の可否勝敗の樞機を達觀し之に従つて和戰攻防の趣向を廻らし、奇正變化縱横に其道を行ふ心得有るを要す、然るに昏々朦々徒に一小部分の利害得失にのみ汲々として大勢を顧みざる者は遂に算の小さきを招きて破るゝに至る、孫氏の曰く算なきは破ると。

一、勝敗因と是れ兵家の常、勝碁を逸して必ずしも悔いず、負碁を轉じて必ずしも驕らざるは碁者の優雅なる襟度なり、彼の僥倖の勝に隨喜して他の惡感を買ひ萬一の敗に悲憤して他を怨むが如きは其心情の陋醜共に伍するに足らざるなり、秀吉は小牧に家康に敗せり、曹操は赤壁に周瑜に破れたり、されども誰か之を以て兩者の覇者たるを妨げんや、故に碁を打つ者勝敗の結果によりて喜憂を爲すを用ひず其勝敗を決する手段と因由とを尋釋して以て圍碁妙味を考ふべし。

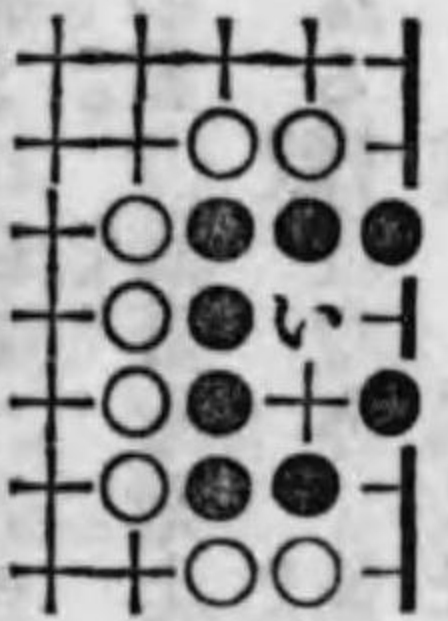
◎圍碁勝負上の要約

◎生死のこと

生死を説明する前に、眼といふことを説明し置く要あり、眼には本眼、半眼、缺眼の三種あり、本眼は二つ以上の眼あるをいひ、完全なる眼形なり、半眼とは僅に二つ若くは三つを有すれども、敵に先手を打たれば直に之を失ふものにて、不完全の眼形なり、缺眼とは一見眼の形を有すれども、敵に先手を打たれば直に潰ぶるものをいふ、左圖甲は本眼の形、乙は半眼の形、丙は缺眼の形なり。



甲



乙



丙

生とは碁石の一集團に完全の眼形を二個以上別々に有するものをいひ、死とは此の條件に合はざるものをいふ、今前三圖に就いていはば甲圖の白「一」と打ちたるによりて別々に二個所の眼を生じたるを以て之を生形の形といひ、乙圖に於ては眼は三個を有すれども若し白に先手を「い」の所に打たれば、黒は最早別々に二つの眼を有する能

はずして死となれども黒先手を「い」の所に打たば二眼を有して生となるべく、丙圖に於ては、△印の所一見眼形を具ふれども、黒に先手を「い」の所に打たれば△印の所潰ぶれて眼はなくなり、結局死となれども、白先手を「い」の所に打たば△印の所眼となりて、完全に生となるなり、更に他の形を以て説明せんか。

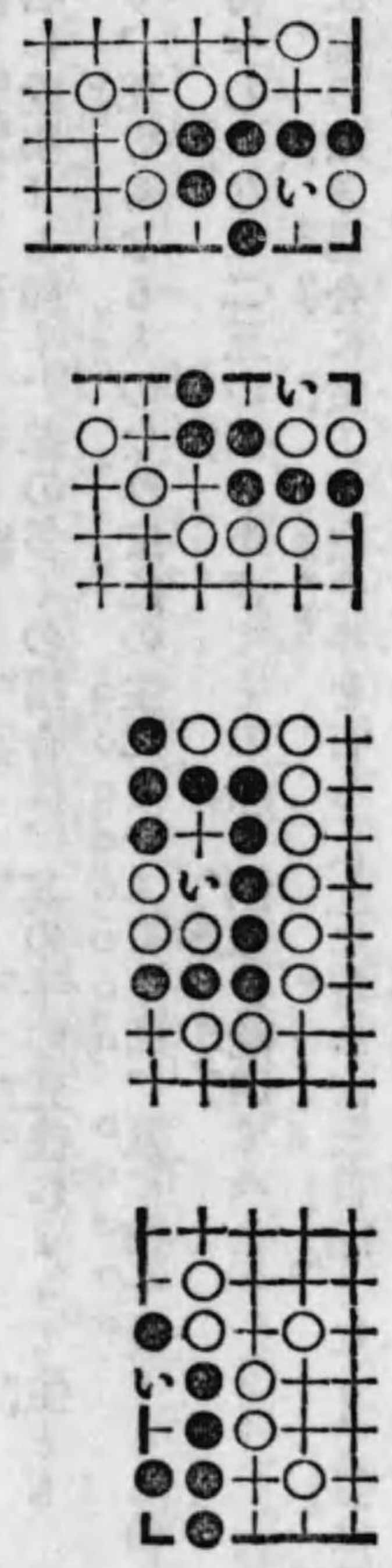
下圖の如き場合には、乙圖と同じく三眼を有すれども其の手の先後によりて、生ともなり死ともなるべし、即ち「い」の所へ黒先を打たば生くべく、白先を打たば死するなり。



右に説明せる如く、碁の多くの場合は、其の手の先後によりて生ともなり、死ともなるものなれば此の生死といふことは、互に相一致するものといふことを得べし、なほ二三の例をあげてその然る所以を説明すべし。

左圖の如き場合に於て、白先手を打ち「い」に行れば三目點となりて黒は死すれども若し黒先を「い」に打ちて、白の一子を撮らば完全に生となるべく、下圖の場合に於て白「い」に行れば同じく三目點となりて、黒は死すれども、黒先を「い」に打たば生とな

るべし、なほ之と同じ手續にて左の二個の場合は何れも白黒の先後の關係にて生死相分るゝなり。

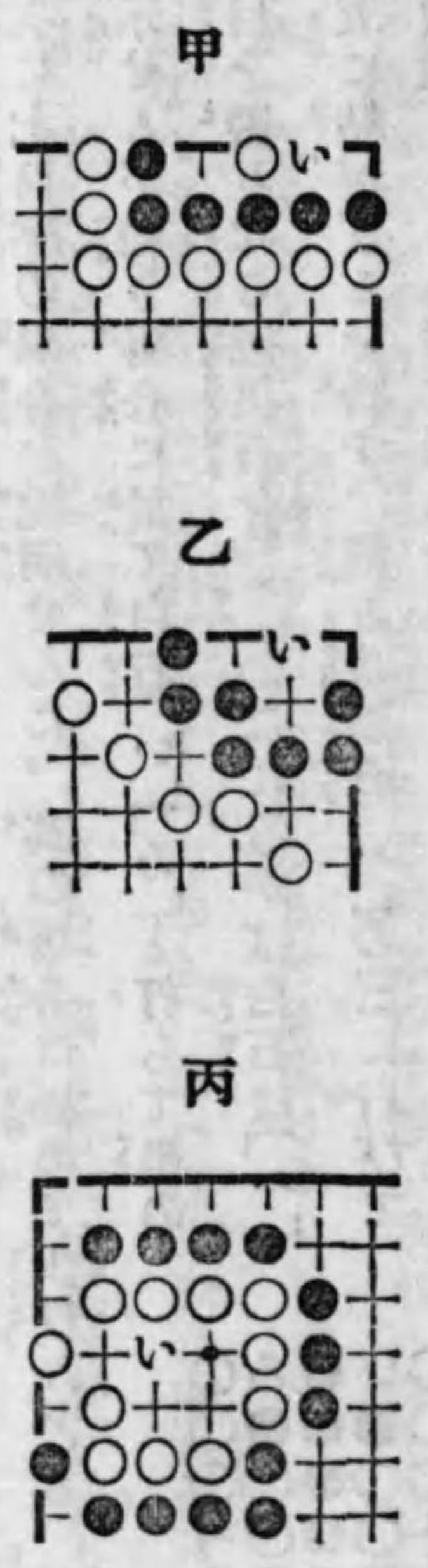


◎ 點のこと

點とは前にも説明したる如く、敵の地面内へ石を打込みて敵をして本眼を作るを妨げ終に敵を殺す手をいふ、點に三目點、四目點、五目點、六目點、七目點あり、何づれも我れ先手を打たば敵を殺すべく敵先手を打たば敵生くる場合あり、而して三目點のことは前項「生死のこと」の條にて説明したれば、こゝには四目點以下の説明を爲すべし。

一、左圖は四目點の場合にして、その中の場合は黒先を「い」の所に打ちて生くべ

く、乙の場合は黒先に「い」の所に打たば生く、甲乙共に白先に「い」に打たるれば黒は死ぬるなり。



二、丙圖は五目點の場合にして「い」の所に黒白何れかの先手によりて生死は分るゝなり、即ち丙、丁圖の場合の何れも白先手に「い」の所に打たば白は生くれども、黒先に打たるれば死ぬるなり。

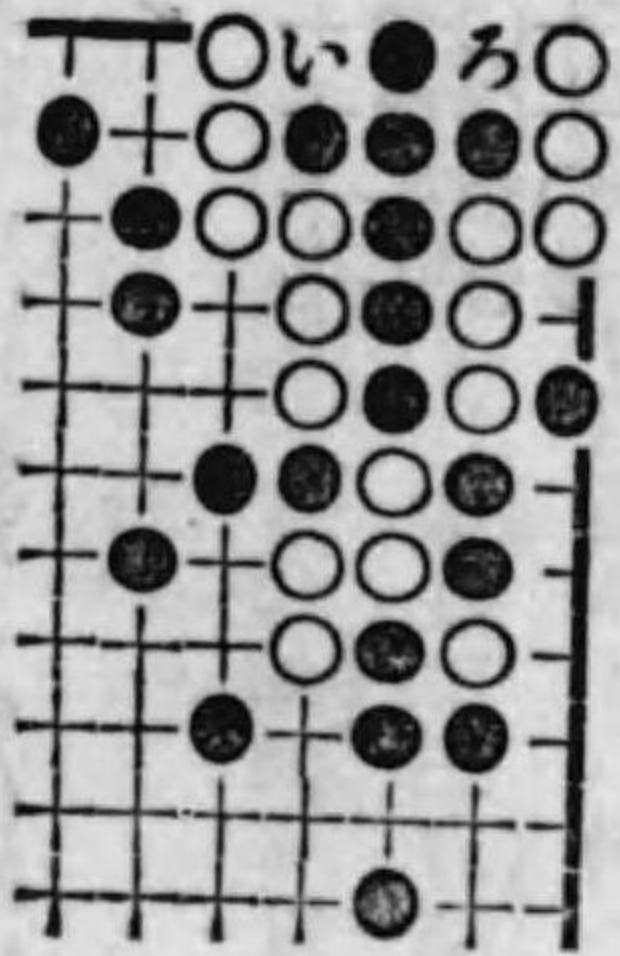


三、六目點の場合も又四目點五目點の場合と同じくその先後の關係によりて生ともなり、死ともなることあり、戊、己圖兩場合に於ける「い」は即ちそれなり。

此の如く、四目點、五目點、六目點は何れも敵に先を打たるれば、我れ死ぬるを以て完全なる生といふことを得ざる場合多きなり、尤も四目點以下の點にありては其の眼が一行に並べる場合には、例令敵に一手先を打たるゝとも死ぬる憂はなきなり、例へば下圖に示すが如し、下圖は五目點の一行に並べる場合にして黒「い」「ろ」の二手を打つも、白は死せざるなり。

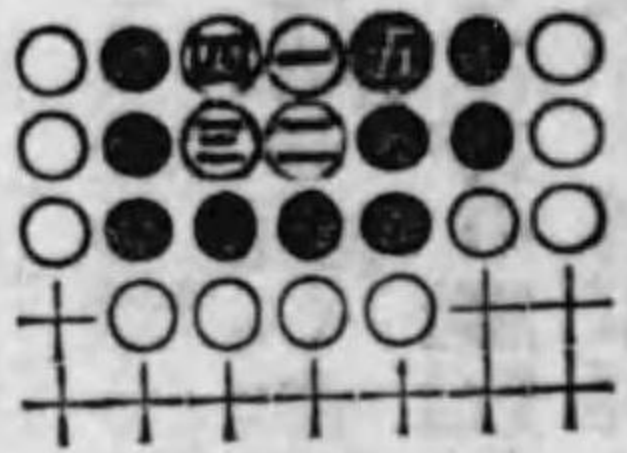


次に七目點の場合を説明せんに、其の場所は極めて少けれども、下圖に示せるが如き場合に於て白石「い」「ろ」と打ちて黒の七目を撮りたる後黒石を「ハ」の二に置かば白石は「ハ」の五に粘がざるを得ず、然る時黒石「ハ」の三に行ひて五目點となり、白は終に死するなり。



以上は點に於ける生死の大略を述べたるものなるが

此の點の手續に就て一言したき事は、俗に五目點十三手といへることと是れなり、これは計算の仕様によりては、十三手と見ることを得べし、然れども攻合の場合に於けるその局部の手續が我れ一手し、敵も亦一手するものは計算の中に入れざるを至當とすべし。



何となれば兩者互に差引計算すればなり、例へば下圖の五目點の場合に於て白一と打ち、次に二三と打ち、四と打たば黒は五と打ちて、白の四目を捉らざる可らず、此の時の四と五とは、我れ一手、彼れ一手なれば差引相殺して、手數計算の中に入るべからず（されば此の時白の手續は三なり）次に白は「タ」の一二に打ち「レ」の二に打たば黒は「レ」の一に打ちて、白の三目を捉らざるべからず、此の時も亦白の一手、黒の一手は互に相殺すべきを以て白の手續は二つと見ざるべからず、（前の三と合して五となる）次に白は「タ」の二一に打たば黒は「レ」の二と打ちて、白の二目を捉るべし、此の時も亦黒白共に一手宛相殺すべきを以て、白の手續は一つなり（前二回の數と合して六となる）最後に白は「タ」の一二と打ちて、黒の十二目を捉りて

局を結ぶべく、前後四回の手續に於て、白は八回の手敷を施して、黒を殺したる事となるなり。

此の計算は極めて大切なることなれば能く記憶し置くべし、俗に所謂五目點は十三手なりと心得、其の計算にて敵と攻合を爲すことあらんか、收れる石も收れる石も收り得ず或は己が白を收らるゝ事もあるべし、俗説の五目點十三手は以上差引相殺の事を無視したるものなれば、いざ攻合といふ場合の計算には合はざるものと知るべし、此の相殺勘定を以て點の手敷を計算すれば、三目點は三手、四目點は五手、五目點は八手、六目點は十二手となり、之を基礎として攻合に臨まば決して違算を生ずることなきなり。

◎勝負の事

圍碁の目的は、盤面の地域を多く占領せんとするにあるを以て其の地域を多く占領したるものは少く占領したるものより勝ちとなるなり、而して如何にして其の勝敗を争ふかといふに黑白互に其の地域を多く占領せんと努め、こゝに衝突起り、激戦始ま

り、其の間に複雑なる關係を生じ、最後に雙方共に相争ふの餘地を盤面に有せざるに至りて其の終を告げ以て其占領地域の計算を爲し多少を比較して勝敗を定むるなり。其の地域計算には黒石を持てる人は白の地域を計算し、白石を持てる人は黒の地域を計算するなり、語を換へて曰はゞ互に敵の地域を計算して之を比較し多少の數を明かにして勝敗の局を結ぶものなり、此の場合に戰鬪中捉り置きたる敵の石は悉く敵の地域内に埋むる事は勿論なりとす。

さて黑白兩石を持つは如何にして之を定むるかといへば強き方が白を持ち弱き方が黒を持つは一般の習はしにて黒を持ちたるものは第一着に石を盤面に下す事となる若し双方の力量同等なる場合には、何れかの一方、石を一握り掴みて相手に其の數の奇數なるか偶數なるかを曰ひ當てしめ當てたるものは黒を持ち二回目以後は隔番に白を持つを法となす、若し又強弱の力量に懸隔あらば其の弱き方のものは其の度に應じて幾何かの黒石を置きて打つ之を置碁といふ、又番數を打ちて差引四番負けたる時は其の手合を改せるを法とす、例へば三目置きたる人が差引四番負けたりとすれば四

目置くに至るが如し。

彼我の地域を計算して兩者互に同數なる場合は之を持碁(ちご)といひ、互に勝負なきなり、實際に於ては双方の地域は各所に入り亂れて存在するを常とす、即ち彼所に五目を持ちて生き此所に八目を占領して生くといふ場合多しとす。

而して其の生きたる地域の數を合計して其の總數の多寡が勝敗の因て分るゝ所となる事前に述ぶる所の如く、又我れの捉りたる石は此の際敵地に埋めて其の數を減するに努むる事勿論なりとす。

◎圍碁實戰の準備に就て(配陣と作戰計畫)

◎定石の事

以上を以て圍碁の用語を説き、生死の區別を明にし勝敗を定むる道を示したるを以てこれより愈々實戰の場合に於ける定石を説かんとす。

圍碁の上達をはかるには實戰の功を経るにある事を誰人も否定せざる所なり、され

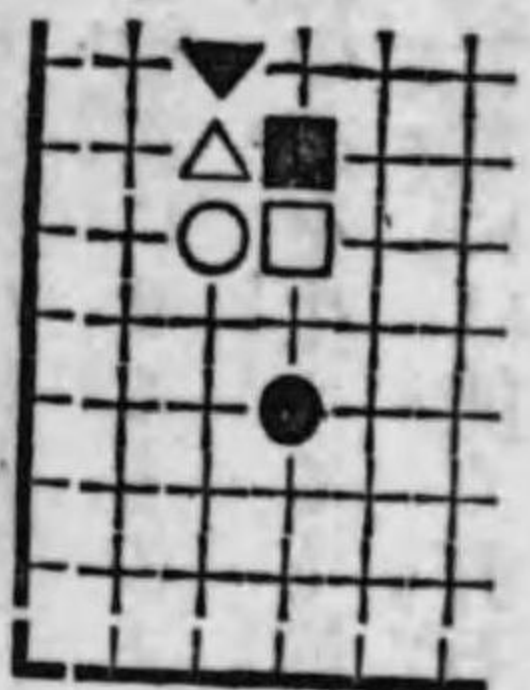


ども其の實戰にして徒らに勝負を弄するに止まり研究的の注意を怠らんには上達の上は何等の功を奏せざるべし、世に碁を打ち始めて何十年、少しも上達せずなごいへる人あるは全く之が爲めなり、同じ道を行くするにも此處は何町なり彼所は何村なり、此所の地勢はしかくなり彼處の風俗はかくくなり等と觀察を緻密にせるものと、さはなくて徒らに素通りするものとは其の地理に熟する上に雲泥の差を生ずると同一理と知るべし、されば碁の上達を圖るには實戰に如くものなく、實戰には能く打石の得失を稽へ、一石をも苟せずといふ自重の心を以て臨むを必要とすべきなり。

されども初心の場合にありては、その打石の得失などは自己の判断力を以て到底之れを明にし得るものにあらずれば師に就て稽古するの得策なる事勿論なれども其の土地柄又はその人の境遇によりては師を得る事難く、師あるも之に就くを得ざる事もあるべし、若し斯る場合には定石を稽きて之を觀べ見るより外に良き道はなく定石を辨へたらんには尙ほ進んで石立、即ち布石法、大打堅、小打堅の手順を研究自得するを順序とすべし。

定石とは讀んで字の如く、圍碁に於ける一定の法則ともいふべきものにて古來の名
 人上手が多年研究の結果に依て作り上げられたるものなり、之を戰爭に譬ふれば定石
 は根據地に於ける攻守の方法ともいふべく、石配りは全體の策戰とも見るべきものな
 り、策戰の計畫を立つるには先づ攻守の方法を辨へざる可らざるが如く、圍碁の研究
 には先づ定石を辨へざる可らず。

定石の原則は分て二となす事を得べし、置碁に於ける定石相先に於ける定石これな
 り、置碁に於ける定石は小斜走掛、大斜走掛、大々斜走掛、一間高掛、二間高掛の五
 種あり、下圖に示せる○印は小斜走掛、△印は大斜走掛、▽印
 は大々斜走掛、□印は一間高掛、■印は二間高掛なり、而して
 個は黒の置石に對する白石の自然の定石にして此の以外に白よ
 り黒にかゝる手はなきものと知るべし、又之に對する黒石の定
 石は無からざるべからず、即ち白石の此の五種の定石に對する黒石の應答變化は四十
 八となる、これを置石に於ける定石といふ。



相先に於ける定石は高目、目脱、小目の三種に分れ之に對する應
 答變化亦四十八に分る、下圖△▲の印は高目を示し、□■の印は目
 脱を表はし○●の印は小目を示せるなり、所謂碁の定石は以上列舉
 せる置石の四十八と相先の四十八との合計九十六を以て基本とし、
 此の外異變化八打堅置碁にて三十二相先にて四十八あり、總計百八十四あるなり、以
 下順次之を説明せん。



●置石—相先の基本と變化の打堅等の説明

第一、小斜走掛

白石が黒の置石に對し小斜走に掛り來れる時、黒石の之に應答すべき場合、大別し
 て附手、大斜走高啓、一間詰返しの四種とすべし、而して其の各種には亦幾多の變化
 あり、順を逐ふて之を述べし。

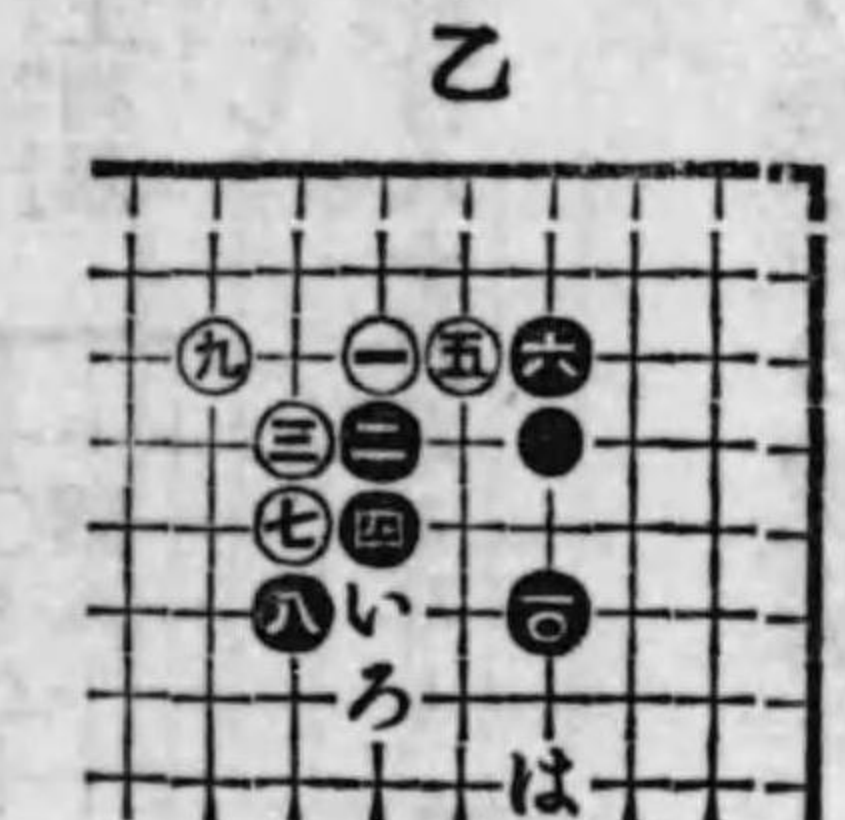
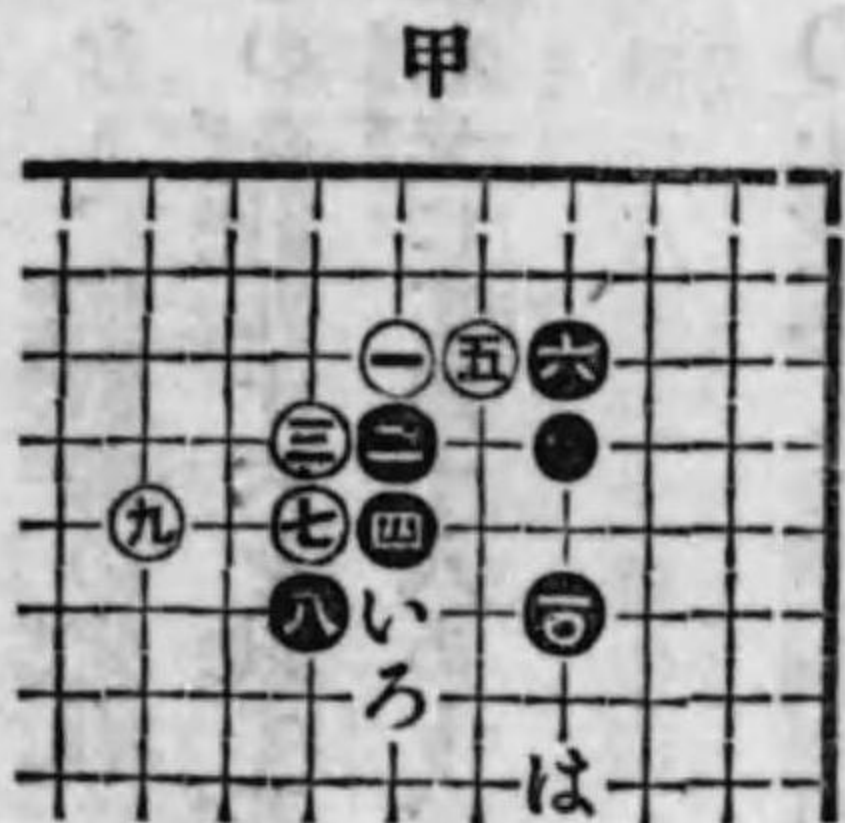
一、附手 (其一)

附手は白の小斜走に掛り來れる時に直にその白石に黒を附け打つの手にて最も普通に行はるゝは甲乙丙種なり若し白九の手にて「い」に切り來らば黒十の所に飛ぶべく白「ろ」に行び來らば黒は八の一子を棄て、「は」に飛ぶを利とすべし。

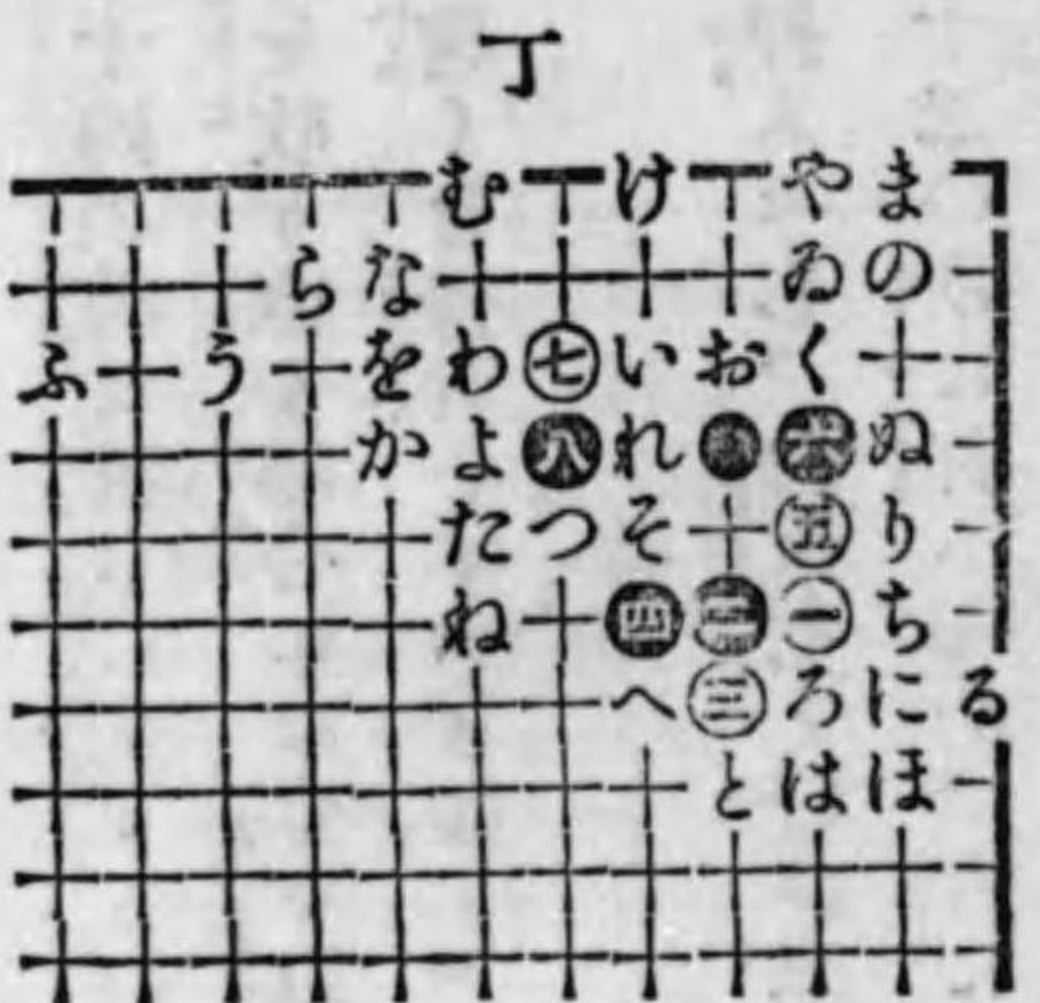
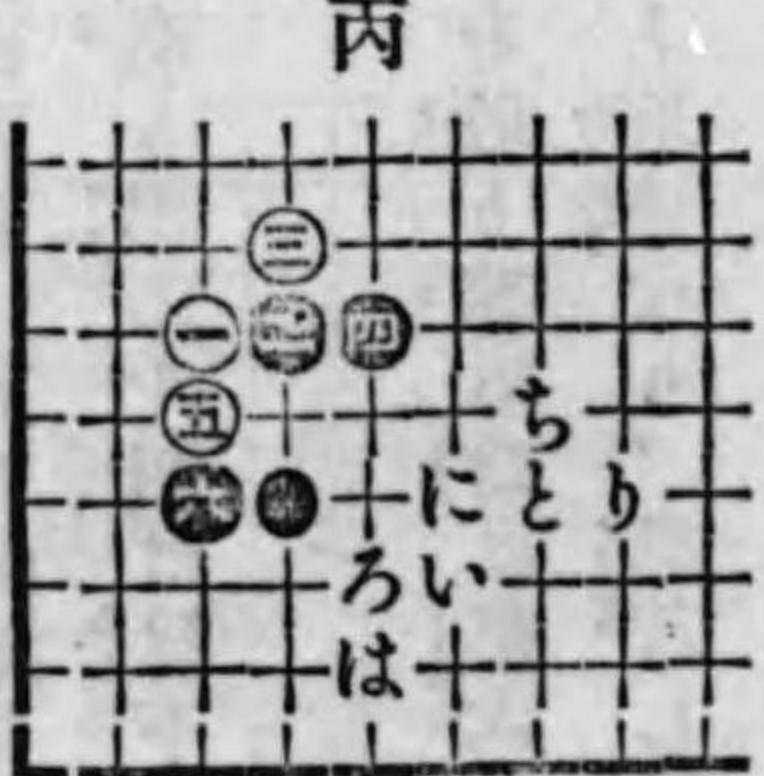
丙の場合 次に丙圖に示せるが如く黒甲六と押へし時、白「い」に掛り來らば黒は「ろ」に尖付け、白「は」へ縛け、黒「に」に押へ、白「と」に縛け、黒「ち」に押へ白「り」に行びるは普通の打方とすべし。

丁の場合 若し又丁圖に示せる

が如く白「い」に行び來る時は黒は「ろ」の所を切り白「は」に縛け、黒「に」に下り白「は」に押へ黒「へ」に押へ白「と」に粘ぎ黒「ち」へ曲り、白「り」に押へ、黒「ぬ」に押へ、白「る」に縛くる時は黒「を」に打ち白「わ」に突當り黒「か」に立ち白「よ」に出で黒「た」に押



へ白「れ」に出で黒「そ」に押へ、白「つ」に打ちて黒の八を取り黒「ね」に行び白「な」へ縛け黒「ら」へ押へ、白「む」に掛粘ぎ黒「う」に掛粘ぎ白「る」に打ち黒「の」に附け、白「お」へ黒「く」に當て白「や」に下り黒「ま」に押へ白「け」に生を打たば黒は「ふ」に打ち優勢の位置となるべし。



二、附手 (其二)

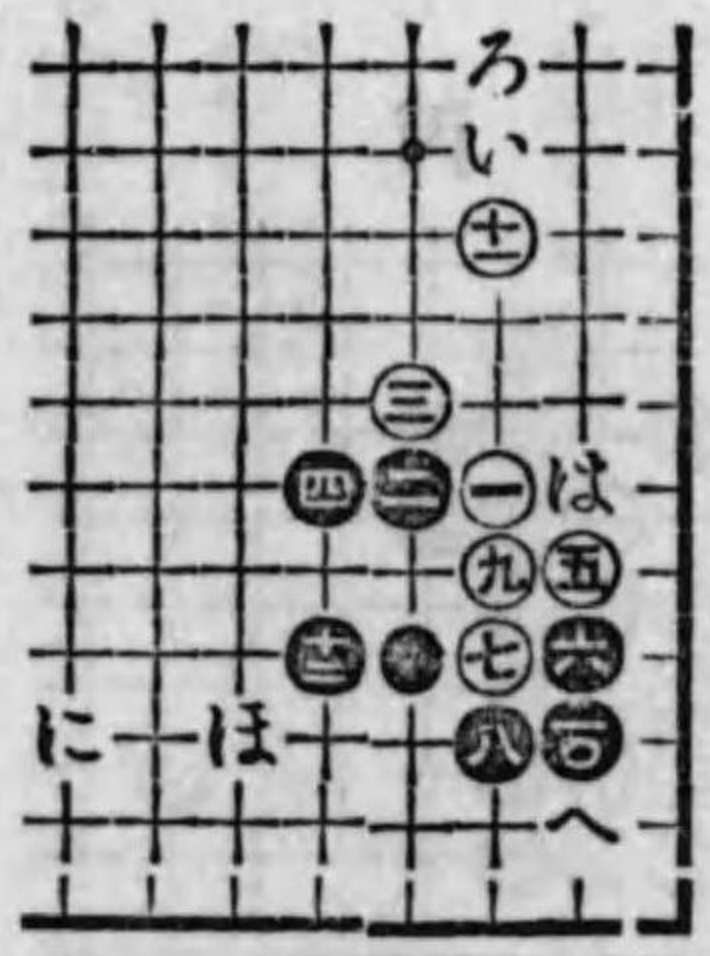
前項の場合と趣を異にし、黒の地域を一層強固に且つ廣く取り得る場合は甲圖に見るが如き場合なり、此の場合に注意を要する事は十二と行び十四と打つ事及び白十五と切りたる時黒十を棄つる事はれなり、若し白十一と粘ぎし時黒十の一子を惜みて「い」に押ふる時



は「ろ」に、白「は」に黒「に」、白「は」に黒「へ」に白「と」に黒「ち」に打たざるべからず、就中白「と」に行ければ黒は「ち」に打つ事を忘るべからず、而して此の時白「い」に押ふれば黒「ぬ」に立ち白「る」に立てば黒は小斜走に「を」と打ち白「わ」に曲らば黒は「か」と飛ぶべく又白「い」に押へずして「ぬ」に押ふれば黒「た」に突出し白「い」に曲り黒「そ」に押へ白「か」に飛び黒「ぬ」に打ち白「な」に一子を抱ふるに於ては黒は優勝の位置を占むるに至るべし。

四、附手（其四）

左圖の如き形は極めて穩當なる定石なれども時として白は十一に打たずして「い」と三間に啓き若くは「ろ」と四間に啓くことあり、此の場合に黒は如何に受くべきやは古來口傳として容易に教へざりき或は白五と尖みし時黒六と附けずして九の所に當て白「は」へ粘ぎ黒八に尖むを定説と説くものあれども斯くては黒の爲には非常に不利益なり、何となれば此の時白「に」へ掛り

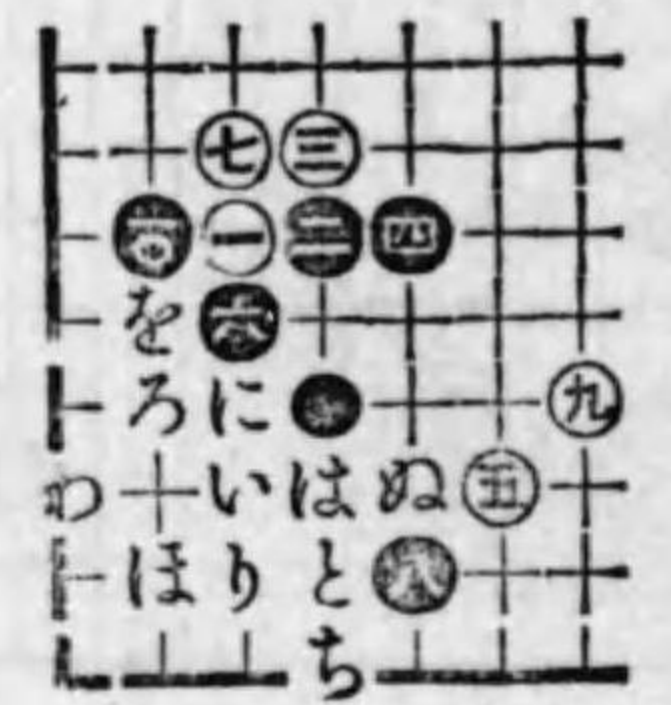
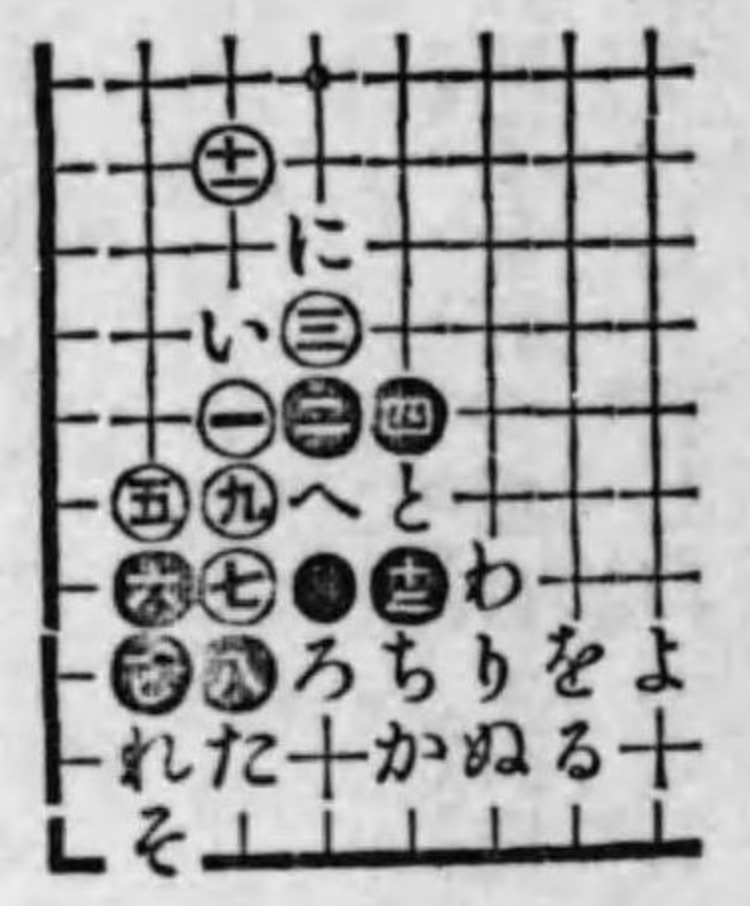


黒「ほ」に受くれば白十の所へ附け黒「へ」に押へ白六の所に引く時は黒地大に窘縮せらるればなり。

前の場合に於て白十一と打ちたるにも拘らず白「に」「い」の切手ありとして黒十二へ並ぶ事をせず、手抜き置かんか白は直に「へ」に突き出し黒「と」に押ふれば白は「ろ」を切り黒十二の所へ粘ぎ白「ち」黒「り」白「ぬ」黒「る」白「を」黒「わ」白「か」黒「よ」白「た」黒「れ」白「そ」といふ順序となりて黒は目在り目無しとなり終に死するに至るべし、されば白十一と打ちたる場合は黒亦必ず十二と並ぶことを忘るべからず。

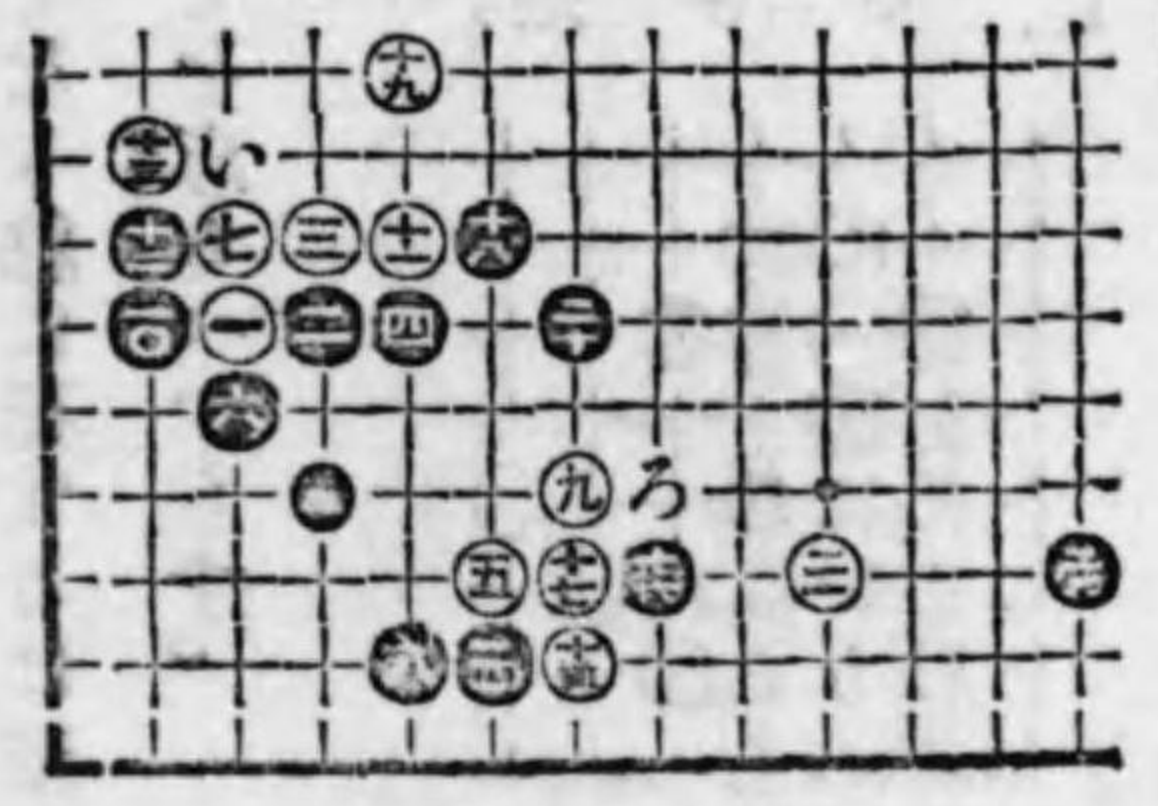
五、附手兩掛（其一）

下圖の如き場合に於て白の一と五とは共に置石に對して小斜走に掛れり、之を附手兩掛といふ、而して此の白の九と黒の十の手は如何なる意味を含めるかを研究する價あり、白の九と尖みたるは黒若し手抜かば直に「い」へ打込み黒「ろ」に尖盤を防がば白「は」



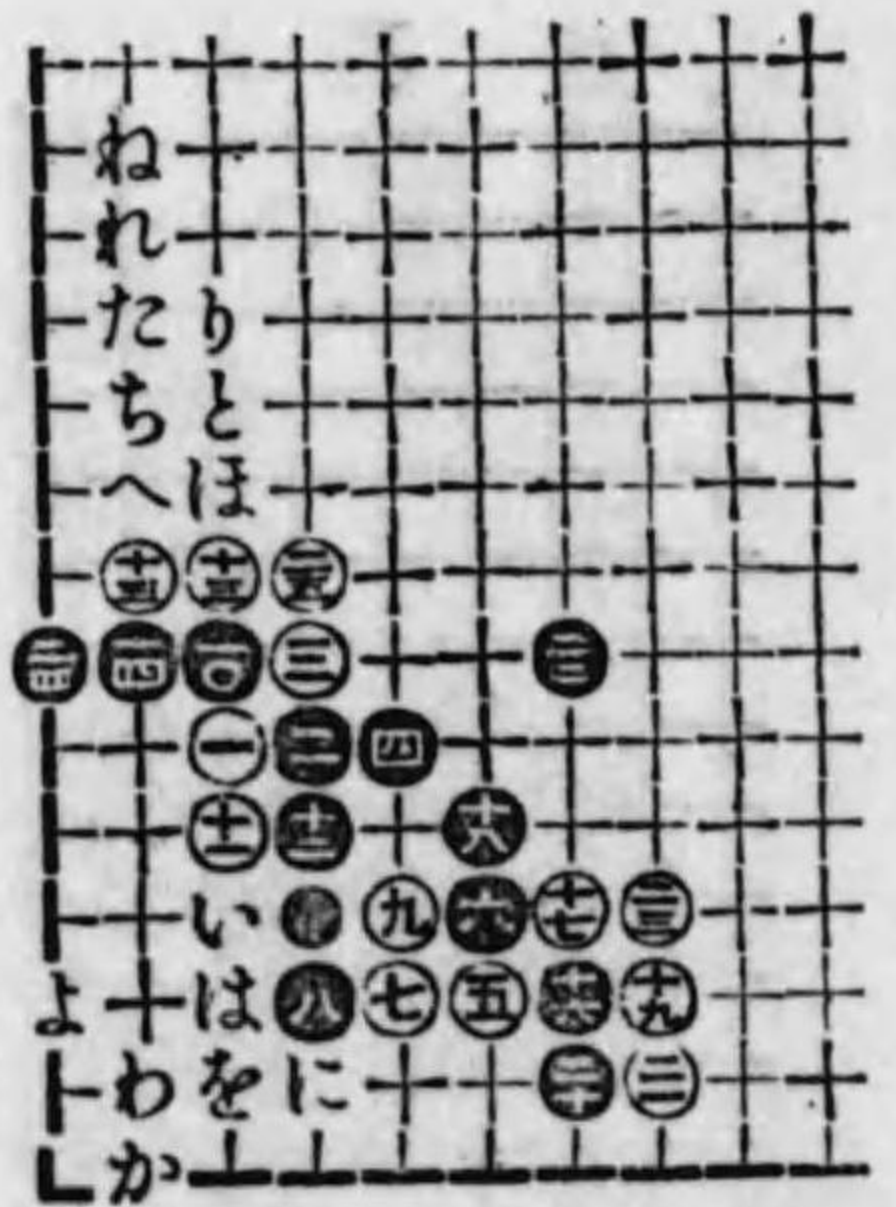
に出切りを打つ手あり黒「ろ」に尖ますして「に」に打たば白「ほ」に尖み黒「は」に押へ白「と」に當て黒「ち」に縛け白「り」に粘ぎ黒「ぬ」に粘ぎ白「ろ」に縛け黒「を」に押へ白「わ」に目を持つ手あるが爲めなり、故に「い」の打込を防ぎ白として此所に地を作るの餘地なからしむる爲に黒十を打ちしものと見るべきなり。

次に黒十と縛けし時白十一に押ふる場合には下圖の如き形勢となり、黒は頗る優勢となるべし、圖中白の十九と飛べるは黒に「い」を切らるゝ恐を防ぎ白二十一と打てるは黒二十へ掛粘がれて黒「ろ」へ押へらるる恐あるを以てなり。



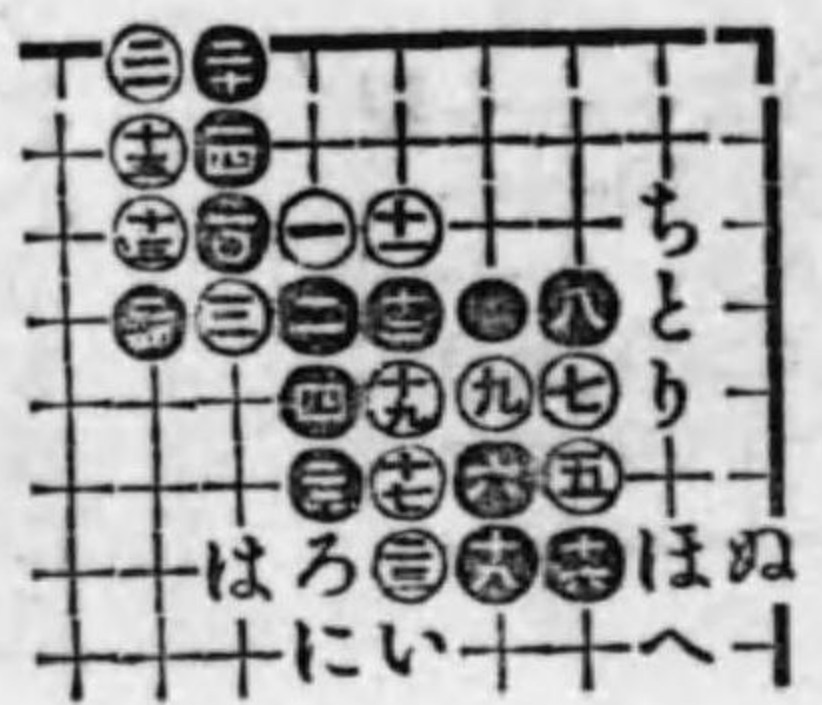
六、附手兩掛 (其二)

同じ附手兩掛の中にて白の小斜走に對して黒石何れも直接に附手を打つ場合を研究せん。上圖の如き場合に於て先づ黒の六と打つべき意味を吟味すべし、若し白七と行びずして十七の所に縛け來らんか、黒は直に十の所を切り白十三の所へ縛け黒十四へ



「ね」に附けて結局は黒石活となるか盤となりて白石は死ぬる事となるなり、されば白も亦之を辨へて七と行び圖示せる形勢を現出したるなり。

若し又黒十六と押へし時白十七の手を以て前の如く切らずして次圖の如く縛ける時は黒十八を粘ぎて形勢更に變化して上圖に見る如きものとなるべし、此の場合注意を要する事は黒の二十と下ることゝ白三の石征の當りあらば黒二十四と切らずして「い」に縛ける事是れなり「い」は縛くる時は白「ろ」に出で黒「は」に縛け白の二十四の所を粘ぎ黒「に」に押へ白「ほ」に縛け黒「へ」に押へ白「と」に縛け黒「ち」に押へ

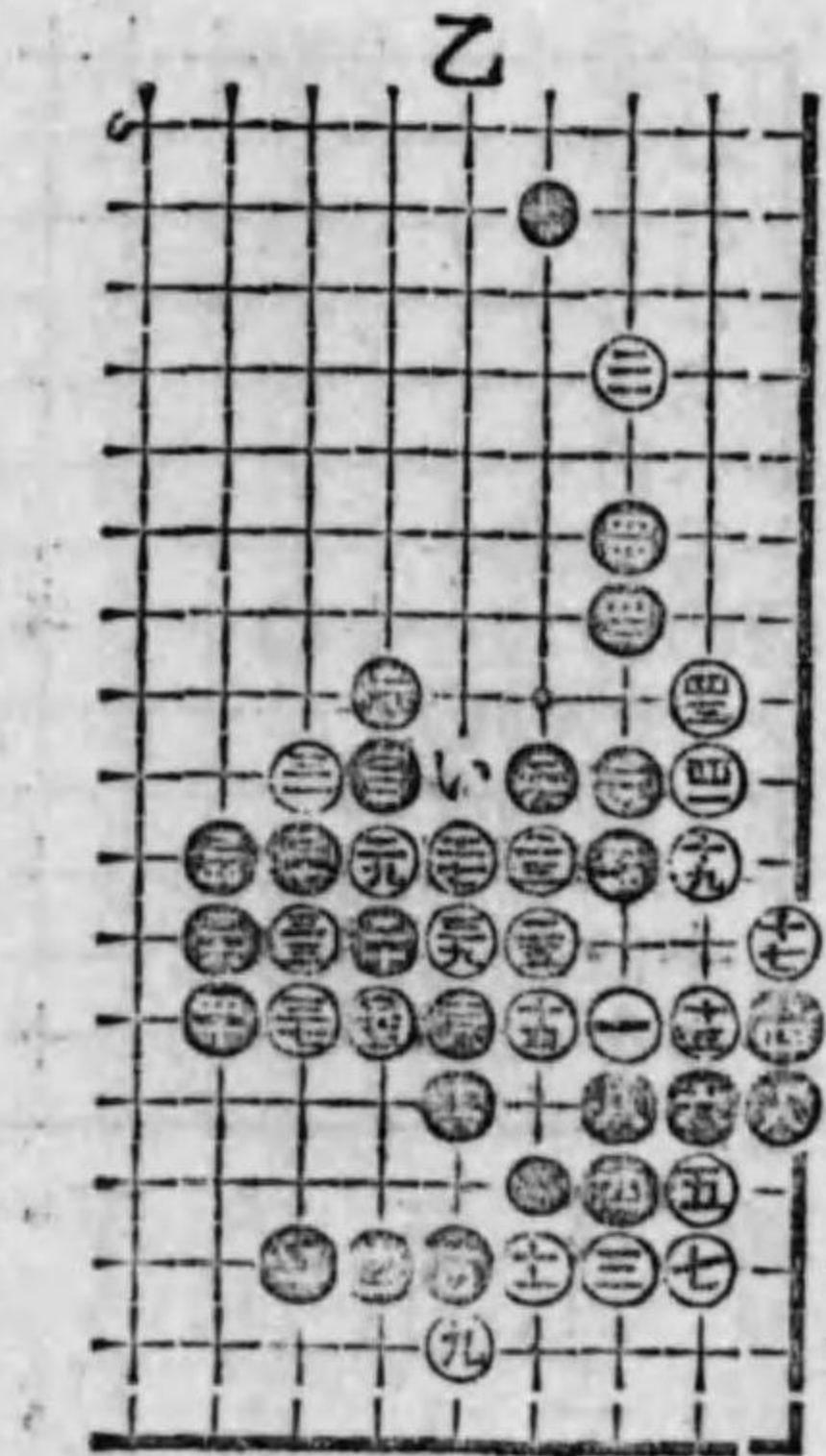


白「り」へ粘ぎ黒「ぬ」に緯けて白遂に死石となるべし。

此の以外、附手兩掛の變化には幾種類もあれども餘りに煩に失し、初心のものに厭倦を招かしむる恐れあるを以て三々の打込の説明に移るべし。

七、三々の打込 (其二)

三々の打込に於ける定石に五種あり、各種共に各變化あり、甲圖は其の第一種を示したるものなるが此の場合に黒十六と掛粘ぐ事最も肝要なり、若し黒十六と打たずして手抜の時は白は黒の十四を押へて黒に粘がしめ「い」の所を切るに至るべければなり。



黒十六と掛粘ぎたる時、白十七と黒の十四を押へて黒に十八と粘がしめ白十九と掛粘がば形勢愈々變化して乙圖の如きものとなり、十七、十九、四十一、四十三の白石は死するか下を匍ふかの極めて不利の位置

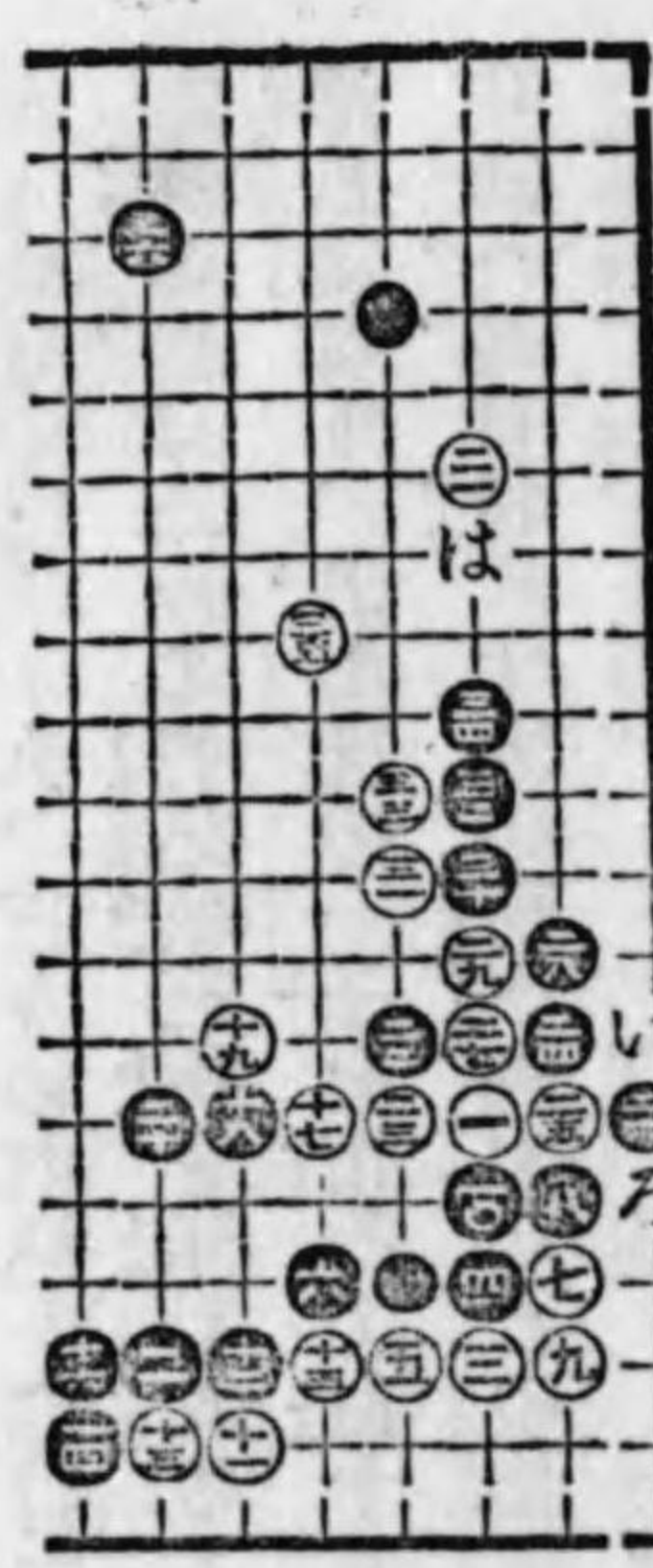
に立つに至らん、尤も此の場合は白二十一は手抜きたる手の場合なり、又白二十三は飛ばすして二十四の所に押へし時、黒は「い」の所にとびて白をして下を匍はしむる事となるなり。

八、三々の打込 (其二)

第二種に屬する三々の打込は丙圖に示す如き形に現はるゝなり、これにも又變化あり、黒二十と行ひたる際に白手抜きたるによりて起る、丁圖白の二十一は即ち其の手抜きを示したる一



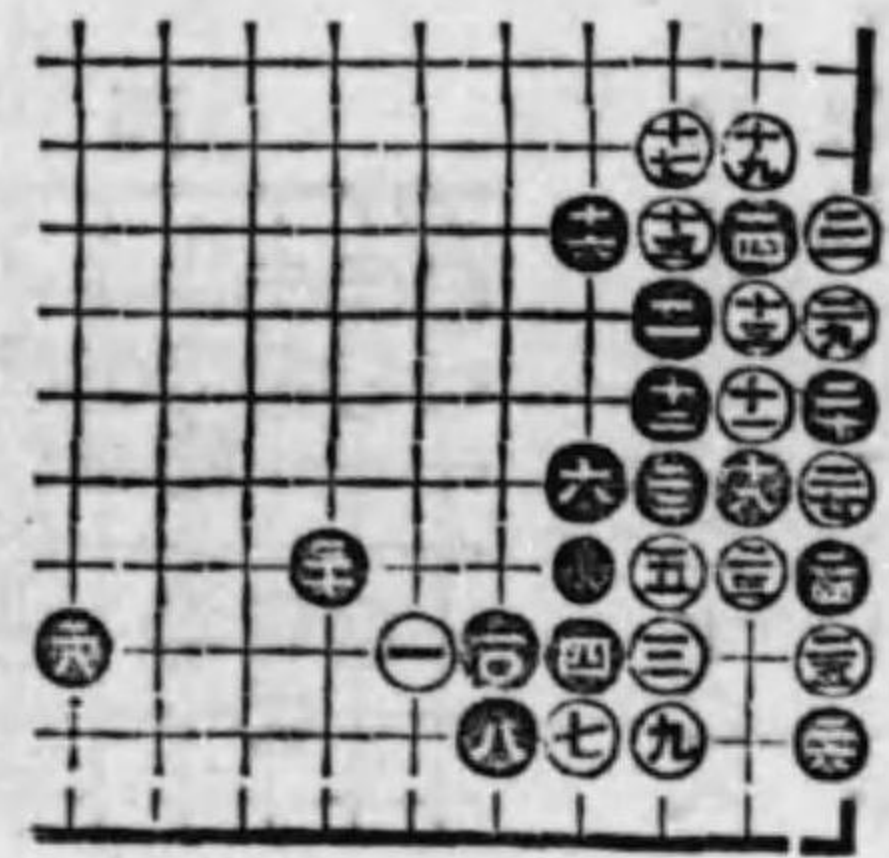
例なり、此の場合に黒之に應答して大斜走又は附手に受くる事をなさず直に二十二へ



覗くを可とすべし、又白二十一を打たずして二十五の所に押へし時は黒二十六の所へ緯かけ白「い」に押へ黒「ろ」に粘ぎ白二十八と掛粘ぎし時黒「は」へ打つを可とすべし。

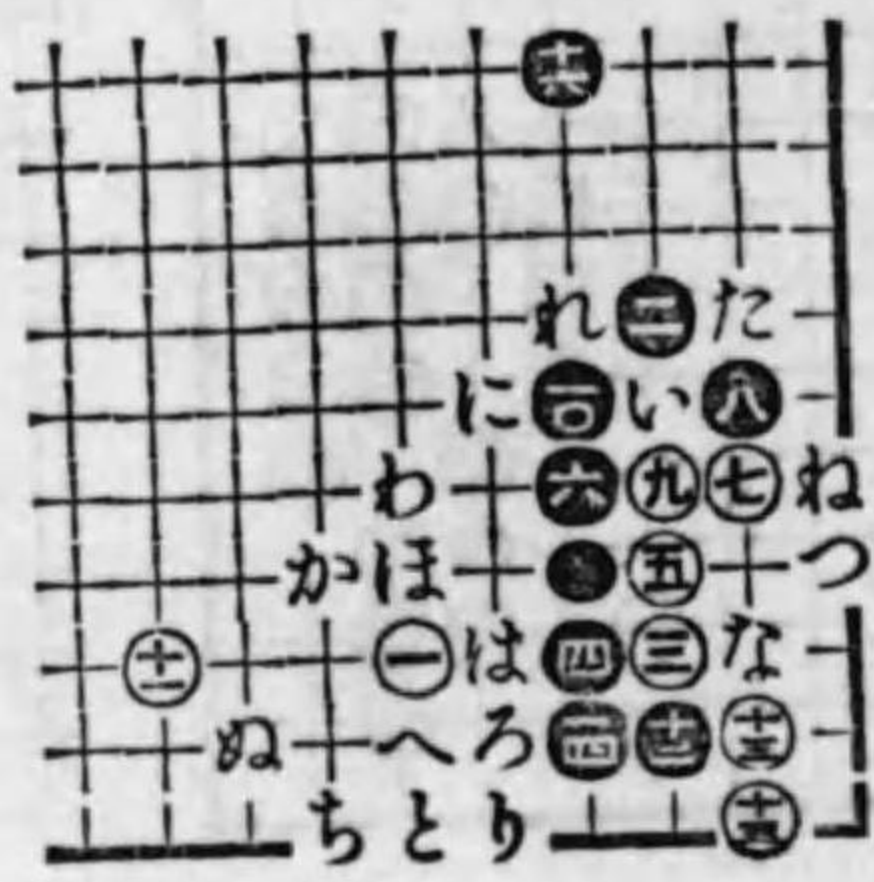
九、三々の打込 (其二)

次の圖は三々の打込第三例を示したるものなるが此場合黒は十四の一子を見棄つる事肝要なり、若し此の一子を惜みて白十五と切りたる場合に十九の所へ逃ぐるか十七の所へ縛り後に十九の所へ粘ぐなどの拙策を收らんか、白に二十二の所へ突當てられ外面の粘手に苦むべし、故に白十五と切りし時は黒は必ず十六と縛り白に手数を掛けさせて黒は十八と縛込み尙ほも二十と縛りて二十二と粘ぎ僅々十四の一目を敵に與へて角の白を收るの道に出づべきなり、而して黒の二十と縛りたるは劫の準備を爲したるものにて白は勢ひ二十三と押へ劫争を爲さざる可らず、而かも白は甚だ不利の位置に立ち且つ黒二十八の劫立に對して最初の事なれば白應ずる能はず、己むを得ず二十九と打たざる可らず、黒は三十に打ち優勢の位置を占むべきなり。



十、三々の打込 (其四)

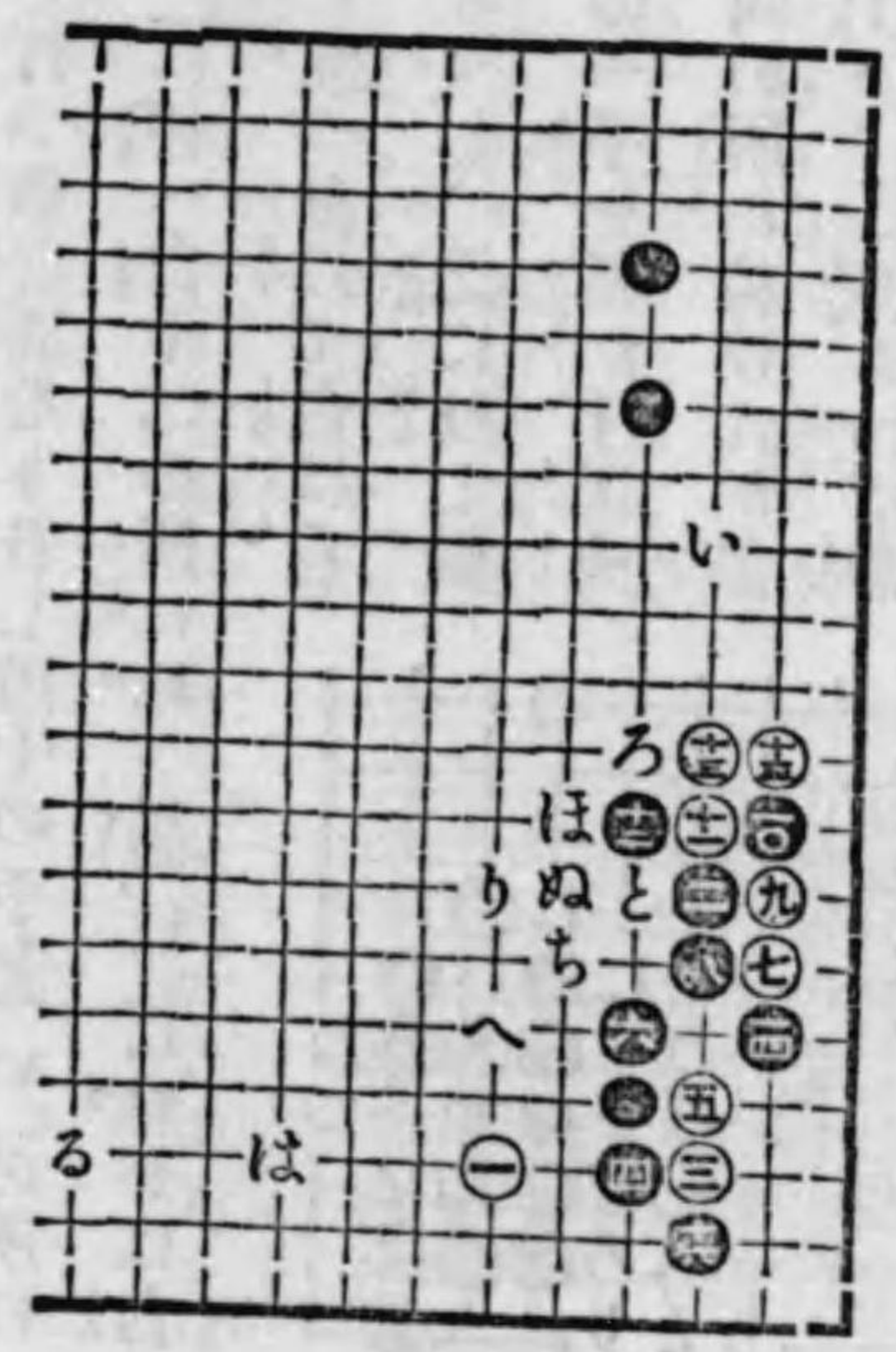
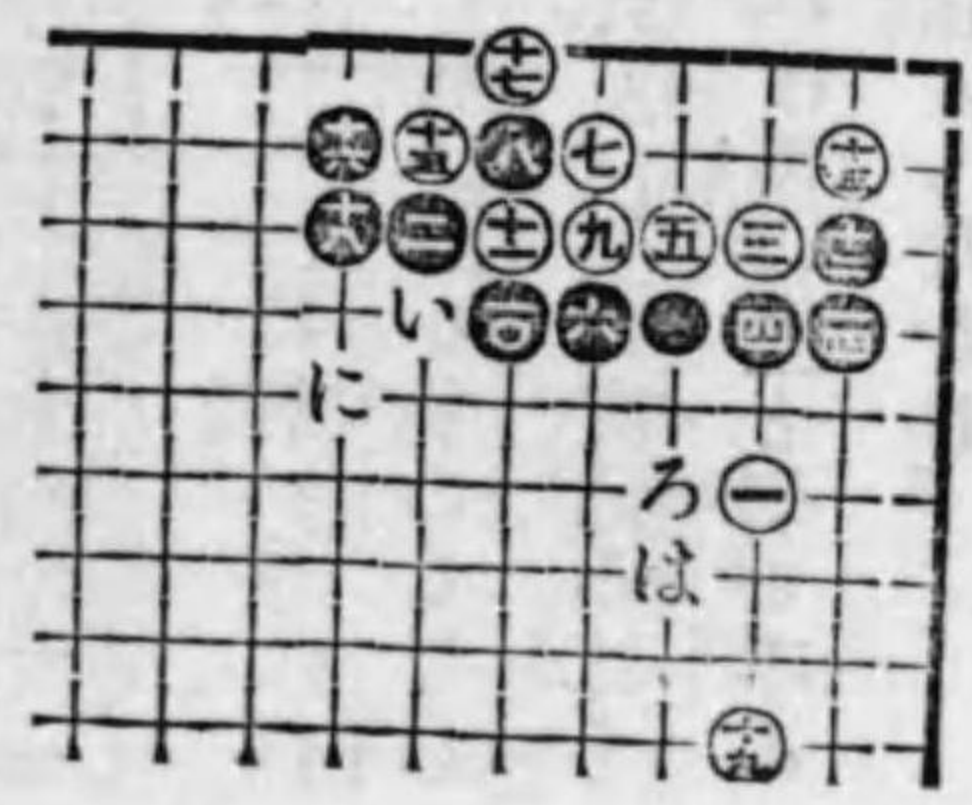
下圖の定石に於て白九と打ちし時黒十と打つ事肝要なり若し黒十の手を「い」の所に打たんか、白は直に十四の所に縛り「ろ」に押へ白十二の所に粘ぎ黒「は」に粘がば白は「に」に覗き黒十の所へ粘ぎ白「は」の所に立つを以て白は自然に活氣を帯び黒は面白からざる形となるべし、之に反し圖の如く黒十と打たば白は十一と飛びて一の一子を働かす工夫をなさざる可らず、若し白十一の手を十四の所に縛りんか黒は「ろ」に押へ白十二に粘ぎ黒「は」に粘ぎ白「へ」に押ふれば黒「と」に縛り白「ち」に押へ黒「り」に粘ぎ白「ぬ」に掛粘ぎ黒「は」に縛りる事となるを以て白は應手に困却するに至るべし、若し白「へ」に押へずして「わ」に飛ばんか黒には「か」と覗きて白に「は」と粘がしめ黒「へ」と飛び出る手あるを以て何れにしても白の一の働きを鈍らすべし、若し又圖の如き型に於て「い」に突込み來らんか黒は「た」に粘ぎ白「れ」と切らば黒「つ」と打ち白「ね」と押ふれば黒「な」と切る手あるなり、要するに此の場合十の手は極めて肝要の手なればゆめ忘るゝなかれ。



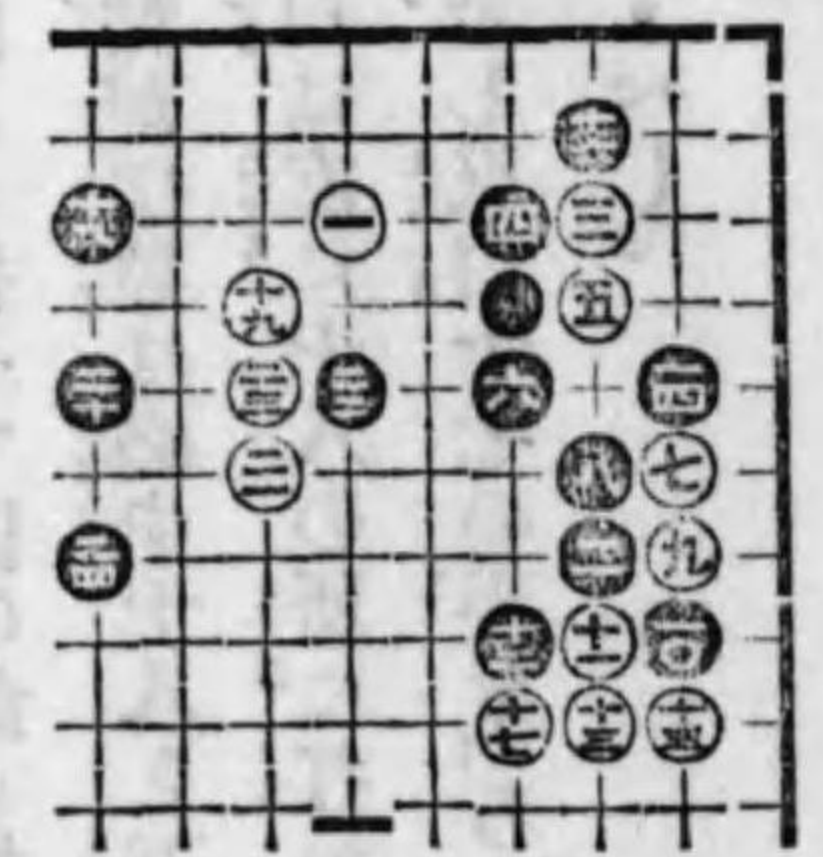
白十一の手にて「い」の所に突込み来れる場合に、黒應手の定石は下圖の如し、此の時白に征の當りありて、白「い」を切りは黒は「ろ」に付け白「は」に緯けし時、黒「に」に掛けて、白「い」の一子を擒にすべし。

十一、三々の打込 (其五)

最後に三々打込の第五種を説明せん、これは次圖の如く、他方に黒の配石ある場合に白の打出す手にて、其他方の配石と連絡を收らしめざると同時に、其間に於て白の地歩を占めんとする手段なり、即ち黒に十六と打たしめて白「い」と打つの便に出でたるものなり、故に此の場合には黒八の手を十一の所に並ぶるを可とせん、又、時としては白



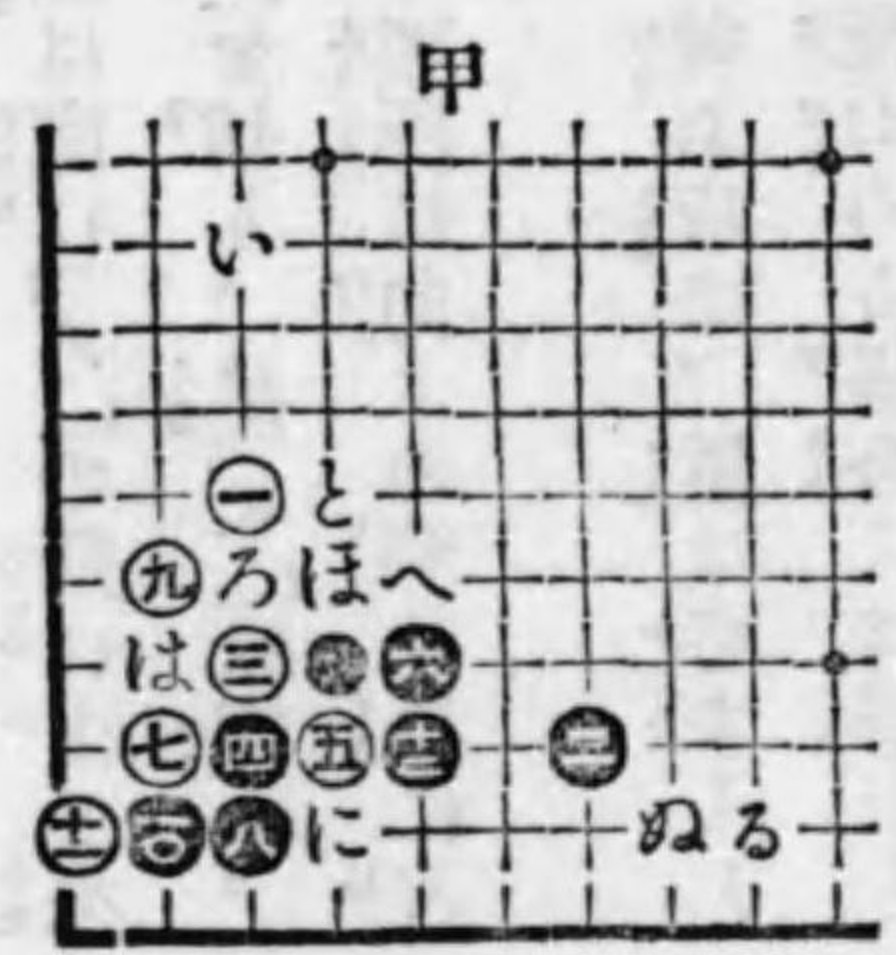
「い」に打たずして「ろ」と押す事あり。

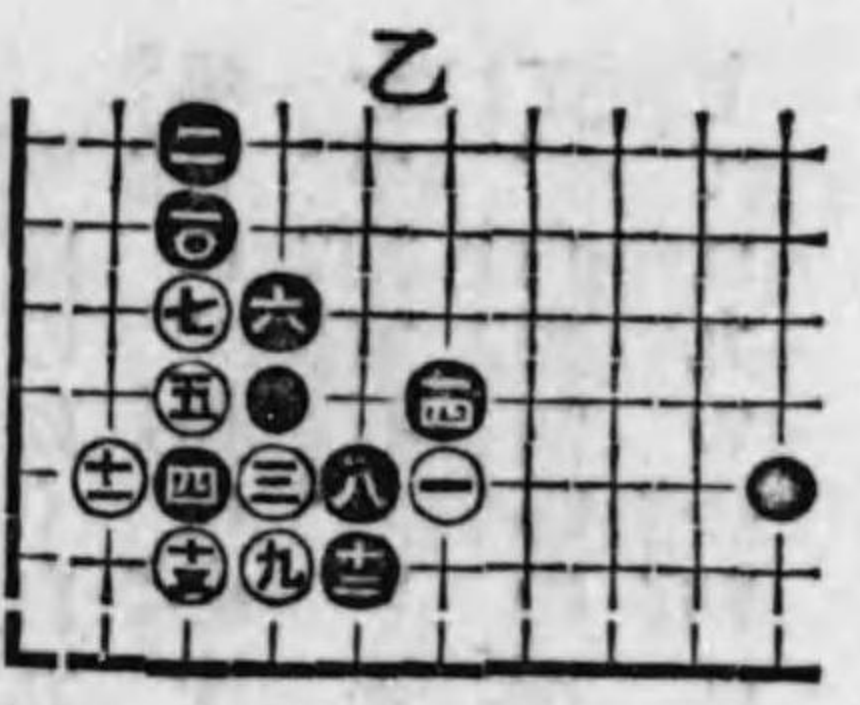


其の時黒は「は」の所へ打ち、決して十二を「ほ」に立つべからず、若し「ほ」に立つ時は白に「へ」と打たれ」とを切らるゝ恐あるを以て黒は「ち」と掛粘がざるを得ず、次に白「り」と覗き黒「ぬ」と粘けは白に「る」と打たれ黒は非常に損するに至るべし、若し白「い」に打たずして「る」に押し黒に「は」と打ちたる手順及び其の後の變化を圖示すれば上圖の如くなるべし。

十二、切違ひ (其一)

甲圖の如く白五と切るを切違ひといふ、白五と打ちたる場合に、黒は必ず六と行びざる可らず、これ定則にして之を手割定石といふ、即ち黒十二と打ちし時白は「い」と打ちて、白黒同等の地歩を占むる事となるを以てなり、又白として九の掛粘は先手を取る準備として極めて必要の手な

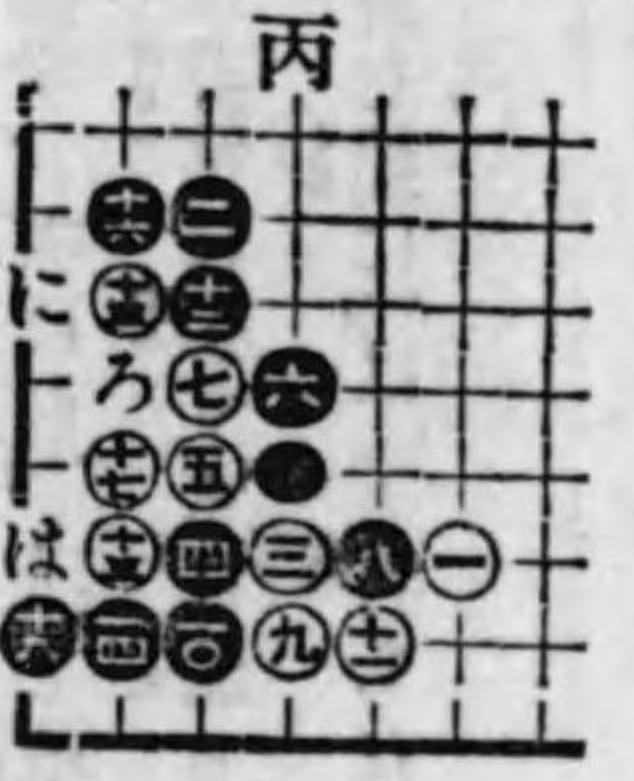




り、若し九の手を十の所に押へんか、黒は直に「ろ」の所に出で來りて白「は」に粘がば黒「に」に曲り白「ろ」を切り、黒「へ」に押へ、白「と」に粘がば黒は先手となりて、他の要所に向ふの利を黒に占めらるゝなり。

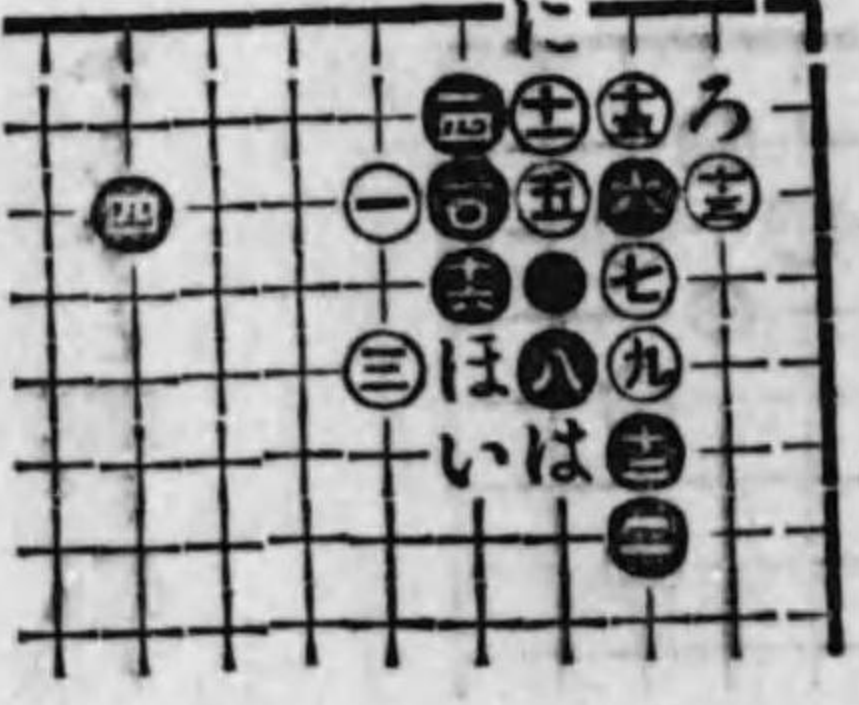
若し白七の手縛掛けずして乙圖の如く並ぶ時は、黒は必ず八と縛込み置き盤面を見渡し、圖の如く黒の配石ある場合には黒十と

押ふるを可とすべし、若し配石なき場合には丙圖の如く黒十と内より押へて圖の如く打つを可とすべし、此の場合に白十七と粘がば黒は必ず十八と下る事を忘る可らず若し「は」に縛る時は白は直に十八の所に打かへ置きて「に」に押へる手あればなり、若し又白十七の手を「ろ」の所に粘がば黒は直に「に」に縛るを可とすべし。

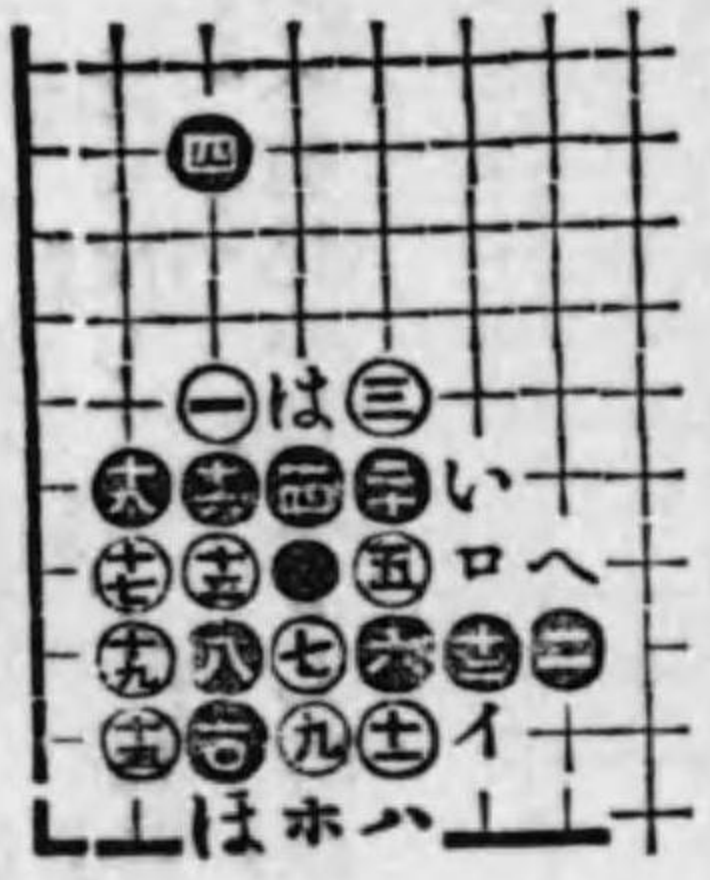


十三、切違ひ (其二)

白三の手を圖の如く立てたる場合には黒は五の所へ縛るが定石なれども、黒他に要所あり、手抜きして例へば四の所へ打ちたりとせんか、白は五と打ちて、こゝに切違ひの一例を生ずるなり、此の圖の如き手續に於て白九と並びし時



黒十と縛込み、十二と押ふる手順極めて肝要なり然らずして黒直に十二の所へ押へんか白は十三に縛り、黒十五に下らば白十六に孕れ黒「い」に粘がば白「ろ」に押へる手となりて黒の不利を招くに至るべし、又黒十四と押へし時白十六の所を切らんか黒は直に十五の所へ二子を取るは不可なり宜しく「ほ」の所へ當て然る後十五



の所を押ふることを忘るべからず。若し前と反對に次圖の如く、白五と附け、七と切違ふる時は、黒八と縛り、十と押ふる事を忘るべからず、又白十五の手を十六の所へ押ふる事あるが黒は之に對して決して二十の所へ遁出す事なく必ず「イ」に押ふべし。

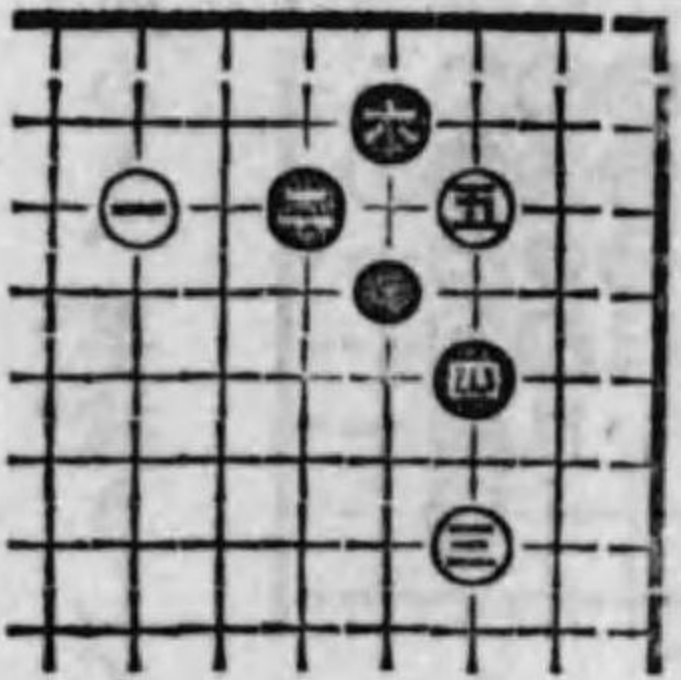
何となれば黒二十の所へ打たば白「い」に押へ黒「ロ」に取り白「は」へ當て黒粘ぎし時
白十五の所へ打ち黒十九に曲らば白「ほ」に盤る手あればなり、之に反して黒「イ」に押
へ白二十に押へ、黒「ハ」に綽け白「は」へ取りし時、黒置石の所へ打込み白取りし時黒
「ほ」に盤らば黒の形勢大に有利のものとなるなり。

第二、大斜走掛

黒の置石に對して白大斜走に掛り來る場合の變化は小斜走に掛り來る場合の如く多
からずと雖も黒としては細密なる注意を要するものあり。

一、兩面大斜走掛

黒の置石に對し白双方より大斜走に掛り來る場合あり上圖の如
きは是れなり假に之を兩面大斜走掛と名付けん、さて上圖の如く白
の一と打つ意味は六の所へ更に大斜走に走り込みを打たんとする
の準備なれば黒も亦之を防ぎて二と尖まざる可らず白三の手も一
の手と同意味なれば、黒四の手も亦之を防ぐの意味に出づるなり

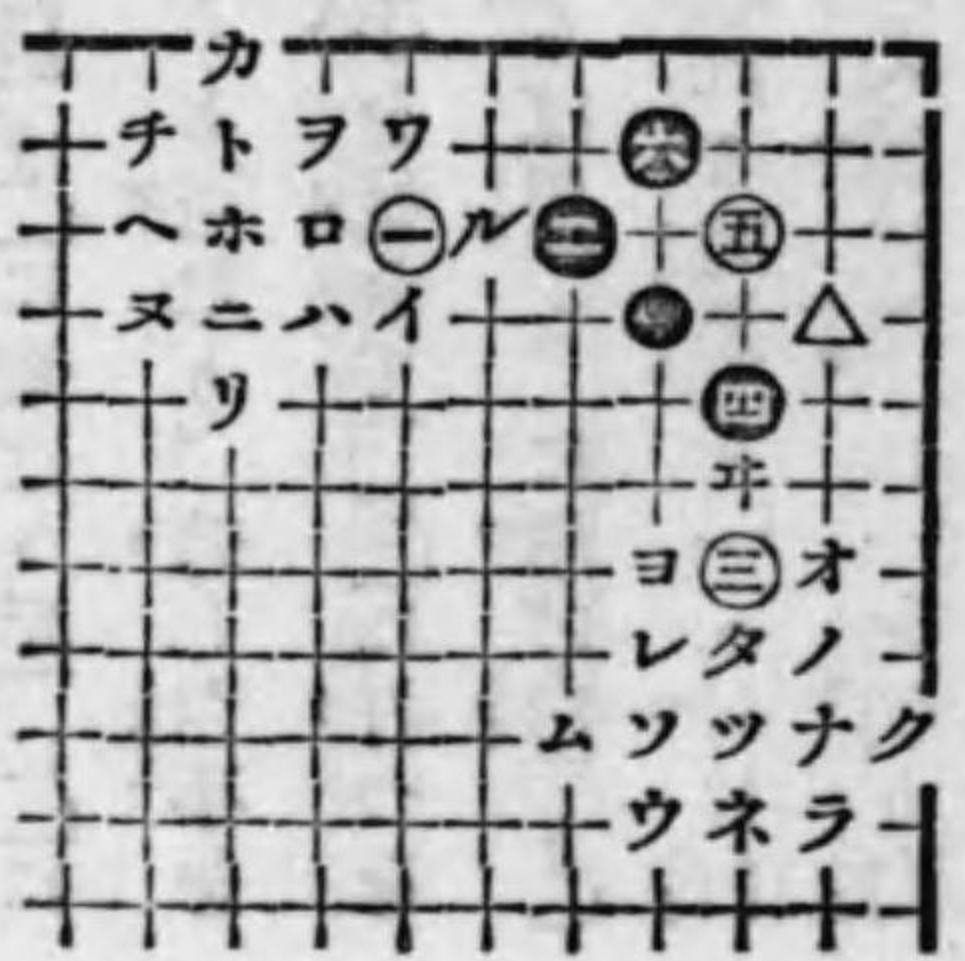


これ一通りの定石なり。

さて此の場合に黒の考ふべきもの二あり、白が手抜きたる時は如何なる態度に出づ
るか又白が五と打込み來る時は如何に應戰するか是れなり。

先づ白が手抜きたる場合を考へんに黒に直に「イ」に付くを可とすべし白「ロ」と行び
れば黒「ハ」に押へ白「ニ」に綽け以下順次「カ」に至るまでの
手續を取り、更に黒は「ヨ」に付け、白を「タ」に行びしめ前
と同様の手續を履みて白「イ」に至るべし最早黒は手抜きて
も非常の利益を得たりなり。

次に白五と打込み來れる場合を考ふるに方り、白は何故
に五と打ちしか、此に生を求めん爲か否黒二、四の手は白

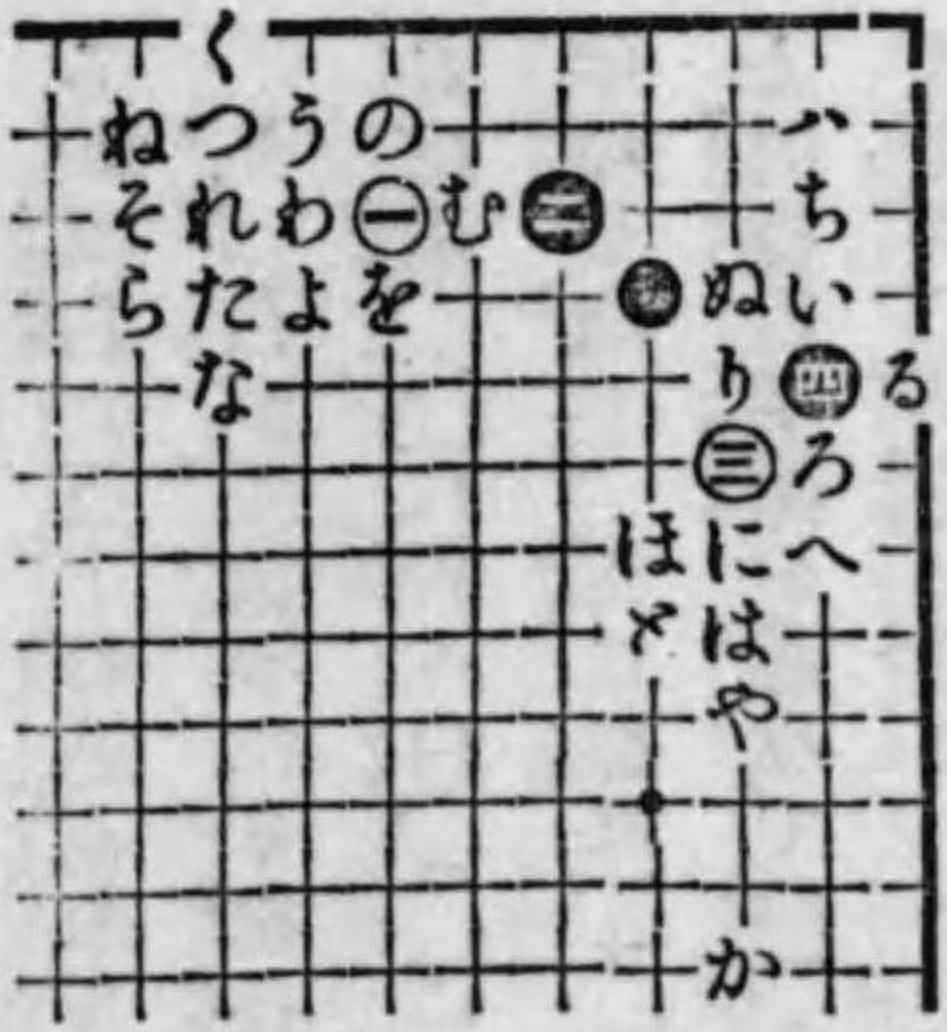


の一、三の兩手に響けるが故に此の響を防止せんが爲のみなる事を知る、此の時黒は
六と尖むか△符の所に打たざる可らず六の「所」に尖まば黒は「イ」へ附くる手はあれど
も「ヨ」へ附くる手はなし何となれば若し黒「イ」に附くれば白は「キ」へ突當りて五の白

へ縛る手あればなり。

二、大小兩斜走掛

白一と大斜走に三と小斜走に掛れるは「い」へ走込まんと意を含めるものなれば、黒四と止むるは當然なり此の時白手を抜けば、黒「ろ」に行び白「は」に飛ば、黒「に」に縛込み白「ほ」に押へ黒「へ」に粘ぎ白「と」に粘ぐ時黒は手を抜くも可なり、若し白手を

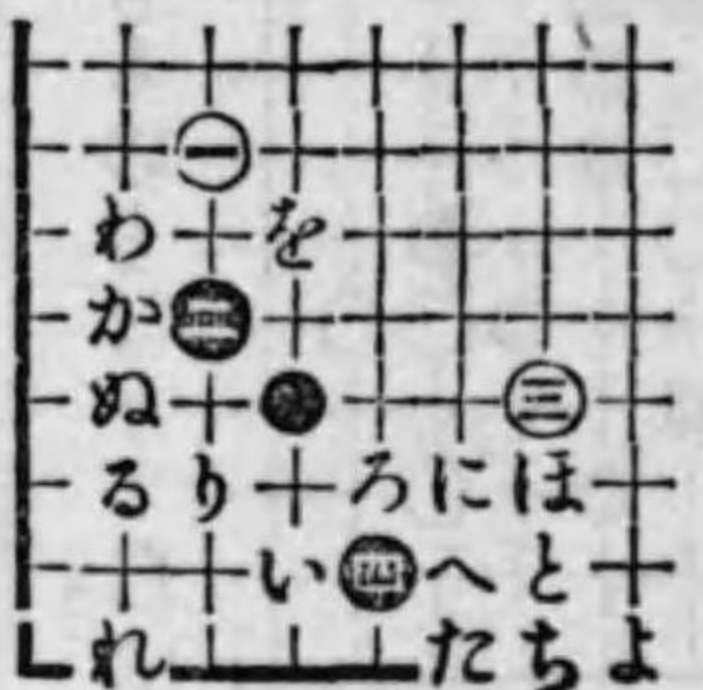


れ黒に收りては大なる利益なり。

抜かずして「ろ」へ押へし時は黒手を抜きて「か」に打つを可とす、此の時白「い」に打ち來らば黒「ち」に附げ白「り」に押へ黒「ぬ」へ當て白「る」を收れる時黒「を」へ付け白「わ」へ引き黒「よ」に押へ白「た」へ縛け黒「れ」を切り白「そ」へ縛け黒「つ」へ下り白「ね」に押へ黒「な」へ縛げ白「ら」へ縛ぎ黒「む」に押へ白「う」に押へ黒「の」に當て白「く」に收り白の（ハ）へ附けを防ぎ黒（や）に詰むべし、こ

三、大斜走二間高掛

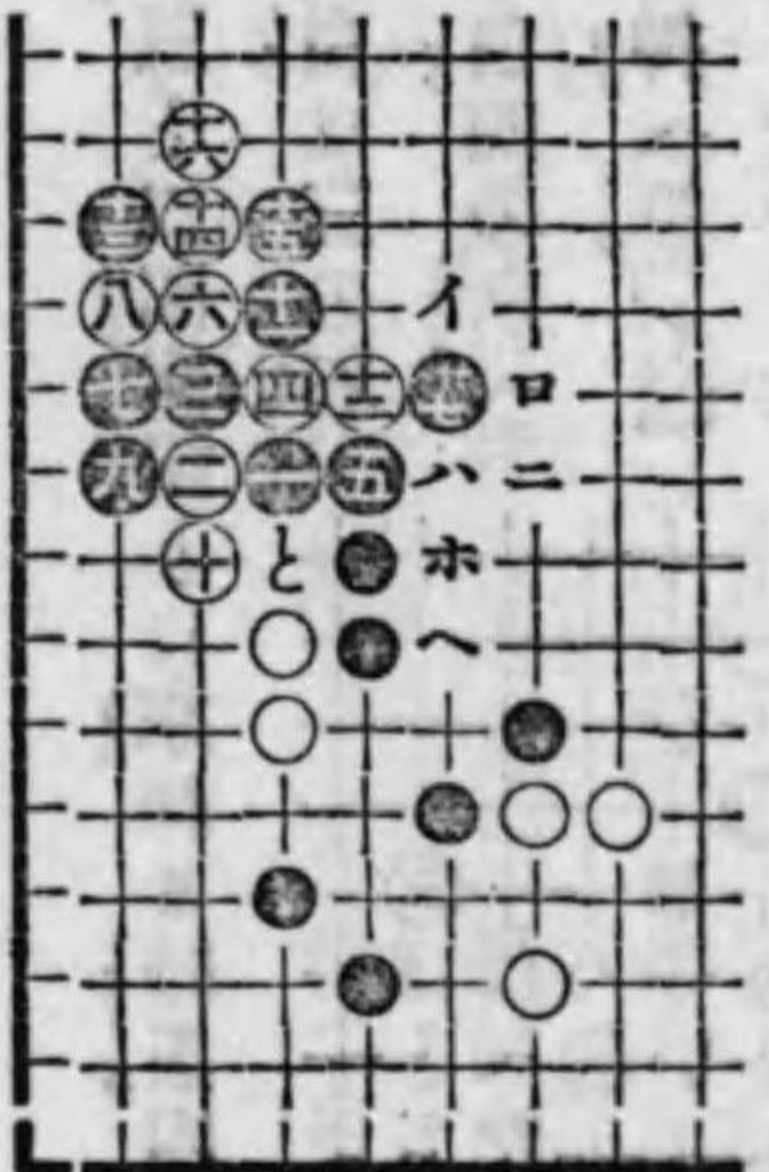
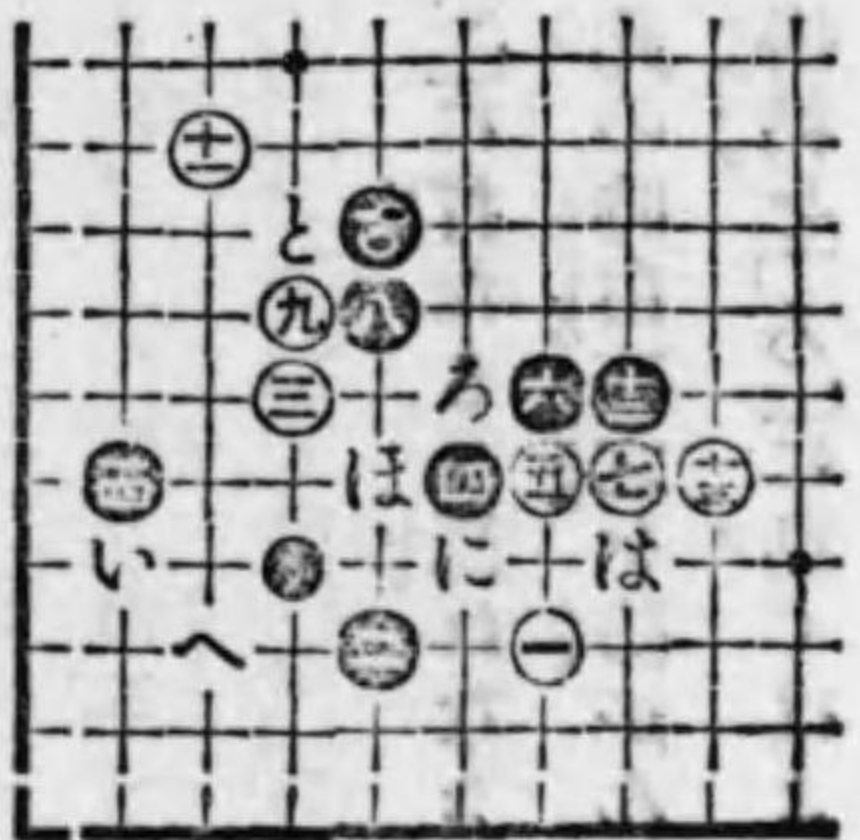
下圖の如く白一と大斜走に掛り黒二と定石を打ち白三と二間高掛りに來れる時黒四の手定石にして最もよし、若し黒四の手を打たざれば白は三の石を力として「い」に打ち來るべし、此の時黒「ろ」と尖み白四の所へ並び黒「に」に行び白「ほ」に押へ黒「へ」に曲り白「と」に押へ黒「ち」に縛け白「り」に尖み黒「ぬ」に尖み白「る」に押へ黒「を」に掛粘ぎ白「わ」に尖み黒「か」に押へ白「よ」に押へ黒「た」に粘かば白「れ」に生を打つを以て黒は目を有せず、薄弱となるなり、されば黒四の石は極めて重要な打石たるなり。



四、大斜走一間高掛

白一と大斜走に掛り三と一間高掛りに來れる時は前例の如く「い」に打たる、恐れなきを以て黒は四と打ちて外部へ出づる氣勢を示すこれ定石なり、此の時白亦之を防がんが爲に五と打ちて左圖の如き形を作るなり、此の場合に黒八の掛粘を「ろ」に粘ぐはよ

ろしからず、若し黒「ろ」に粘がば白「に」に打ち黒「ほ」に曲る
 時白「へ」に打たるれば黒苦境に陥るを以てなり、次に黒十白
 十一黒十二白十三と打ちし時は黒十四の手極めて必要なり、
 何となれば白三の場合に於ては「い」への打込手なかりしが黒
 八に對して打ちたる白の九は即ち二間高掛りなれば「い」への
 打込みを生じたればなり、故に之を防ぐ爲に黒十四の手を必
 要とするなり、又黒十に對して白は「と」と行びずして十一と打つは定石なり、若し白
 十一と打たずして「と」に行びたる場合の結果を圖に示さば左の如きものとなりて白は
 極めて不利の地位に立つを見るべし、即ち圖は白
 「と」と行げたる場合に黒一と縛げ白二と受け以下順
 次應對の順序を示せるなり、見るべし、黒は十七の
 手にて白の四、十二の二子を征に掛けて收るべく白
 に征の當りあらば「イ」に打つ自由を有する事を而



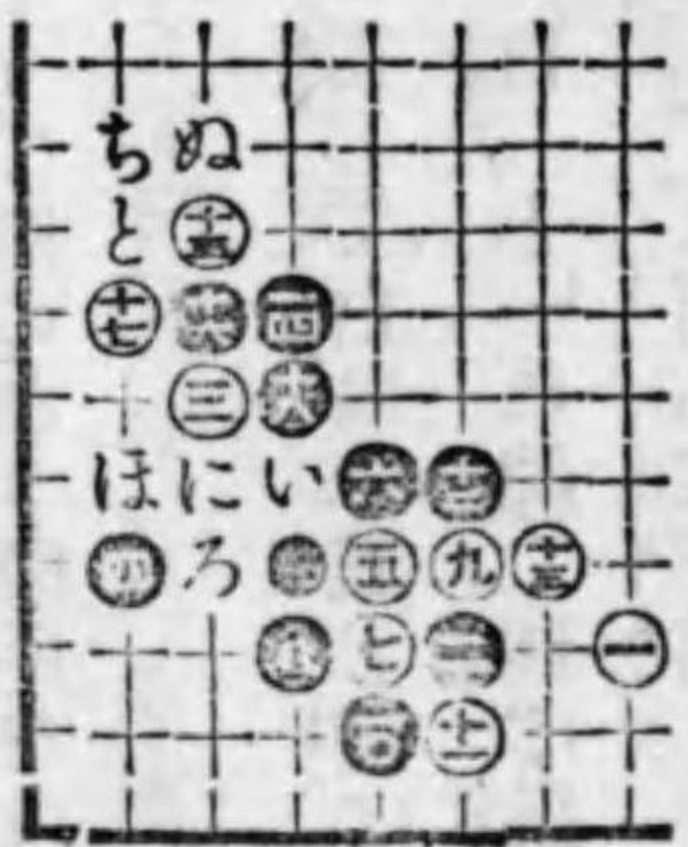
して黒「イ」に打ちたる場合に白十七の所に出れば黒「ロ」に押へ白「ハ」に曲らば黒「ニ」
 に押へ白「ホ」に行ければ黒「へ」に押へ白は到底免る能はざるべし。

第三、大々斜走掛

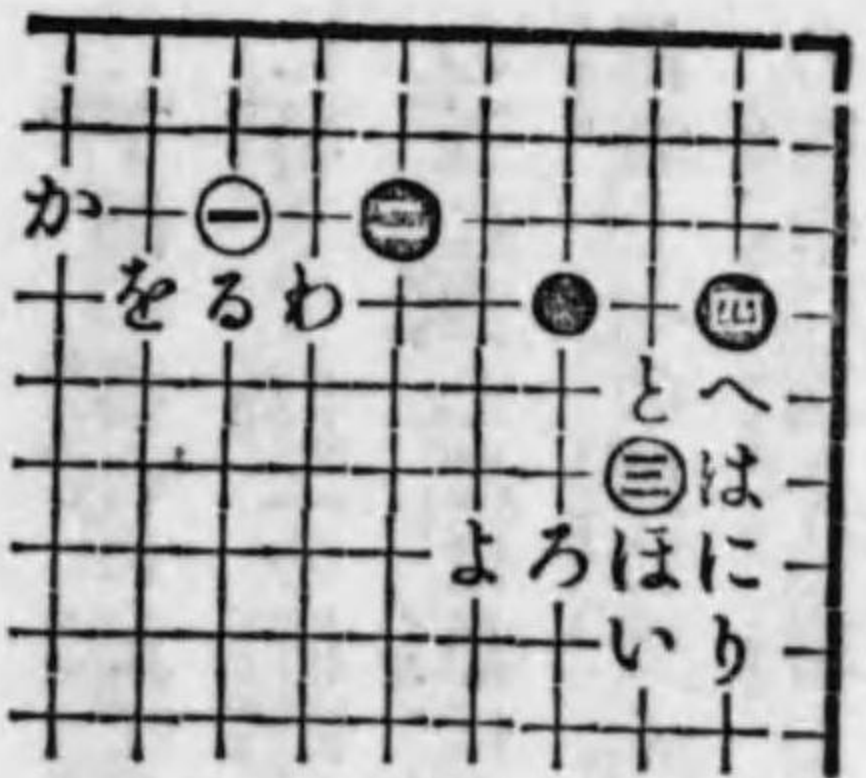
白大々斜走に掛り來れる時黒は其の白石に隣りて小斜走に開く事定石なり、而して
 此の大々斜走に於ては其の變化四つあり。

一、第一の場合

下圖の場合に於て黒の四と白の五とは大に味のある石なり、即ち黒の四は十五の所
 に響きて白三の活路を遮る手なるを以て白は之に應ずる爲に五と打ちしものなるが此
 の五に對しては黒は必ず六と縛げざるべからず、何となれば
 黒若し七の所に受くれば白「い」に押へ黒「ろ」に粘ければ黒は白
 の術中に陥りし事となるべく又黒「ろ」の手を以て「に」に打た
 ば白「ほ」に當て黒「ろ」に粘かば白は手抜きするも安心のもの
 となるべければなり、故に此の場合には黒は必ず六と縛けて



外部に突進するの姿勢を収るべきなり、白は止むを得ず七と下りて圖の如き順序を収らざるべからず。



次に黒十二と押へ十四と掛けし手順に對して白は十五と飛ばずして十六と並ぶ時は黒十五の所へ縛け白「と」に縛ければ黒「ち」と二段に縛けて白の二子を収るか黒「ぬ」と打ちて何處までも白を這はしむる事となりて白は極めて不利を招くなり。

若し又黒四と打ちし時白手抜かば上圖の如く黒「い」に詰め白「ろ」に尖む時は黒「は」に付け白「に」に押へ黒「ほ」を切り白「へ」に割込みし時黒「と」を切る手あるを以て白は「ろ」に尖む手を以て「ほ」に突當るを可とす、然る時は黒は「り」に下りて盤の氣勢を収るべく白は「へ」に尖みて之を防ぐべし、此の時黒「る」に付け白「を」に縛け黒「わ」に引き白「か」に掛粘かば黒「よ」に打ちて白の脱るゝ道を絶つべし。

二、第二の場合



次に白一と大々斜走に掛り、三と小斜走に掛りたる場合に黒四の手を前例の如く、一間高掛りに收らずして上圖の如く尖み、白五と行ひし時六と立つ場合に就て研究せんに、黒十二の手は極めて宜し、何となれば黒十二と下りたる爲に白十三の所切手を生ずべきを以て白は勢ひ之を粘がざるを得ざるべく、若し黒「い」に粘がば白十三の所切手なきを以て白は手抜く事を得ればなり、黒十四と打たざれば白は「ろ」に出で黒「は」に粘ぎ白「い」に突出し黒十四の所へ白「に」へ突當り黒「ほ」へ粘ぎし時白に「へ」を打たるゝ恐れあり。

若し白九の手を前例の如く縛けずして左圖の如く行ひし時は黒は「へ」に縛けざるべからず、此の時白は「ほ」に孕るゝならば黒「に」に押へ白「は」を切らば黒「と」に押へ白「い」へ取りし時黒「ろ」に當て白粘ぎ黒「ち」に粘ぐを順序とすべし、又黒六と打たずして手を抜くは宜しからず、若し手を抜かば白に「り」へ打込まれ、以下黒「ぬ」白「る」黒「に」白「を」黒「わ」白「い」黒「ろ」白「六」黒「ち」白「か」の順序となりて黒死石となるべし

又黒「わ」へ尖ますして「よ」に打ちし時は白「か」に下り黒「ろ」に掛粘ぎし時白「た」に下る手もあるなり、されば白「五」と打ちし時は黒は六と打つ事を夢忘るなかれ、これ定石なり。

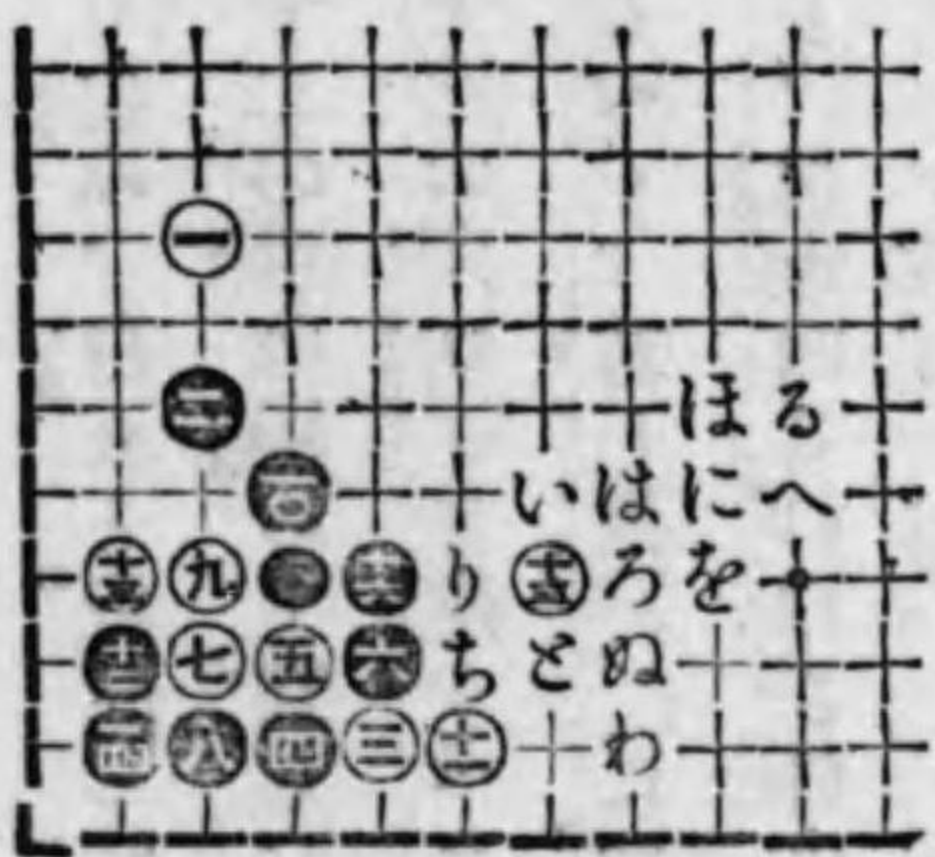
三、第三の場合

白三の小斜走掛を下圖の如き位置に收り來れる場合に黒四と附け以下十六までの順序を示す、此の後黒若し「イ」に詰めんと欲せば先づ「い」に付



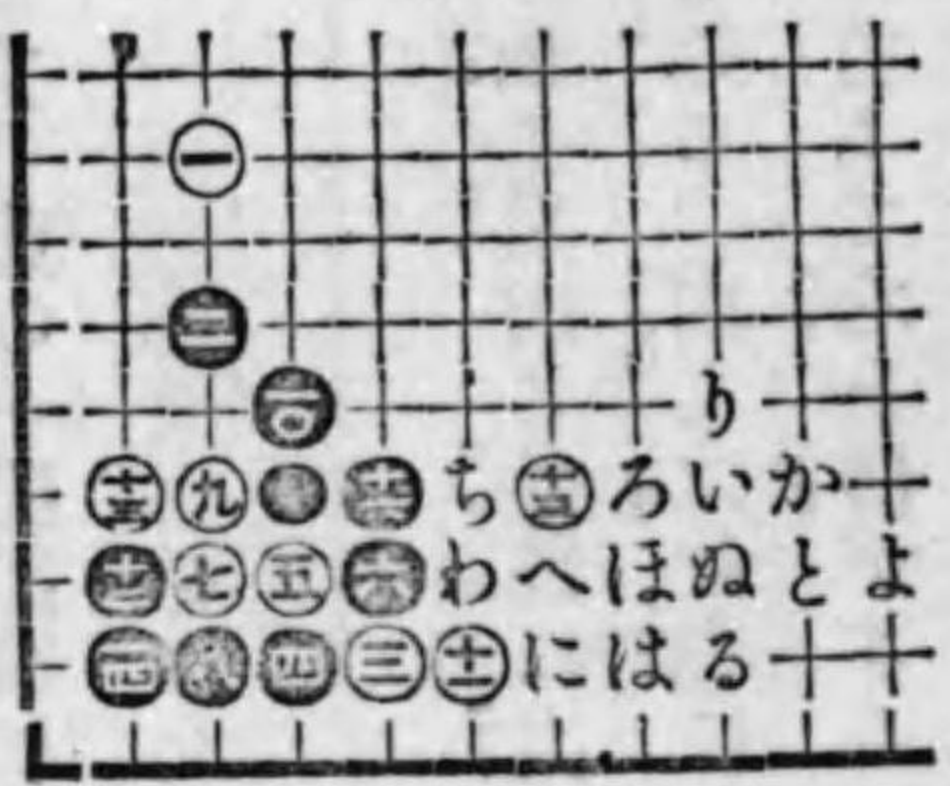
け白「ろ」に行び黒「は」に押へ白「に」に縛け、黒「ほ」に押へ白「へ」に行び黒「と」に頂越し白「ち」へ押へ黒「り」を切り白「ぬ」へ曲りし時始めて黒「イ」に詰むる順序となるなり。

若し白「へ」に行びずして直に「る」へ縛くる時は黒「を」を切り白「へ」へ粘ぎし時黒「と」に超越し、白「ち」に押へ黒「り」を切り白「ぬ」に押へし時黒「わ」へ縛け白三、十一、十五「ろ」「ぬ」の數石死する事となるなり。



若し前例の如く黒石白の一の方へ打込む餘地なき場合に於ては十五の方へ一間高掛りに打込むをよしとするその手續は直に黒「い」と打ち白「ろ」と突當りし時は黒「は」と打

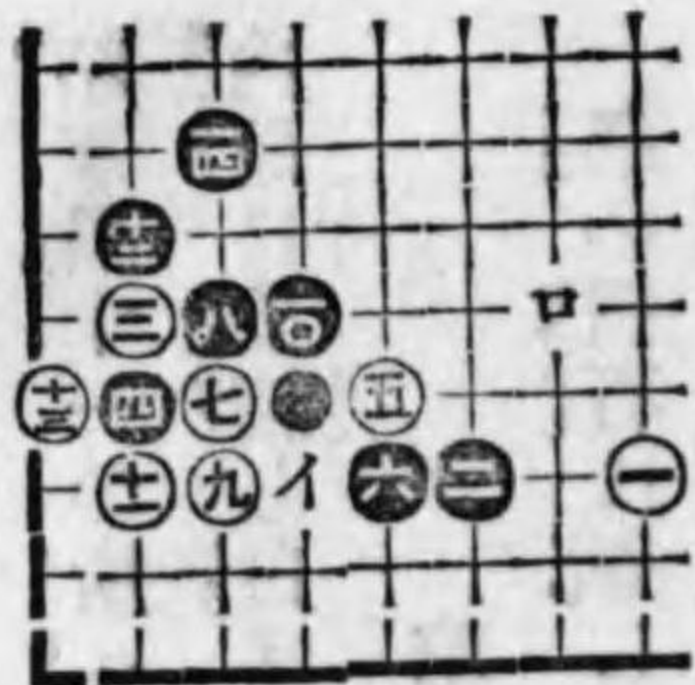
つを定則とす、此の時白若し「に」に突當れば黒「ほ」に立ち白「へ」に押ふれば黒「と」に掛粘ぐべく又白「へ」の手を以て「ち」に並ぶ時は黒「と」の手を以て「り」に立つべきなり白若し「に」に突當らずして「ぬ」に縛くる時は黒「る」に行び白「と」の所へ行ふれば黒「わ」に突出して白の二子を收るべし。



又白「と」に行びず「ほ」に粘がば黒「と」に縛け白「か」を切りば黒「よ」に行び白「り」の所へ一子を收らば黒「わ」の所に突出して二子を收るべく又白「り」に打つ手を以て「に」に打たば黒「り」の所に立つべきなり。

四、第四の場合

第四の場合は白五と七とに對する黒の應戰なるが黒六と縛け、



八と外部より押へたる所頗る妙味あり、黒若し八の手を以て白の九の所に打ち白八に粘ぎ黒十一の所へ粘ぎ白十の所へ押へ黒「イ」の所へ粘ぎ白「ロ」に斜走に掛くれば黒は内面に萎縮し白は外面を蔽ふこととなりて黒不利の地に立つべし。

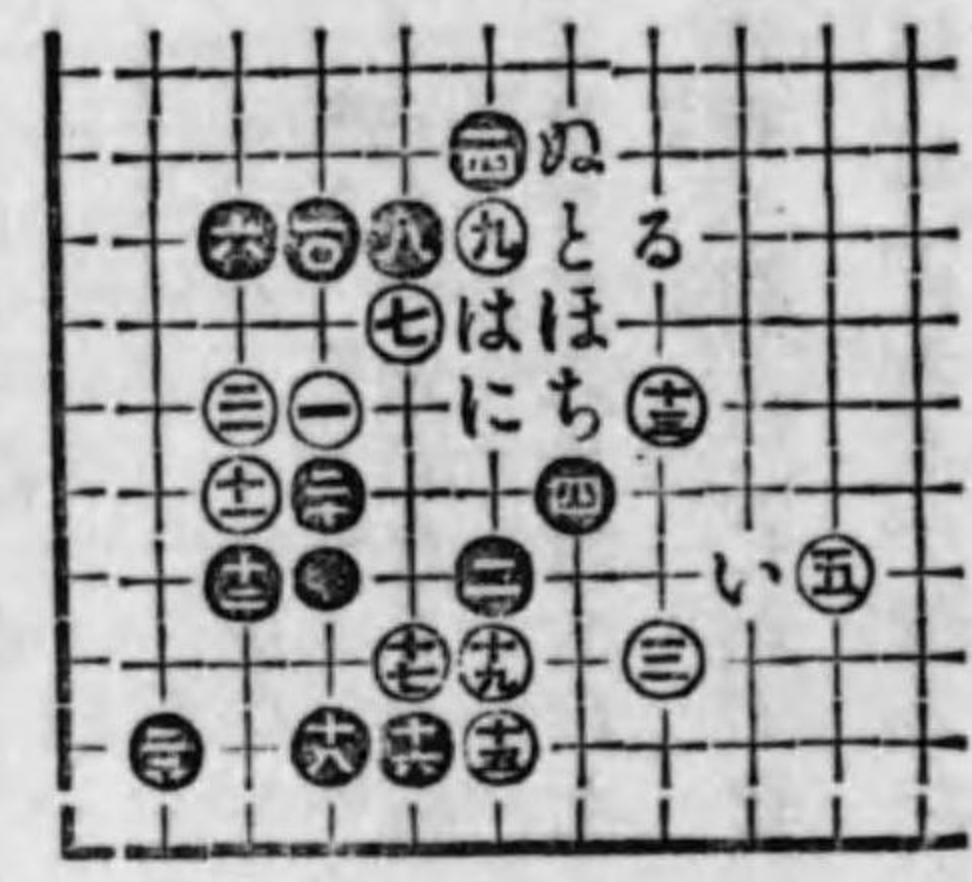
第四、一間高掛

黒の置石に對して白が一間高掛りに來る時は黒は白の掛り來れる他の方向に同じく一間高飛びに打つか、若くは白の高掛りに對して頂引くかを法とす、此の一間高掛りに於て四變化あり。

一、第一の場合

第一の場合白三と黒の二に對し、小斜走に掛り來る時次圖の如く黒四と外部に尖む場合なり、今此の四の手を研究するに頗る味のある事なる事を知る、即ち之を右にしては「い」に響き左にしては六に響くなり、されば白は勢ひ五と打ちて右を防がざるべからず、黒は亦自ら六と打ち、二十一の所へ付くるか、二十の所を切るの態度を收る、茲に於てか、白七と尖みて之を防ぐ次に黒八と打ち白九に綽けしめて十と棒粘の

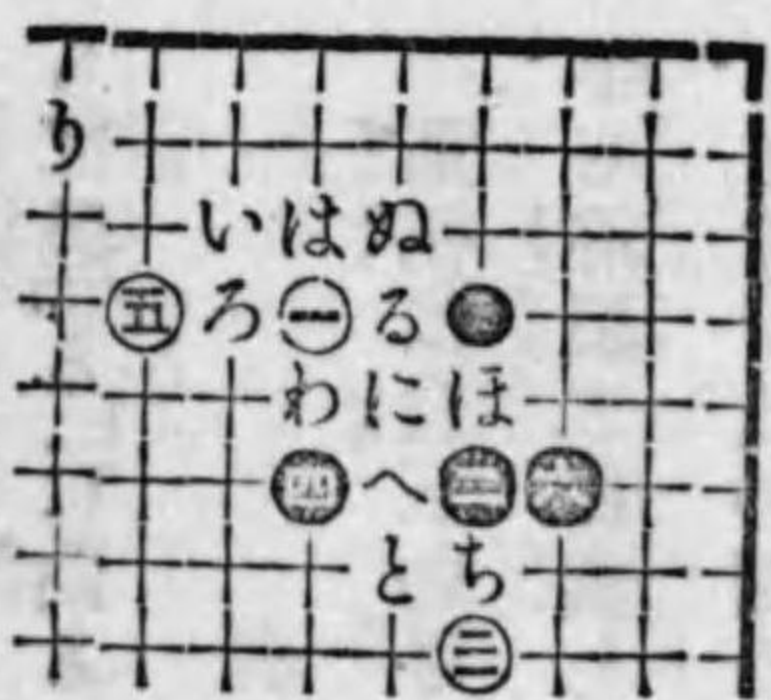
手頗る妙味あり、十の手猶ほも二十一に付くるか二十を切るの凄味を帯べるを以て白は厭々乍らも十一と突かざるを得ず而して順次黒二十二と打ちて黒の角石活を得たる場合には、白は「に」と打たざる可らず。



黒手抜かば白二、四の二子を収るべしと雖も黒は此の二子を捨て、も他の優勢の所へ打つの餘裕あるを以て黒の形勢は此の場合たしかに良し、若し白「に」の手を抜かば黒「は」に打ちて白の數石死となるべし、即ち白「は」に粘がば黒「と」に押ふべく、白「ち」に打たば黒「に」を切り白「ぬ」を切らば黒「る」に曲る手あればなり。

二、第二の場合

前例は白三の手、黒の二に對して小斜走に掛れる場合なるが、第二の場合白三の手も亦黒二に對して一間高掛りに來れる場合なり、此の時黒は左圖の如く四と打つを可とす、此の四の手を研究するに白若し五と打たずんば、黒は直に「い」に打ち白「ろ」

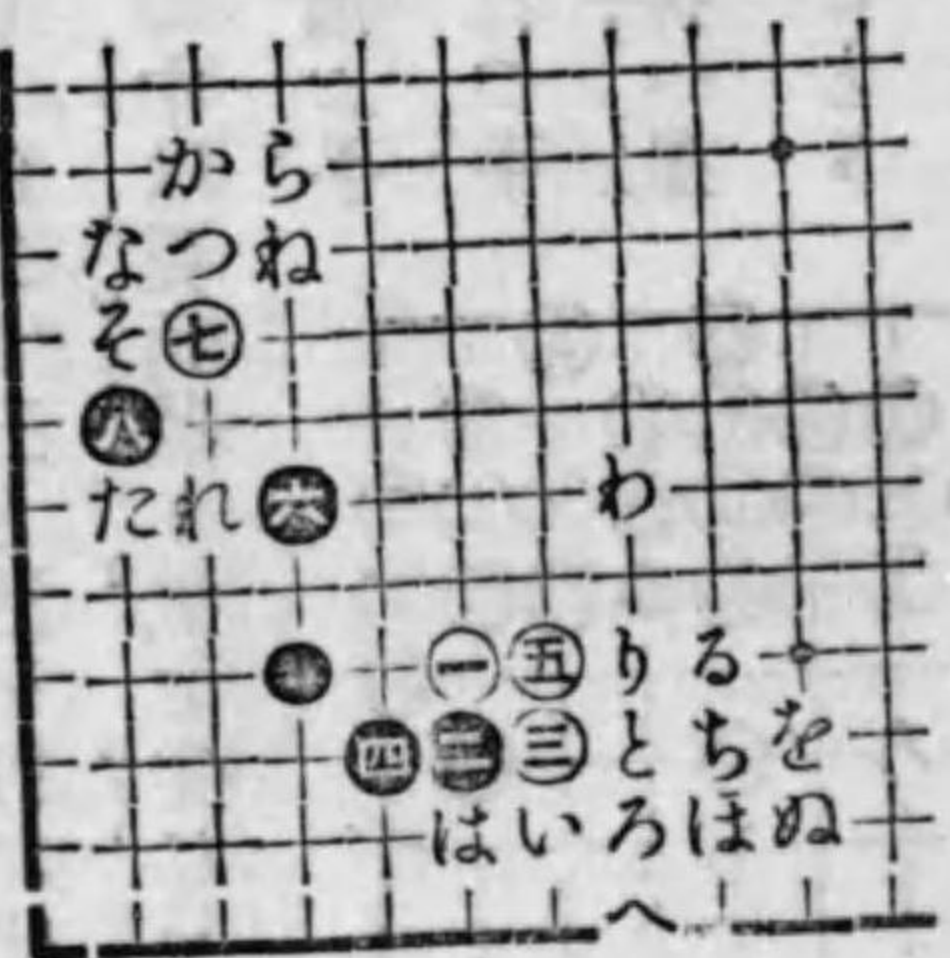


に押ふれば黒「は」に引き白「は」に押ふれば黒「ろ」に行びる意を示せるなり、次に白五の手を研究するに「に」の所に打ち兩覗きの氣勢を示せるものなれば黒は必ず六と打ちて之に應戦せざる可らず白若し五の手を以て直に「に」の所へ覗かんか、黒「ほ」に粘ぎ白「へ」に出で黒「と」に押へ白「ち」を切らば黒は「は」の所へ付け、白「ろ」に行び黒「い」に行び白五に行びば黒「り」に斜走に打つを定石とす、若し黒「は」に付けし場合に白「ろ」の手を以て「い」に押ふれば黒「ろ」の所を切るべし、然る時は白「ぬ」へ縛くれば黒「る」を切り白は頗る不利の地位となるなり。

三、第三の場合

第三の場合は白の一間高掛りに來れる石に對して黒之に頂引く場合の定石なり、次頁の圖に示せる如く黒二と頂引き、白三と押へ黒四と引き白五と粘ぎ黒六と打ち白七黒八と打つの順序なれども其の以後に於て黒「い」と縛け白「ろ」に押へ黒「は」に粘ぐを黒の先手とすべし、何となれば白若し此の場合に手を抜かば黒は「ほ」に打ちて盤るか

「と」の所を切るかの姿勢を收ればなり黒「ほ」に對し白若し「へ」と下らば黒は「と」と切るべく之に對して白「ち」と切らば黒「り」にたち、白「ぬ」に「を」に粘ぎ黒「わ」に飛びて優勢となるべし、次に黒六の手を研究せんに白一の石に響きて、良き手なれども若し白石「か」の位置に在る場合ならんには白に直に「た」に打たる、手あるを以て黒六の手を以て「れ」に打つをよしとす、又白の七に對しては黒八と打たざる可らず、此の時白「そ」と押ふれば黒は手抜くも可、白「そ」に打たずして手を抜かば黒「そ」に行び白「か」に打たば黒「つ」に縛込み白「ね」に押へ黒「な」に粘ぎ白「ら」に粘ぐべきなり。



四、第四の場合

第四の場合は黒二と頂引きたるに對し白三と縛込む場合なし、次頁の圖の如く應對二十八手に及びて靜に其の成績を顧みれば得失相半ばすと雖も黒の外方に發展したる



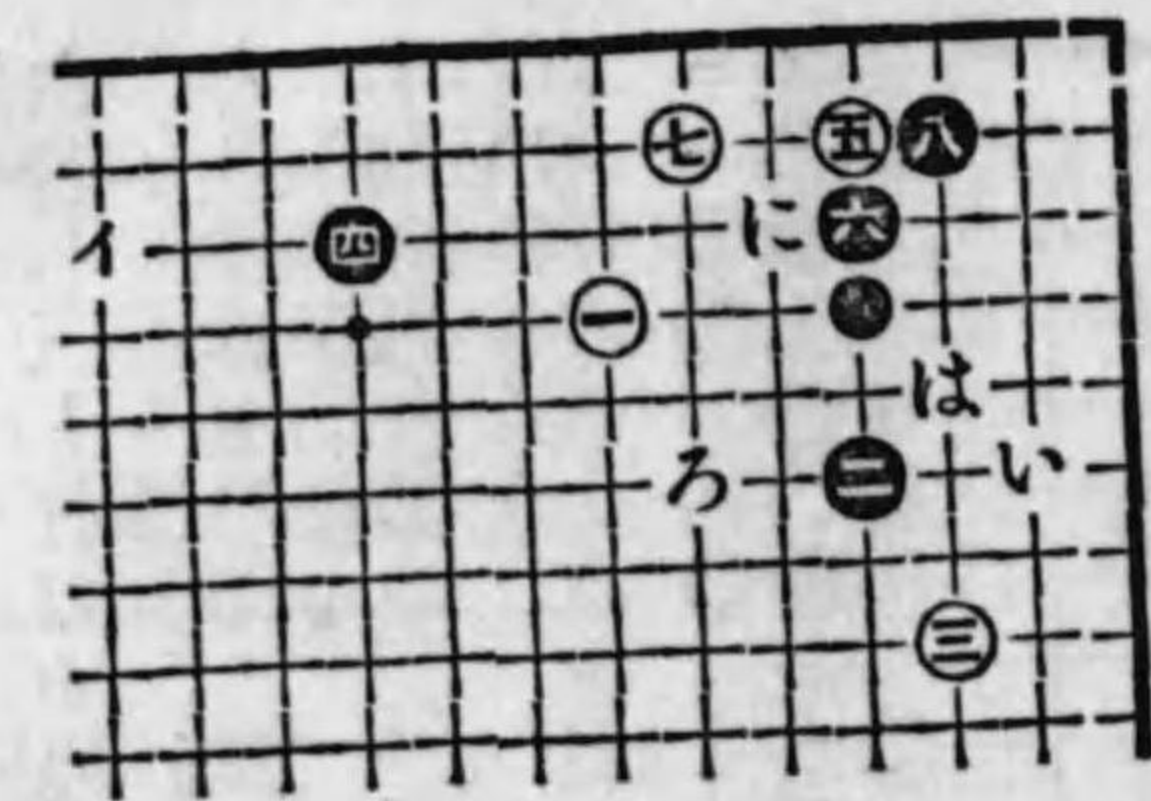
だけ其の有利なるを知る、而して白三の緯込みに對して黒一朝受方を誤らんか非常の損失を招くべきを以て能く注意せざる可らず、即ち黒は必ず四と外部より押へざる可らざると同時に白七に對しては黒八の手を忘るべからず、若し八の手を以て、十三の所を切り然る後八の所へ曲る如きは、後害を遺すものなり、又白十一と下りし時は黒十二の緯けて白十三の粘ぎは極めて必要なりと知るべし、白二十三と活を打たば黒は二十四と打つを定石とすれども初心の中は兎角收り氣を生じ易く次圖「い」に打たんとする傾あり、然れども白には「ろ」に飛ぶ手あり、黒「は」に行び立たば白二十四の所へ打ち更に「へ」に打つ手あるを以て黒は「と」と打たざるを得ず、此の時白「ち」に押へ黒「り」に行ければ白「ぬ」に覗き黒「る」に粘がば白「を」と尖むこと、なりて折角勝ち得たる黒の地をして浮石たらしむ事あり能く注意すべきなり。



第五、二間高掛

二間高掛りに白の向ひ來たる場合に黒の應手四種あり、一間高啓、尖み、小斜走啓二間高啓これなり。以下順次之を例示せん。

一、一間高啓の場合



白の二間高掛りに打ち來る時、上圖の如く黒石の一間高啓に打つ手、最も堅固にして良し即ち白三と打ち來るも黒は他に手抜きても黒石決して死する事なし、黒四は其の手抜きを示したるものにて強ちこゝに限らず、四又は「い」に打つも可なりその他よしと思ふ所に打つも可なり、白五の手を以て「い」に打ち來らば黒は「ろ」に飛び白「は」に覗けば黒は「に」に尖むべし、黒の二と高啓の手か如何に堅固なるかを證するにたる。

二、尖みの場合

下圖に於て白二と尖みし手白三と防ぎし手を研究するに
 白若し三と打たず他に手を抜きしと假定せば如何なる結果
 を生ずべきか即ち黒は直に「い」と打ち白「ろ」と押へ黒「は」
 と切り順次黒の「つ」に至る手を経て其の結果を顧みれば白
 の不利や甚しきを見る、黒の二は白手抜かば此の結果ある



ことを暗示し白の三は之を豫見して防戦せしものと知るべ
 し、されば黒は之に應せずして四と大斜走に啓きしなり。
 白若し此の場合に「イ」の所に打込み來らば如何、上圖の
 如き結果となるべし「イ」を白の一となし、以下順次二十二

までの手續を経べし、但し黒十八の手にて白の三子を打貫く。

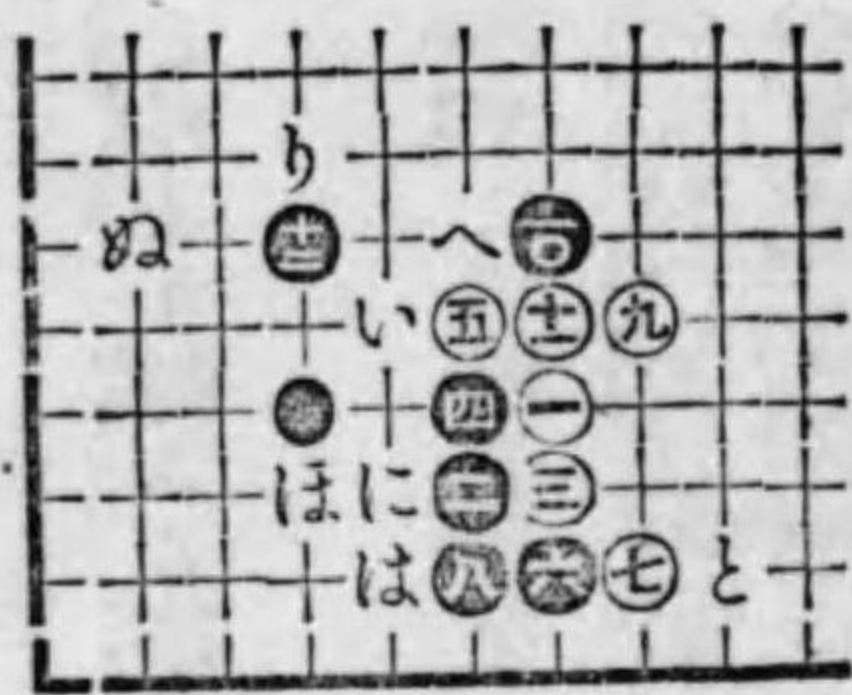
又黒三と尖ますして四の所へ行び出せし時は如何、此の時黒は十二の所へ突當り白
 十三の所へ行び黒三の所へ突出し白十四の所へ盤りし時黒十の所へ縛り白十一の所へ
 押へ黒十七の所へ粘ぎし時白若し手抜かば黒直に「イ」に縛り白十五と粘ぎ、黒「ハ」に

劫に打込み白「ニ」へ劫を取らば黒六の所へ出で白七の所へ押へて黒劫を收り有利の姿
 となるべし。

三、小斜走啓

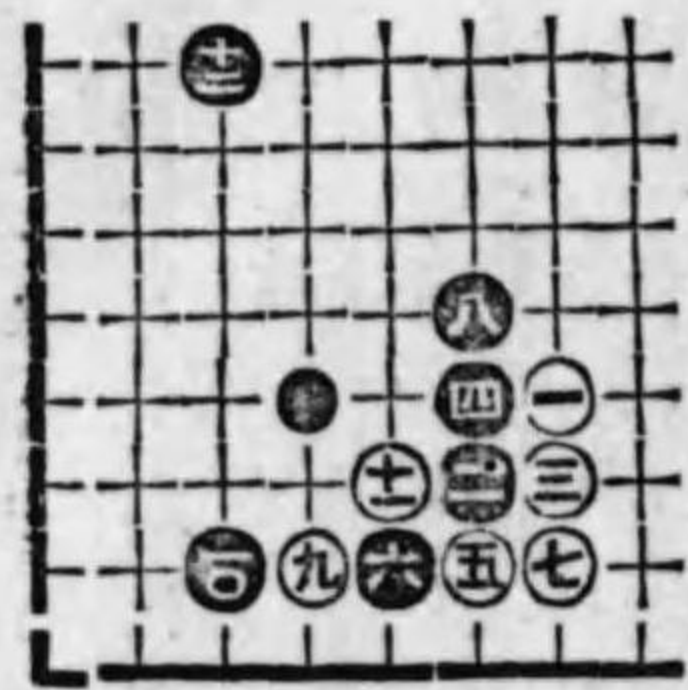
下圖の手順に於て白の五と黒の六とは大に研究を要し、黒十、
 十二の手甚だ良し今之を説明せん。

白五に對し黒六と打たずして「い」と押へんか白は八の所に縛り
 黒に「は」と押へしめ白六の所に粘ぐべし。



然る時は「に」の所に白は切り來るを以て黒は是非とも「ほ」に打
 たざるを得ず、此の時白「へ」に行びて白は優勢となるべし、され
 ば黒としては白の五に對して六と打ち白に七と押へしめて八と粘
 ぐべきなり。

白九の手は黒の「と」を付くる手を防ぎしなり、黒十と覗き之を
 棄石として十二と打ちたるは頗る可なり、若し然らずして十の手



を以て「い」に打たんか白「へ」に行び黒「り」に斜走に打たば白に「ぬ」を打たれて黒の形勢悪しくなるべし。

若し白五の手を八の所へ縛り來るときは如何なる結果となるべきか黒「は」の所へ六と押へ白六の所へ七と粘ぎて前圖に示す如き形となるべし、即ち黒は優勢となり、白は角へ手を下す餘地なきに至るべし。

四、二間高啓

黒二の手、二間に高啓きの時白は三と頂け來るべく、黒は必ず四と外より押ふる事を忘るべからず。

若し誤つて内より押ふる時は即ち四の手を六の所へ打つ時は一手不足にて四五子を失ふに至るべし、今その次第を説明せんに、黒四の手を六の所に打たんか、白は十の所を切るべく黒「い」に引き白「ろ」に縛り黒十一の所に行び白「に」に並び黒「ほ」に押へ白十二の所へ押へ黒七の所へ曲り白四の所へ行び、黒十三の所へ行び白「へ」に行び黒「ど」に下り白「ち」に粘ぎて攻合とならば黒一手不足するなり。

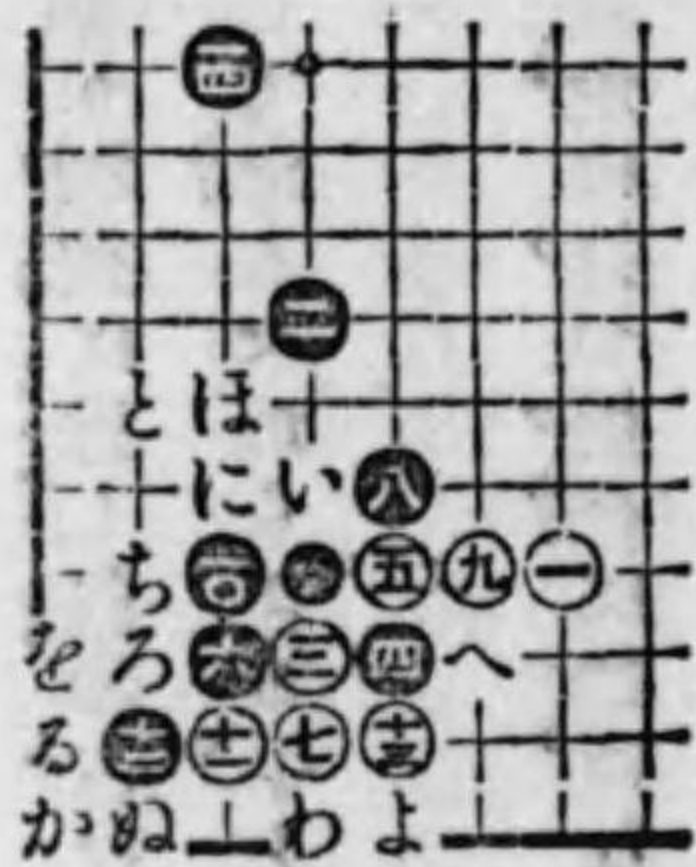
次に黒十二と押へし時白は十三と行びずして「ぬ」と縛くる時は黒に十三と押へられて白は遂に死するに至るべきを以て能く注意すべし、即ち黒十三と押へられれば白は「ろ」と切り黒「る」と下り白「を」と押へ黒「わ」と縛り白「か」と收り黒十二の所へ打込み白收りし時黒「よ」と粘ぎて白の目無くなればなり。

第六、大斜走締打込

黒の置石に對し白小斜走に掛り來り、黒大斜走に啓ける時、白の角に向つて打込む石を黒は如何に應ずべきかは屢々起る問題にして、又幾變化もあれど、之を大別して四となす。

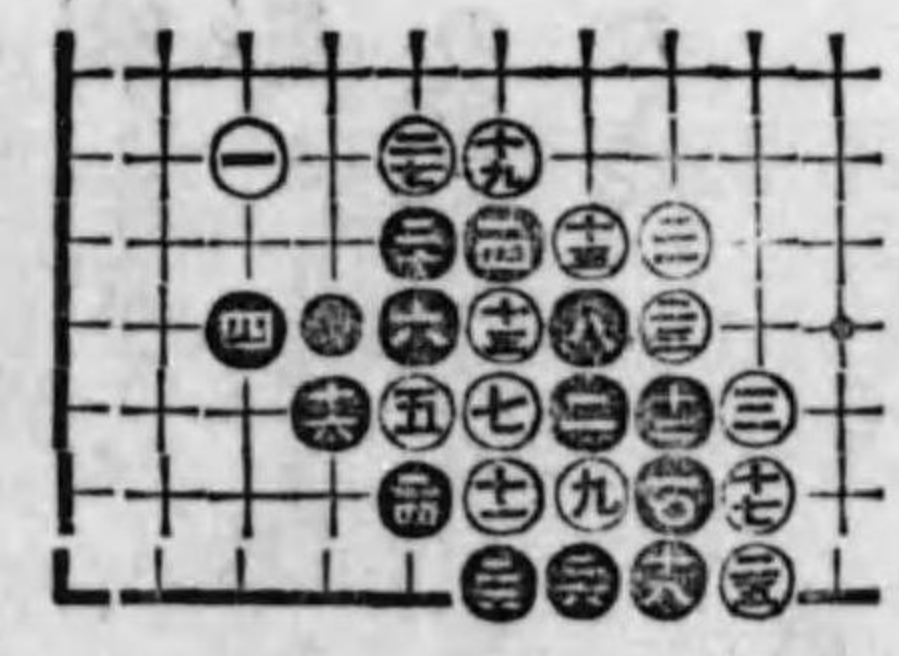
一、第一の場合

次圖に示せる如く、二十の順序までは普通の定石にして、十八の手は大によし、此の時白は十九と盤らずして、二十の所へ行ぶれば其結果や如何あらん、黒は先づ「い」



と縛くる事を忘るべからず、此の時白「ろ」を切らば黒「は」に縛け白「に」に行び黒「は」に付け白「へ」に縛け黒「と」を切るべし、白「ち」に縛ければ黒「り」を切り白「ぬ」へ縛ければ黒「る」を切るを以て白の「ろ」に「の」二子免るゝ能はざるべし。

若し又白十七と押へし時、黒十八の手を白の十五に縛けずして下りたる場合は如何なる結果を見るべきかを吟味せんに黒は上圖に示

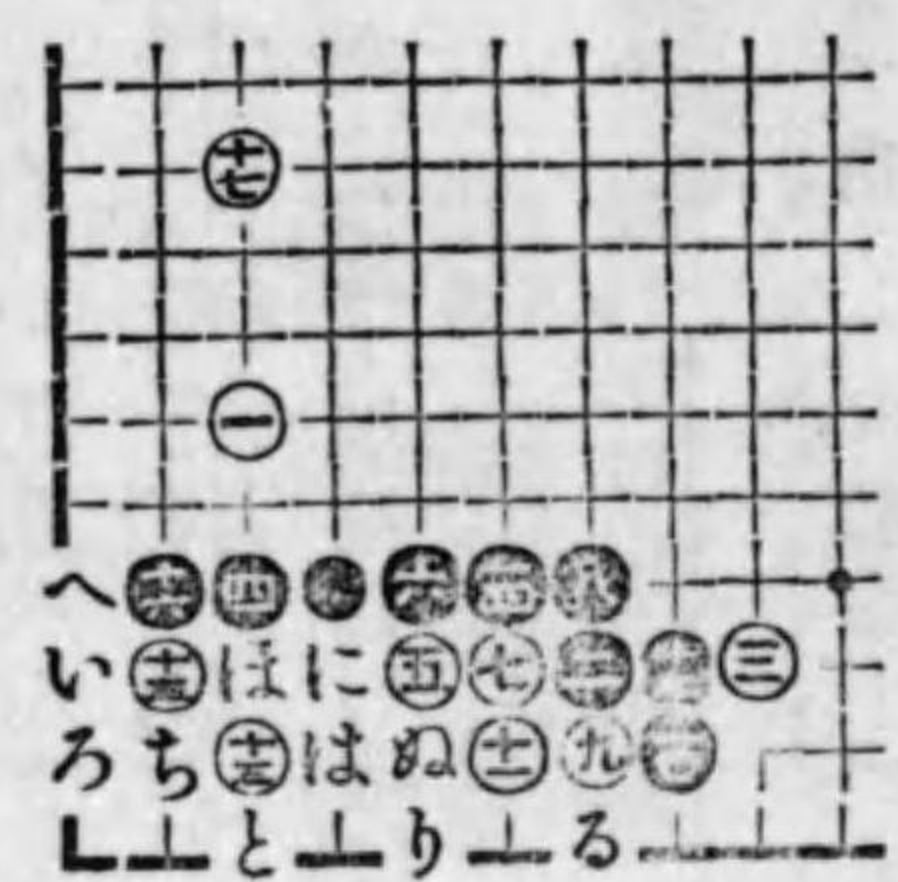


せる如く、白の五子を収り得たるも白に外部に鐵壁を築かれたるを以て結局は黒の不利となれるなり、次に白七と突當りし時、黒八と立たずして十三の所へ押ふる時は如何なる結果となるべきか、次圖に示せるが如く黒は單に死せずといふに止まり利益は悉く白の占むる所となるべし、されば黒八と立つ事は決して忘るべからざる手と知るべし。

次は又黒十二と粘ぎし時白十四の所へ出でんとせず十三と斜走に打つ場合は如何なる

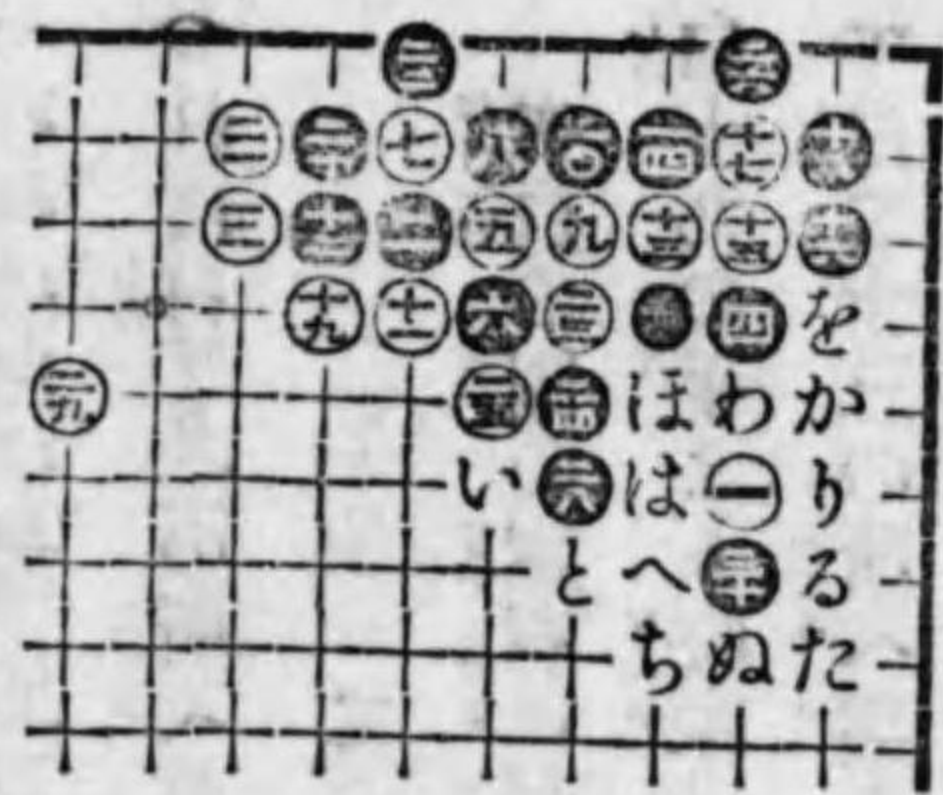


る結果を生ずるかといふに黒に十四と押へて白に角に生かして己れは外部に鐵壁を築く事に轉すべし、即ち勢ひ左に圖示せるが如き形となるべし、此の形に於て白は一見有利なる如きも尙ほ缺點を存するなり、即ち黒「い」に縛くる時は白「ろ」に押へ黒「は」に頂越し白「に」に押へ黒「は」に突込み白「へ」に一子を収らば黒「と」に縛け白「ち」に粘ぎ黒「り」に尖み白「ぬ」へ當て黒「る」へ縛け劫となるべく白「へ」に收らずして「ち」へ粘ぐも黒は「り」へ尖み白「ぬ」に當つれば黒「と」に縛けて劫となるべきを以て結局白の損となるべければ白は黒「い」に縛けられたる時「は」に引き黒「ち」へ當つれば白「り」の所へ打ちて生を求むるの外なきなり。



二、第二の場合

次頁の圖の定石に於て研究を要する問題は白十九の手と黒二十八の手となり、先づ白十九の手より吟味せんに白若し二十の所を打たば如何、黒十九の所に行び出すを以て白二十三の所へ突き出したる時黒二十四に押へ白二十五に収り黒二十六に盤り白二



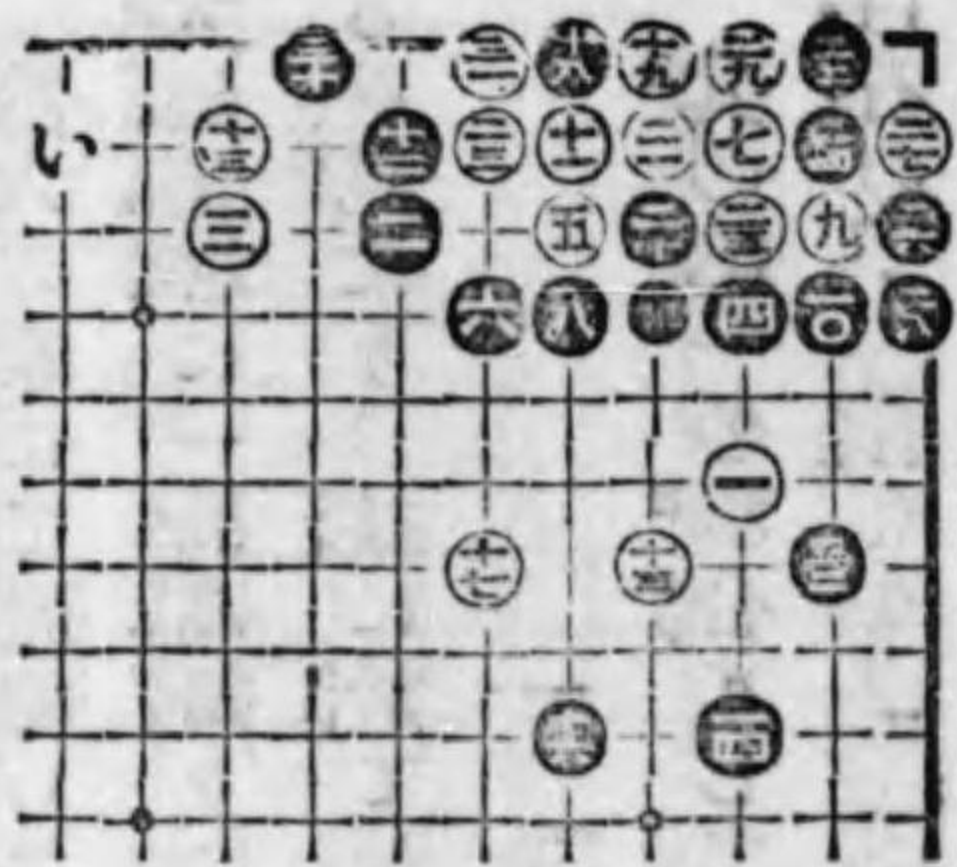
十七と粘がば黒「い」に縛けて白は征にかゝるに至るべし、次に
 黒二十八の手を「は」の所に掛粘がつか、一見堅固に見えて其の
 實極めて不利に陥るべし、何となれば此の時白二十八の所へ當
 て黒「は」に粘ぎ白「へ」に押へ黒「と」を切り白「い」の所へ粘ぎ黒
 三十の所を切り白「ち」へ行び黒「り」に縛け白「ぬ」に押へ黒「る」
 に粘けば白「を」を切り黒「わ」に收り白「か」に當て黒粘ぎし時白
 先手にて「た」を押へ外面を覆ふに至ればなり。

若し黒六と縛けたる場合に白七の手を九の所へ行びし時は如何な
 る結果を生ずべきか之を圖示すれば勢ひ下圖の如き手順となりて白
 石死するに至るべし。



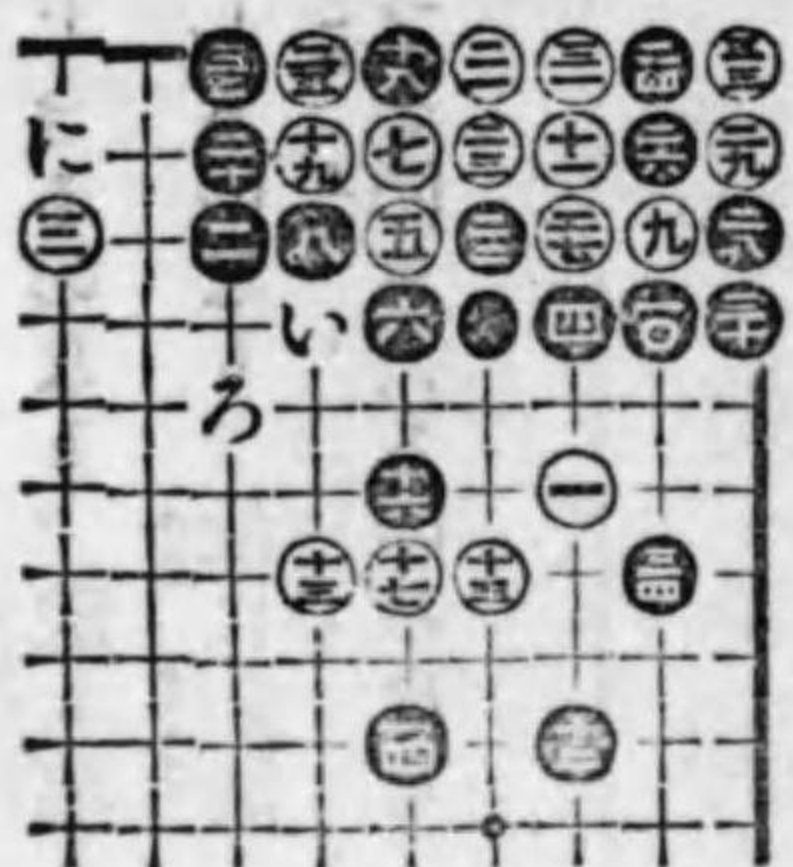
これ白石が前圖の如く七と縛けたる所以なりと知るべく、白七の
 手本圖の如く行へる時には黒石は必ず八と下る事を忘るべからざる
 なり。

三、第三の場合



上圖の手順に於て研究を要するものは白十三黒十四黒十八
 及び三十の手なりとす、此の場合に於て白五と打ら順次十一
 と打ちて打込の白石活を得たる上に十三と下りて愈々白の強
 固を得たるものなれば黒は他に其の地歩を求めざる可らず。
 乃ち十四と打ちて白手抜かば十五の所へ掛けて地位の交換
 を行はんとす、白之を防がんが爲に十五と尖み、黒十六と立

てるも此の目的に出づ、白の十七と打ちしも亦之が防禦の手
 段なり、かくて黒は十四、十六の石と白を蔽へる石との連絡
 を收り且つは白の三石に薄らんが爲に十八と打ちて一方白の
 打込石を襲ひつゝ三十二に至るまでの手段を経て其の目的を
 達したるなり、而して黒三十の石は一面白の打込石を襲ふと
 共に「い」の所へ打つ手を生じたるなり。



四、第四の場合

第四の場合其の手順を異にして其の結果は第三の場合と同じきものなり、即ち黒十六の手は白の十三、十五の覗きと同時に白「い」の切りを防ぎしものなり、故に前圖の形となりたる所にて白「い」と切り來らば黒「ろ」に打ちて優に之を防ぎ得るのみならず、場合によりては黒は「に」に飛び出る道をも具ふるなり。

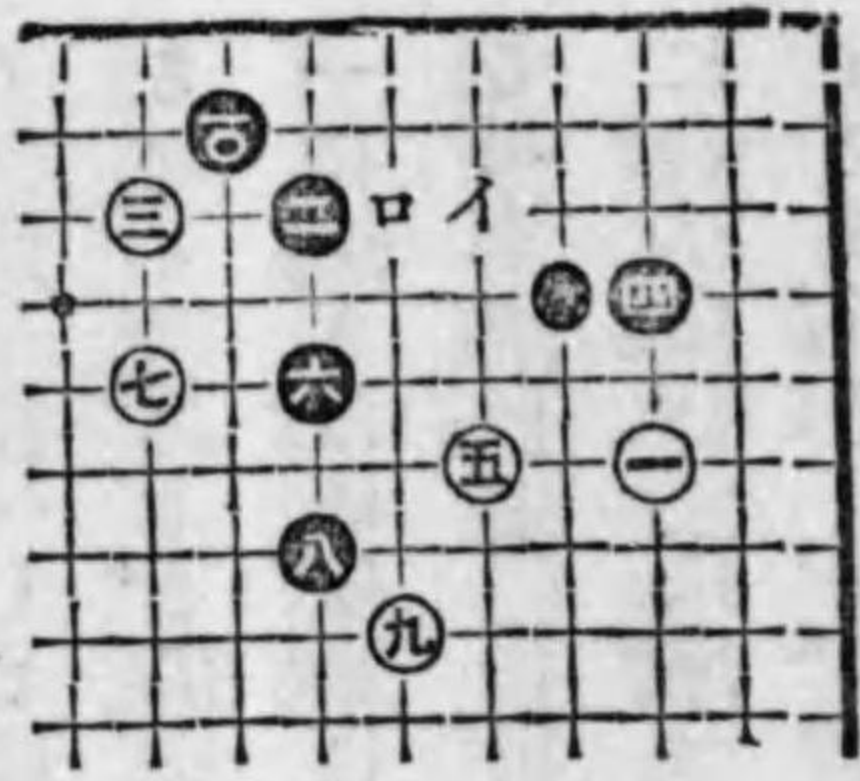
第七、大斜走縮兩立

第六の章にて説明したる如く白小斜走に掛り、黒大斜走に啓きたる時、白三と黒の大斜走啓に一間高掛りに打ち黒四と縮りし場合に白の打込は四種類共に不結果に終れるを見たり、茲に於てか大斜走縮兩立の定石起る。

一、第一の場合

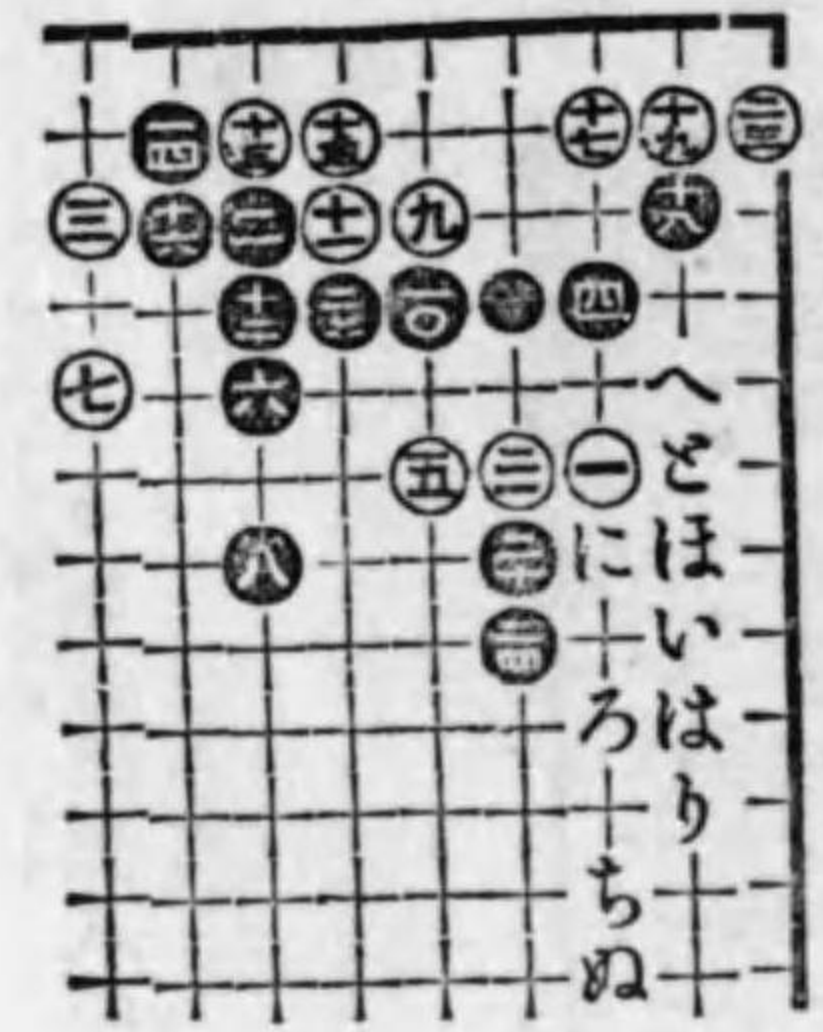
其の第一の場合として左に圖解を試みんに白の三に對して黒四と縮りたる場合に、白石の「イ」若くは「ロ」に打込む事は前章の例示の如く白の不利に終るを以て白先づ五と立ち爾る後「イ」若くは「ロ」に打込まんとするの氣勢を示す、黒は白の五の石ありて

後内部に打込まれては甚しき不利に陥るを以て左はさせじと六と打ち白又七と打ちて尙ほも打込の態度を收る、黒は打込むならば打込むべし、我は外面に地歩を得んと



の意を以て八と飛ぶ、白之を防がん爲に九と打ち黒然らば打込ませじと十と尖めるなり、これ大斜走縮兩立の結構なり、黒八と立ちし場合に白外面の防禦なくして直に上圖「イ」若くは「ロ」に打込み來る時は如何なる結果を生ずべきか、白の打込石は生くる事を得べしと雖も外部に於て非常の損失を招くべし、今「イ」に白九と打込みしと見て以下手順を左圖に示さん、即ち

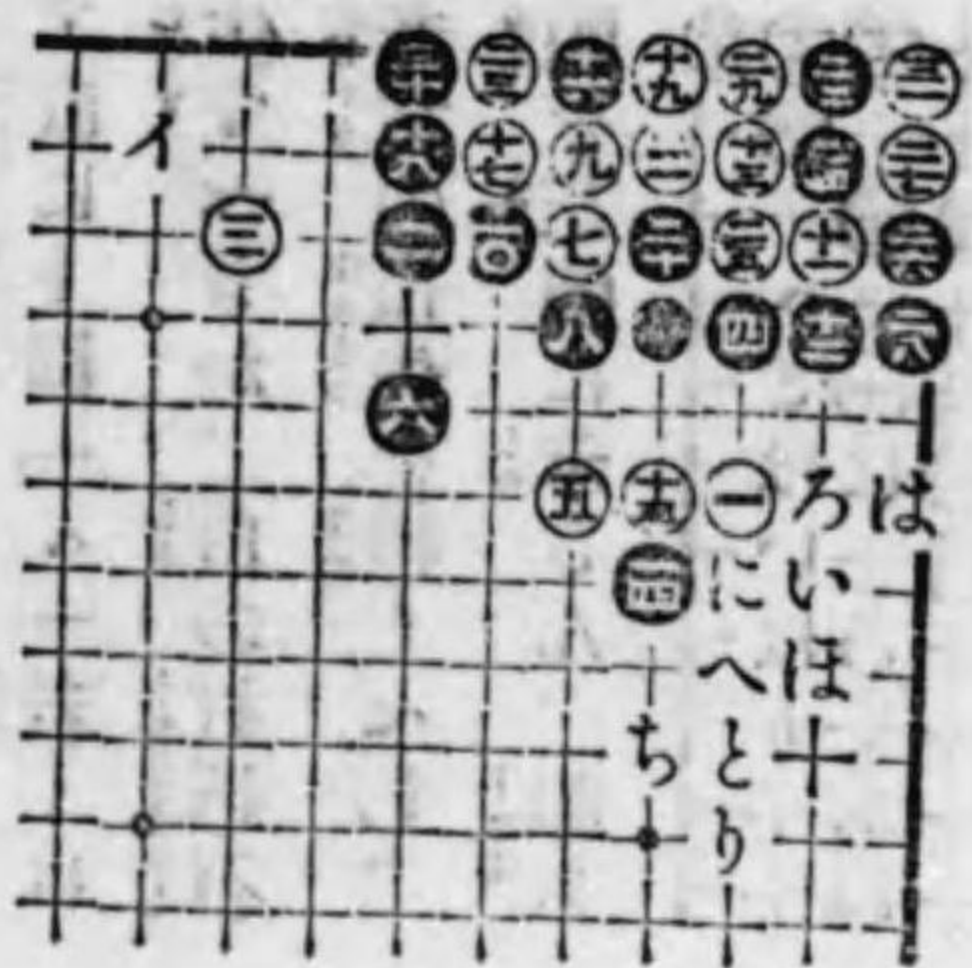
二十四までの手順に至つて白の打込石は活きたれども外部の三石は全然浮石となれるにあらずや、此の時白は之を助けんが爲めに「い」に斜走すれば黒は「ろ」に尖み白は「は」に行ひ黒「に」に出で白「は」に押へ黒「へ」に覗き白を「と」に粘かば黒「ち」に飛び白「り」に行ひ黒「ぬ」に並びて



八〇
 白は到底活くる能はざるなり、尤も此の場合に「ぬ」を所に白の布石ある場合は黒八の飛出しは無効に終るべきを以て十四の所に尖むべきものと知るべし。

二、第二の場合

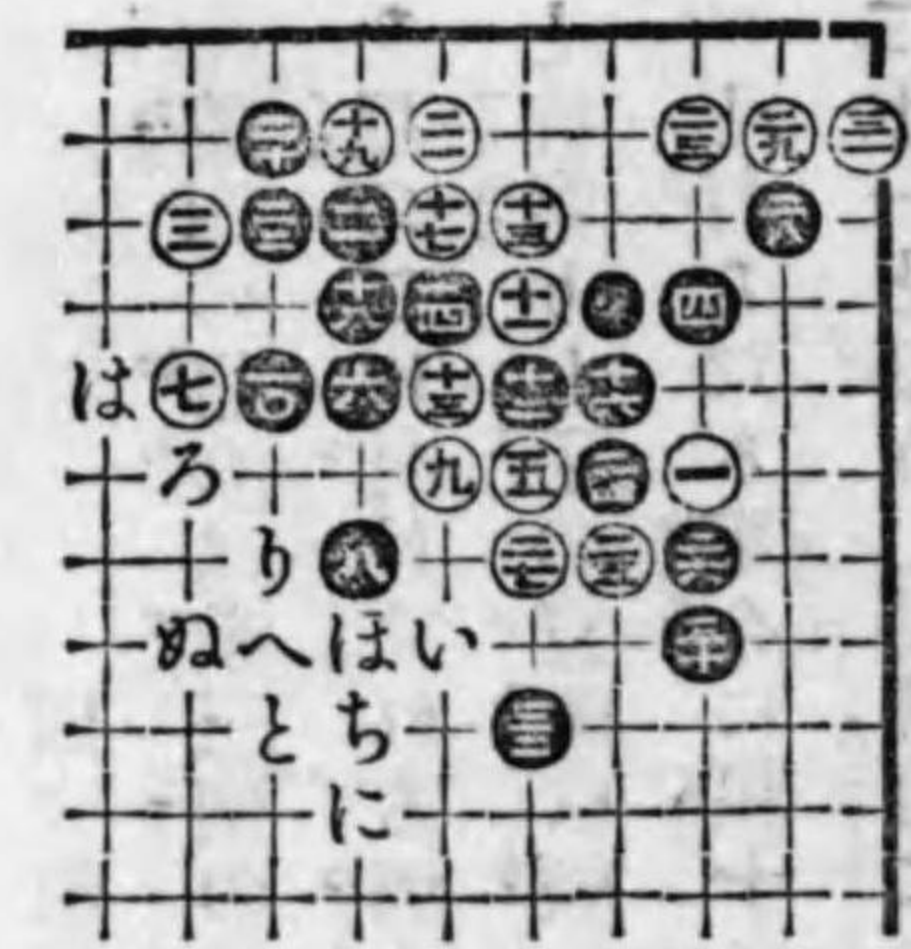
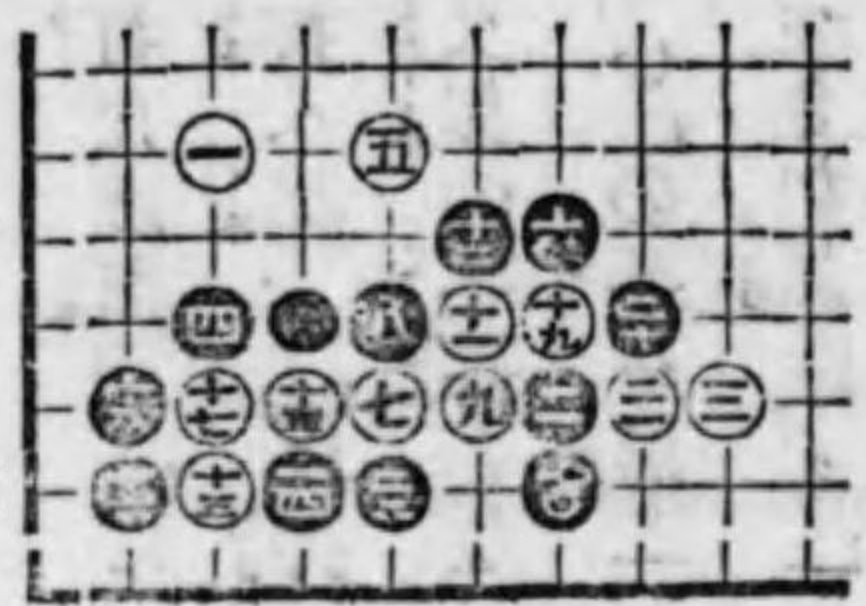
白石外部の備へ全からずして黒の六と防ぎを打てるにも拘らず下圖の如く、七と打込み來る時は白は定石の示す如く活路を得べしと雖も其の活きは死に優る損害を他に受くるなり、見よ下圖に於て白七と打込み黒之に應戦して三十一に至り白は確實に活きたりと雖も黒は直に「い」に打ち來るべく、白「ろ」に出で黒「は」に盤り白「に」に突出し黒「は」に行び白「へ」に押へ黒「と」に緯け白「ち」に押へ黒「り」に行びるを以て白五と打ちて作りたる外部の地歩は黒の爲に蹂躪されたるにあらずや、況んや黒に猶ほ「イ」に飛出づる餘地を興ふるに於てをや。



若し夫れ白九の手下らずして黒の二に突當り來らんか全然白の打込死するの外道なきを見るべし、次圖は之を證明せり、されば白としては五と打ちたる場合は能くく外部の備へを全うしたる後ならでは内部に打込むことを控ふべきなり。

三、第三の場合

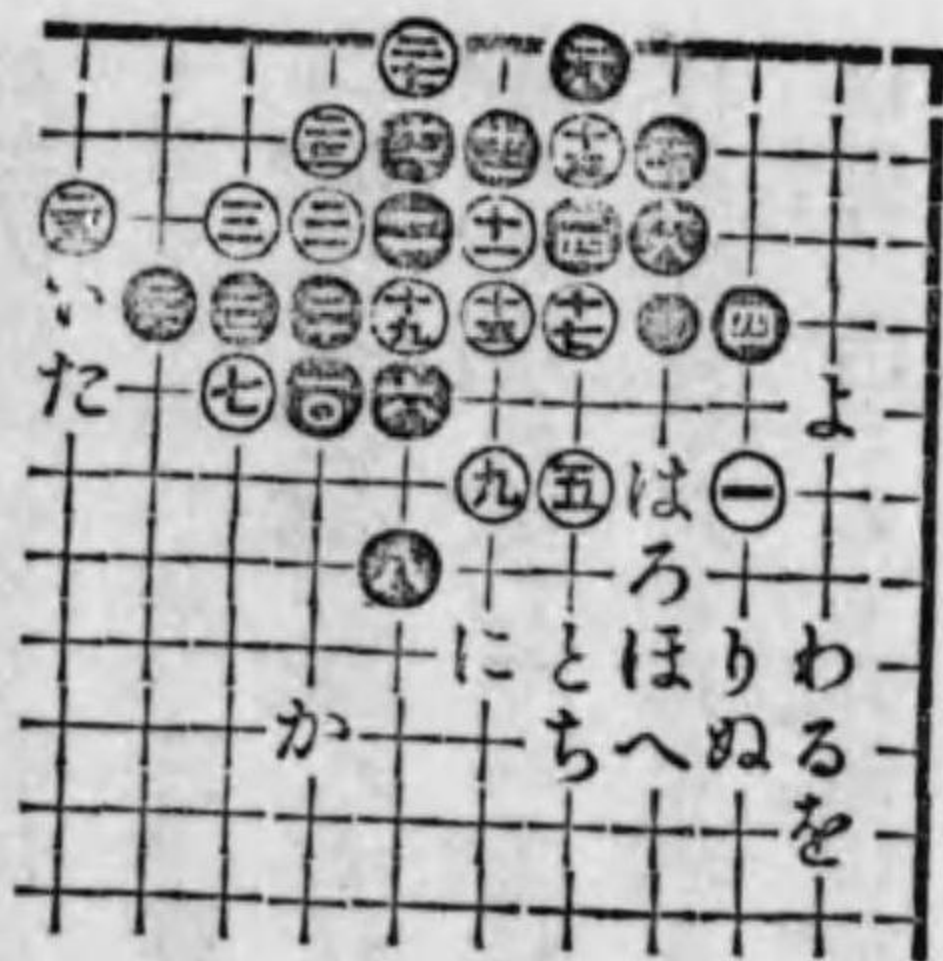
第三の場合は黒八と打ちたる石が次圖の如く二十五の所へ覗く意味なる事を解して一方には之を防ぐと共に他方には十一の所への付けを含みて九と打ち來る場合なり、此の場合に於ても亦白の打込石は優に活くるも外部に於て不利を買へり、即ち白三十一の手にて活



きを得たるも黒は三十二と打ちて外部に於ける白の五石を擒にしたるなり、白若し之を免れんとして「い」に尖み來らんか、黒は「ろ」と尖みて白の三、七の兩石を厭すべく白之を免れんとして「は」に引かんか黒「に」に斜走に掛け白「は」に行ぶれば黒「へ」に押へ白「と」に切り黒「ち」に切り白「り」に切り黒「ぬ」に行びて白は遂に擒らるゝなり。

四、第四の場合

第四の場合には前三個の場合と趣を異にし白十一の手を黒の二に付け來れる場合なり、此の場合に白の十一と突當りし手の意味は頗る深長なる所あり、即ち白十一と打ちたる場合に黒十二と縛り以下手順を追ひて白二十一と切りし時黒直に二十二と突出し得る餘地を存



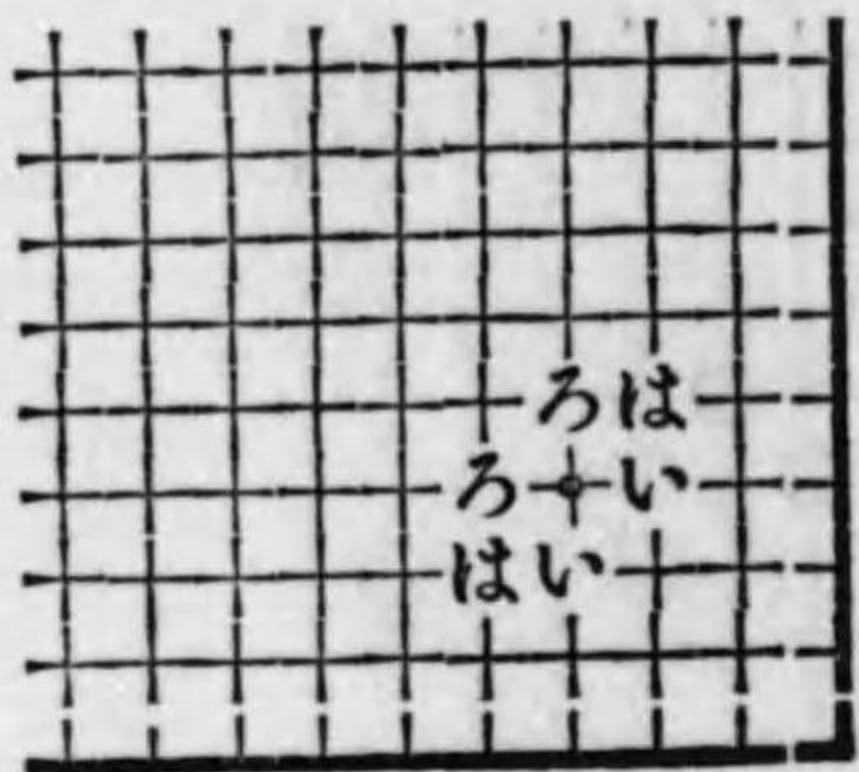
じたるものなり、又此の形に於て白「い」に打たば黒「ろ」に押へ白「は」に行へば黒「に」に出で白「ほ」に押へ黒「へ」に押へ白「と」に行び黒「ち」に斜走に打つべし、又黒の手番とならば黒「ぬ」に打つを可とすべし、若し又白「い」の手を黒二十六の石に押ふる時は如何なる結果を生ずべきか黒は「ろ」と覗き白は「は」に粘り順次に「ほ」「へ」と「ち」「り」「ぬ」「る」を「わ」「か」「よ」と打て黒「た」に終り其成績を顧みれば黒の形勢頗る有利なり。

圍碁用語解

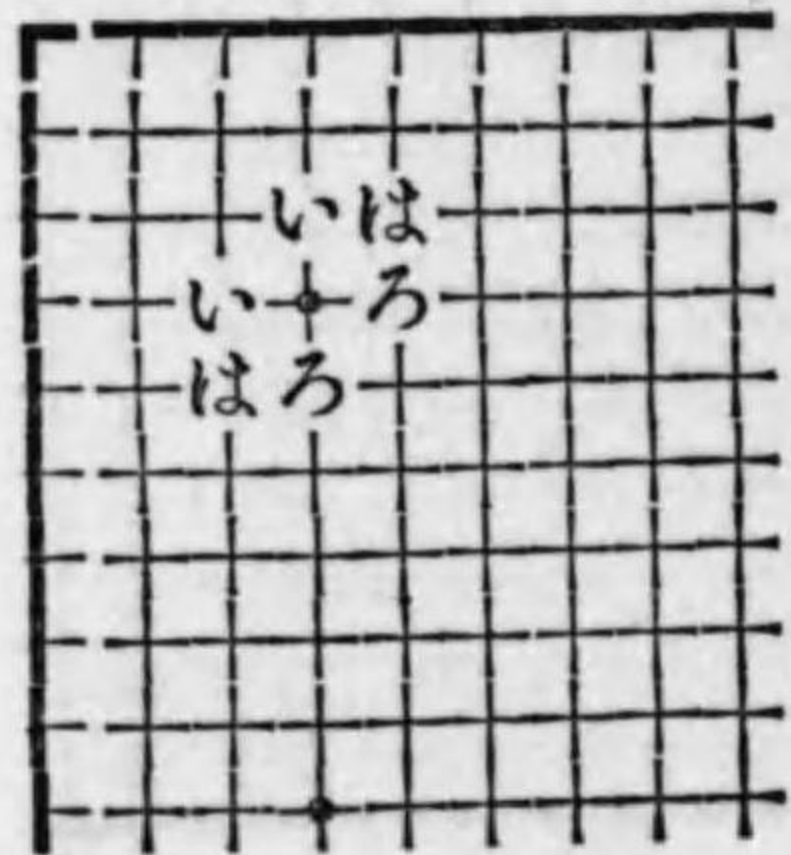
●小目 碁盤の各四隅の星の下を指すのである。
●圖に於けるいはいづれも小目である



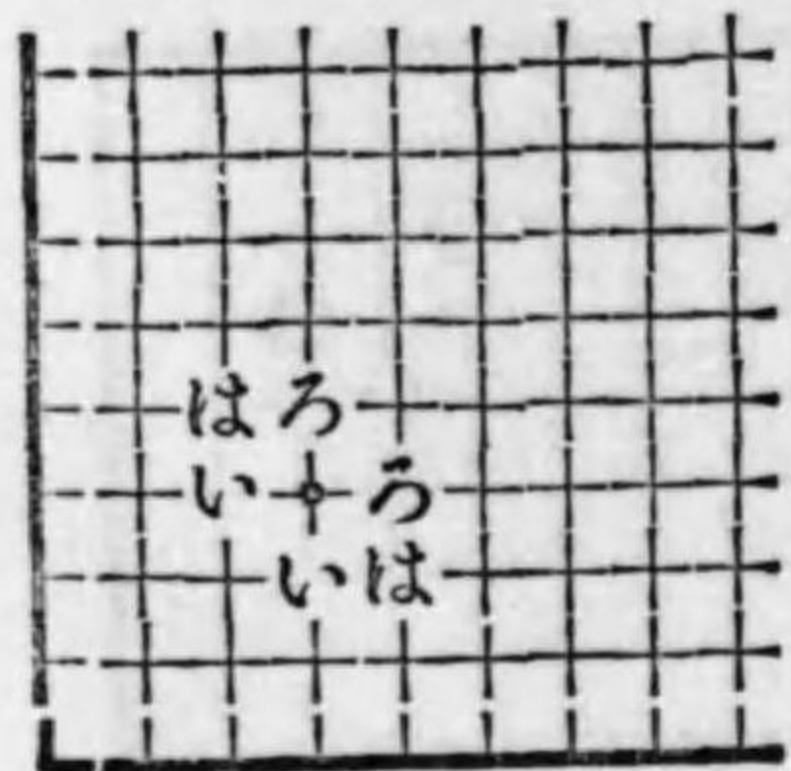
●高目 碁盤の各四隅の星の上を指すのである。
●圖に於けるろはいづれも高目である



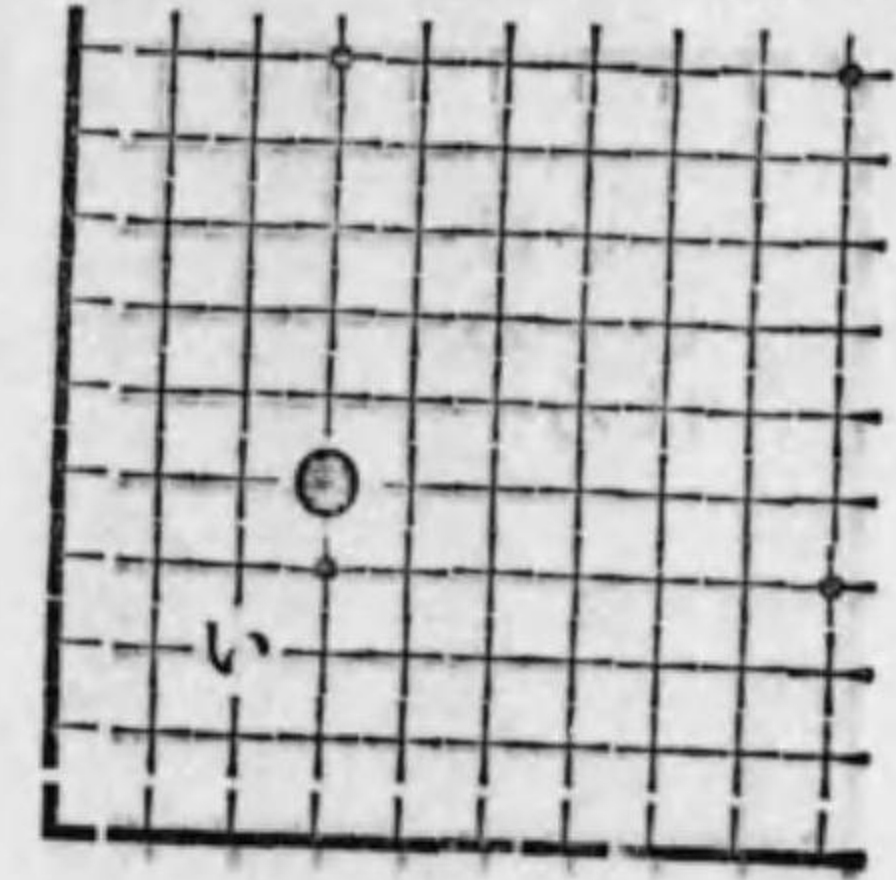
●目外 碁盤の各四隅の星の斜を指すのである。
●圖に於けるははいづれも目外である



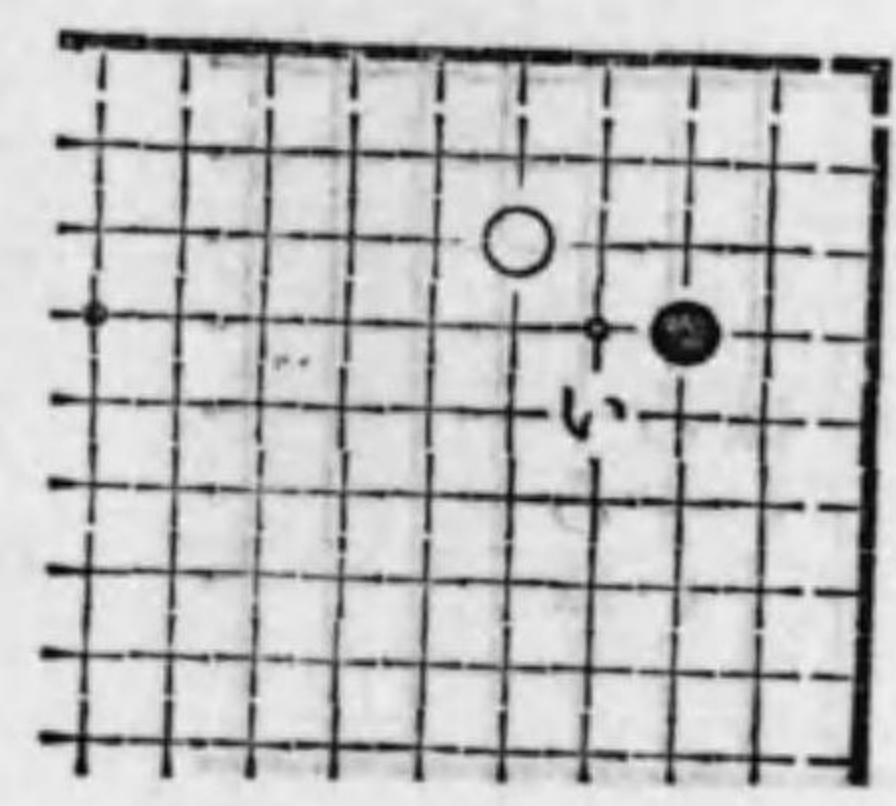
互先の圍碁では始めの打出しは此等の點即ち小目、高目、目外以外の決して打たぬものとし得てよろしい。



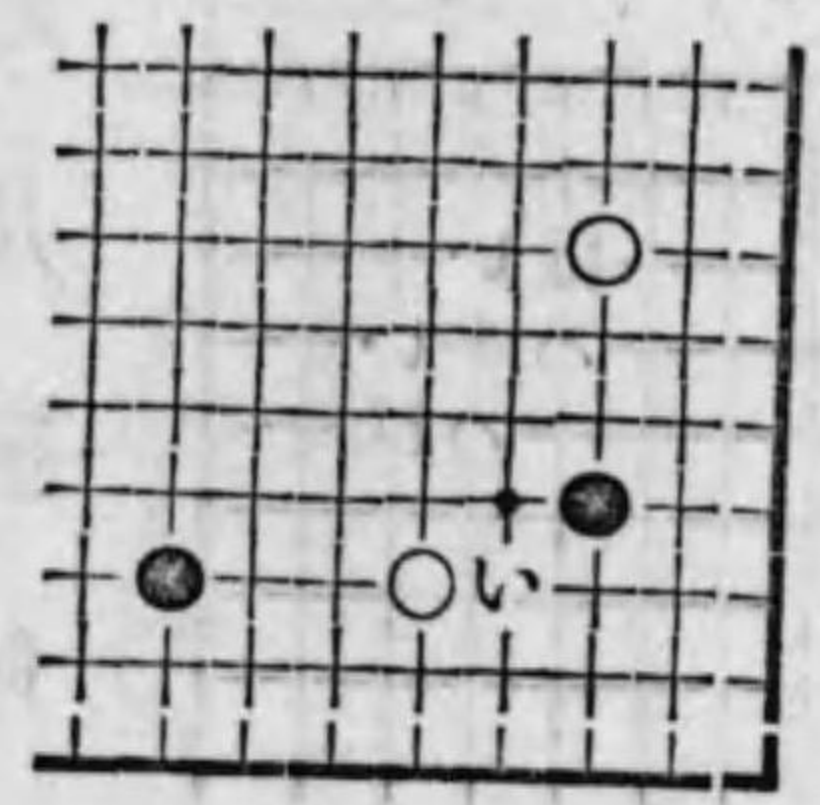
●打込み 白が圖の
いと打つ手である
互先に於て高目
にある石に對し
注 掛る手は右の三
つ即ち小目掛り
桂馬掛り打込み
の他はないと心得
得て宜しい。



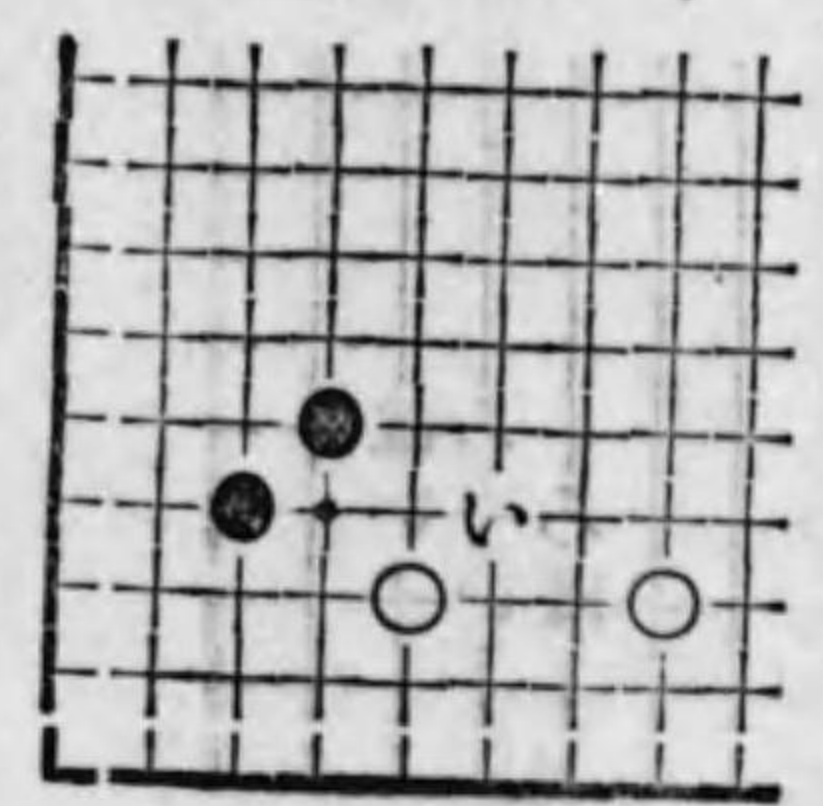
●尖む 味方の石よ
り斜に連続して打
つた手で圖の白い
である。



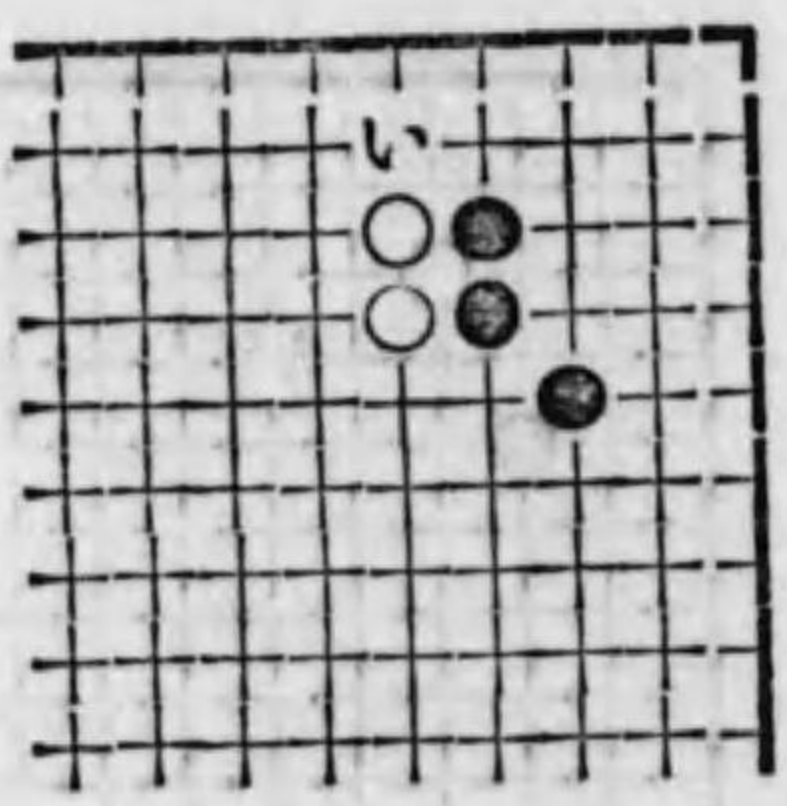
●尖附け 尖むのと
同時に敵の石に接
觸して打つ手であ
る圖に於ける黒い
はそれである。



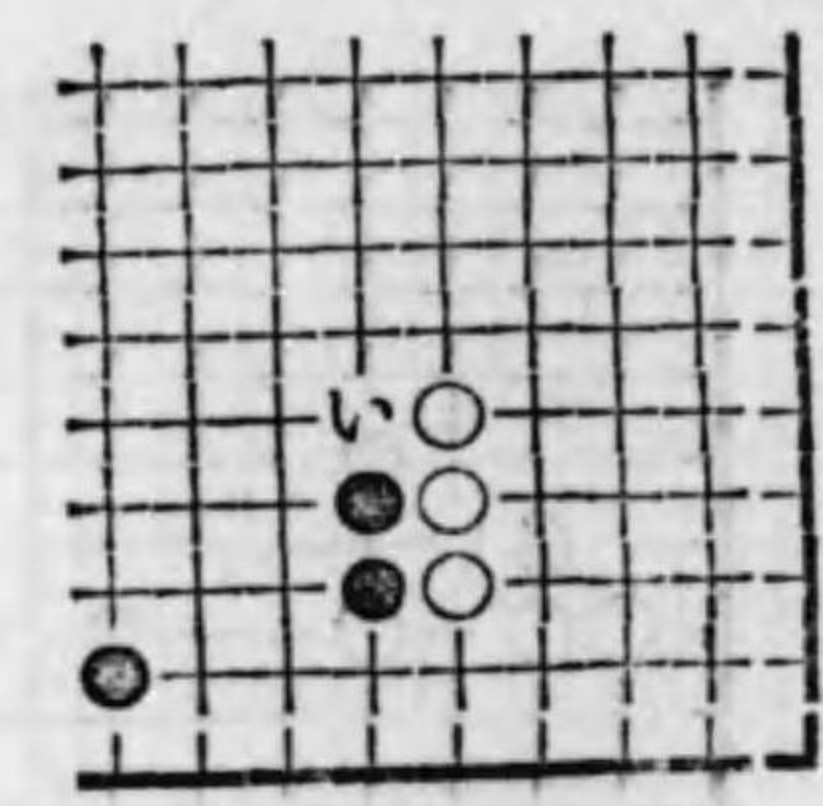
●掛ける 圖の如く
黒いと打つて敵の
石に打撃を與へる
手である。



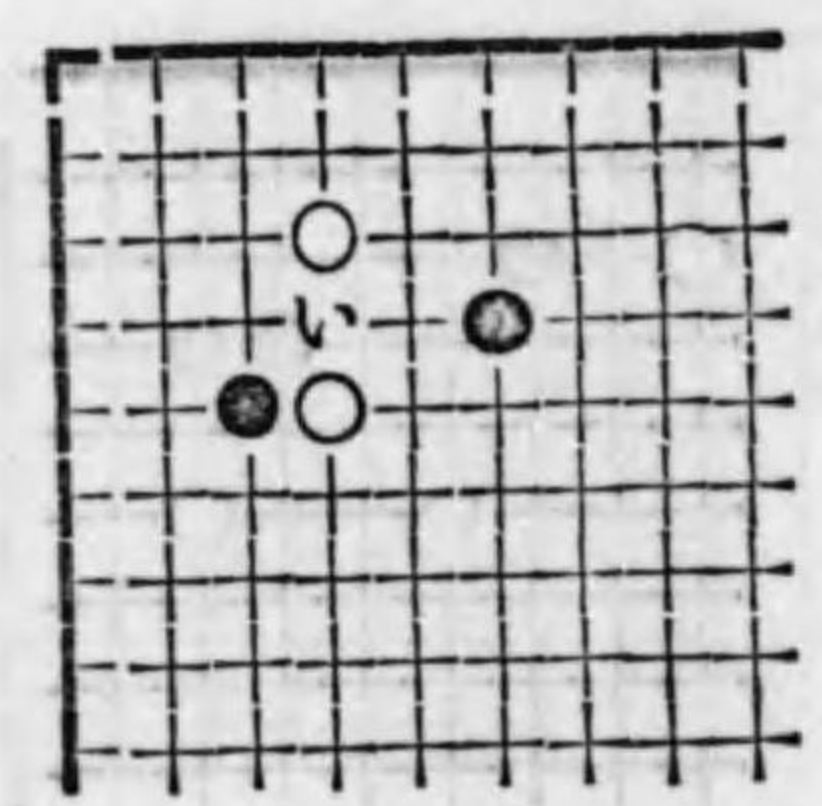
●下る 味方の石よ
り連続して下へ打
つ手である圖の白
いの如し。



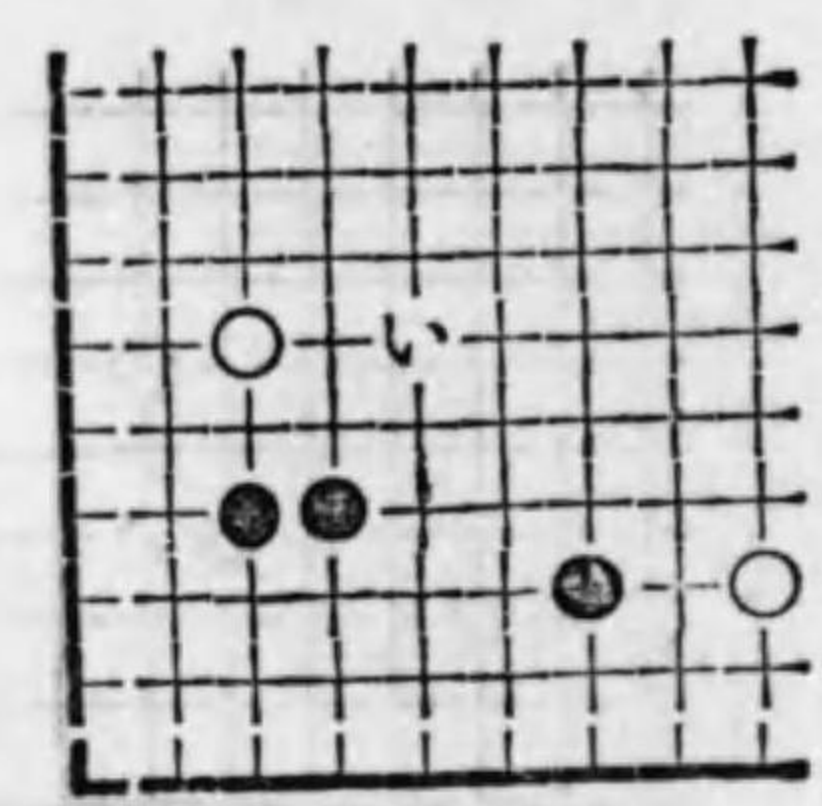
●曲る 圖の如く味
方の石が連続して
居て敵の石にも接
觸して打つた手白
いはそれである。



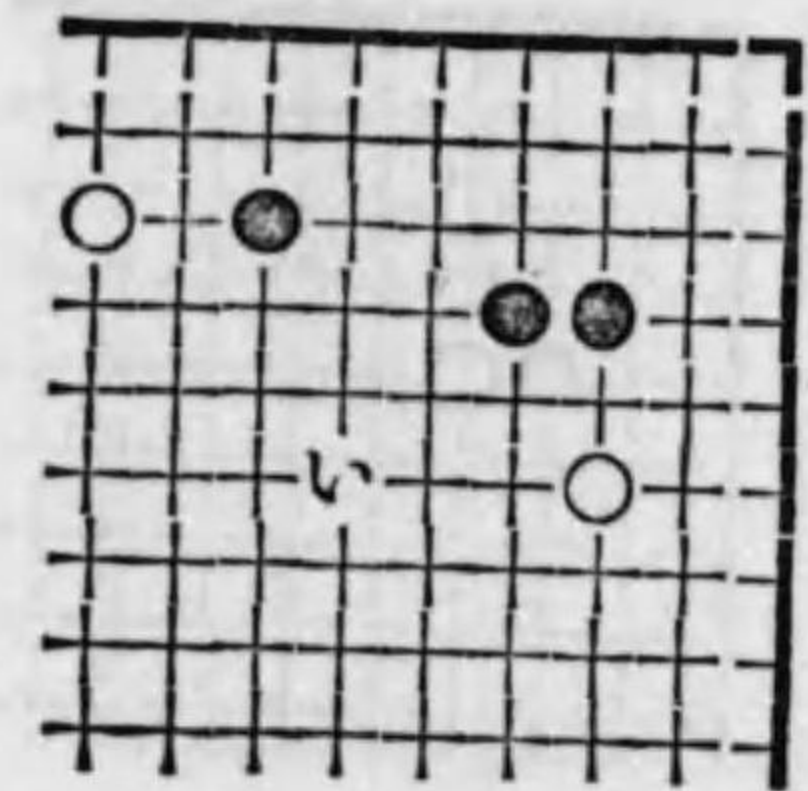
●割込む 圖に於け
る如く黒は敵の白
の間に打つ手であ
る黒いはそれであ
る。



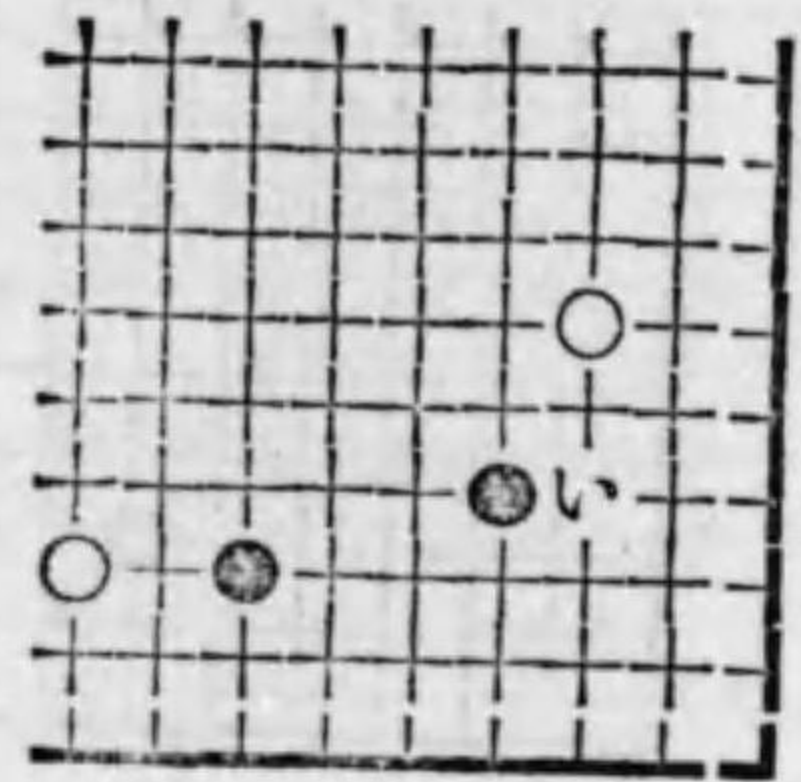
●一間飛 圖に於て
白いの如く味方の
石より一路間を置
いて打つ手である



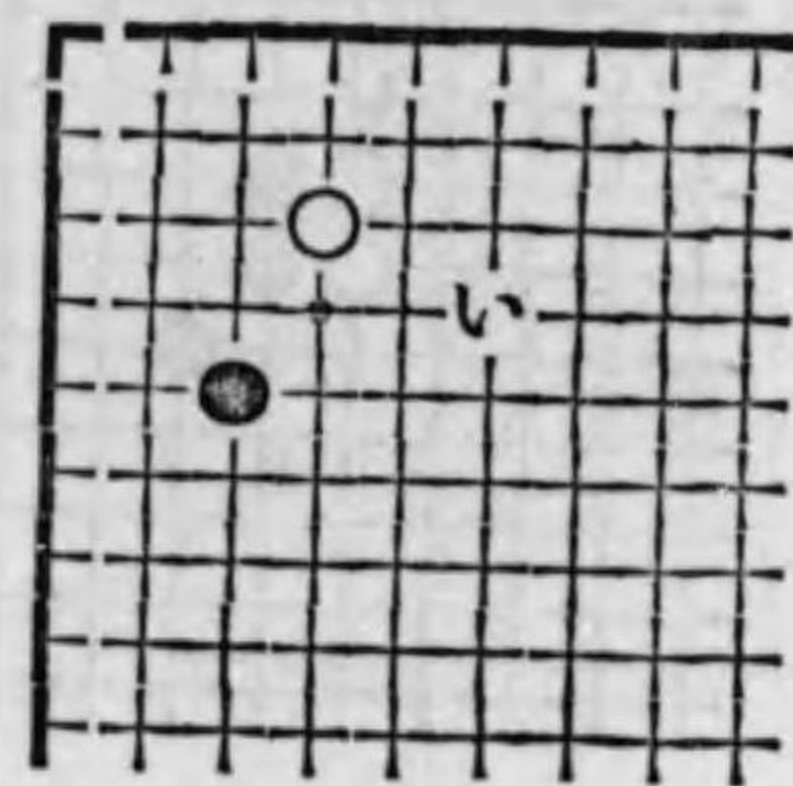
二●間●飛● 一●間●飛●の
一●路●進●ん●だ●も●の●即●ち●味●方●の●石●よ●り●二●路●間●を●置●い●て●打●つ●た●手●圖●の●白●い●の●如●し●



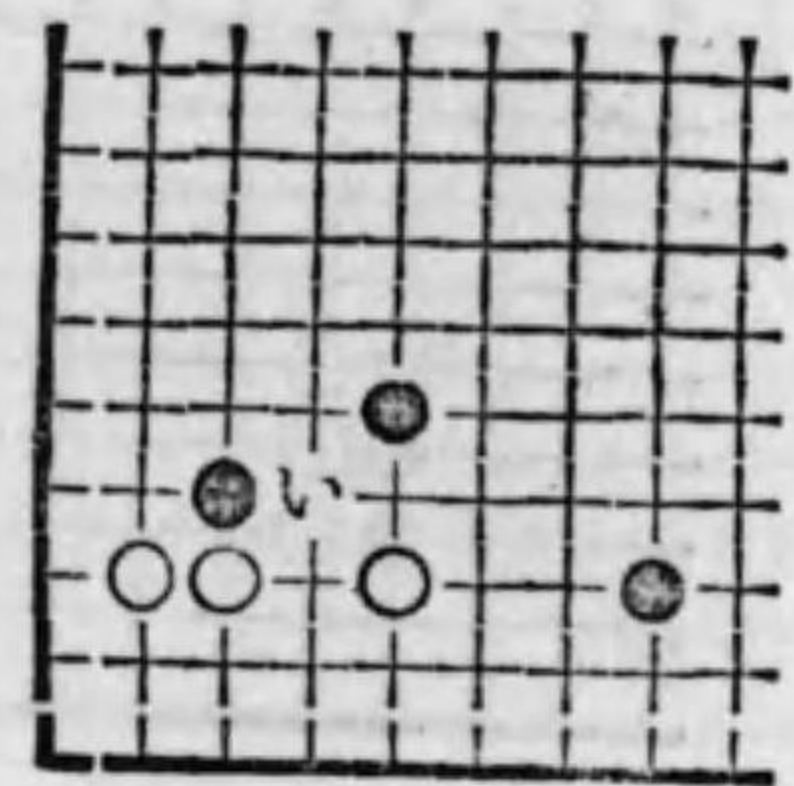
縮●り●敵●の●侵●略●を●防●ぐ●爲●め●打●つ●手●圖●の●黒●い●の●如●し●



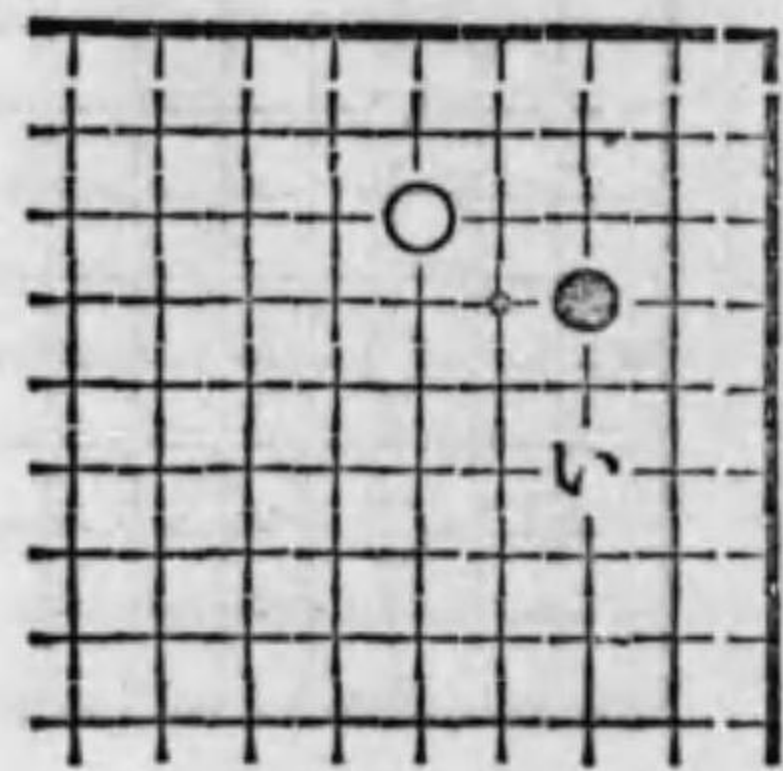
大●斜●掛●け● 圖●の●形●の●時●黒●が●い●の●手●を●特●に●言●ふ●



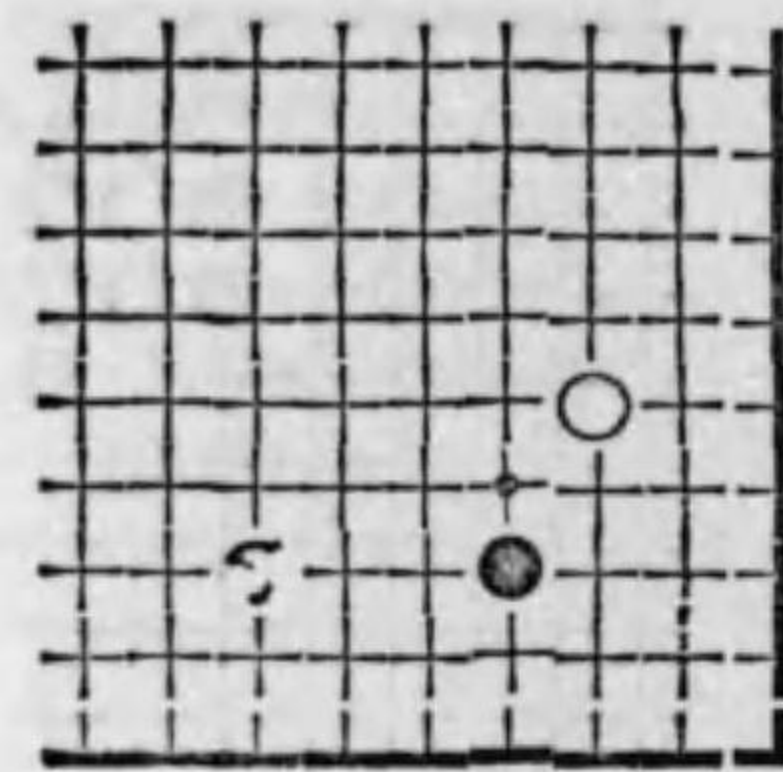
膨●む● 圖●の●形●の●時●白●が●い●の●手●を●言●ふ●



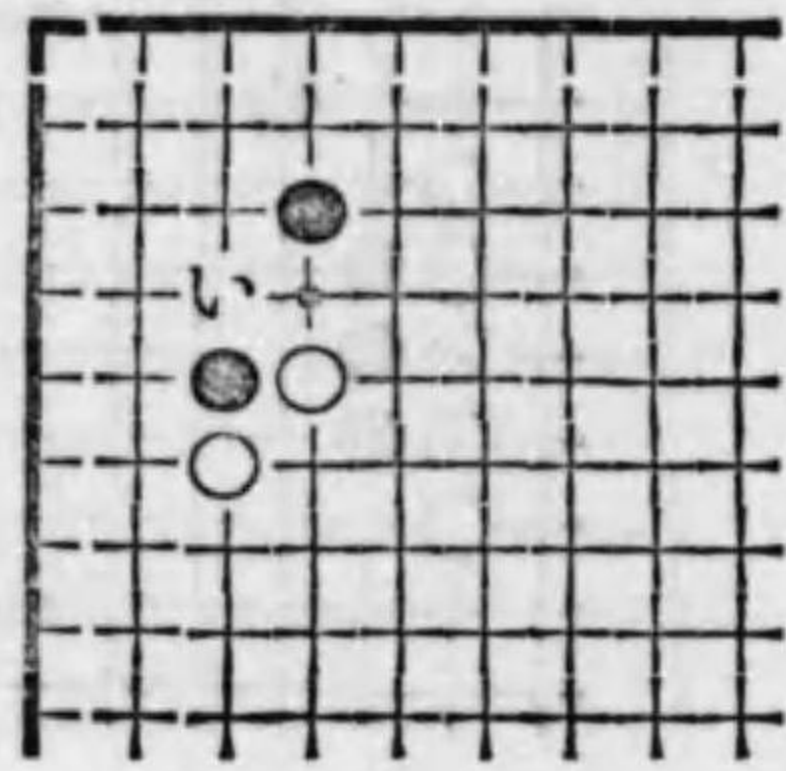
拓●く● 味●方●の●石●と●連●絡●を●取●つ●て●多●少●の●地●域●を●占●め●ん●と●し●て●打●つ●手●で●あ●る●圖●の●時●白●が●い●と●打●つ●の●は●そ●れ●で●あ●る●



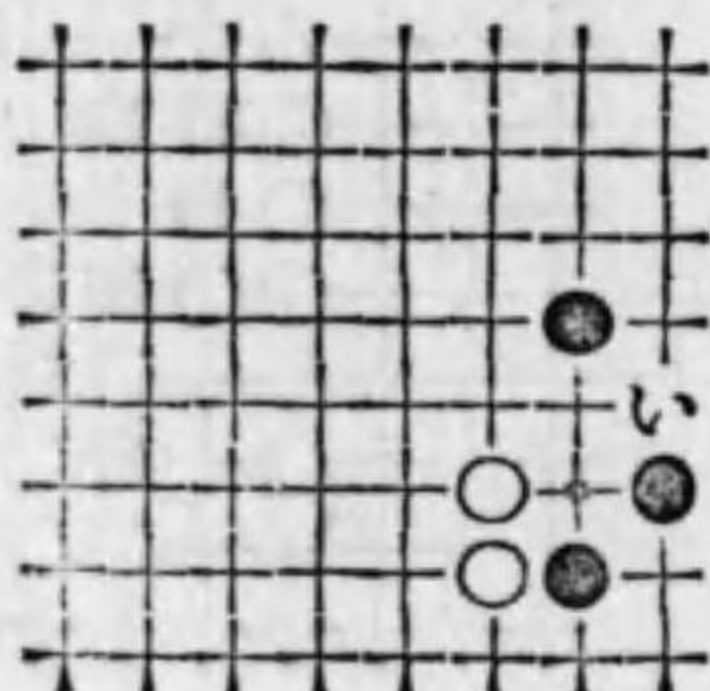
二●間●拓●き● 二●路●間●を●置●い●て●拓●く●を●言●ふ●圖●の●時●黒●が●い●と●打●つ●の●は●そ●れ●で●あ●る●



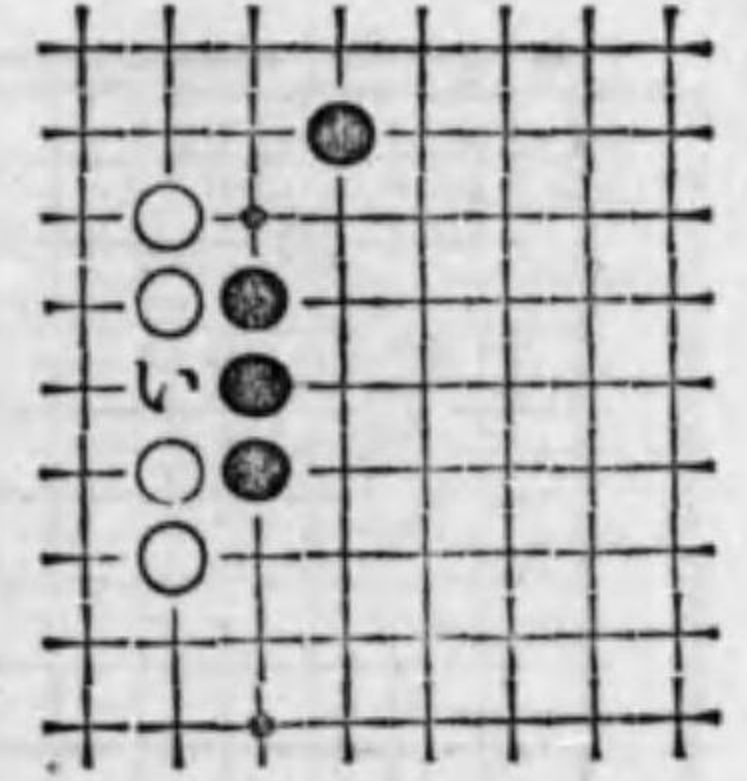
引●く● 圖●の●如●き●形●の●時●黒●が●い●と●打●つ●た●手●で●あ●る●



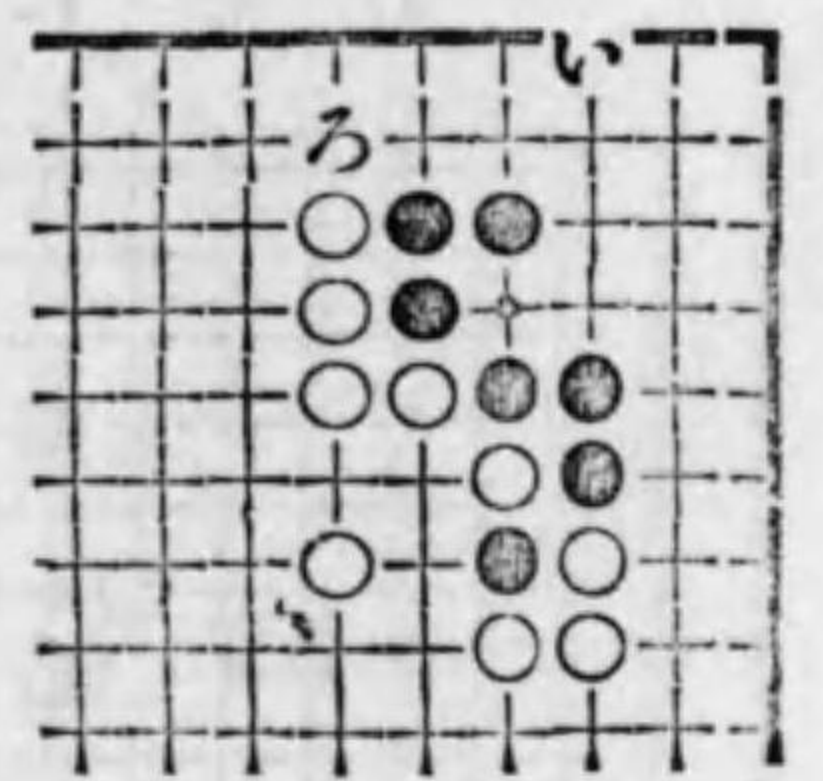
附●越●し● 圖●の●形●に●於●て●白●い●と●打●つ●の●は●附●越●し●の●手●で●あ●る●



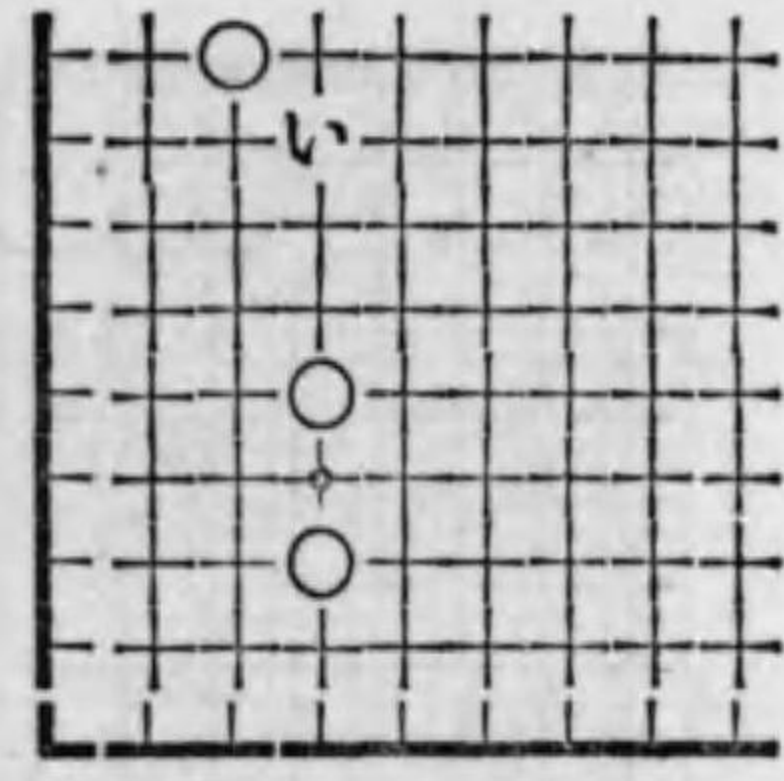
●●●●● 突出る 圖に於ける
 ●●●●● 黒がいと打つ手
 を言ふのである。



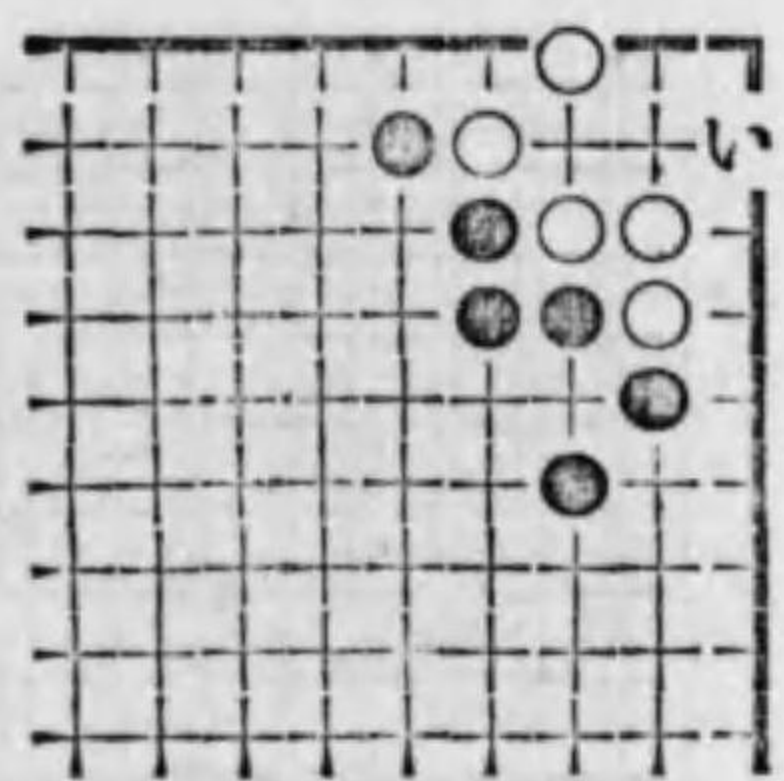
●●●●● 大猿迂り 圖の如
 き形に於て白はい
 と打つて敵地を侵
 害し味方のろと連
 續する手である。



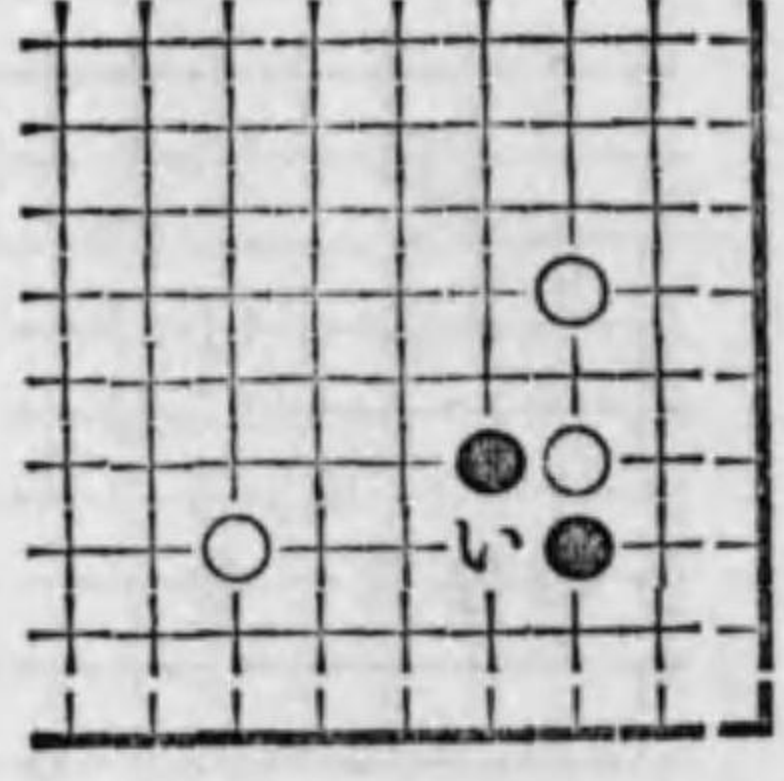
●●●●● 肩に打つ 圖の如
 き形に於ていと打
 つた手を言ふので
 ある。



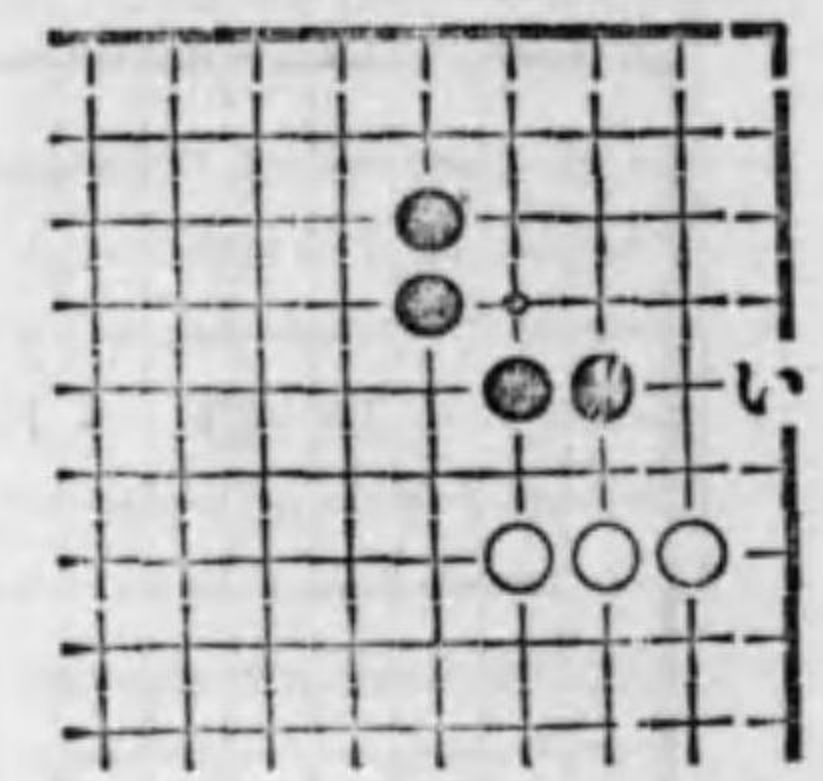
●●●●● 置く 中手と同じ
 様な意味である 圖
 黒いと打つて白石
 を殺す時に用ゆる
 手である。



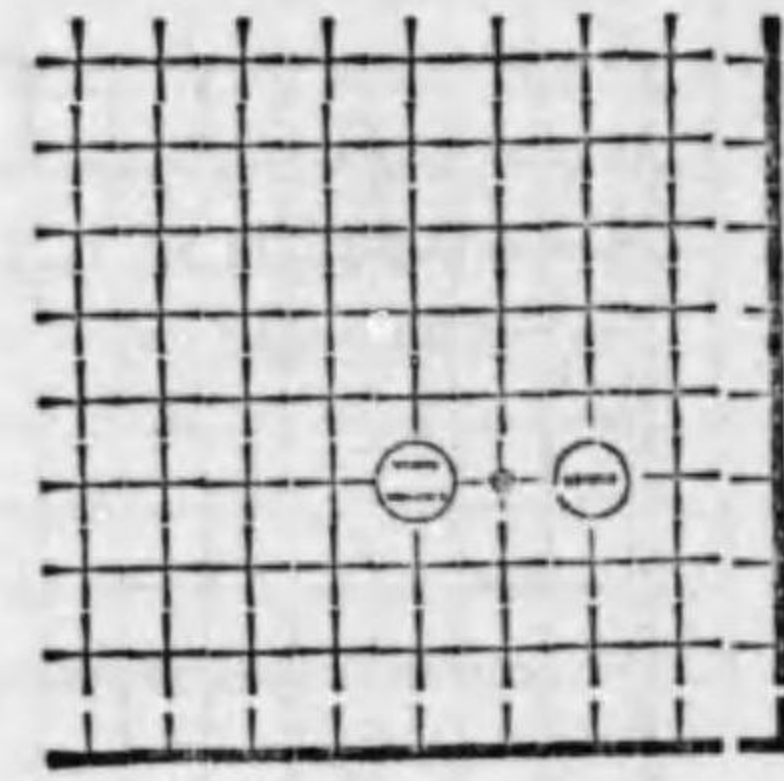
●●●●● 切交い 圖の如き
 形の時白いと打つ
 た手を言ふのであ
 る。



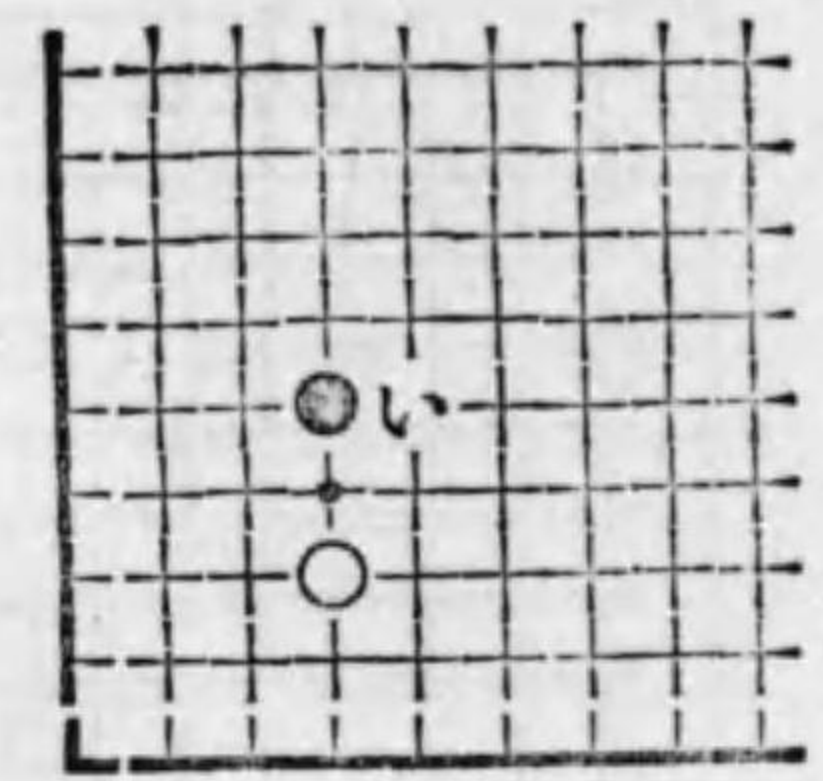
●●●●● 小猿迂り 圖の白
 いの手の如き小猿
 迂りと云ふ。



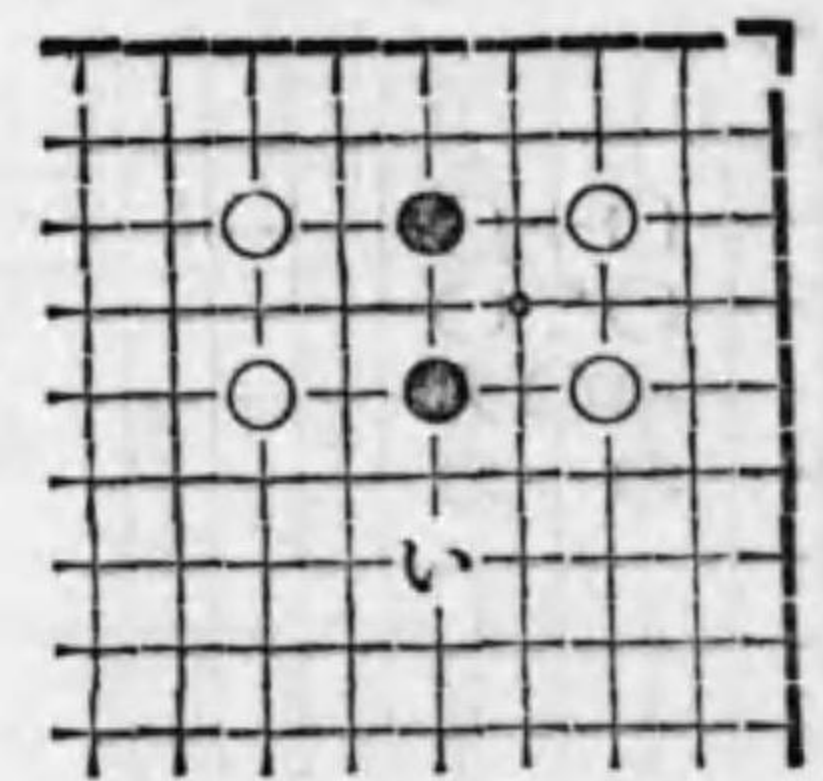
●●●●● 高締り 圖の如く
 一と打つてある時
 二と打つて隅を守
 るのを高締りと云
 ふ。



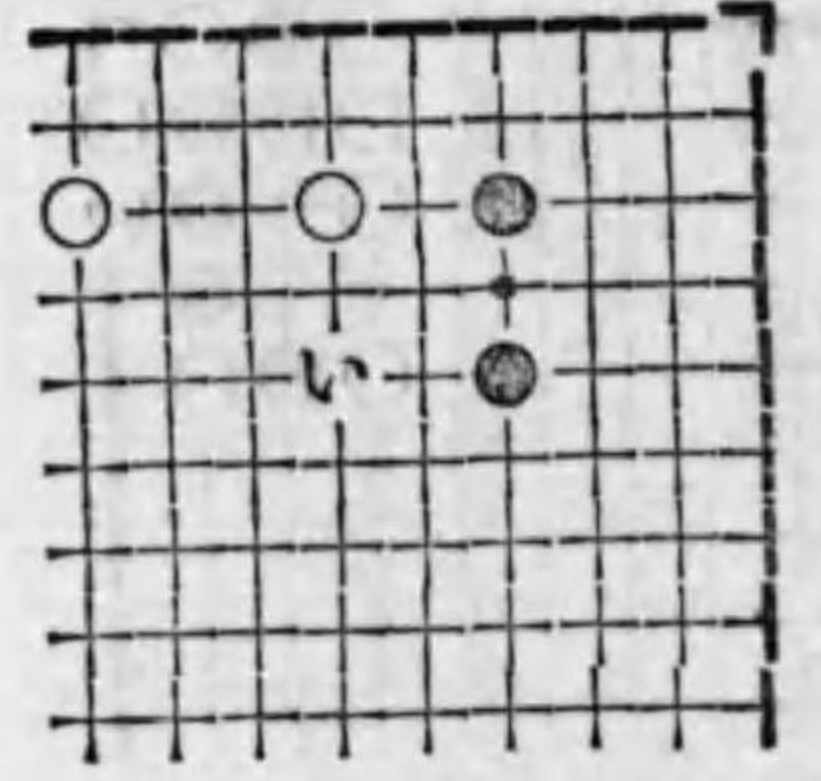
●●●●● 外附け 圖の白
 いと打つた手を言ふ



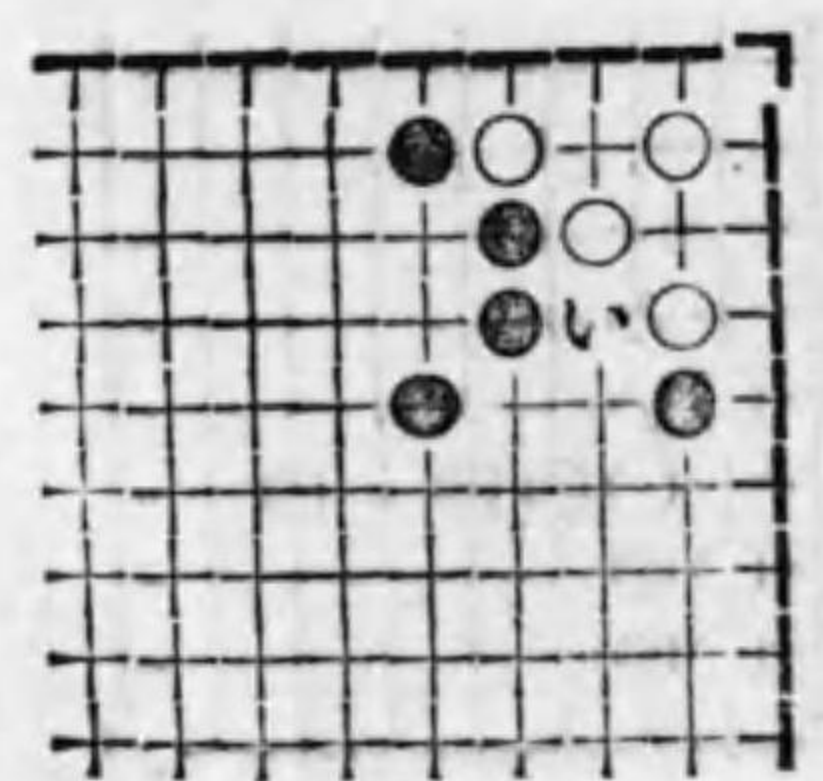
飛●●●
 び●●●
 抜●●●
 く●●●
 圖●●●
 の●●●
 黒●●●
 い●●●
 の●●●
 手●●●



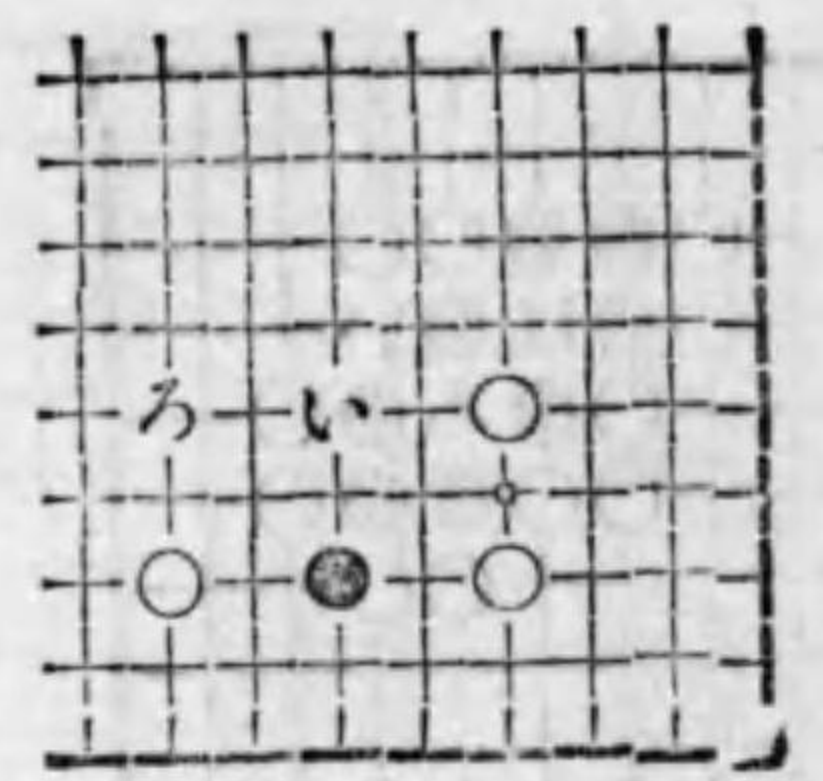
飛●●●
 曲●●●
 り●●●
 圖●●●
 の●●●
 黒●●●
 い●●●
 の●●●
 手●●●



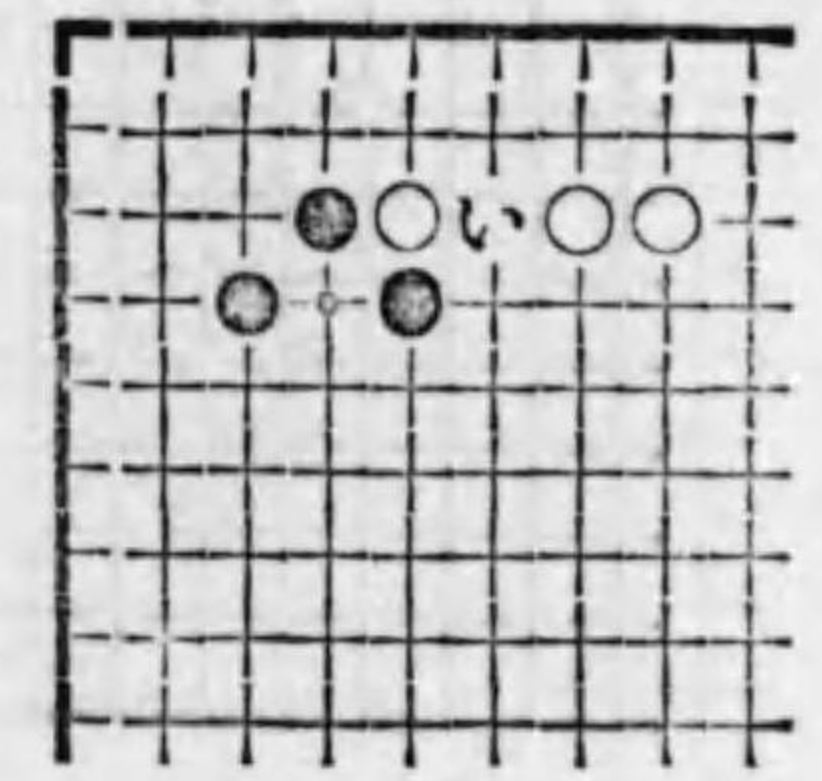
極●●●
 め●●●
 る●●●
 圖●●●
 の●●●
 黒●●●
 い●●●
 の●●●
 手●●●



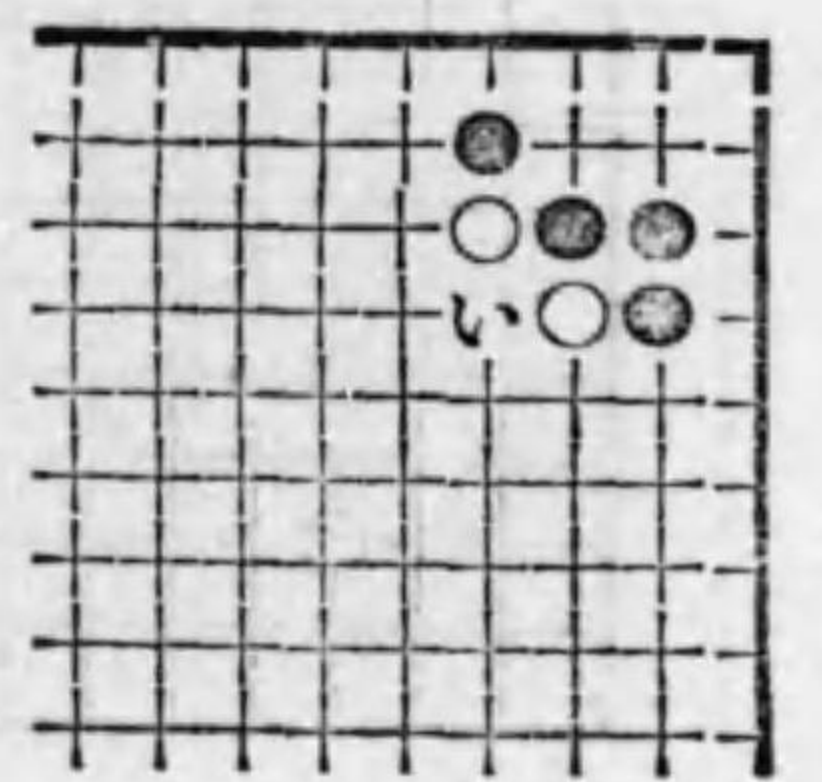
飛●●●
 び●●●
 飛●●●
 び●●●
 圖●●●
 の●●●
 黒●●●
 い●●●
 の●●●
 白●●●
 を●●●
 言●●●
 ふ●●●



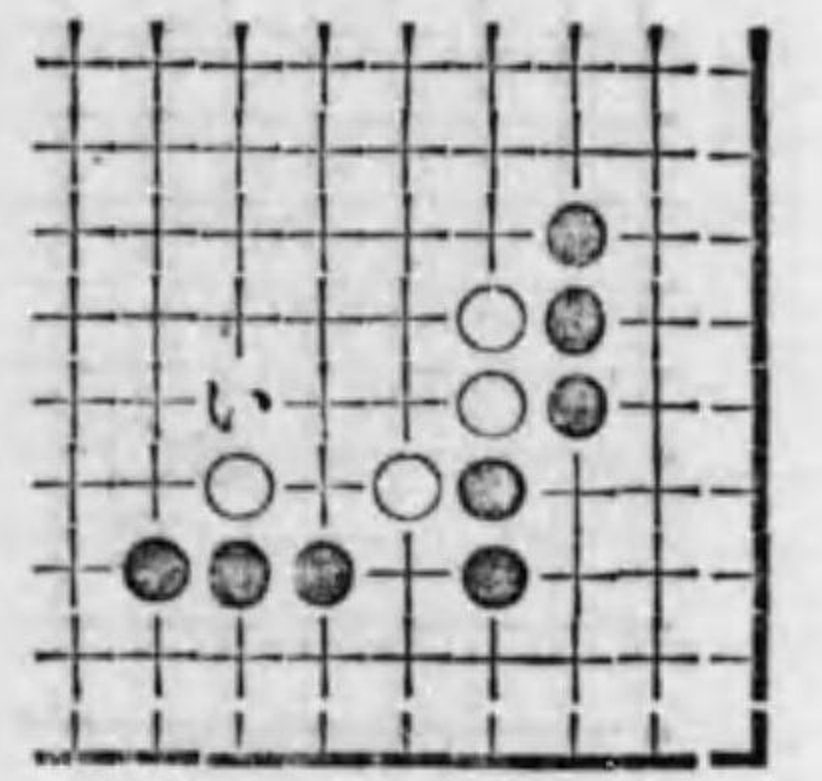
抱●●●
 へ●●●
 込●●●
 む●●●
 圖●●●
 の●●●
 黒●●●
 い●●●



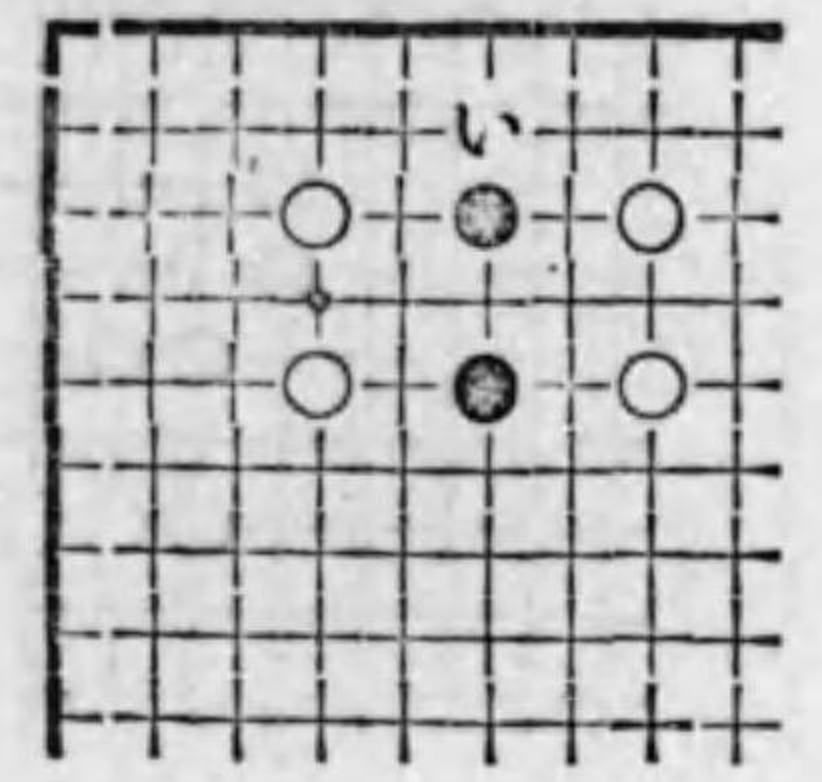
兩●●●
 手●●●
 切●●●
 り●●●
 圖●●●
 の●●●
 黒●●●
 い●●●
 の●●●
 手●●●



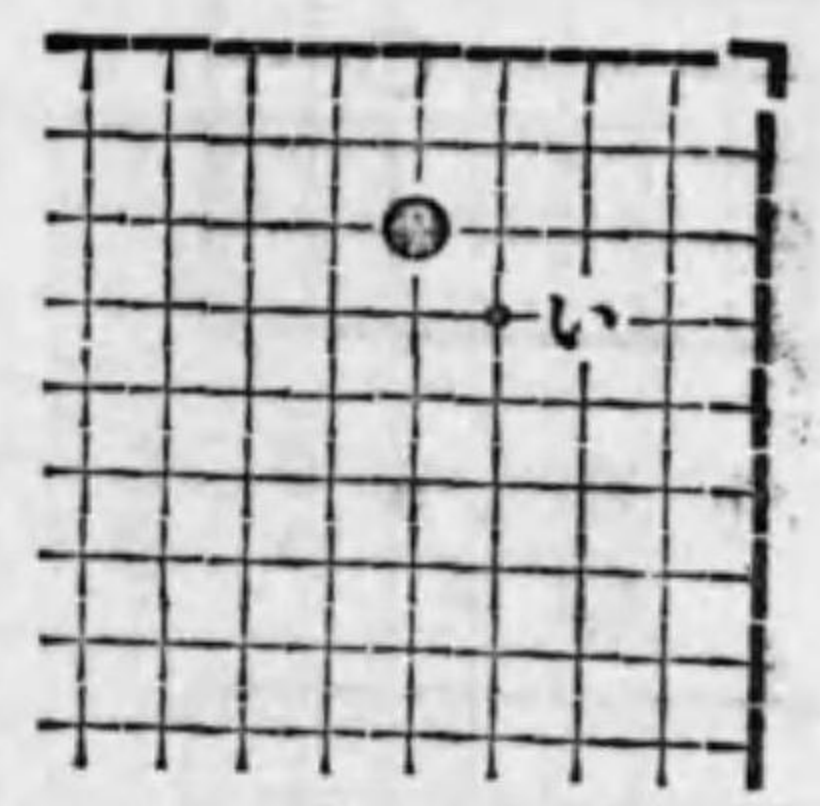
挟●●●
 み●●●
 つ●●●
 け●●●
 圖●●●
 の●●●
 黒●●●
 い●●●
 の●●●
 手●●●



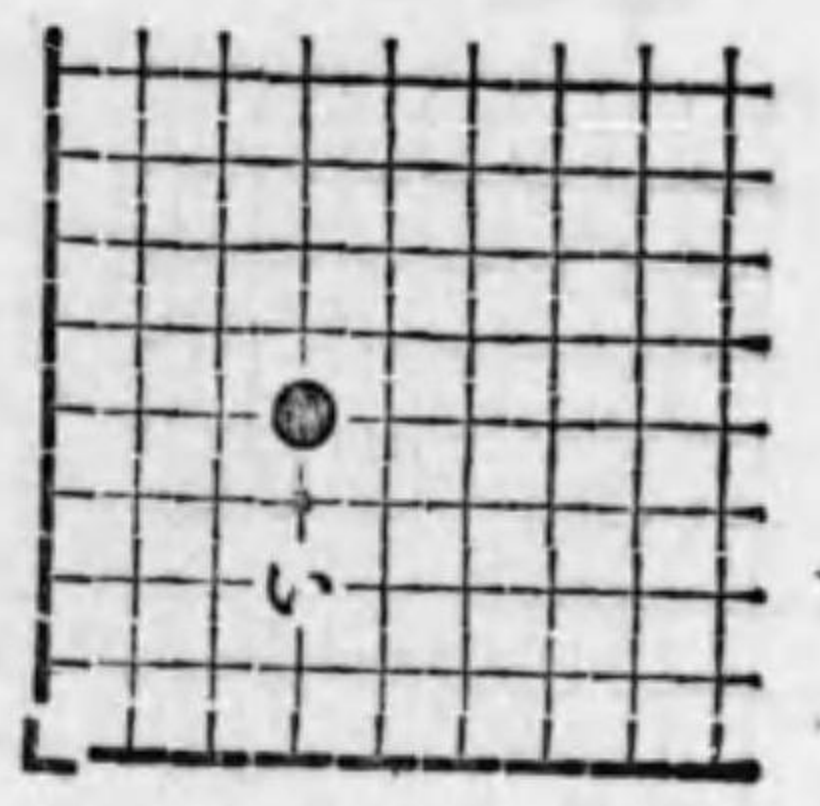
腹●●●
 へ●●●
 附●●●
 ける●●●
 圖●●●
 の●●●
 白●●●
 い●●●
 の●●●
 手●●●



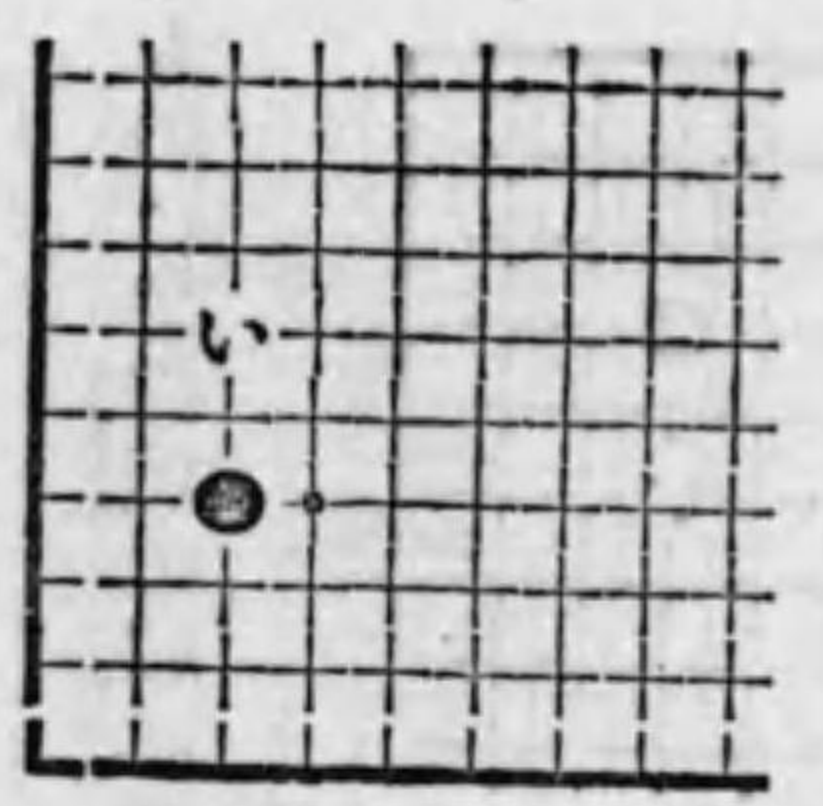
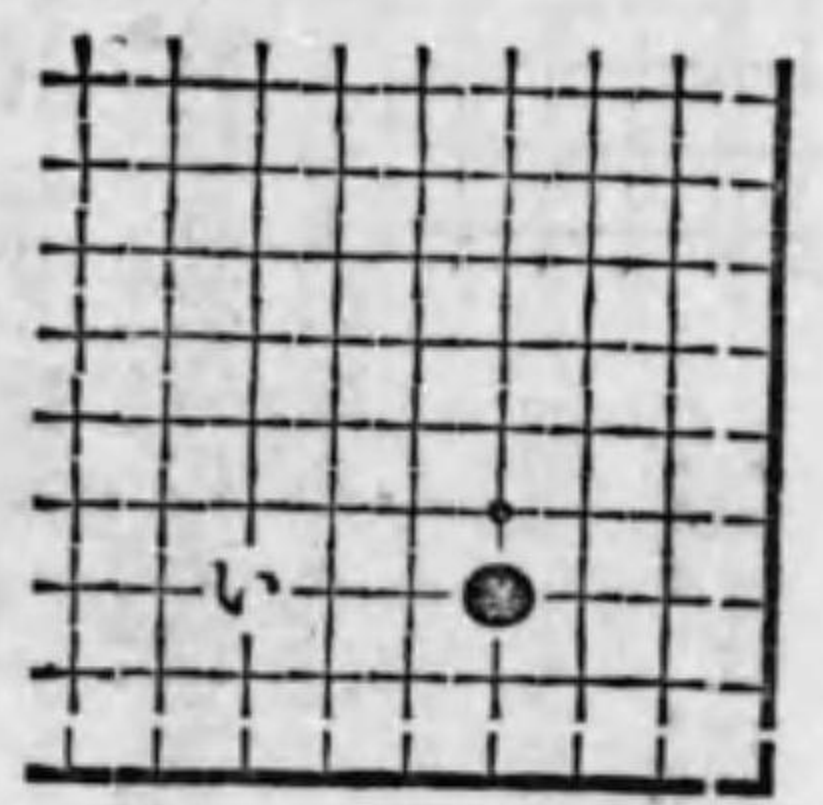
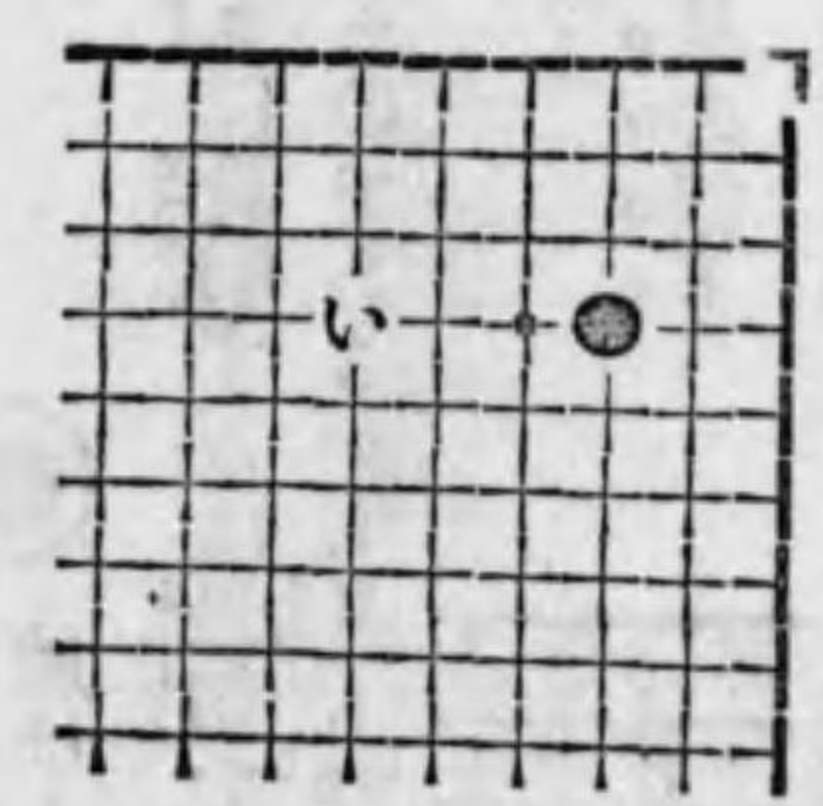
◎ 目外の縮り方
 小目の小桂馬縮りと同型となる



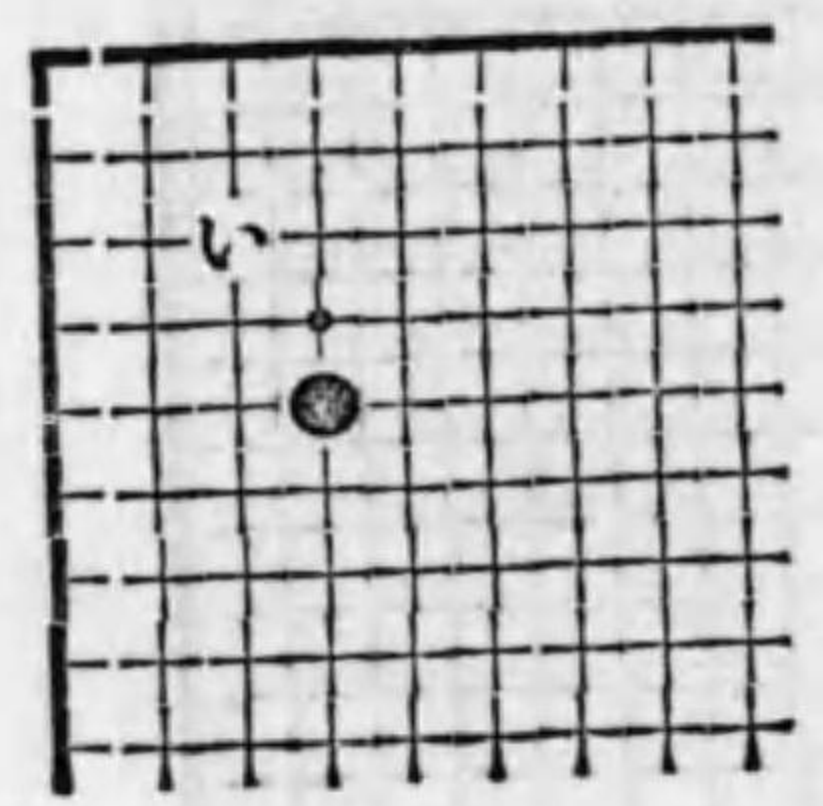
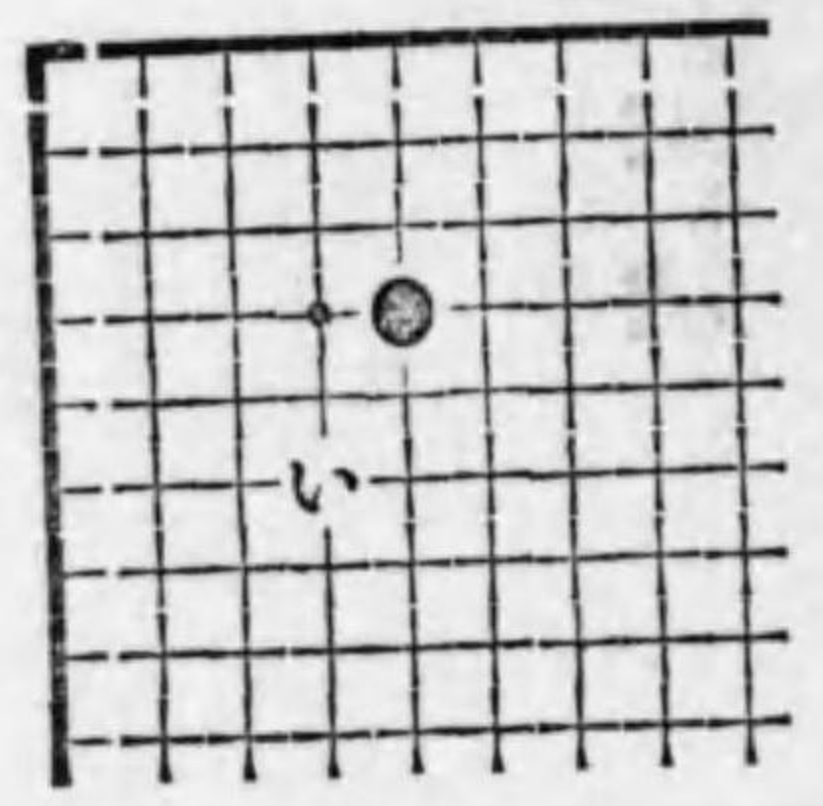
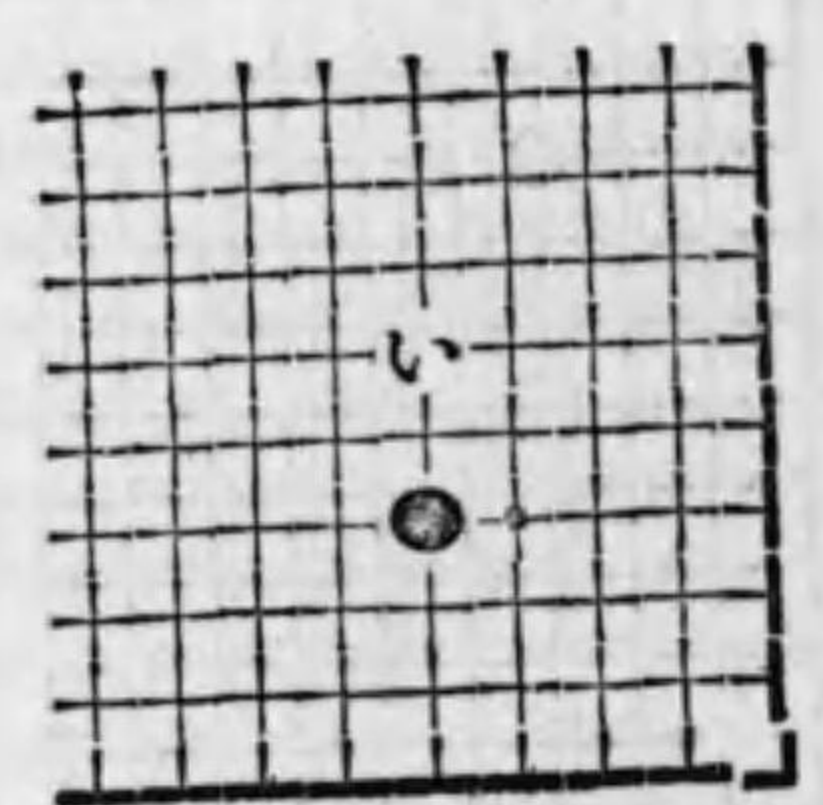
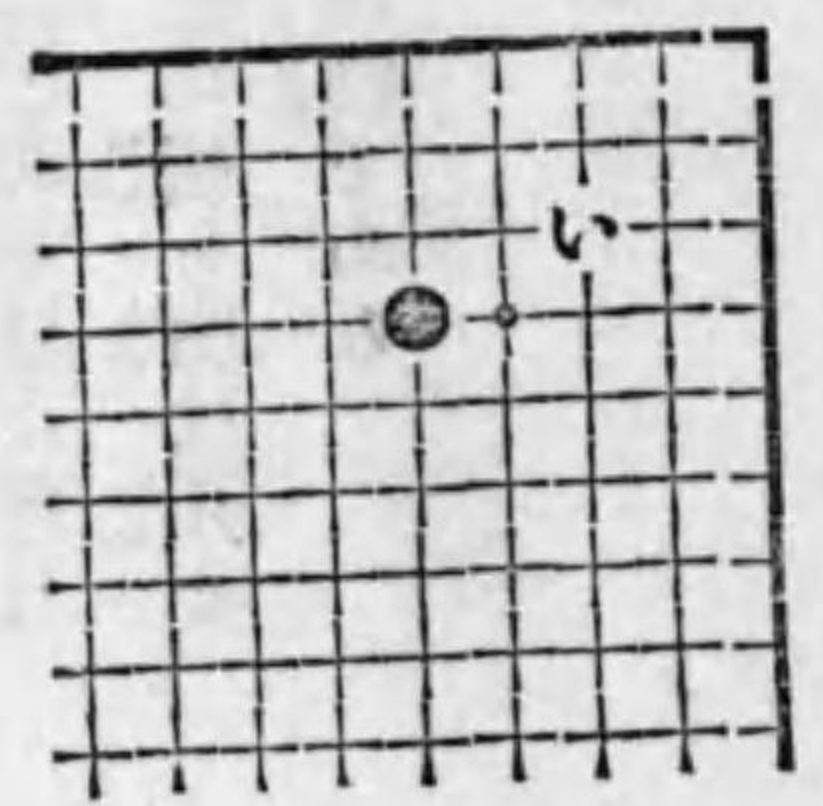
◎ 高目の縮り方
 小目の高掛りと同型となる



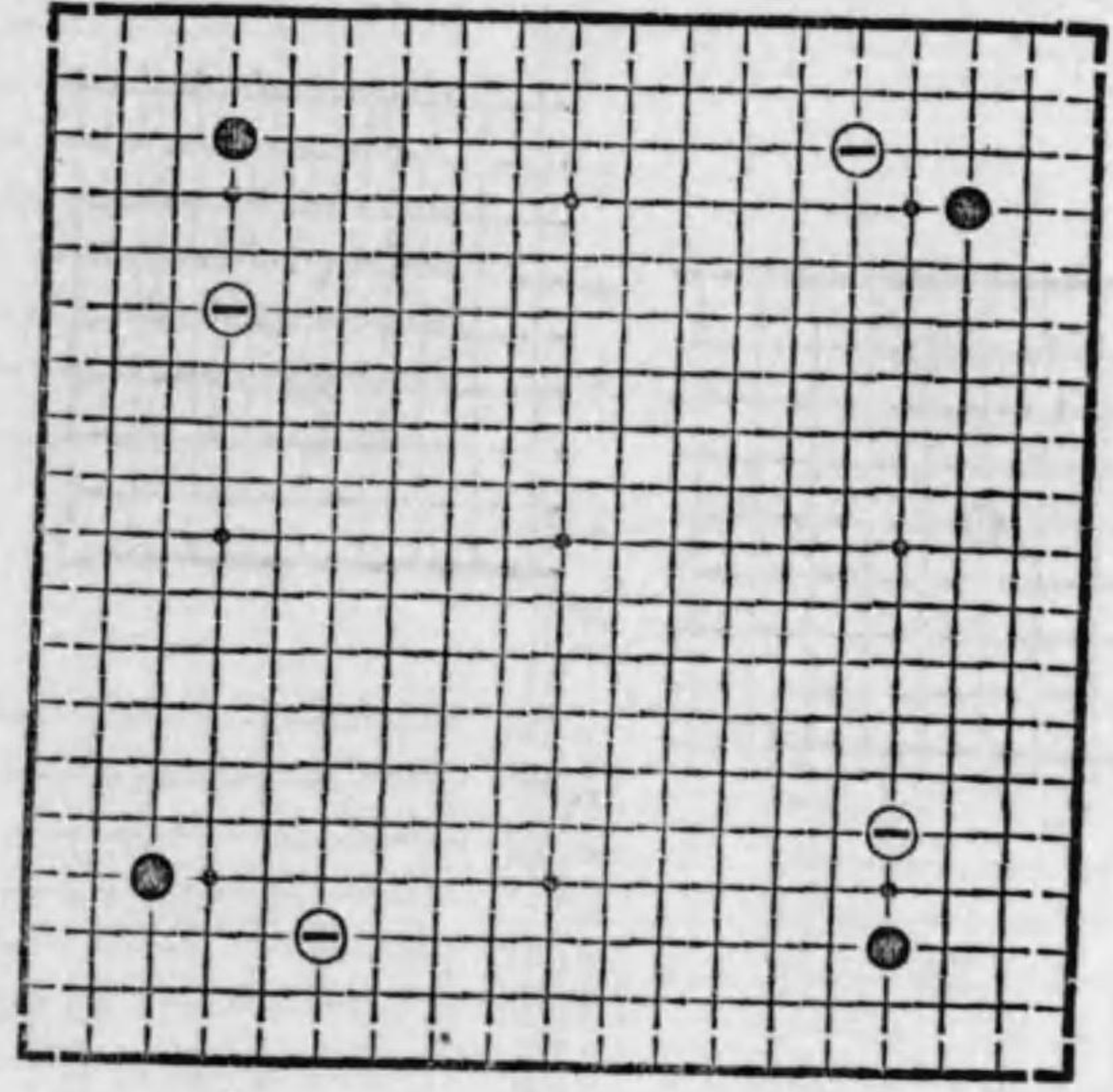
◎ 小目の縮り方
 悪しき類例
 此三圖の如くいと打つ縮り方は守勢甚だ薄弱にて悪し



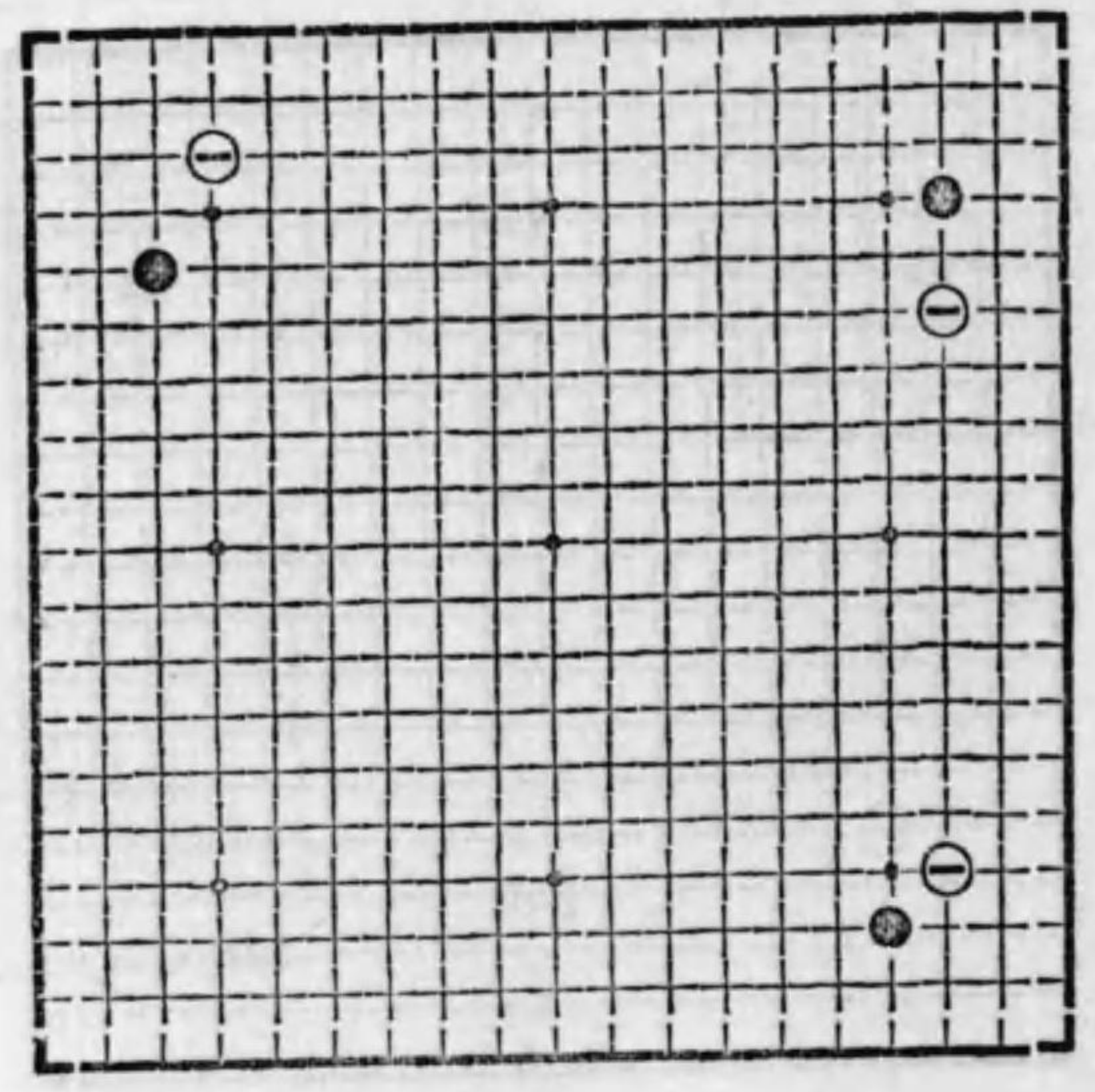
◎ 高目に於ける悪手の類例



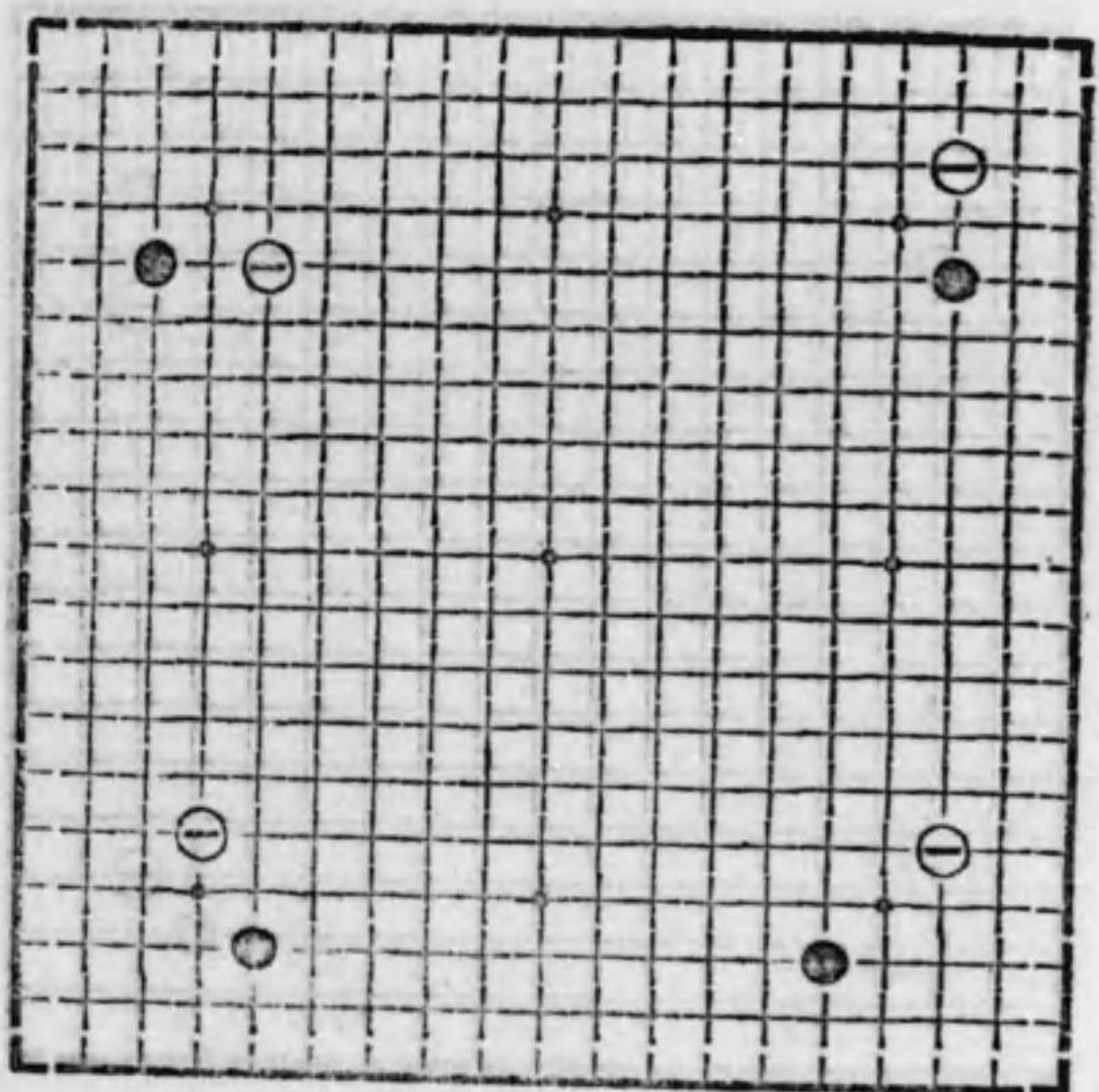
⑨ 小目に對する掛り方
 敵(黒)の小目に對し
 (白)の掛り方は凡そ
 此四種である



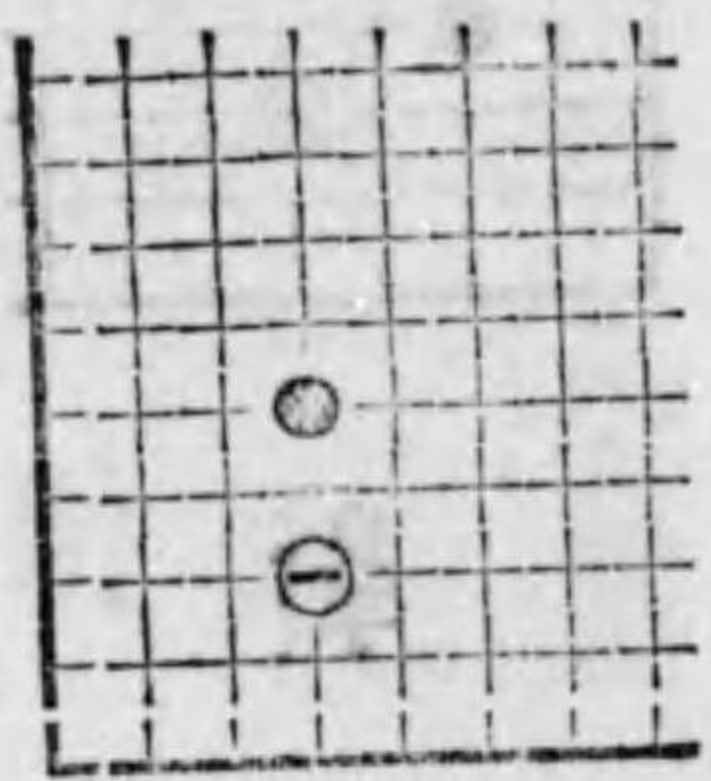
⑩ 小目に對する
 掛り方の悪しき類例
 敵(黒)の小目に對し
 下圖の如き(白)の掛
 り方は最初の布石と
 しては最も悪しき類
 例である



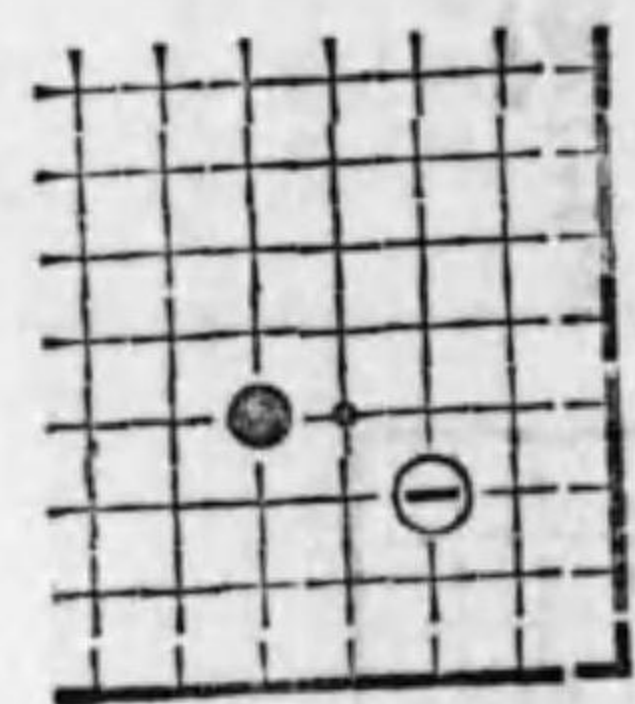
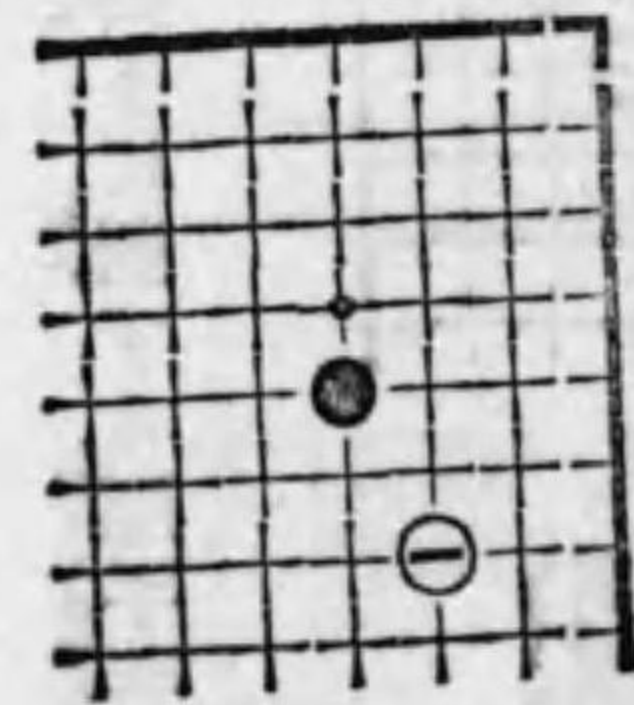
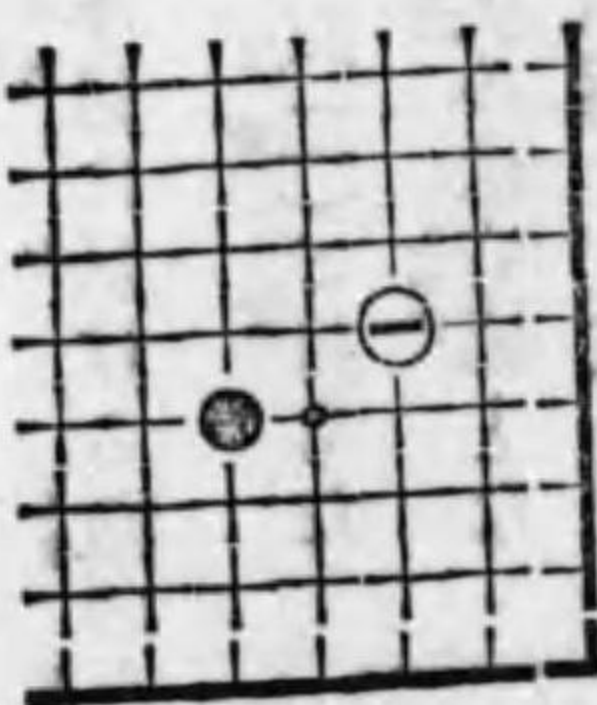
◎目外に對する掛り方の
 悪しき類例
 敵(黒)の目外に對し
 (白)掛り方は最も悪
 しき類例である



◎高目に對する良き掛り方



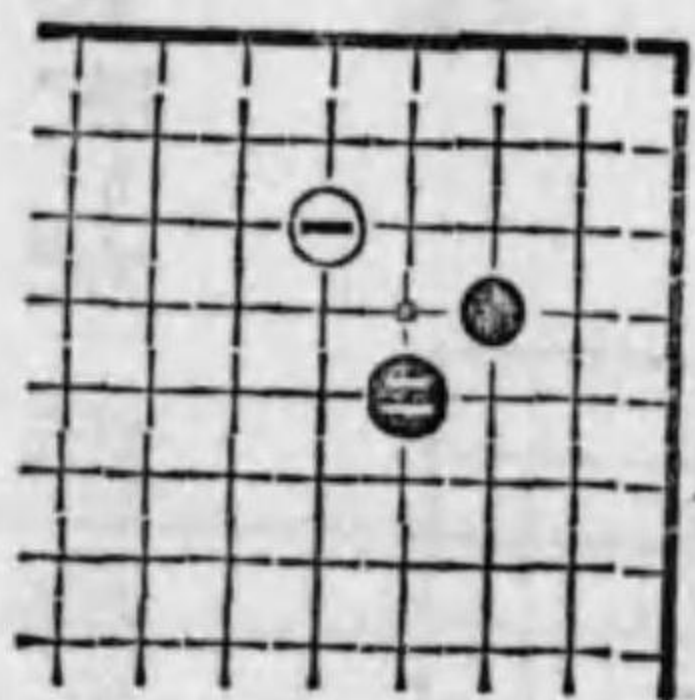
◎高目に對する悪しき掛り方
 である。



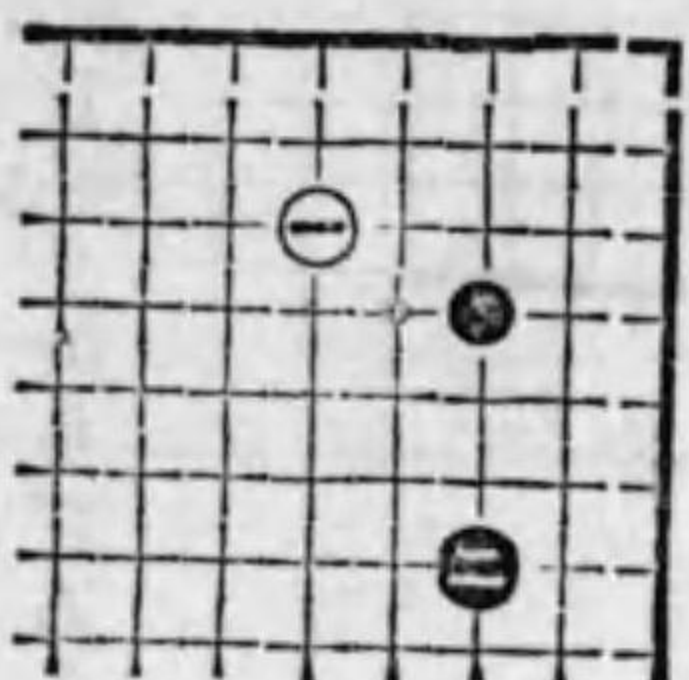
此三種の掛り方の如きは攻勢に於て好まからざるもの

◎小目に於ける敵の小掛馬掛りに對する應手善悪

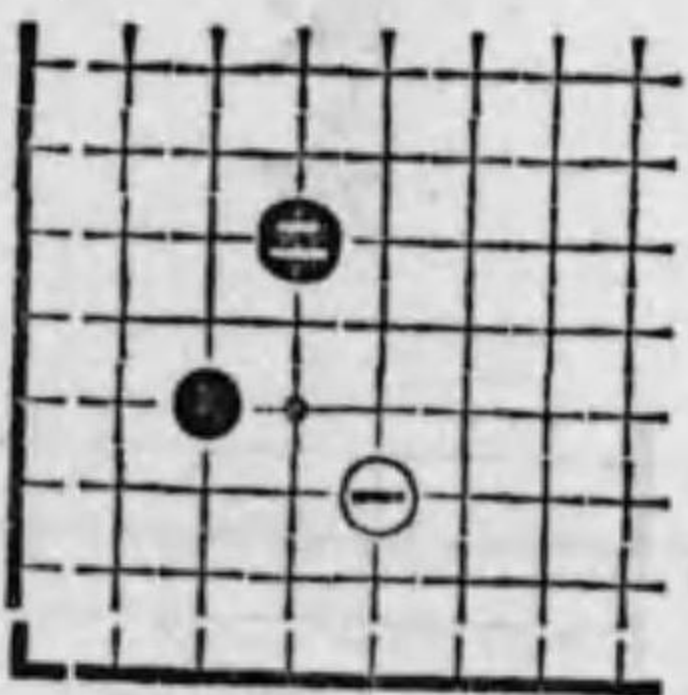
黒の(二)と打ちたる尖みは守備となり攻撃にも便にして最も良き應手である。



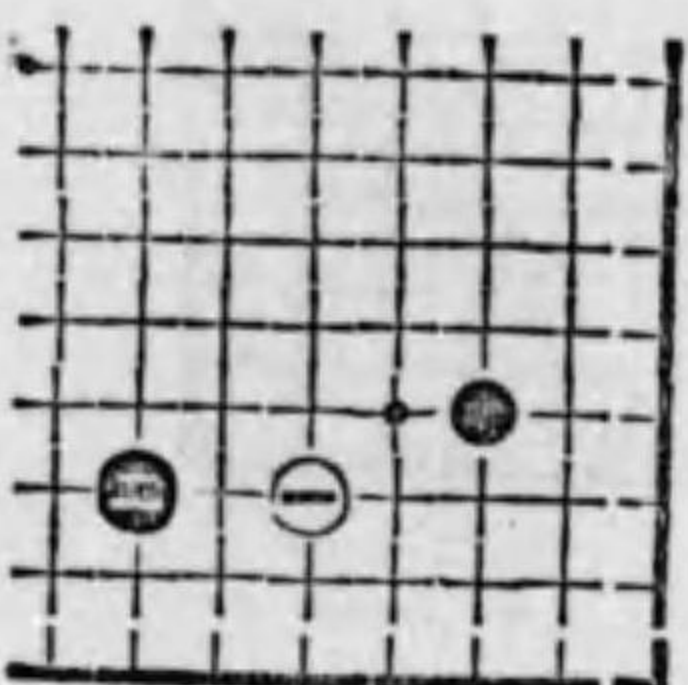
周囲の状況によりては用ひて良し



形勢により用ひてよし

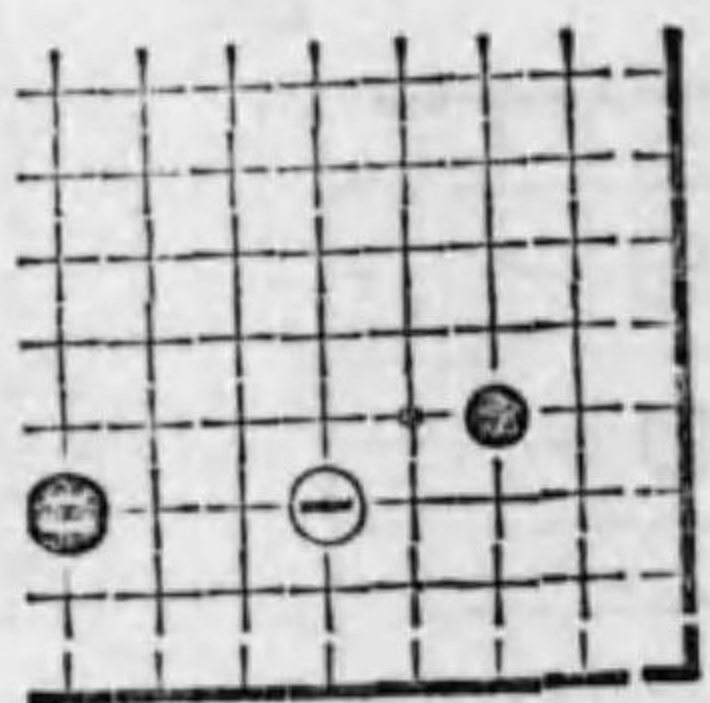


良手

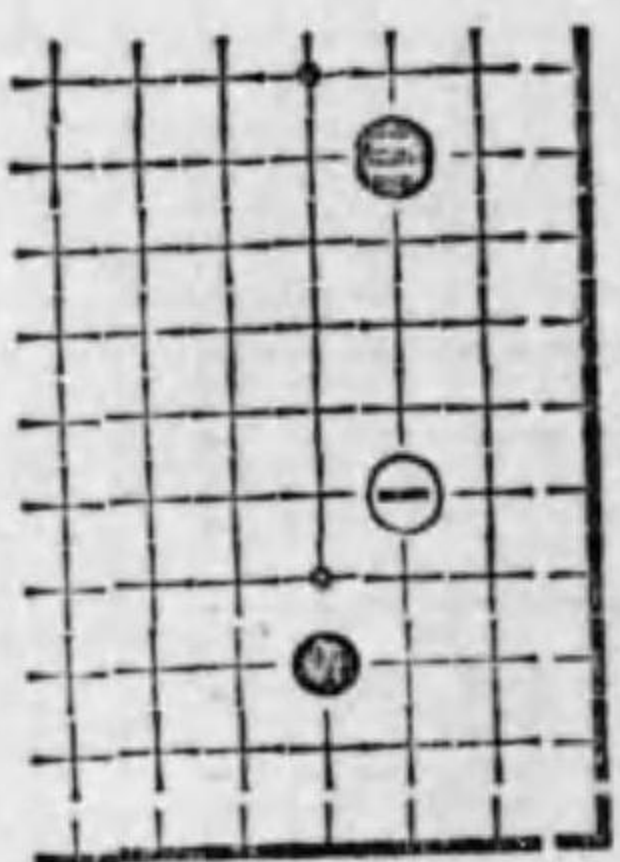


◎小目に於ける敵の小掛馬掛りに對する應手善悪 (其二)

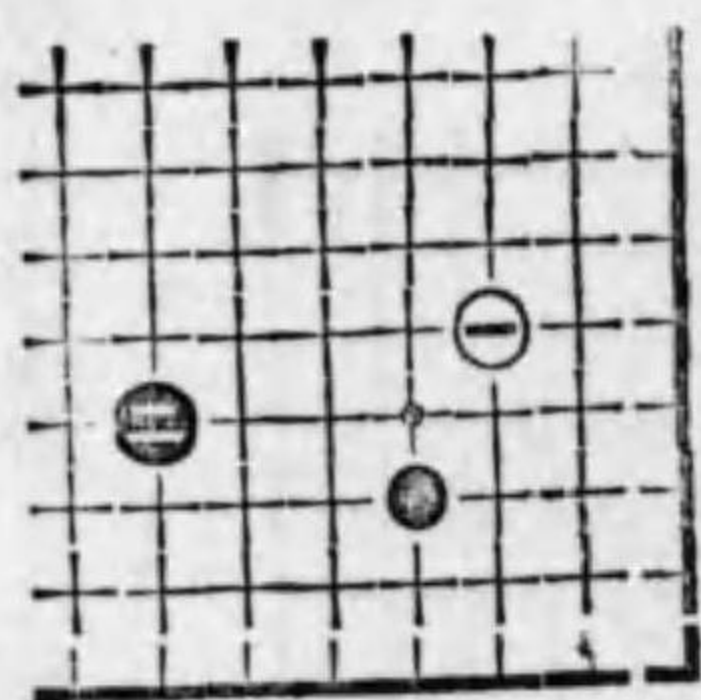
良手



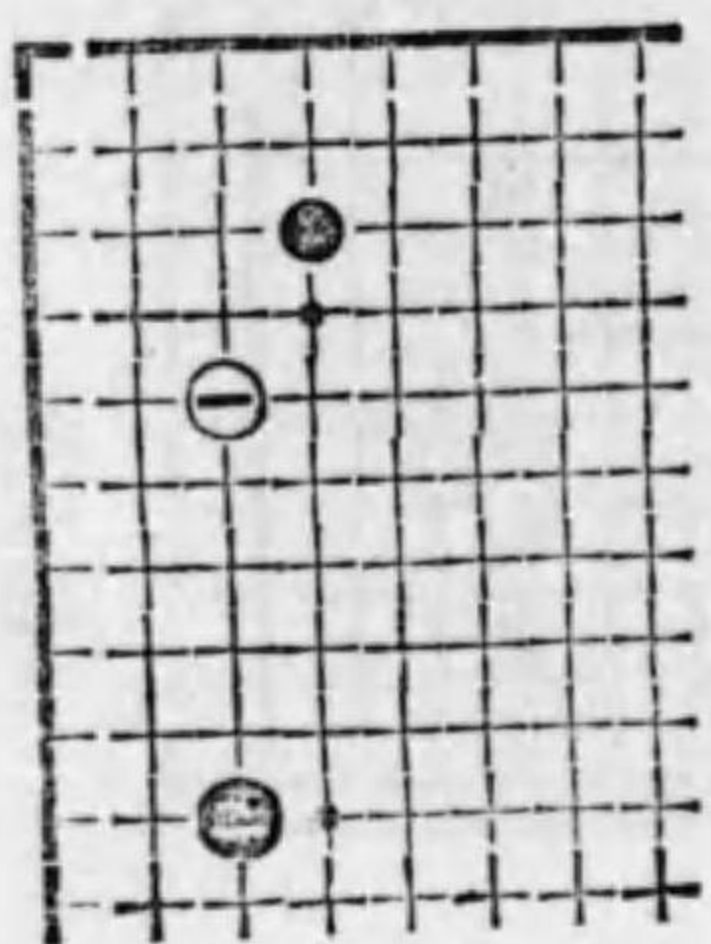
良手



悪手
用ゆ可からず

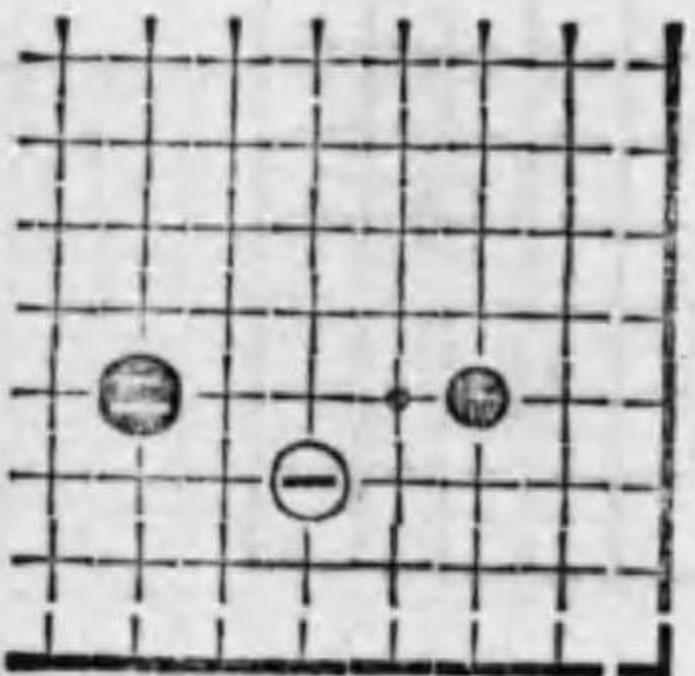


廣きに過ぐ
他石との關係あれ
ば兎に角單小掛馬
掛りの應手として
は悪手

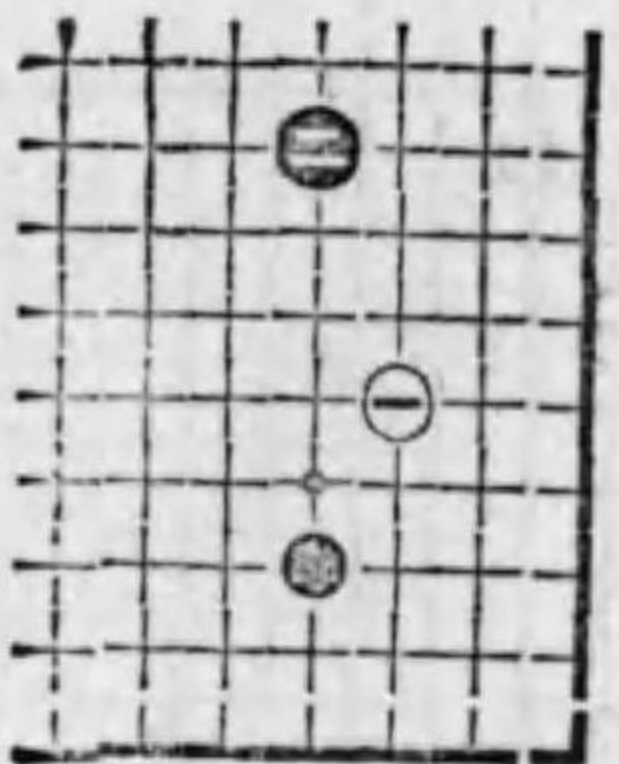


●小目に於ける敵の小掛馬掛りに對する應手善惡（其三）

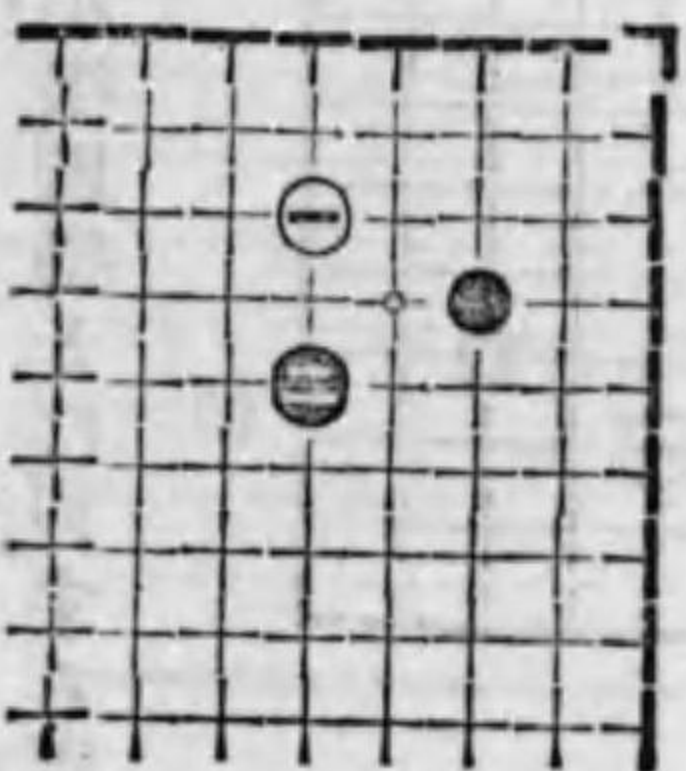
惡手



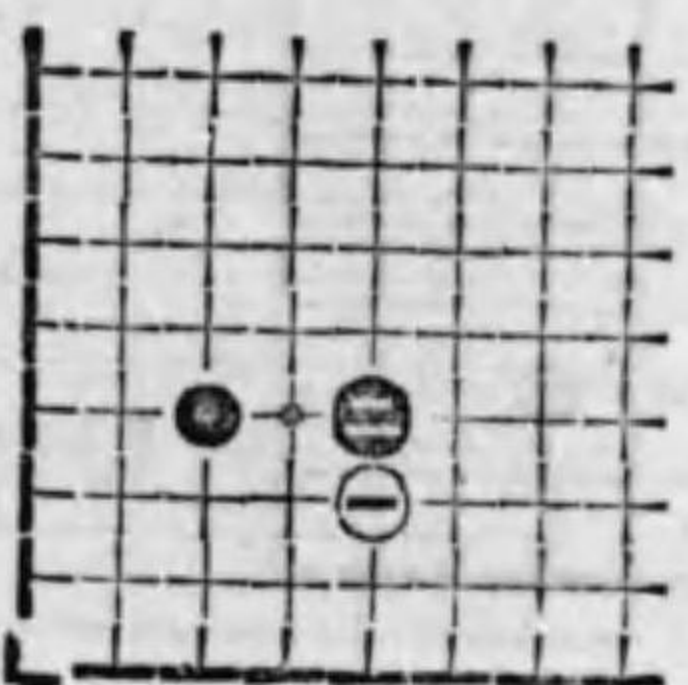
場合に
もよれど
餘り
好まし
からず



惡手



惡手

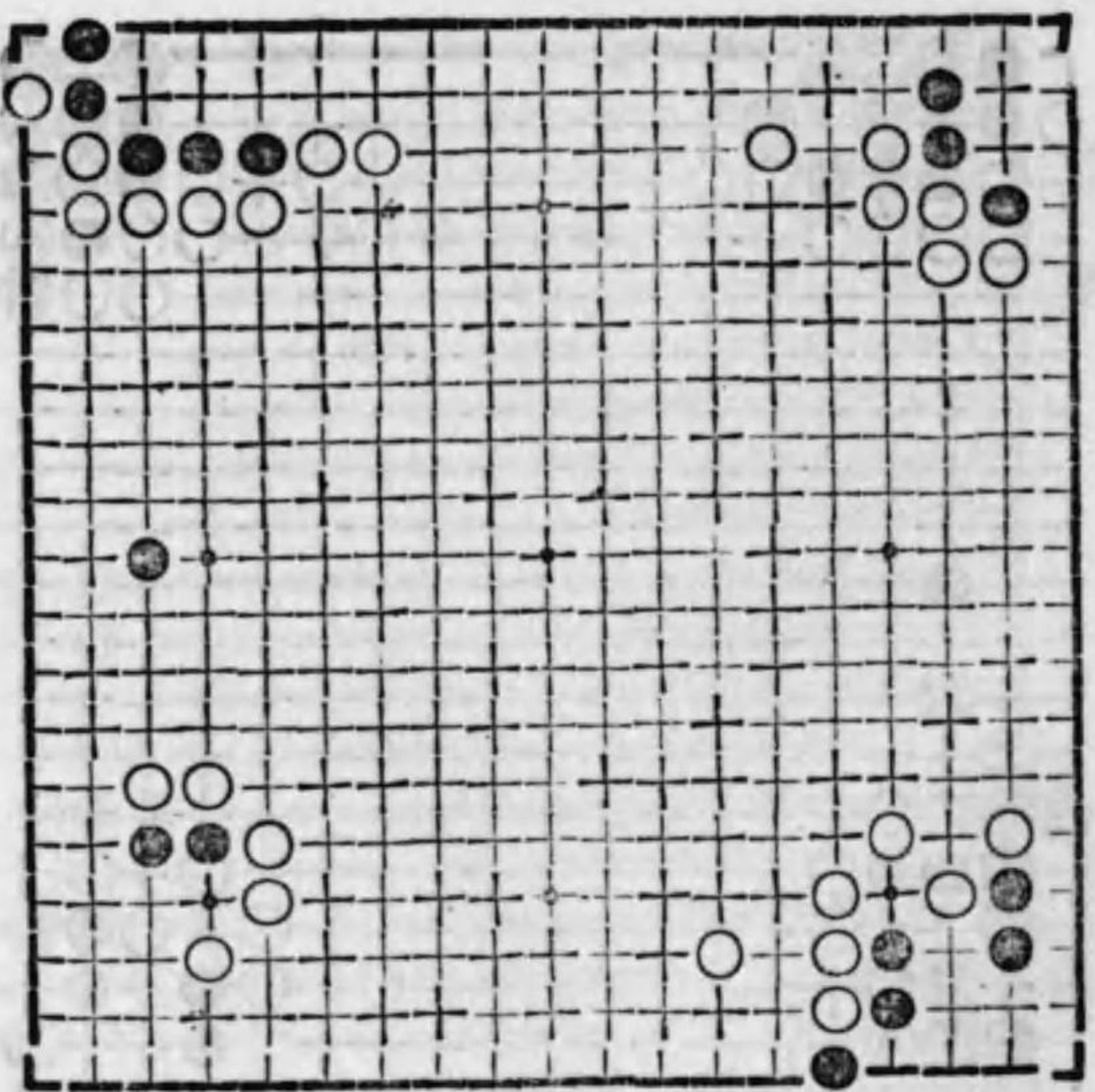


第一圖

第二圖

活の研究

下圖に掲げたる黒は如何なる手段によりて活き得べきか。

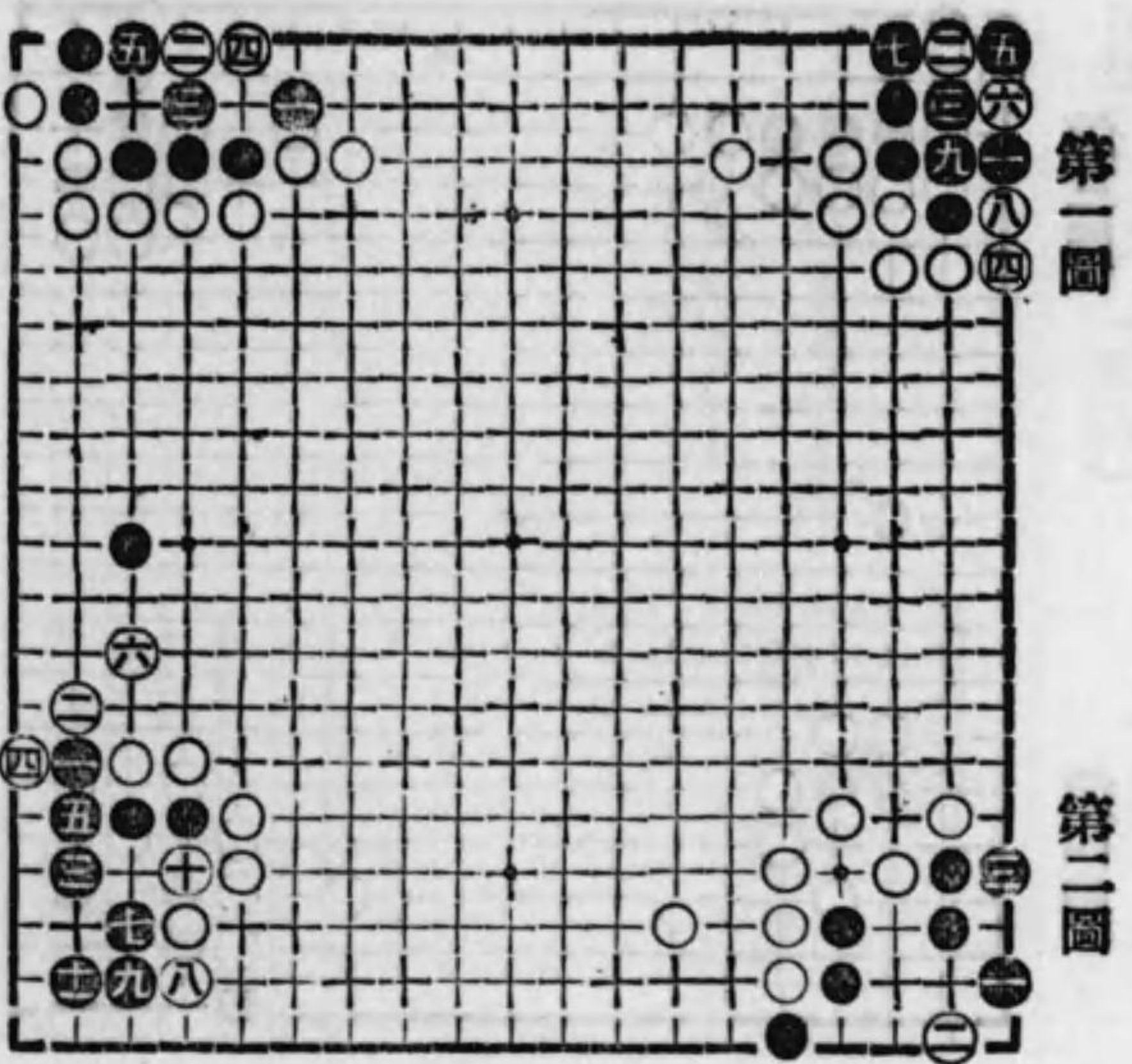


第三圖

第四圖

前頁の解

前頁に掲げたる黒の打方は下圖に示す如くであります。



第一圖

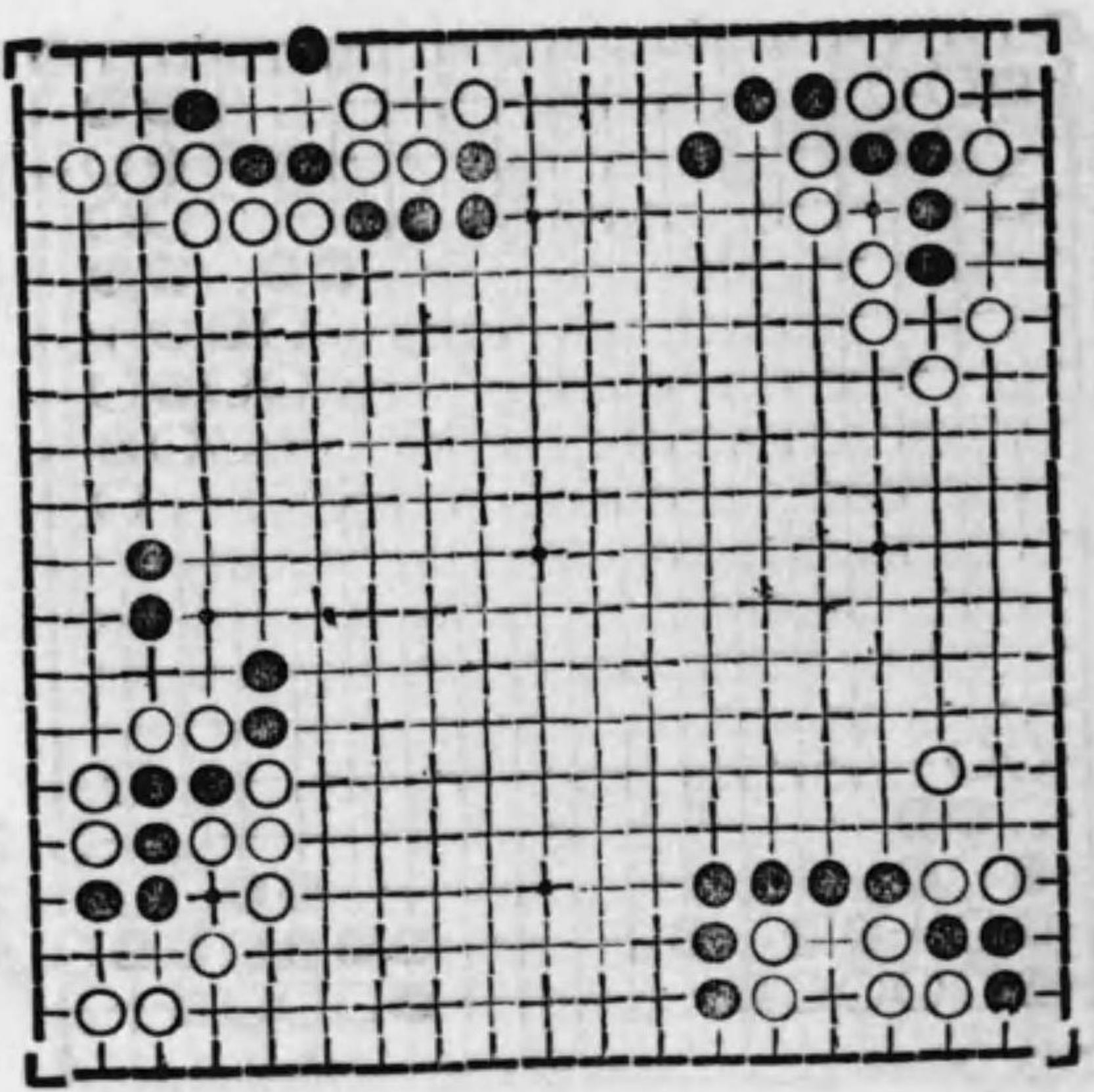
第二圖

第三圖

第四圖

攻合の研究

下圖に示す黒が活きんとするには如何なる手段を採る可きや。



第一圖

第二圖

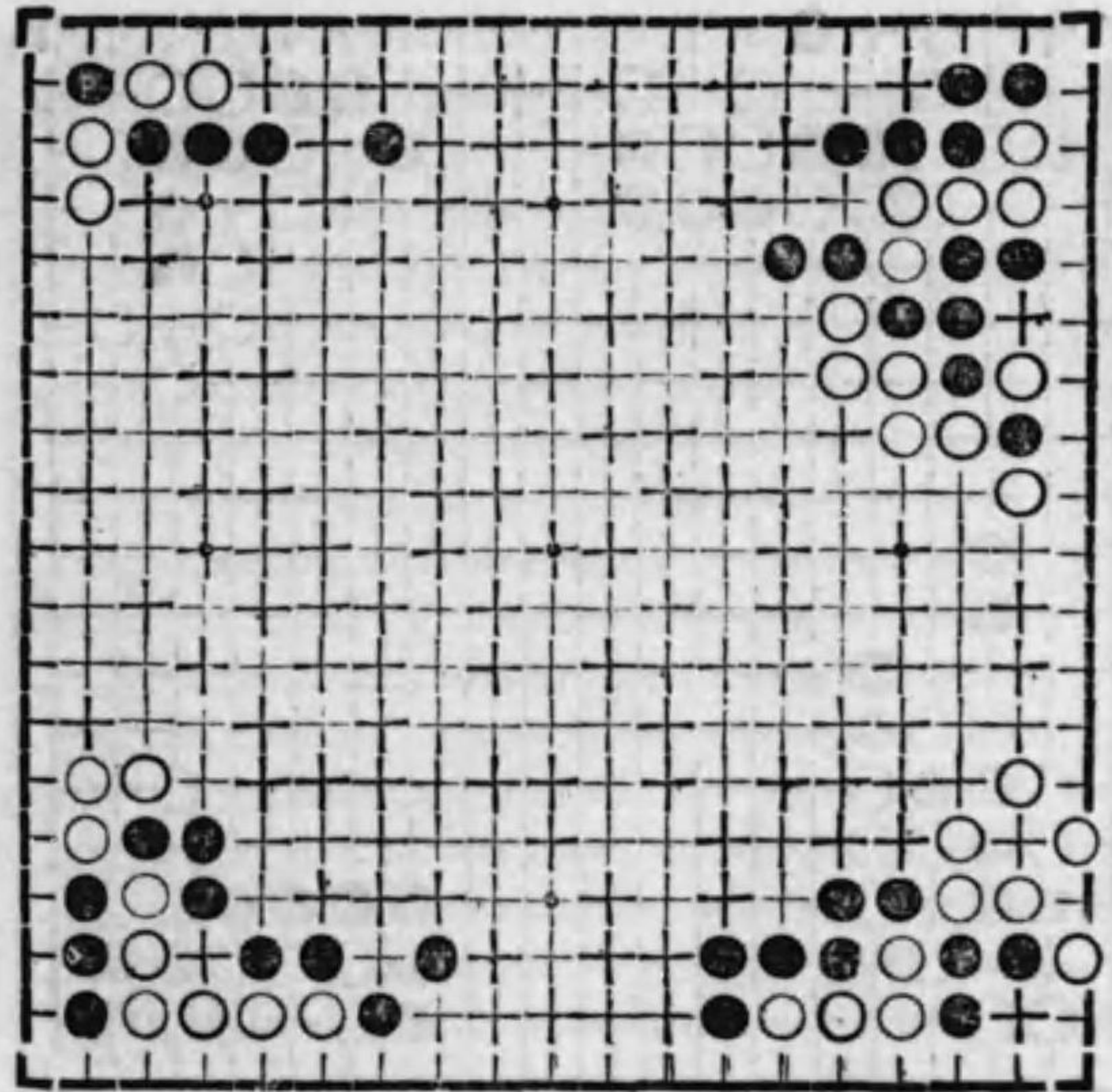
第三圖

第四圖

攻合の研究

其二

第五圖



第六圖

第七圖

第八圖

第一圖中

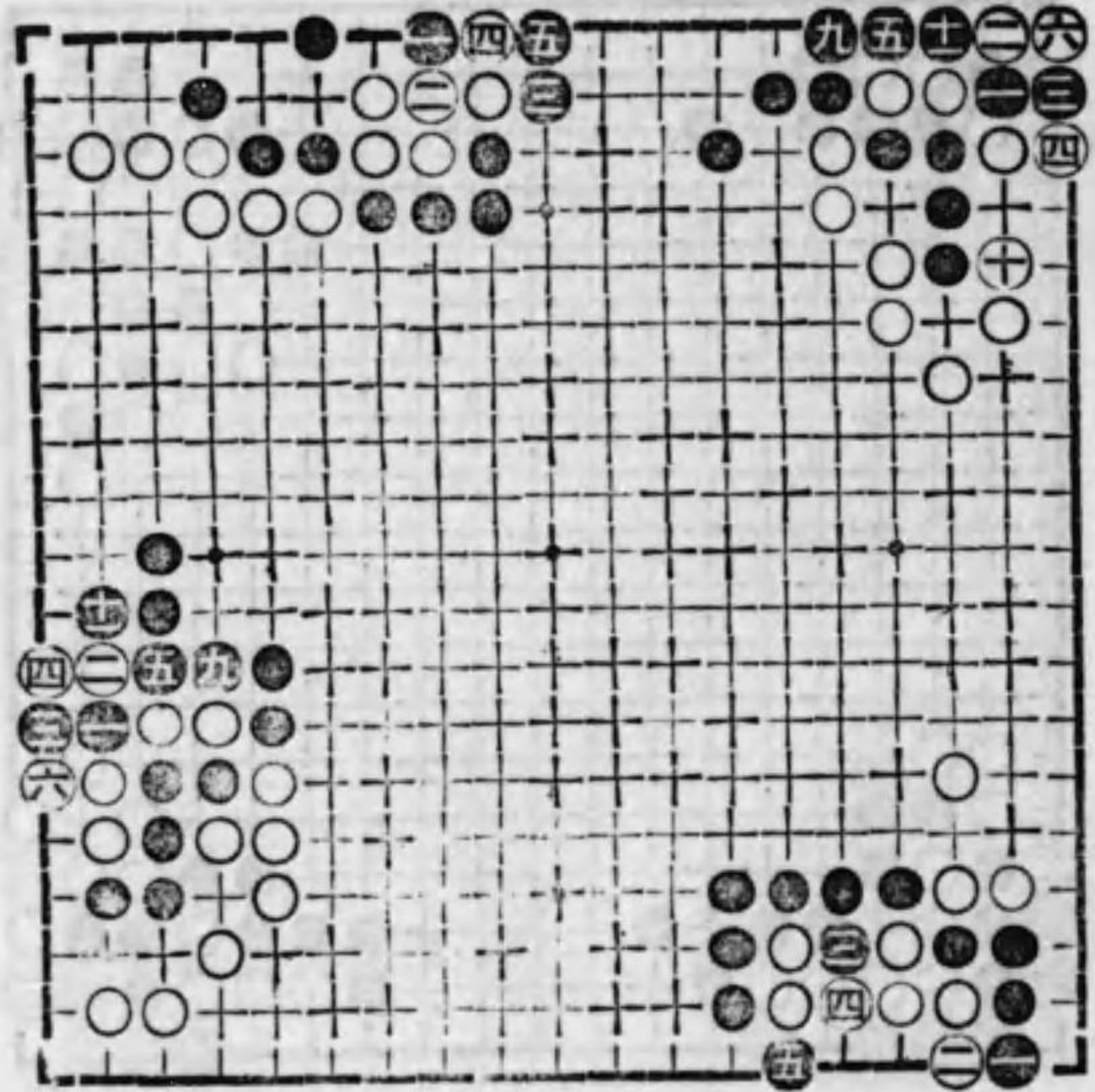
一の所
三の所
八

前頁に掲げたる黒の打方は下圖に示す如くである。

第四圖

一の所
三の所
八
九

第一圖

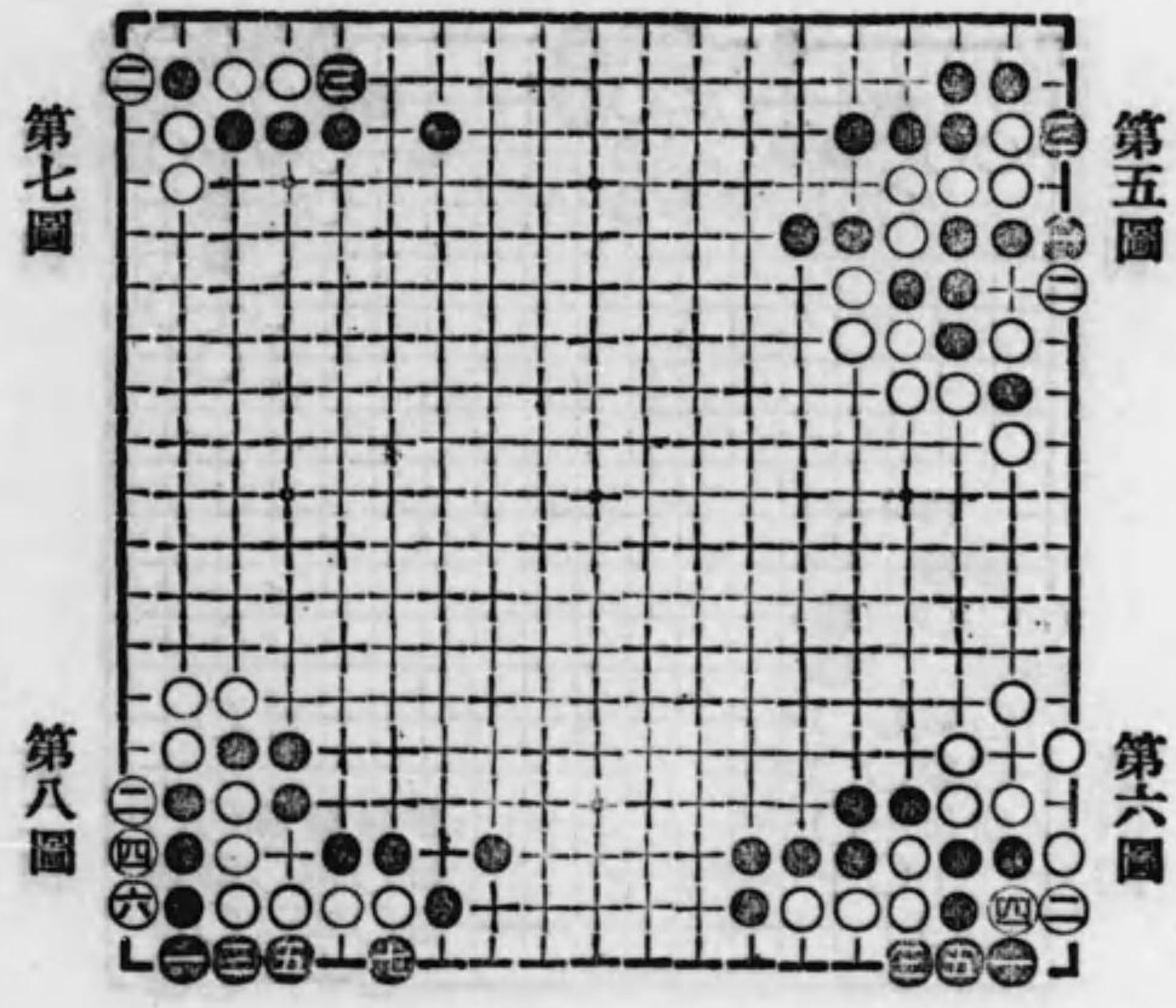


第二圖

第三圖

第四圖

前頁の續き



第五圖

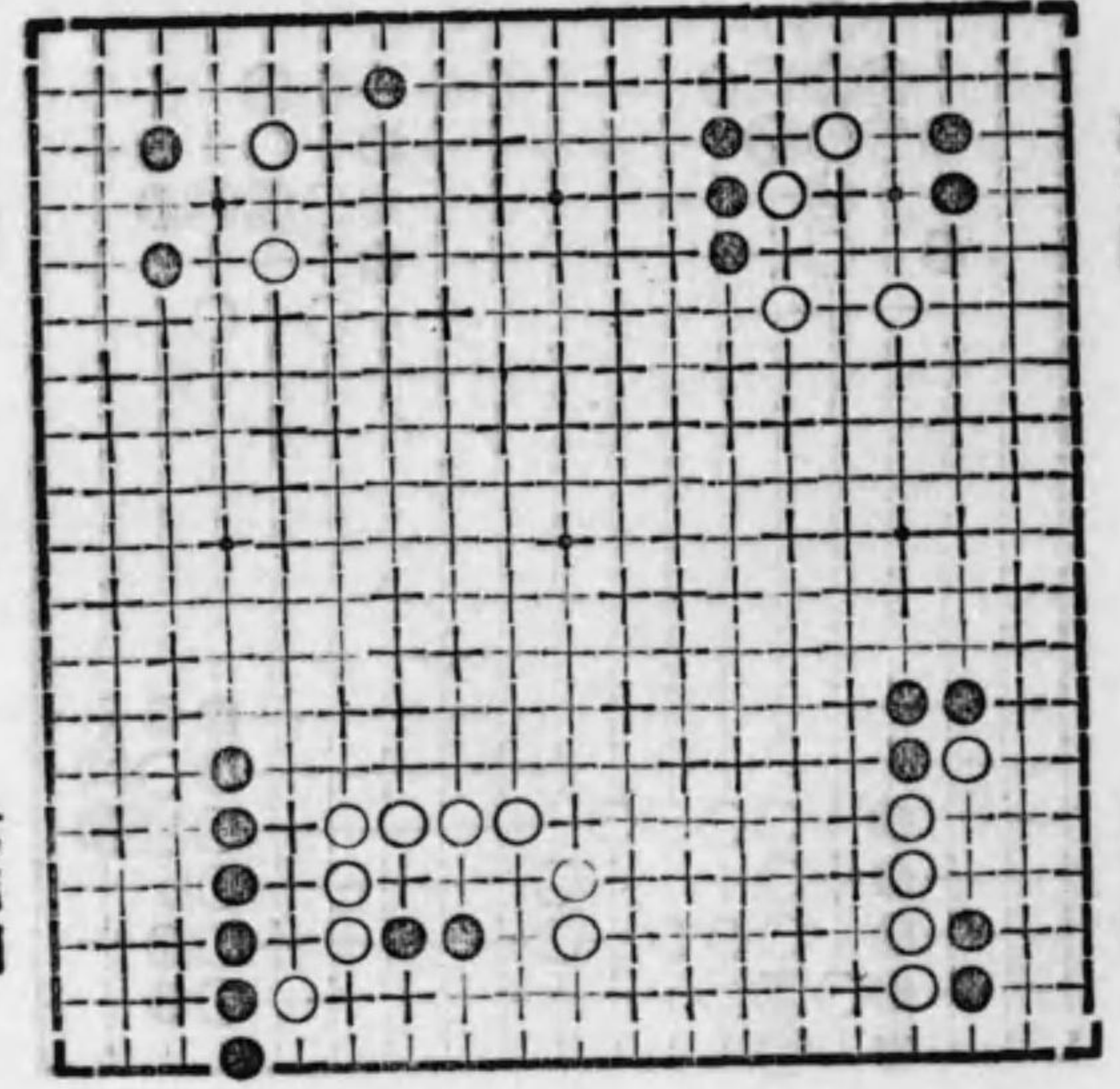
第六圖

第七圖

第八圖

盤りの研究

下圖に示せる如き場合に黒は如何にして盤り得るや。



第一圖

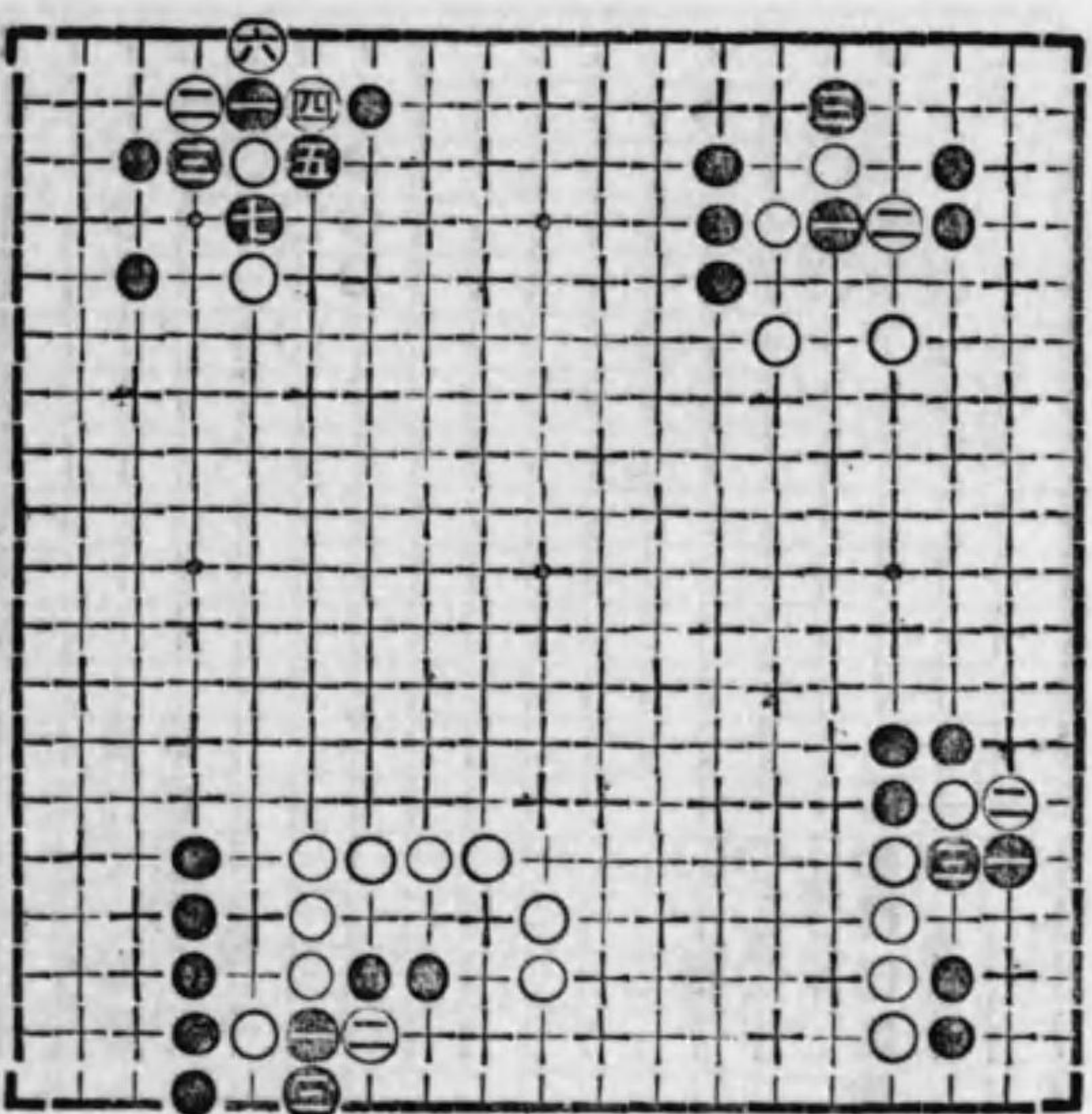
第二圖

第三圖

第四圖

前頁に掲げたる黒の打方は下圖に示す如くであります。

第一圖

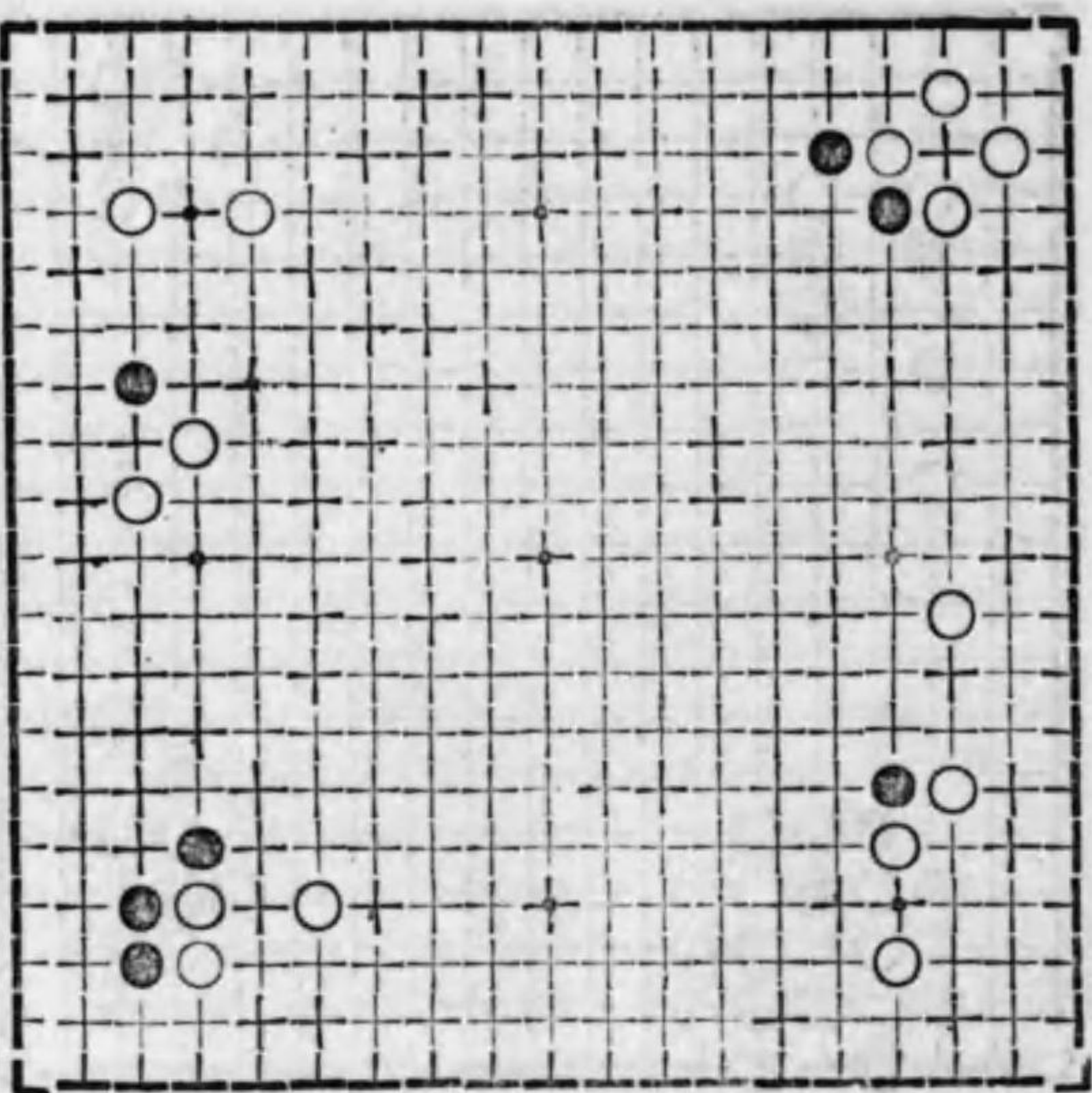


第二圖

第三圖

第四圖

第一圖



第二圖

第三圖

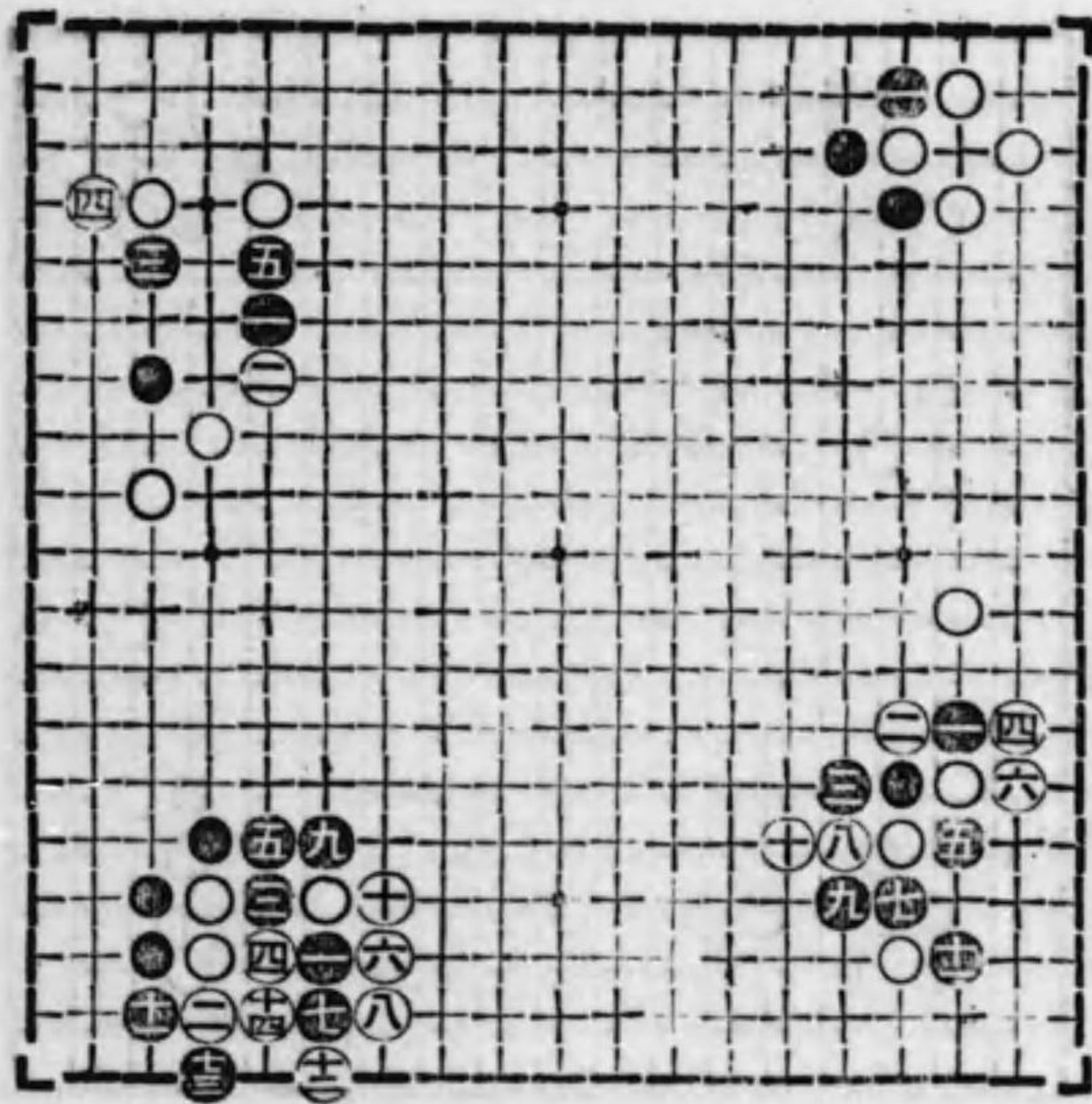
第四圖

應手の研究

成行上下圖に示せる如き場合に黒は最も有利に打たんとするには何れに打つ可きや。

前頁の解

前頁に掲げたる黒の應手は下圖に示す如く打つを最も有利とす。



第一圖

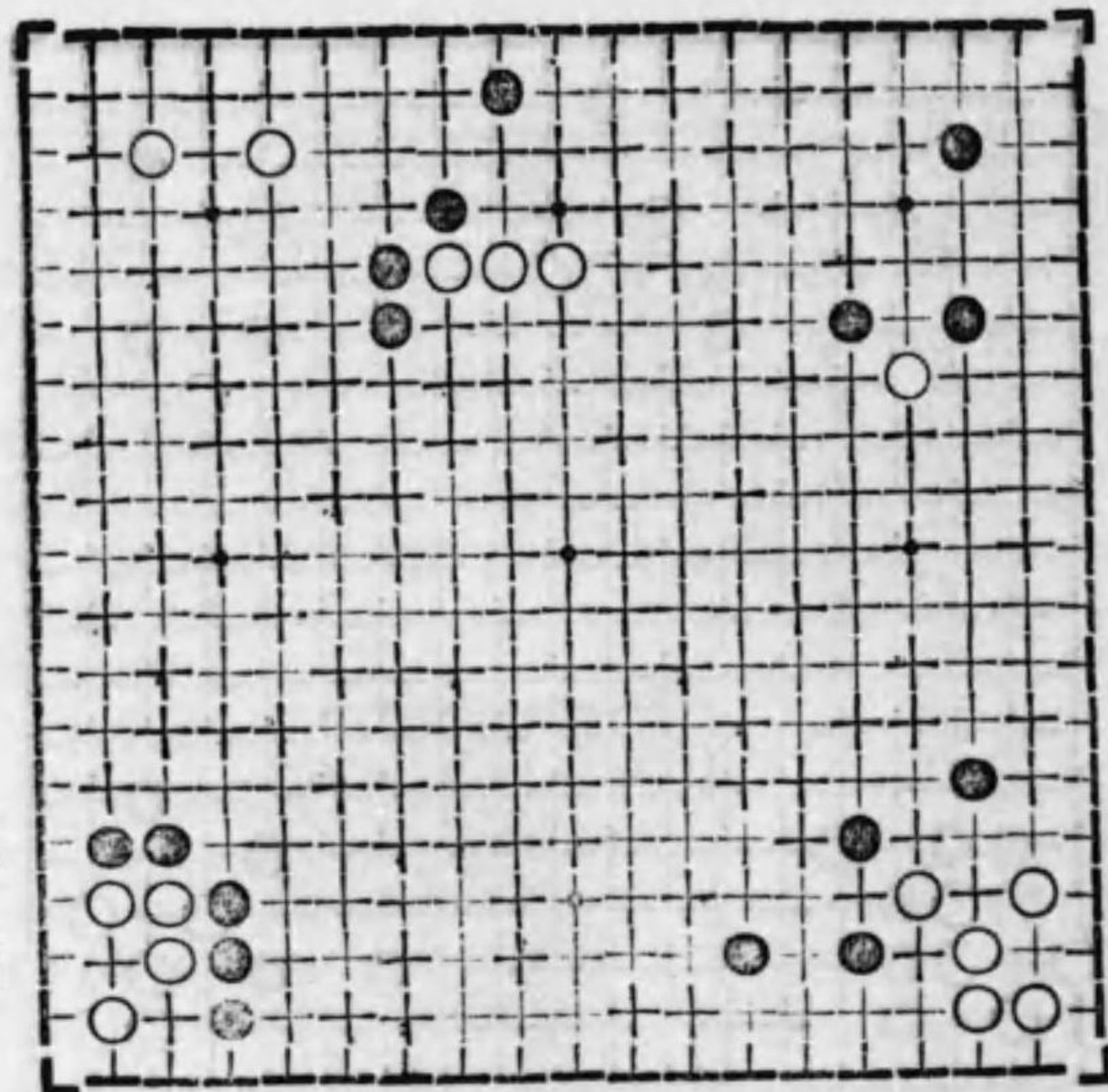
第二圖

第三圖

第四圖

續きの研究

下に示す圖面に於て黒は如何に打ちたれば最も有利且つ完全に連絡し得るや。



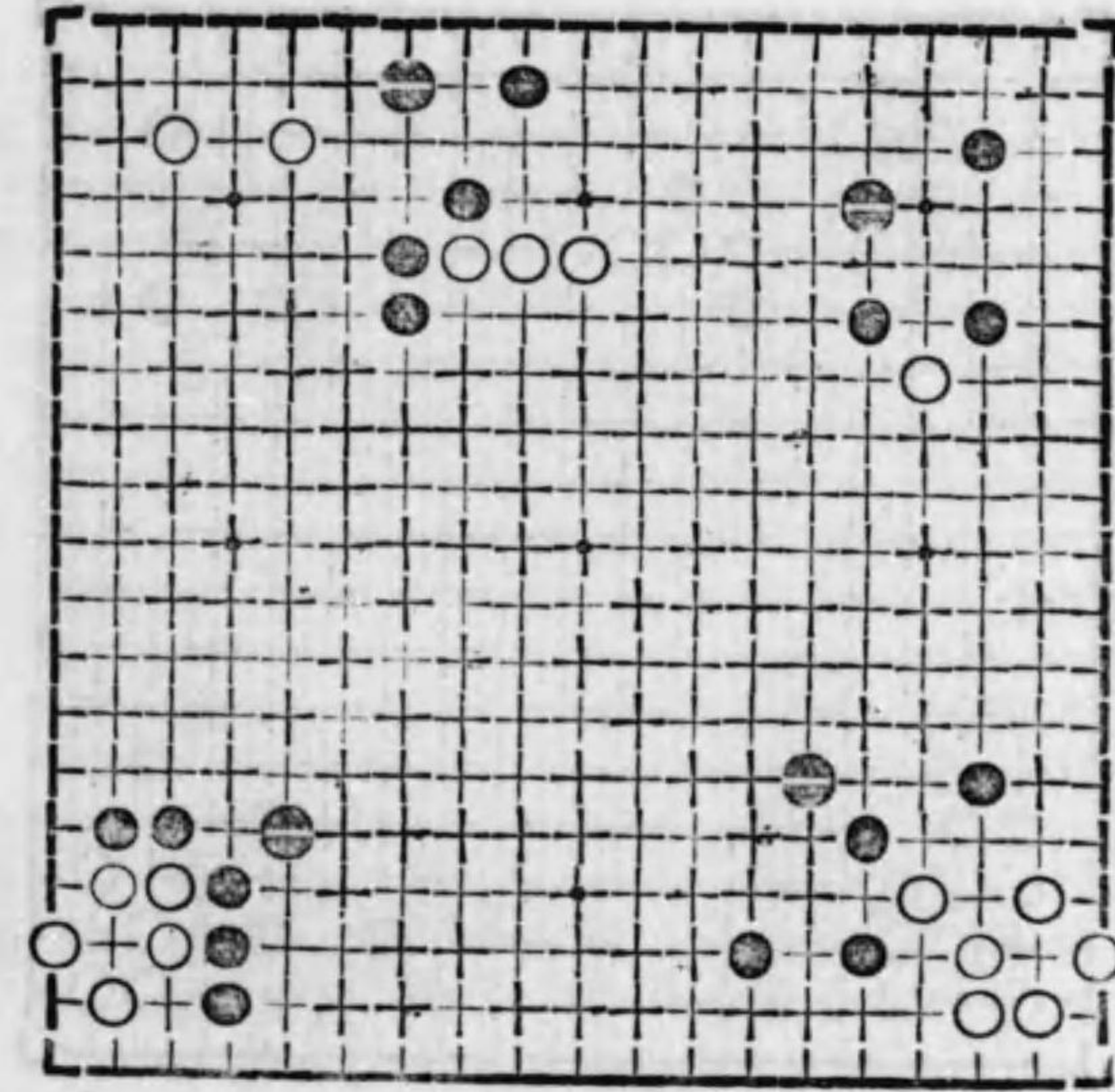
第一圖

第二圖

第三圖

第四圖

前頁の解
 前頁に示したる問題の解は下圖の各一である。



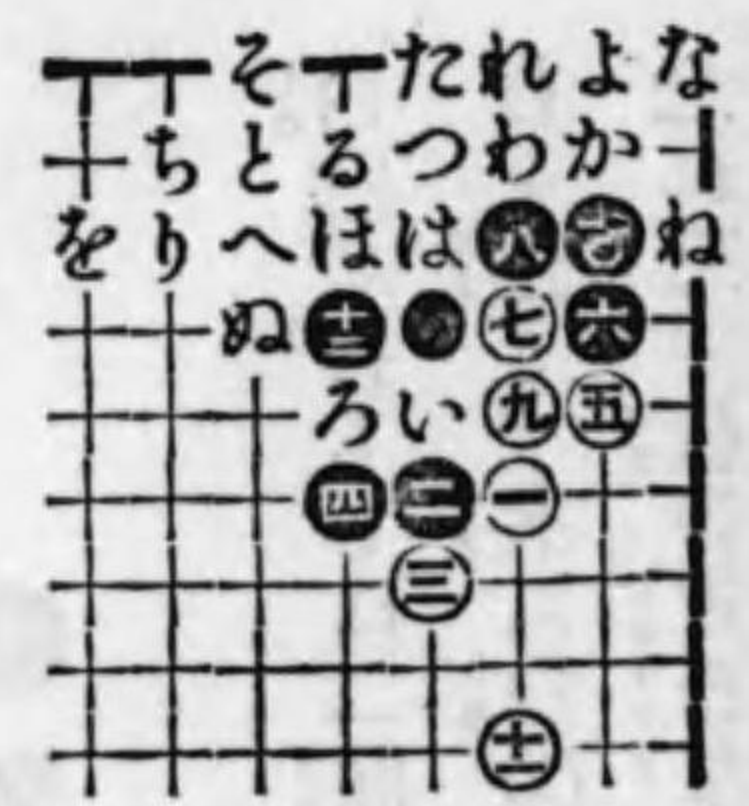
●置碁 小斜走掛り

●頂手



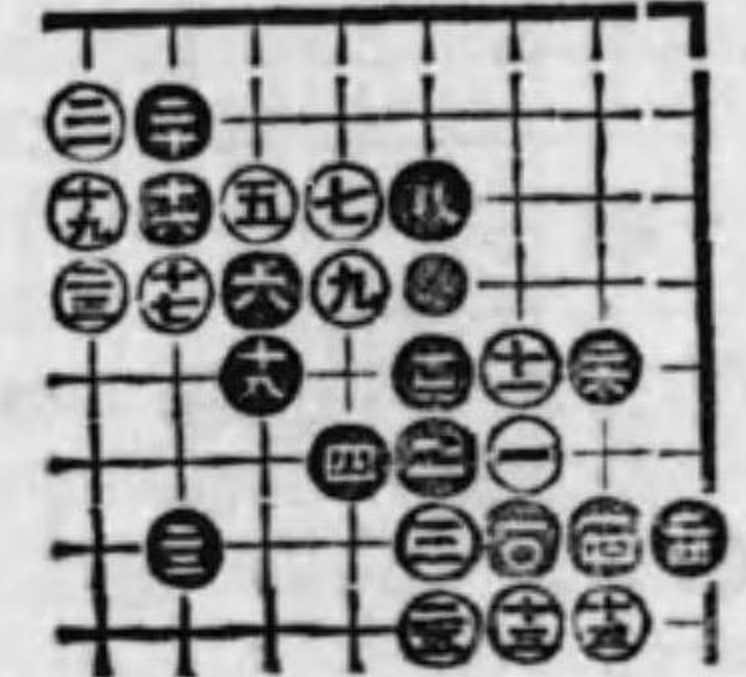
變化黒九の石は十六印に打たば黒は十六へ直に打つ可し又白九は印なれば黒十六の間に啓く又黒九は印なれば黒十六の間に啓く又黒九は印あり

●頂手



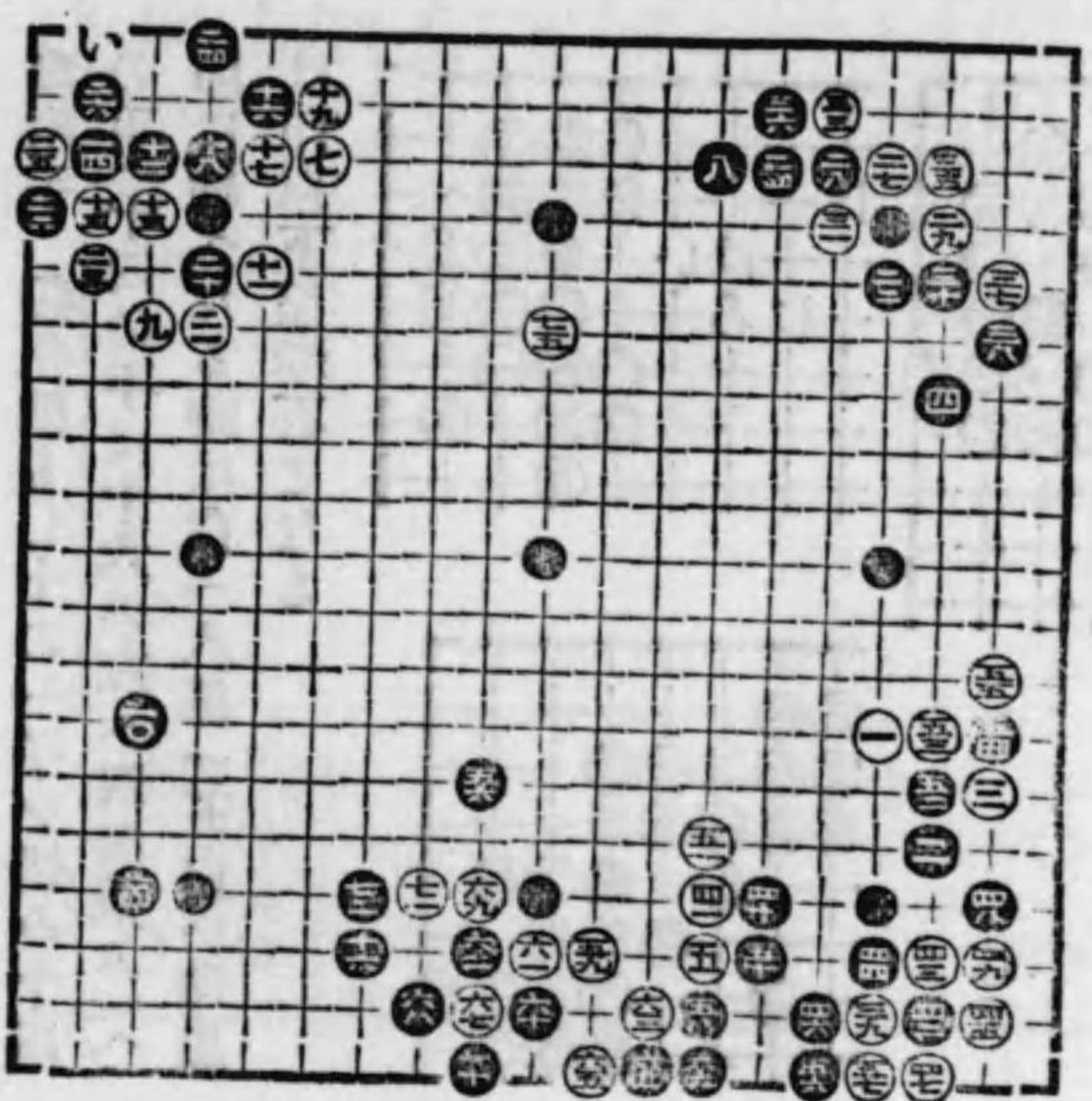
變化黒十二もし手抜なれば白順に突出れば下順に追へば黒遂に死石となる

●附手 變化黒もし十の一子を惜み十四の手(十四の手は十六の左へ四間飛ぶ)へ印に約へたる時は白一八黒一五白印黒は印以下黒浮石となる



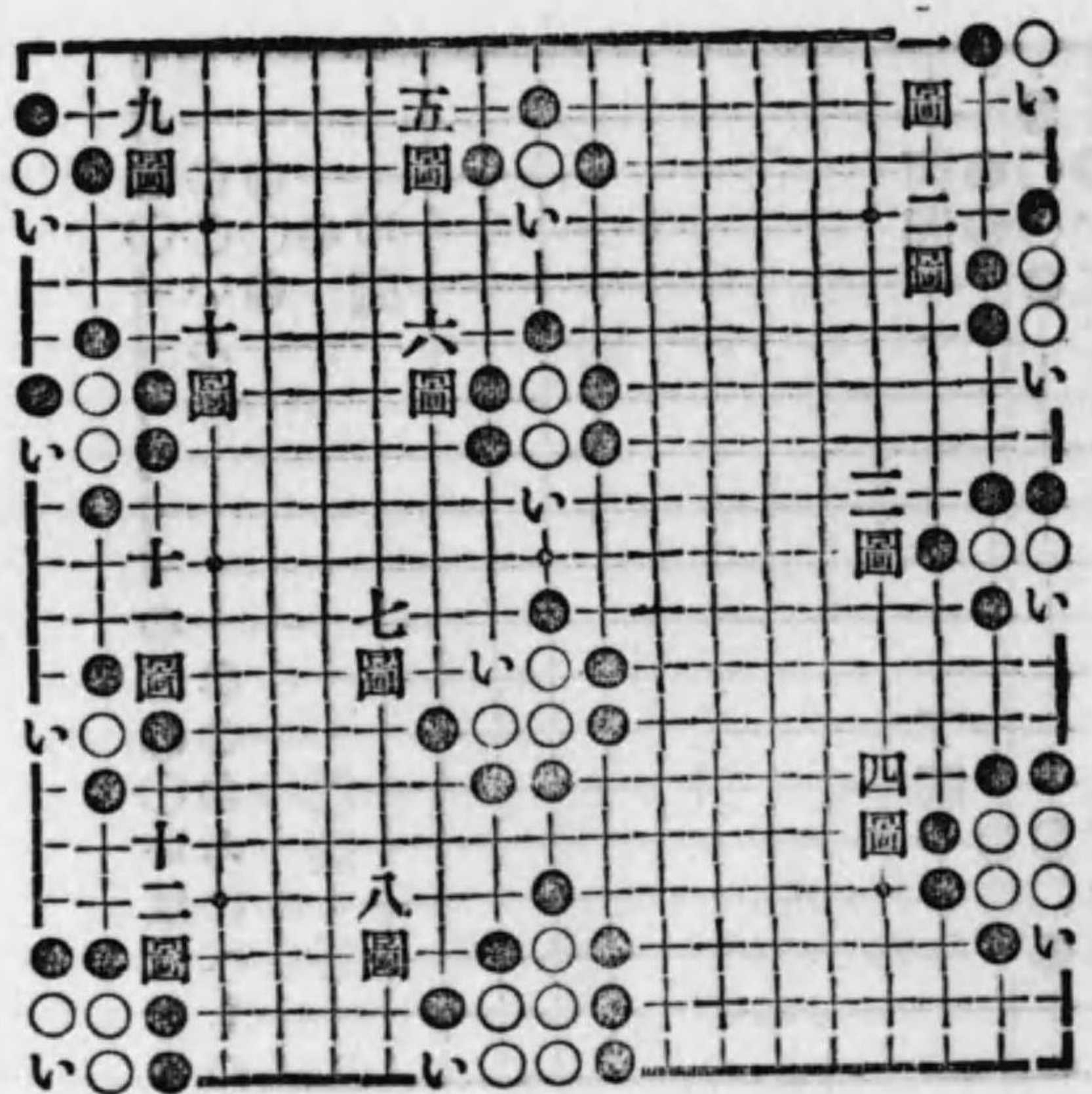
●置碁 井目の石立

白○と打ちしは二間高掛りにて黒●と尖
 みを法とす次に白○と掛し時黒●と尖む
 之れ三手抜の定石なり以下手順を逐ひ白
 へ打込し時黒捉らずして●の曲り宜し
 もし之れを捉らば白をい印に置かれ黒全
 部死石となる次に黒●と押へし時白手抜
 するも劫となるを見越し白○と走込宜し
 黒●の附越實に吉黒●の斷は先手を以て
 白の盤りを附ぐ黒●の石は活を確にせし
 ものとす黒●の締りは堅し



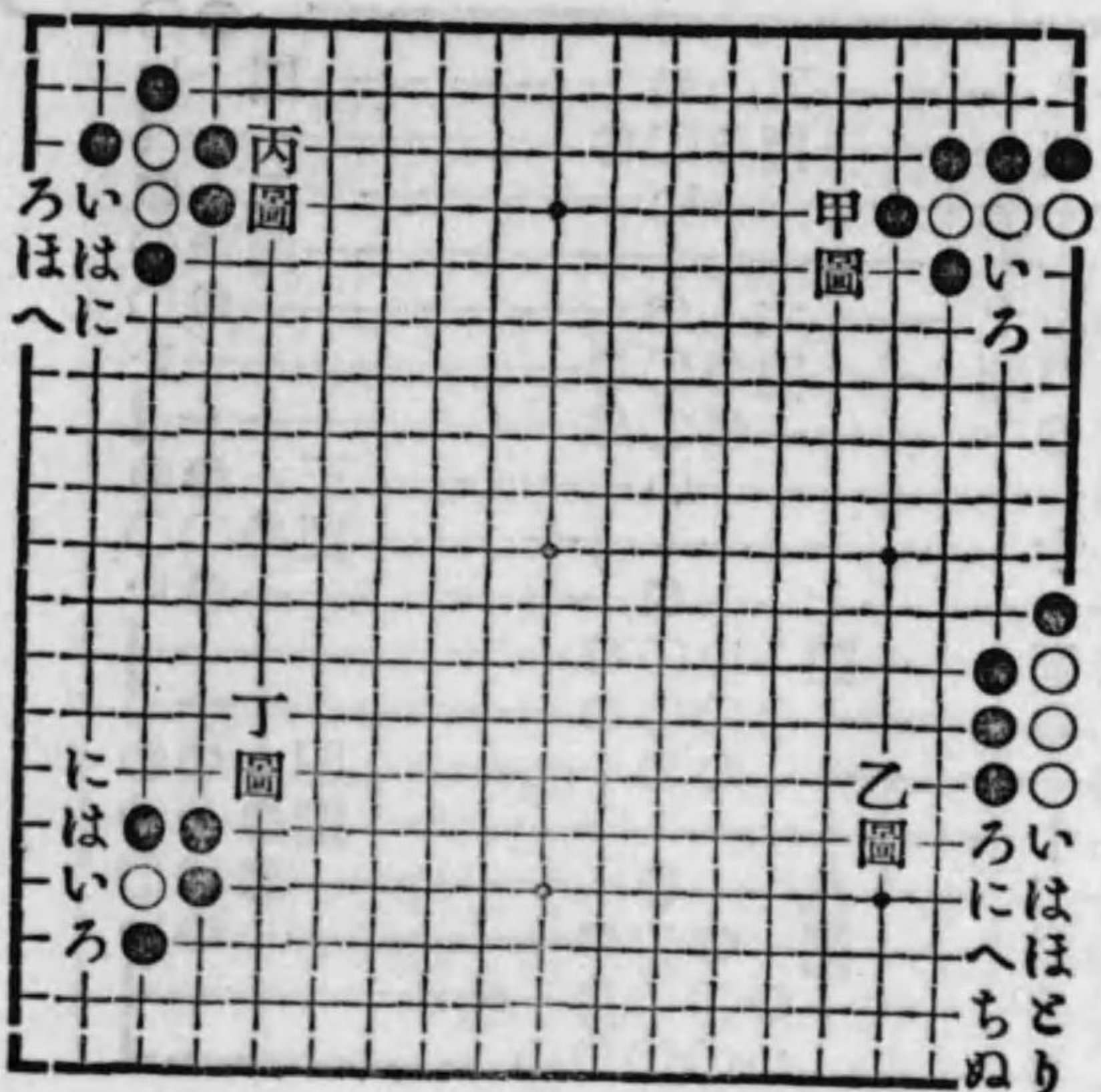
●提る手の研究

提るとは敵の石を包圍して最後の一手
 で敵の石を磐から取り除く手である
 下圖の第一圖から第十二圖は黒いの一
 手で提られる所を示したのである



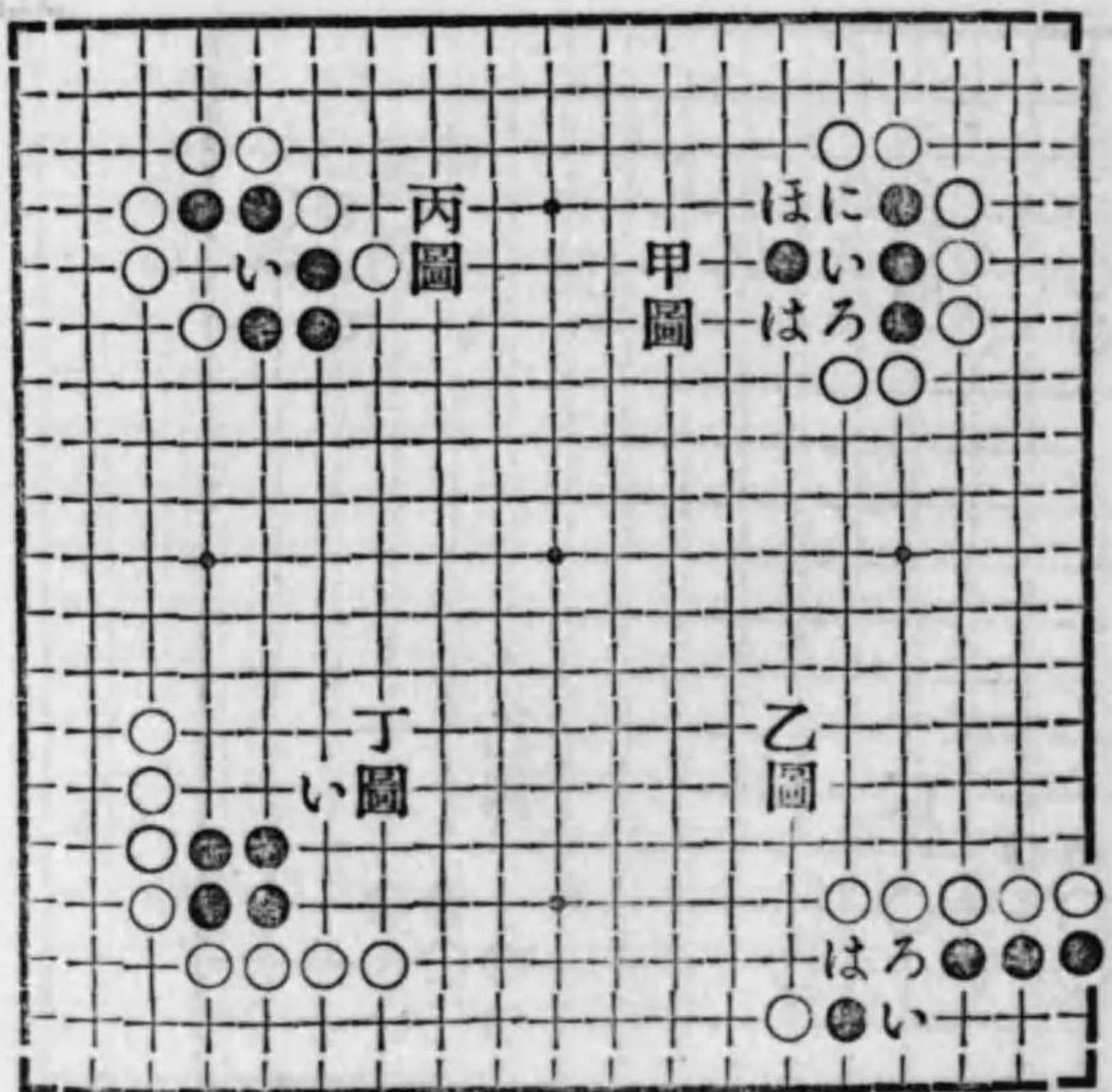
● 提る手の研究

甲圖の如き形は白は決して逃げる事は出来
 ない即ち必ず捉られる白いと打つても
 黒ろと打つて如何する事も出来ない
 乙圖の如き形も白はいくら逃げてても逃
 げる事は出来ない白い黒ろ白は黒に白は黒
 へ白と黒ち白り黒ぬで捉られる
 丙圖の如き形も白は逃げてても取られる白
 い黒ろ白は黒に白は黒へで取られる
 丁圖の如き形も取られる白い黒ろ白は黒
 にの手順で白は逃げる事は出来ない
 註逃げる事の出来ないと云ふ意味は圍
 碁の終りにどうしても捉られると云
 ふ事である



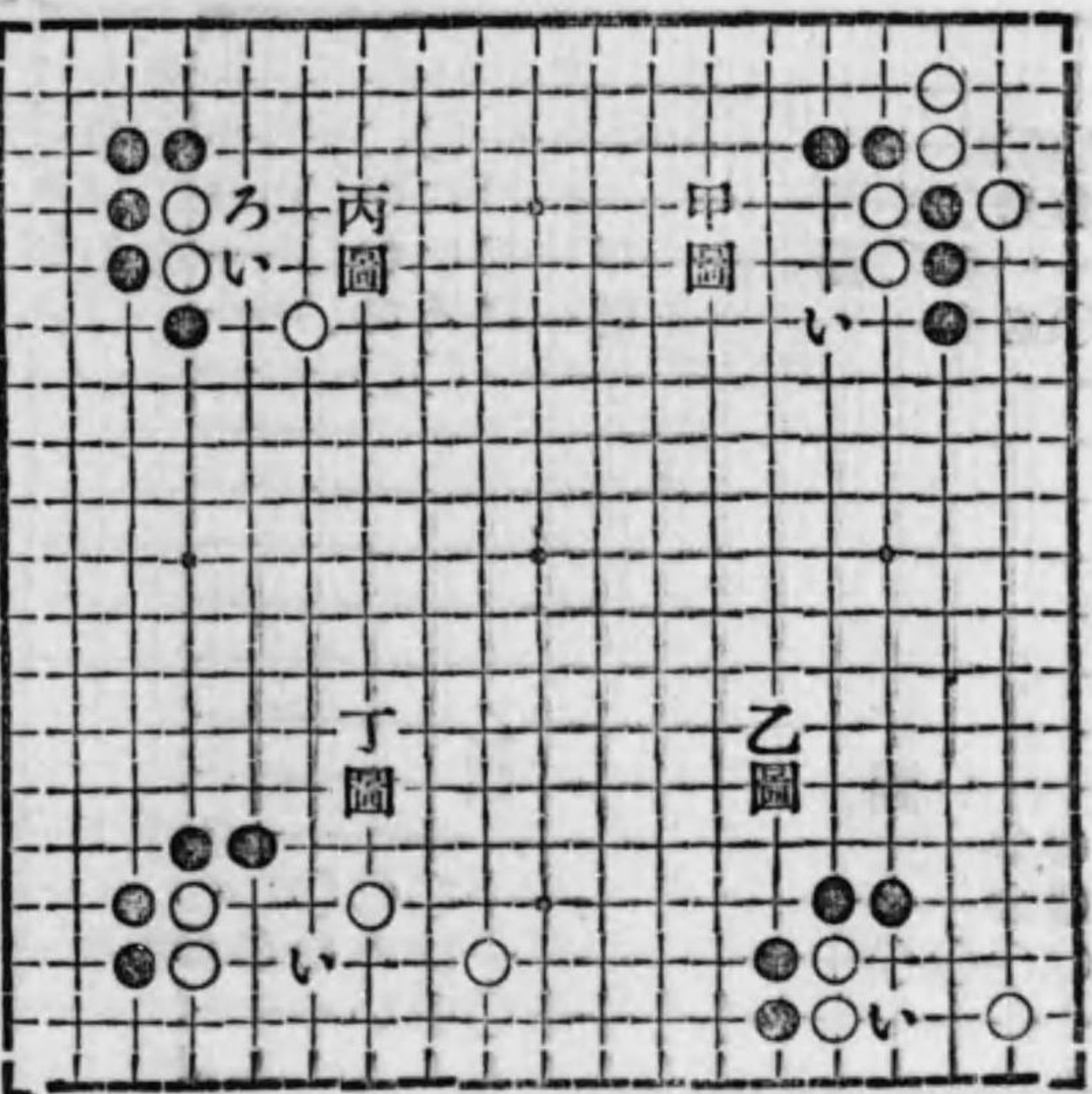
● 提る手の研究

甲圖白はいと打つのである此時黒ろ白
 は黒に白ほとなつて捉れるのである
 乙圖こんな時はいと白が打つがよい黒
 がろと打つても白はと打ち黒は逃げら
 れぬ丙圖白はいと打つのである黒は逃
 げる事が出来ない
 丁圖こんな形の時は白いと打てば黒は
 逃げる事は出来ない黒の四目はどうし
 ても捉られる



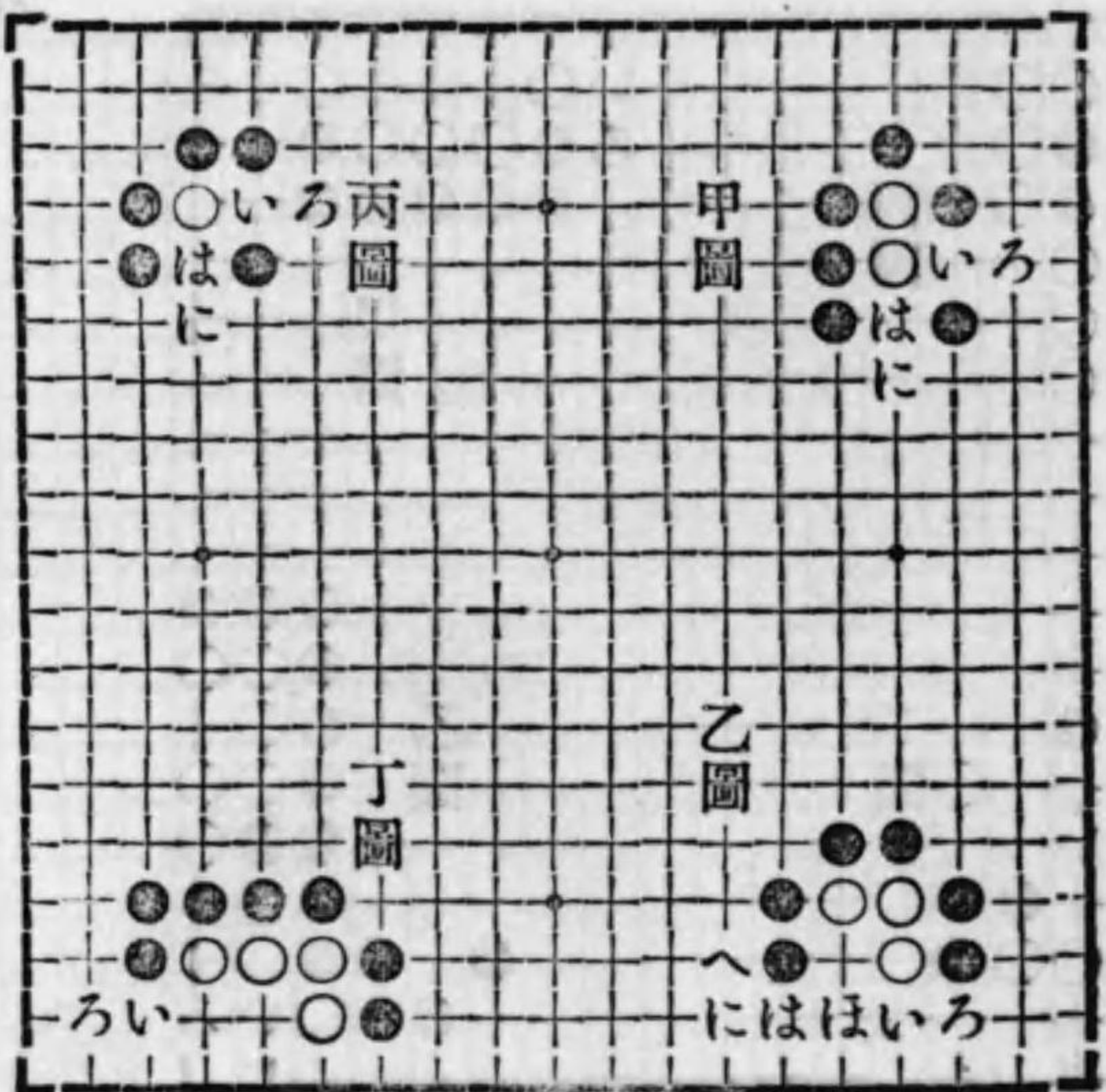
◎ 提る手の研究

甲圖の如き形は黒いと打てば白二目逃げる事は出来ない
 乙圖の如き形の時黒いといが打てば白二目提られる
 丙圖の如き形の時黒いと打てば白二目は逃げてても征になるから打つてはいけない
 丁圖の如き形は黒いのに打てばよい白の二目が提る事が出来る



◎ 提る手の研究

甲圖の如き白黒ろ白は黒にの手順で捉られる
 乙圖の如き白黒ろ白は黒に白は黒への手順で逃げる事は出来ない
 丙圖の如き白黒ろ白は黒にの手順で捉られる
 丁圖も白黒ろと行つた所で逃げる事は出来ない

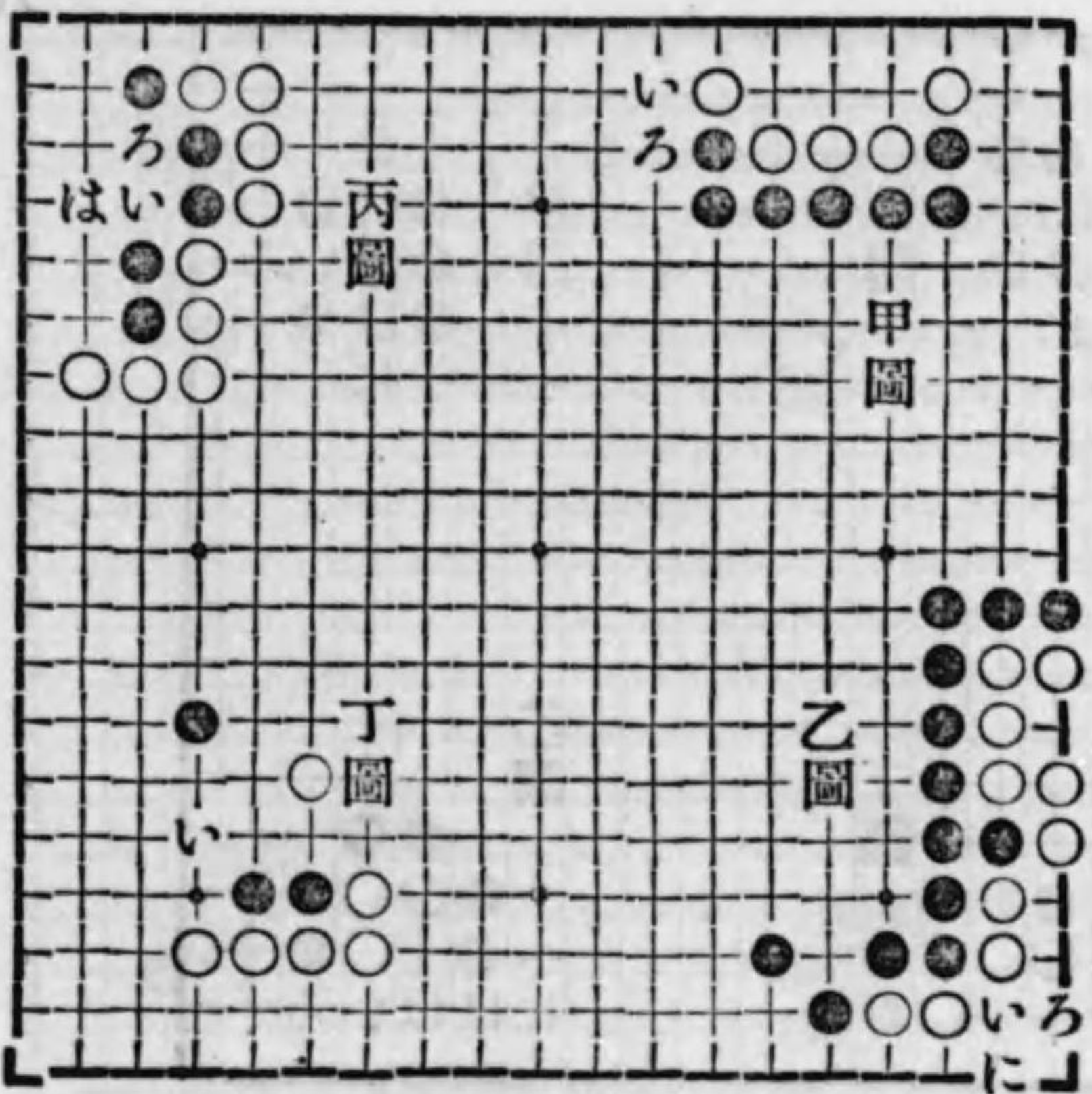


● 提る手の研究

甲圖の如きは黒いと打てば白は捉られる
もしろに打てば捉る事は出来るが面倒な
手順になる

乙圖黒はいと打てばよい白がろと打てば
黒にと伸び白がにと打てば黒ろと伸びる
のである白は全部捉られる

丙圖白がいと打てばよい黒ろと打てばは
と伸びるのである
丁圖白はいと打のである黒は逃げられぬ

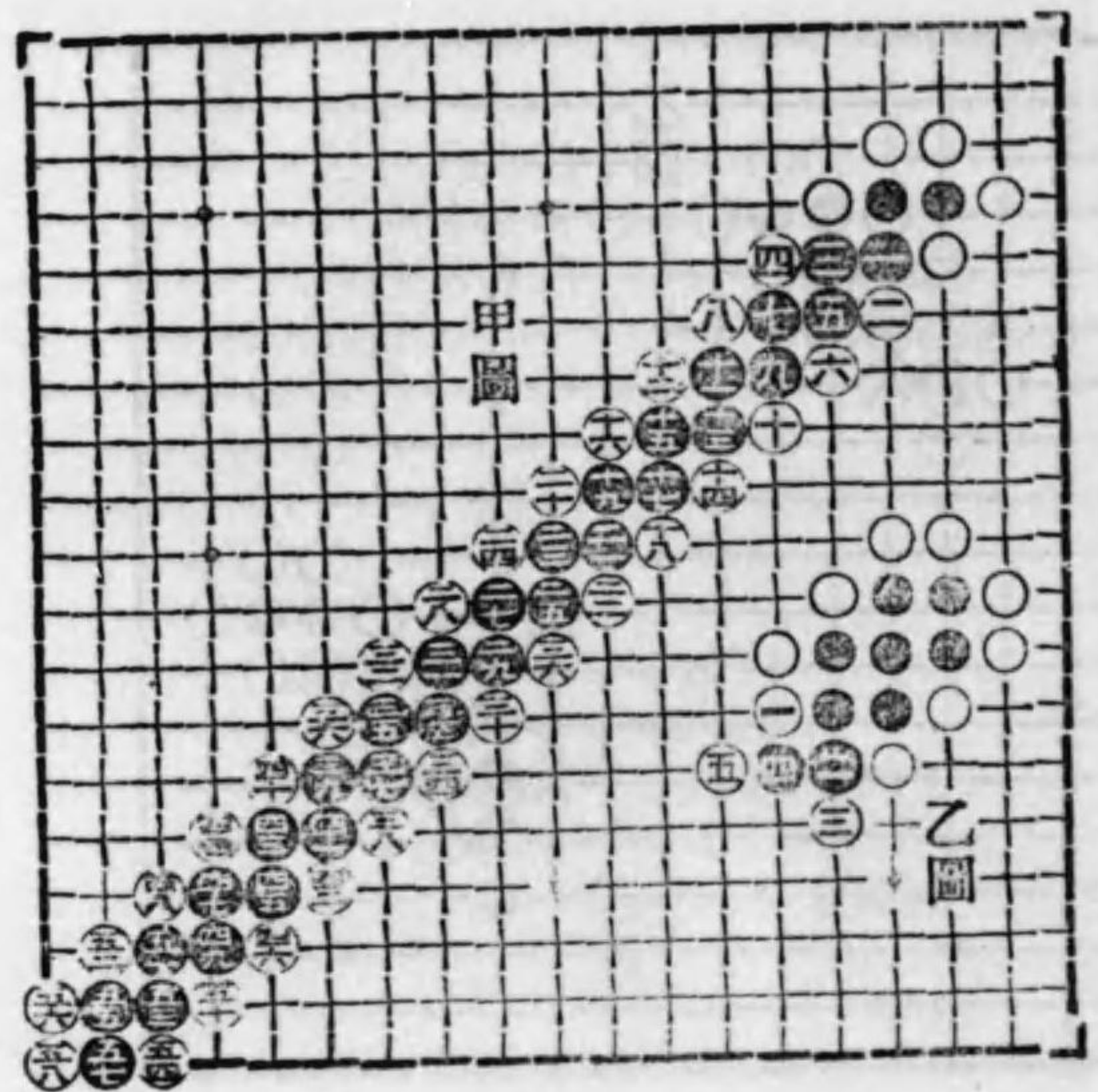


● 征の研究

征とは敵の石を圍んで捉る時隙間なく
追い詰め敵がいくらにげても間断なく追
ふ様にして遂に磐の端に到りて捉るを云
ふのである

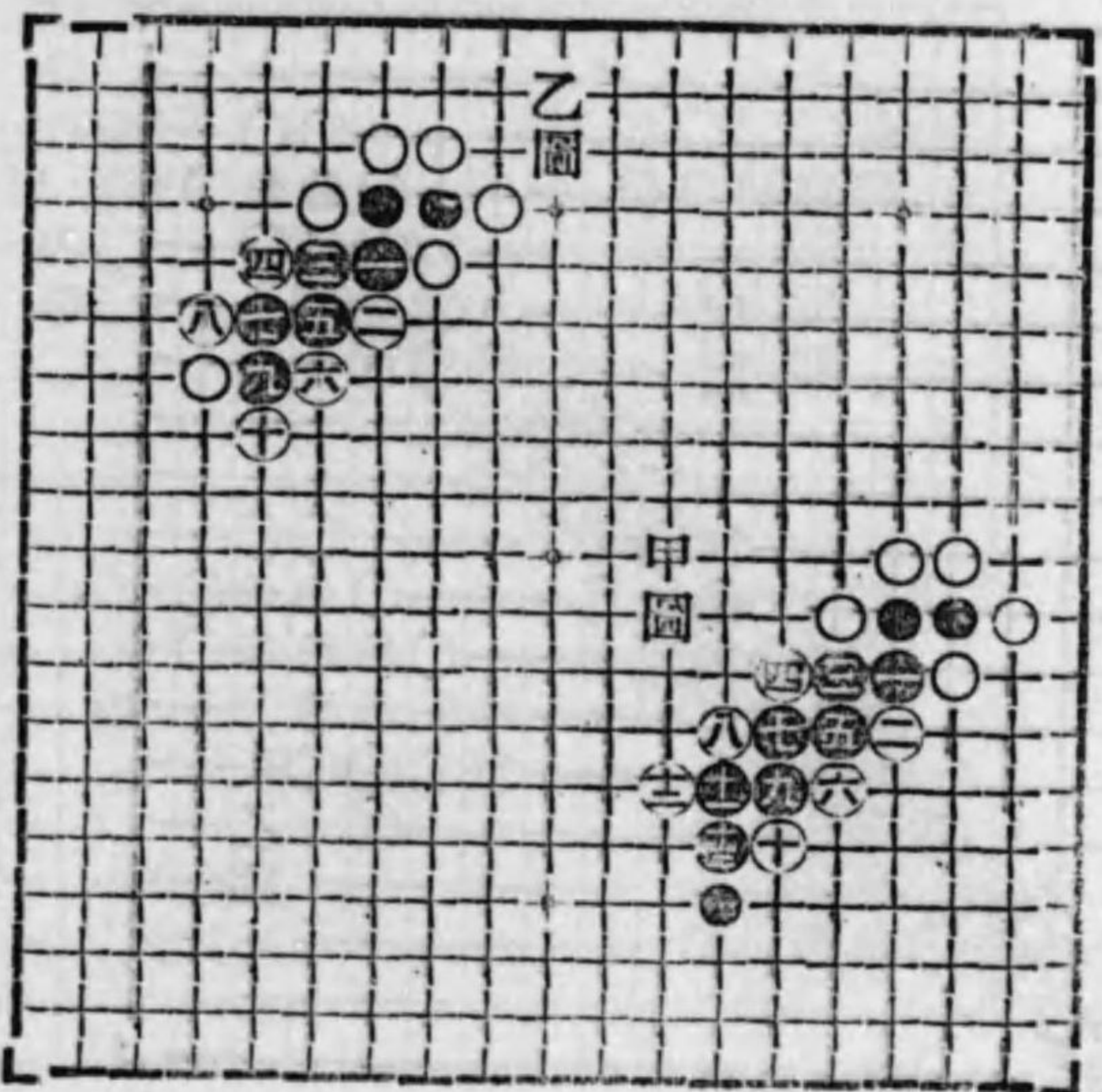
甲圖の如く始め黒の二目が逃げんとて一
と打つ白は直に二と打つて追ふ黒は又三
と逃げ白又四と追ふが遂に黒は磐の端に
到りて五七迄逃げたが白五八で捉られた
のである故に征は絶體に逃げる事が出来
ないのである

乙圖 参照



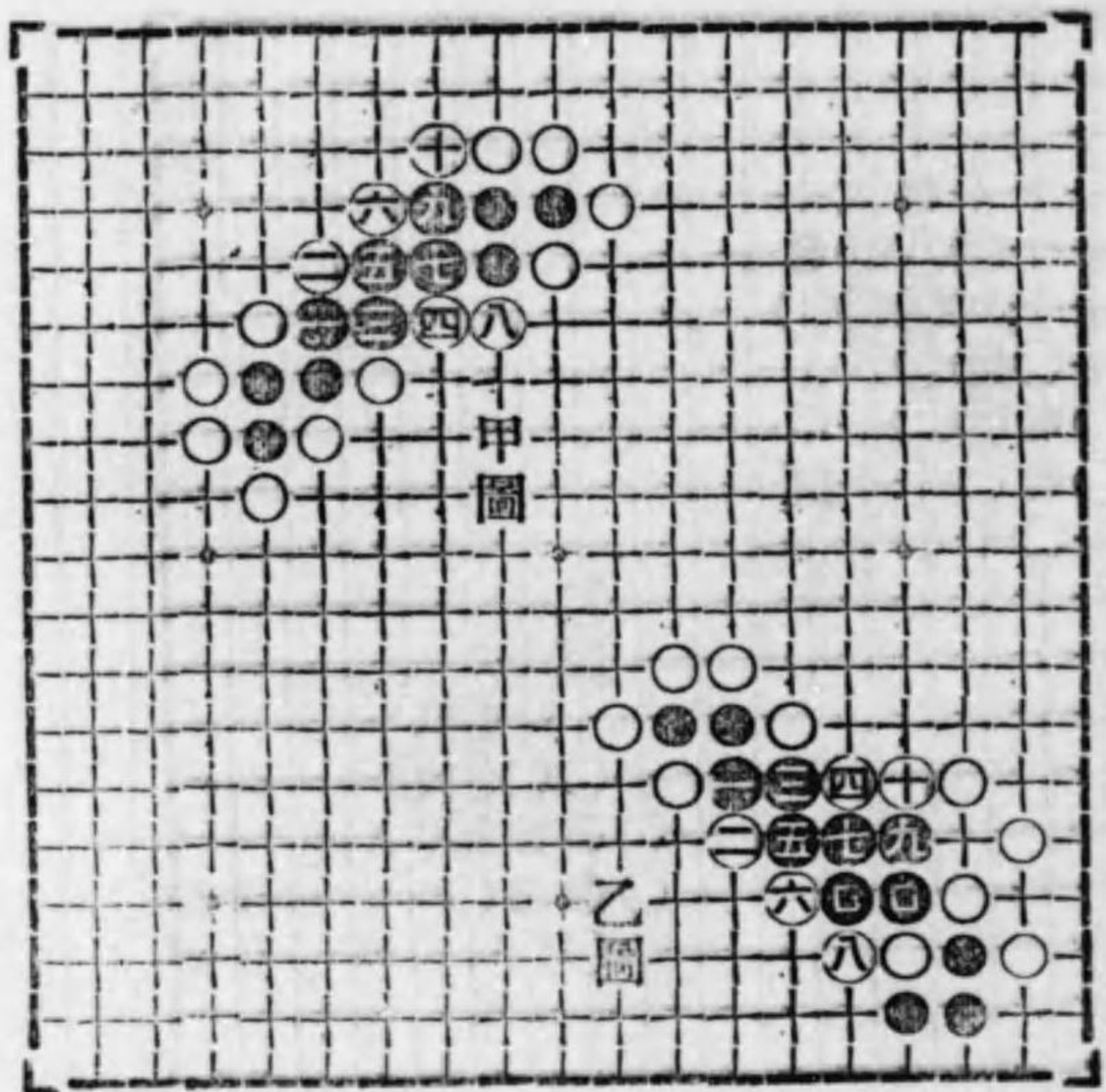
◎ 征の研究

征の時逃げる方の味方の石が征の通路に當つてある時は脱がれて助かる甲圖の如く白が十二の時黒は十三と打つて其通路にある黒と繼がつて助かる又通路に敵の石がある時は勿論助かる事は出来ない乙圖の如く黒九の時白十で捉られる故に敵の石が通路にある時は普通の征と同じである征の時は其通路に味方があれば逃げてよいがさもなくば逃げてはならぬのである



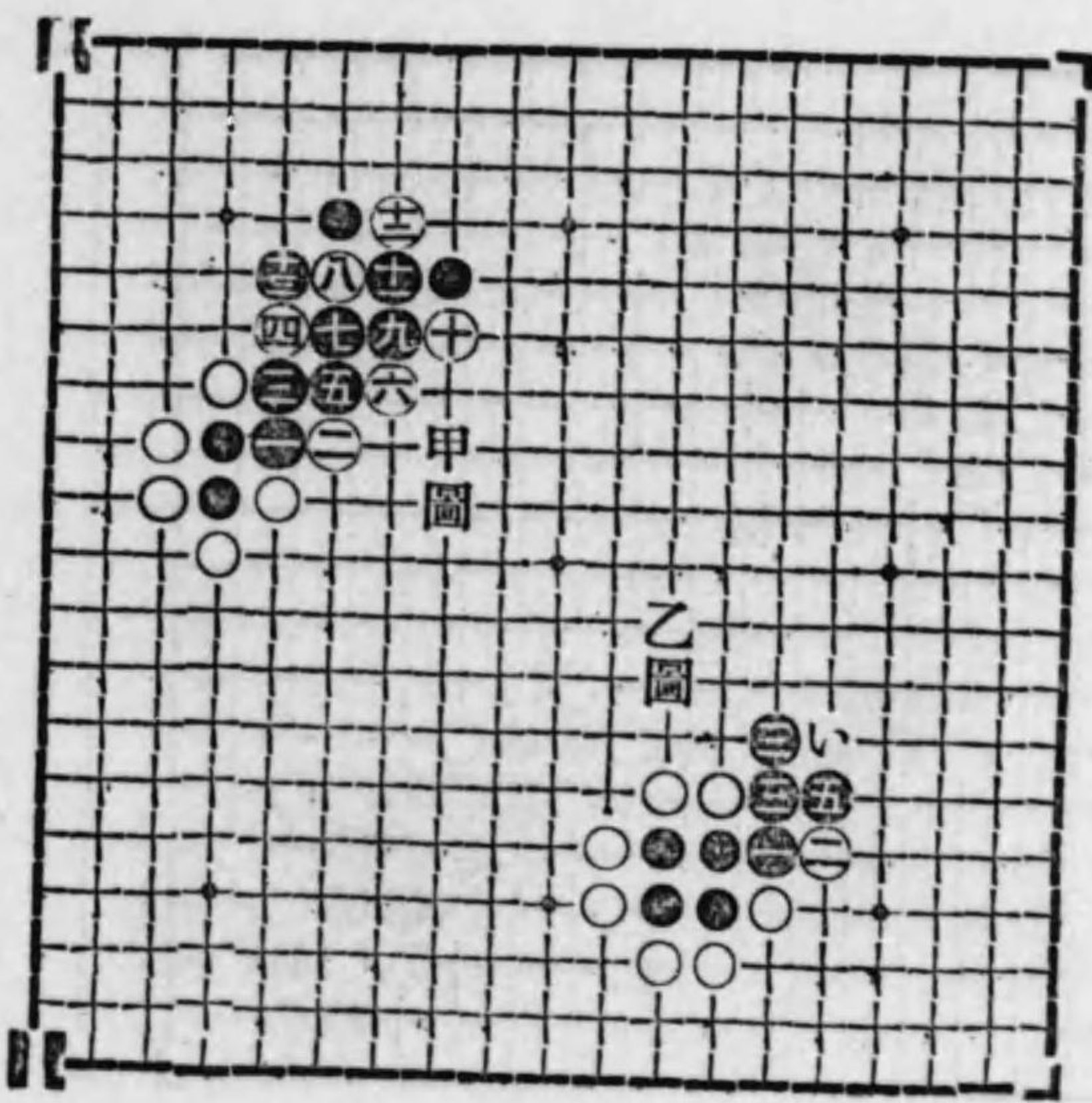
◎ 征の研究

甲圖の如き形は黒逃られる様に思はれるが黒一と逃げ白二と追い三以下七の手順を運んで漸く味方の石に繼がれたかと思へば直に白に八と打たれ九と打つたところ白に十と全部捉られてしまうかくの如き形は注意すべきである
乙圖の二目の黒は一見逃げて○の味方の黒に繼がりそうだが一以下十迄の手順を運んで圖の如き結果になる下の○印で圍んで居つた白の一目迄復活して味方は全部捉られる注意すべきである



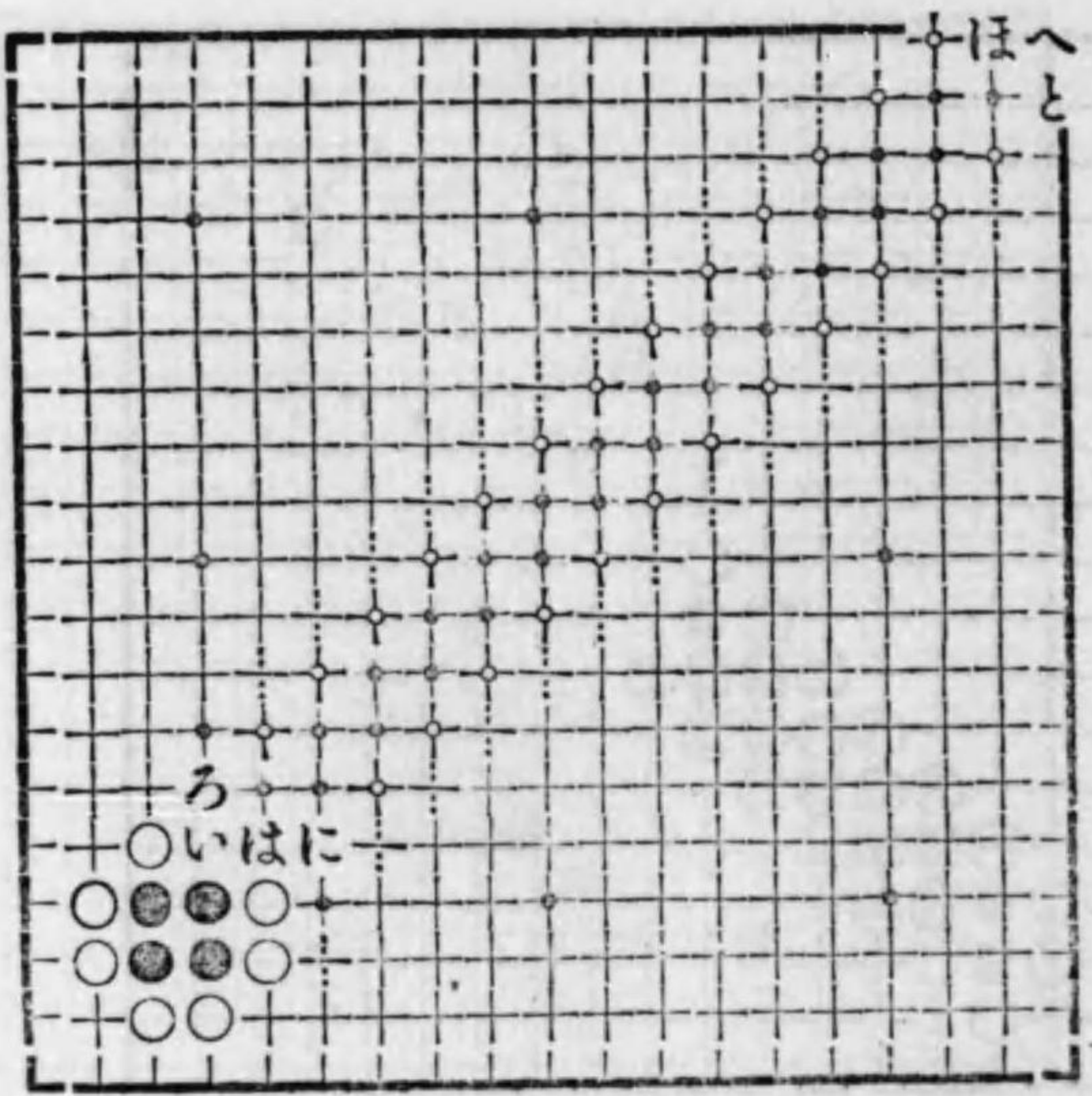
● 征の研究

甲圖に於て黒の二目は征の形になつたが
 扱て逃げて果して逃げ得られるか何如か
 前述の征の通路の見方によりて考へる
 といの味方の黒石が居るから逃げてもよ
 いのである即ち黒は一と逃げ白は二と追
 い三以下十一迄手順を運んで白が十二と
 来た時黒は十三と打つて白の八を捉つて
 助かる又ろに出てもよい乙圖に於ても一
 二三の手順を運んで白が四と来た時黒は
 五と打つて味方の黒石に繼つて助かる



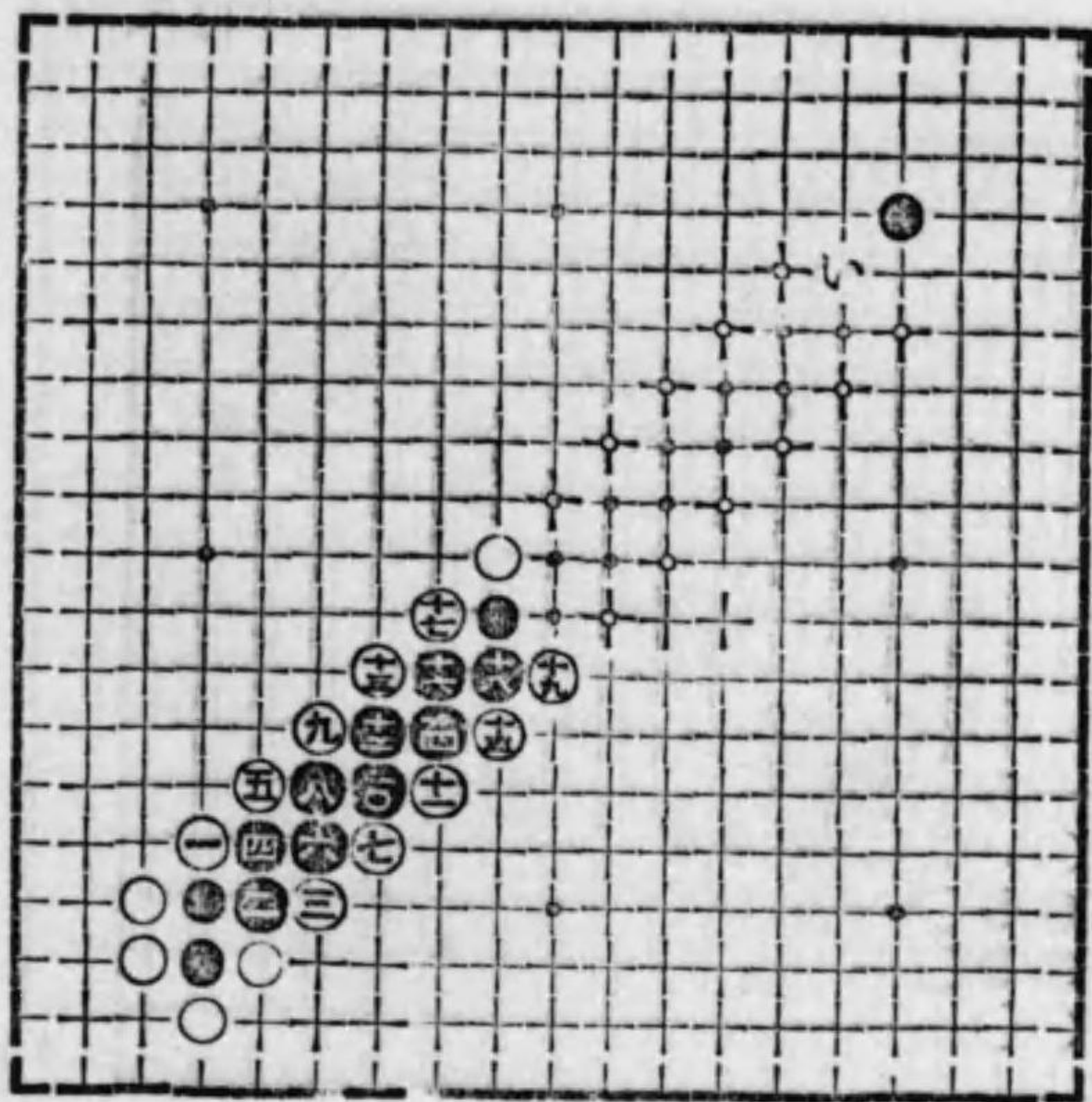
● 征の研究

征の通路の見方 圖の如き形に於て今
 黒がいと逃げ出し白がろと追ふ黒ははと
 逃げ白にと追ふ此際に黒のいの對頂角の
 路白のろの對頂角の路黒のはの對頂角の
 路白のいの對頂角の路を各貫ぬいて連絡
 し三線四線及び此四線に隣られる兩側の
 二線即ち六線内に味方の石があれば逃げ
 出してもよい但しほへの點即ち第一線
 にあるは何等功がない捉れるのである



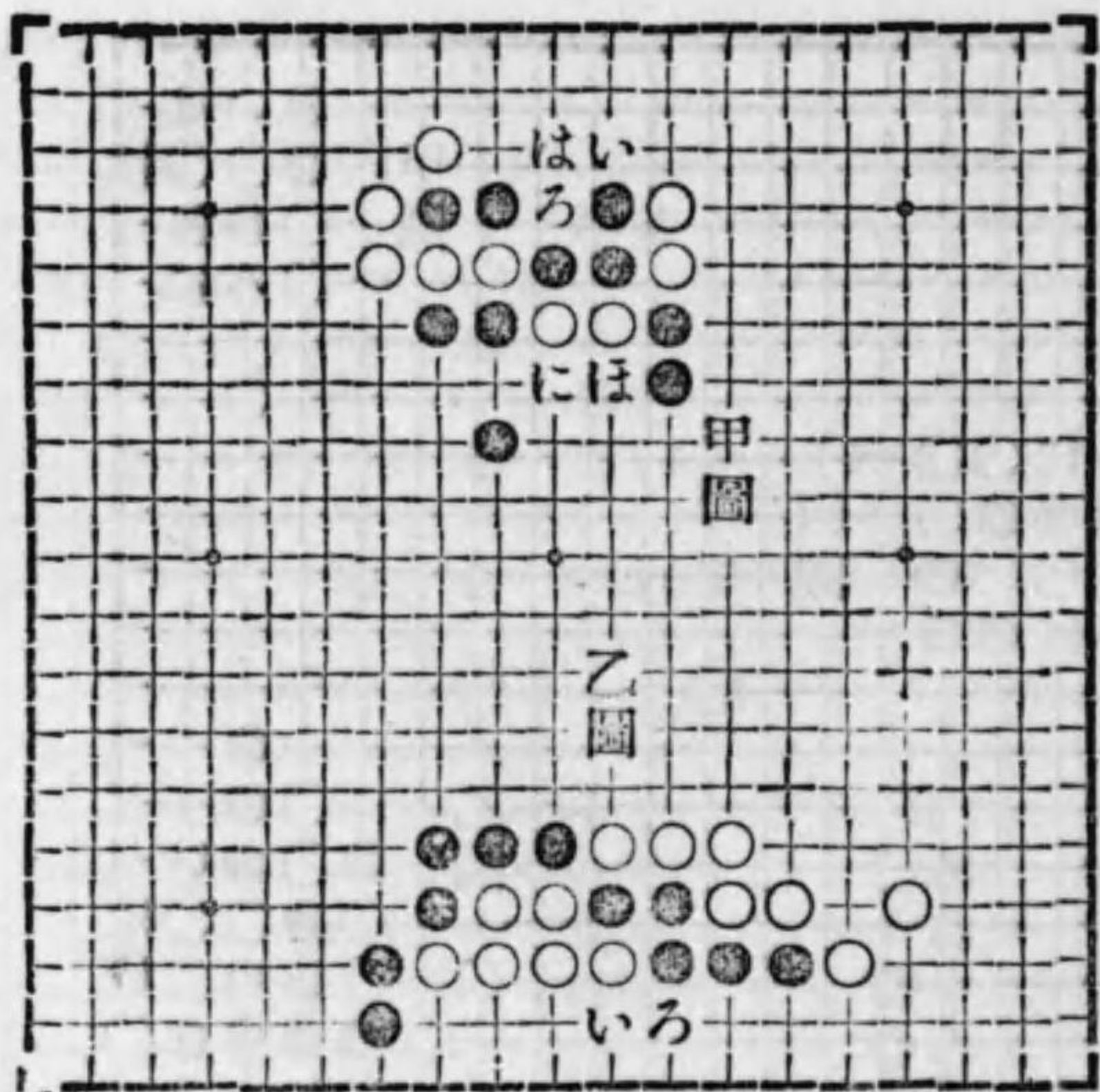
● 征の研究

逃げてはならぬ征味方の石が逃げる通路にあつても其側に敵の石があつて逃げていつて其處迄來ても敵味方の石が力が五分五分の爲め其から又征になる圖の如き形に於て黒が二と逃げ白が三と追ひ黒十八と打つて味方の石に繼がつたかと思へばすぐ白に十九と打たれ又征になる猶其逃路に當つて幸ひに味方の石があればよいが圖の如く敵の石がいの點にあれば逃げることは出来ない



● 攻合の研究

甲圖に於て白はいと打ち黒ろに粘ぐもはと打ち一手にて黒が提られる然し黒が先に打つ事になるとは白の二子を提る乙圖に於て白五目黒五目の攻合にて黒はいと先に打てば後三手にて勝ち若し白ろと打てば後二手に白の勝ちとある故にかゝる形に於ては先手の方が勝ちとなる

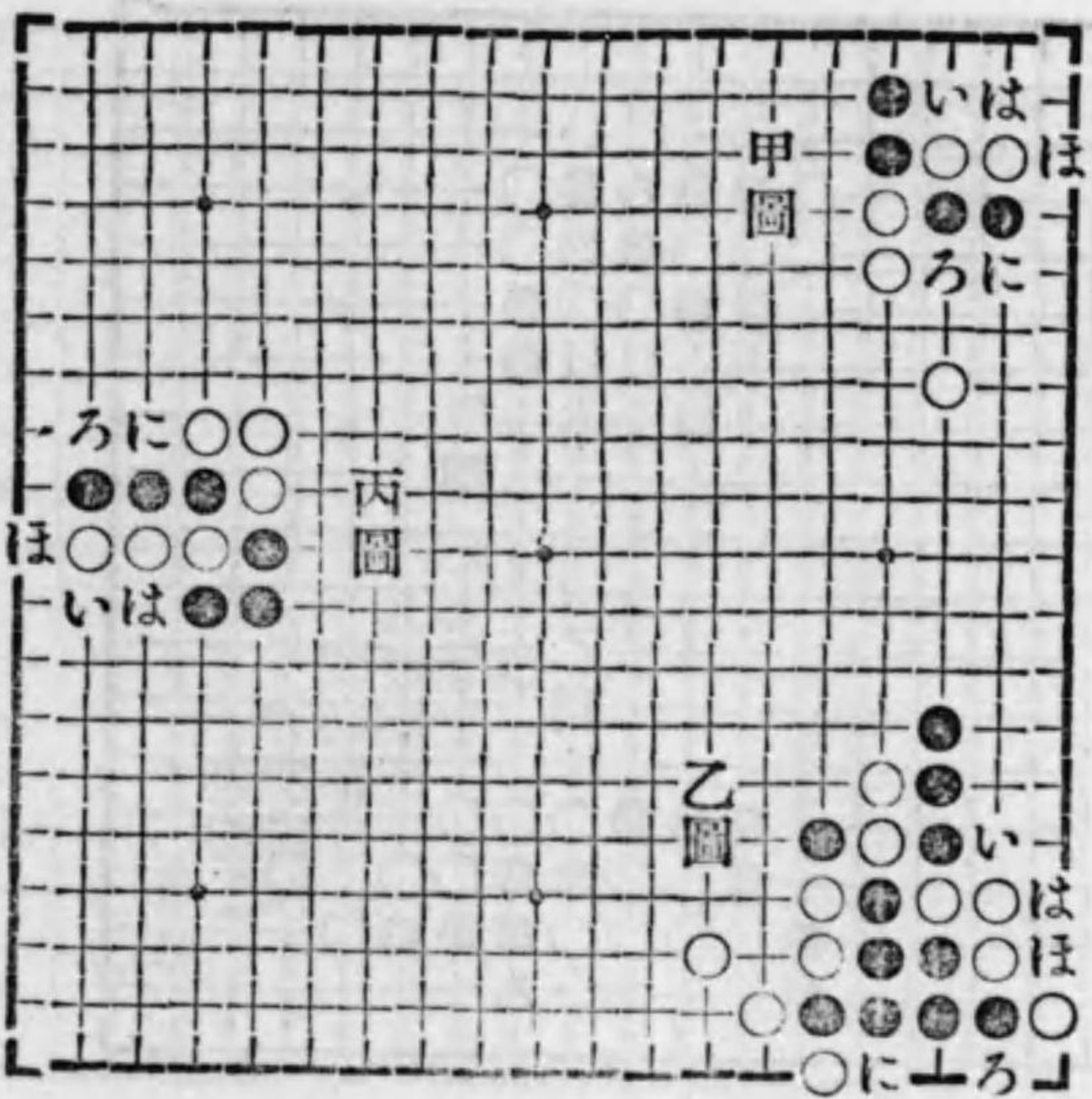


◎ 攻合の研究

攻合とは敵味方が互に石を包圍して捉らんとするものである。甲圖に於て黒いに打ち白ろ黒は白にの手順を運んで黒はほと遂に白の二目を捉つたのである。

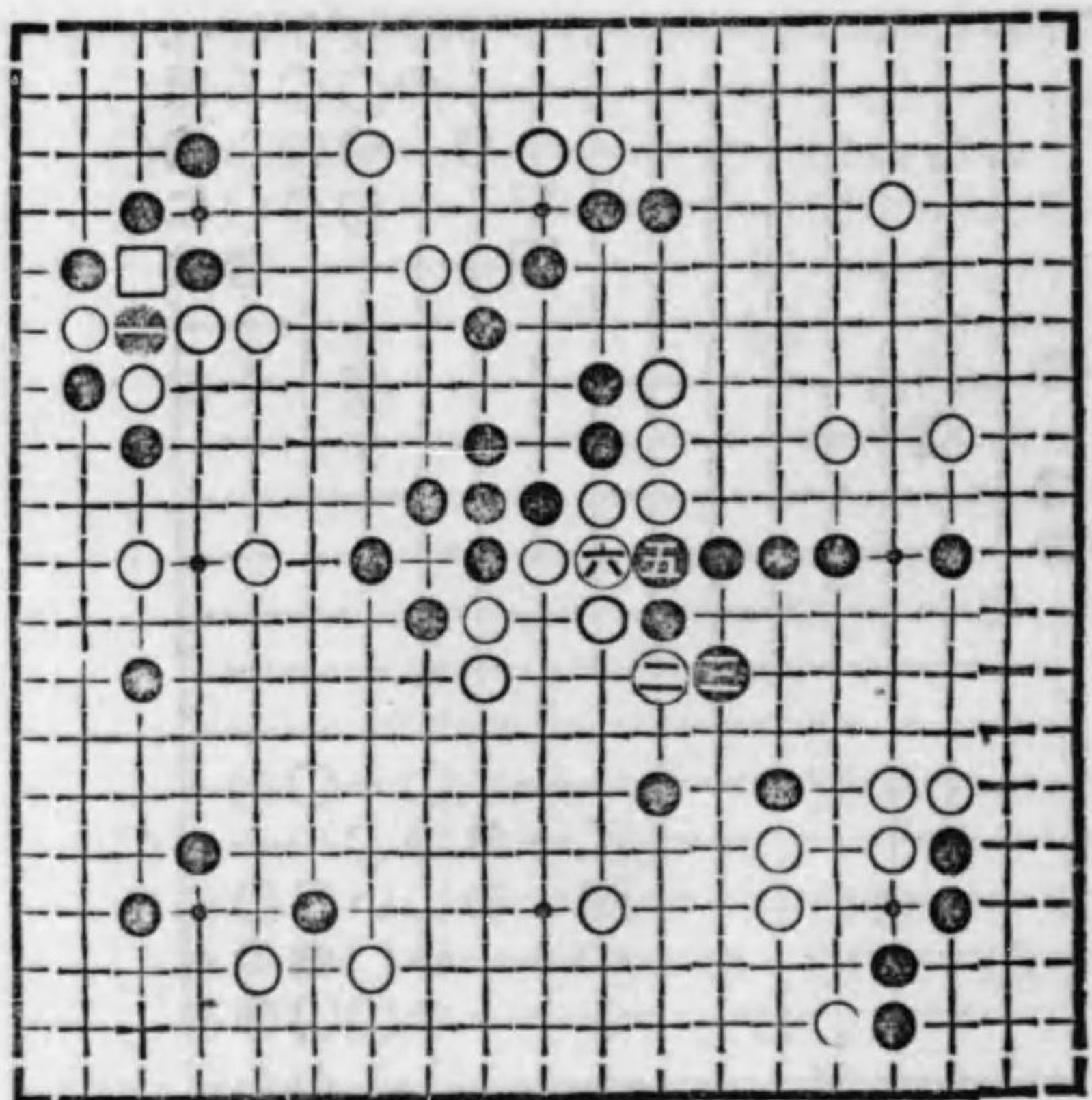
乙圖は黒い白ろ黒は白に黒ほにて黒の勝ちである。

丙圖は黒い白ろ黒は白に黒ほにて黒の勝ちである。



◎ 劫の研究

劫とは敵に味方の一目を捉られても直に捉り返す事が出来ない他の處へ一度打つて敵が其打つたのに對し受けたら其次に捉返すのである。圖に於て黒は一と白の□を捉つたが白は直に捉返す譯にはゆかぬから二に打つて黒の三に受けた時白は黒一を□に捉返す黒は又直に捉返す譯にゆかぬから五と打ち白が六に打つた時一に□を捉るのとかく交代に打つて後に到り又黒五の時白六にて黒一の處に粘ぐ事あり左すれば跡は兎に角劫だけは白勝ちの譯なり斯して打ち進むを劫争と云ふ。白四劫提る。黒七劫提る。

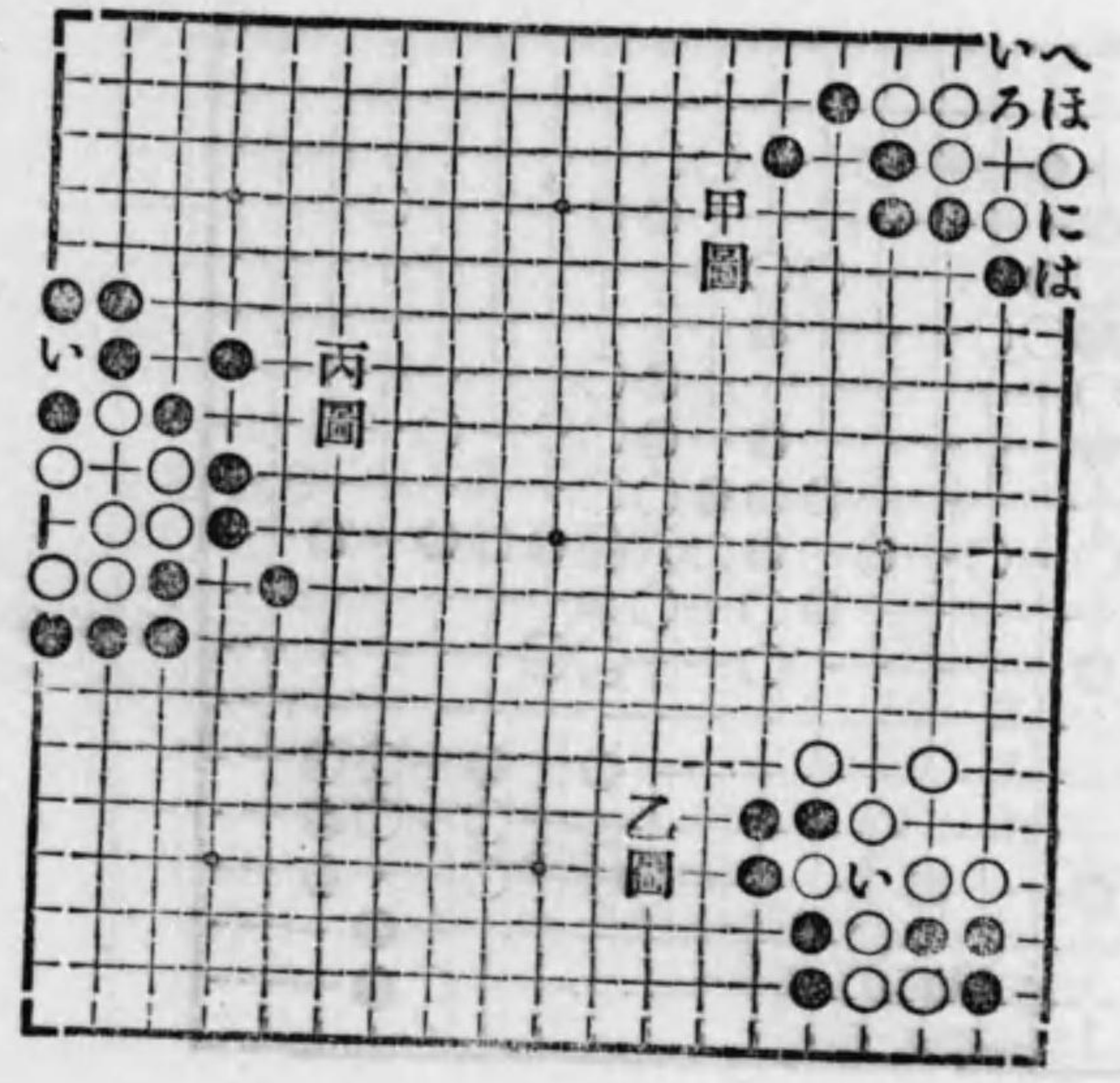


● 劫の研究

甲圖の如き形に於て黒はいと打ち白ろ
 黒は白に黒ほの手順の後白がへと提り
 へほの提りの争で劫になる

乙圖のいの點も黒が打てば劫争にな
 る

丙圖のいの點も白が提れば劫となる



● 盤の研究

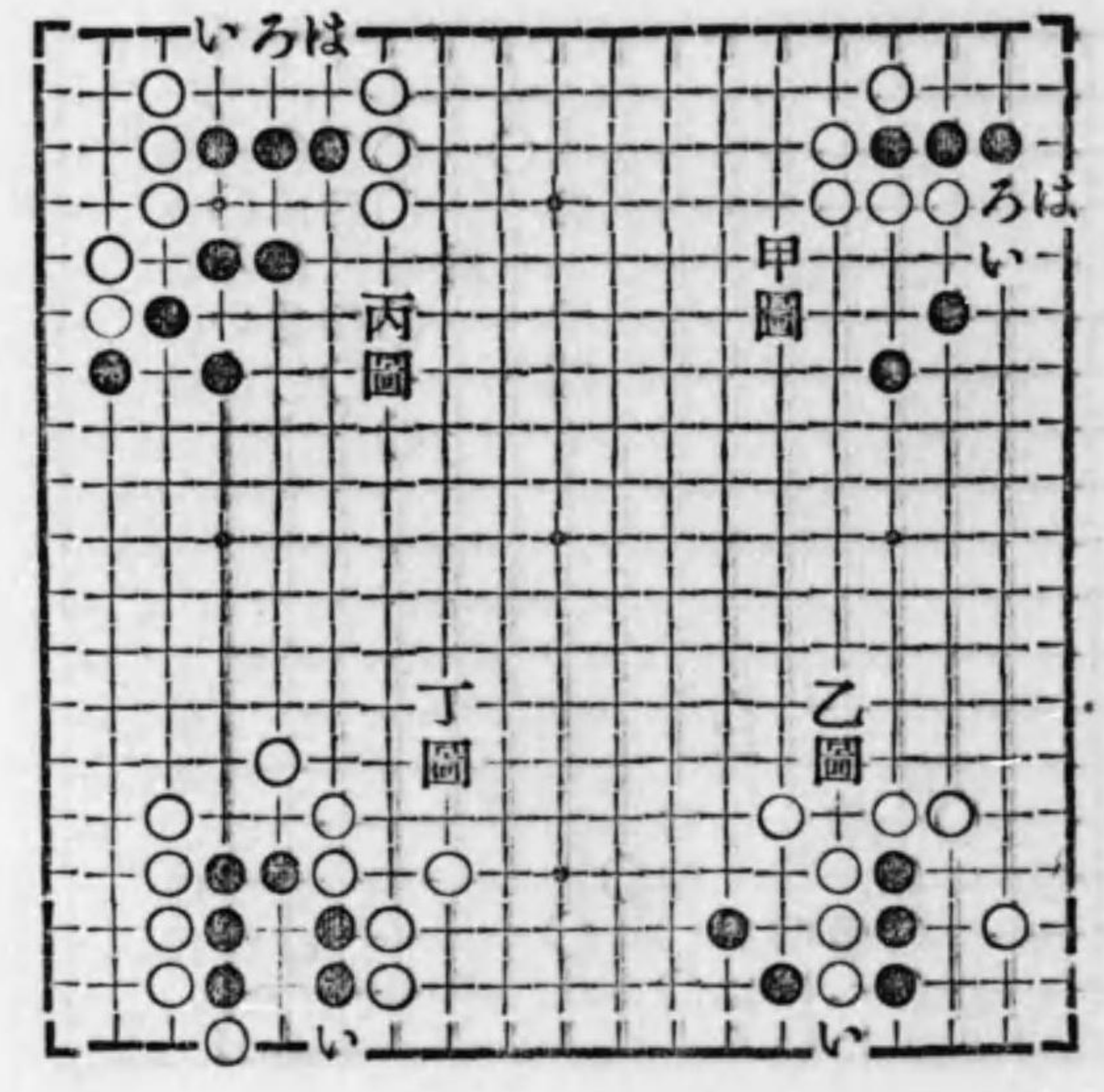
盤とは味方の石と味方の石を盤の端によ
 つた所で繼ぐのである甲圖に於ていと黒
 が打てば黒の三目と二目の石はいにより
 て盤つた事になる白にろと打たれてもは
 によりて繼ながる

乙圖のいも黒が盤つた所を示たのである

丙圖にて白はい若しくははと打てば盤れ

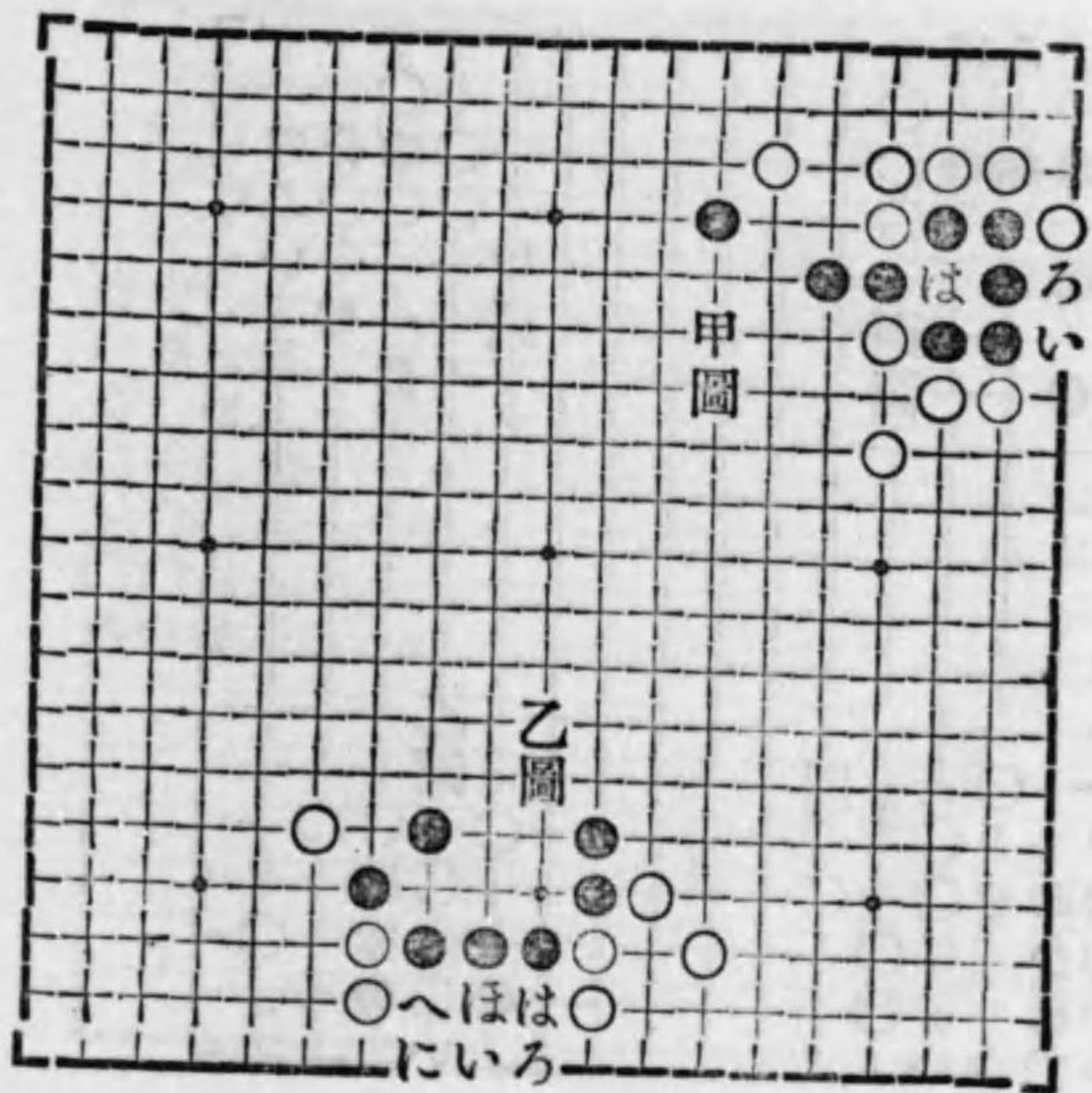
るろに打てば盤れない注意すべし

丁圖の白のいも盤の手である



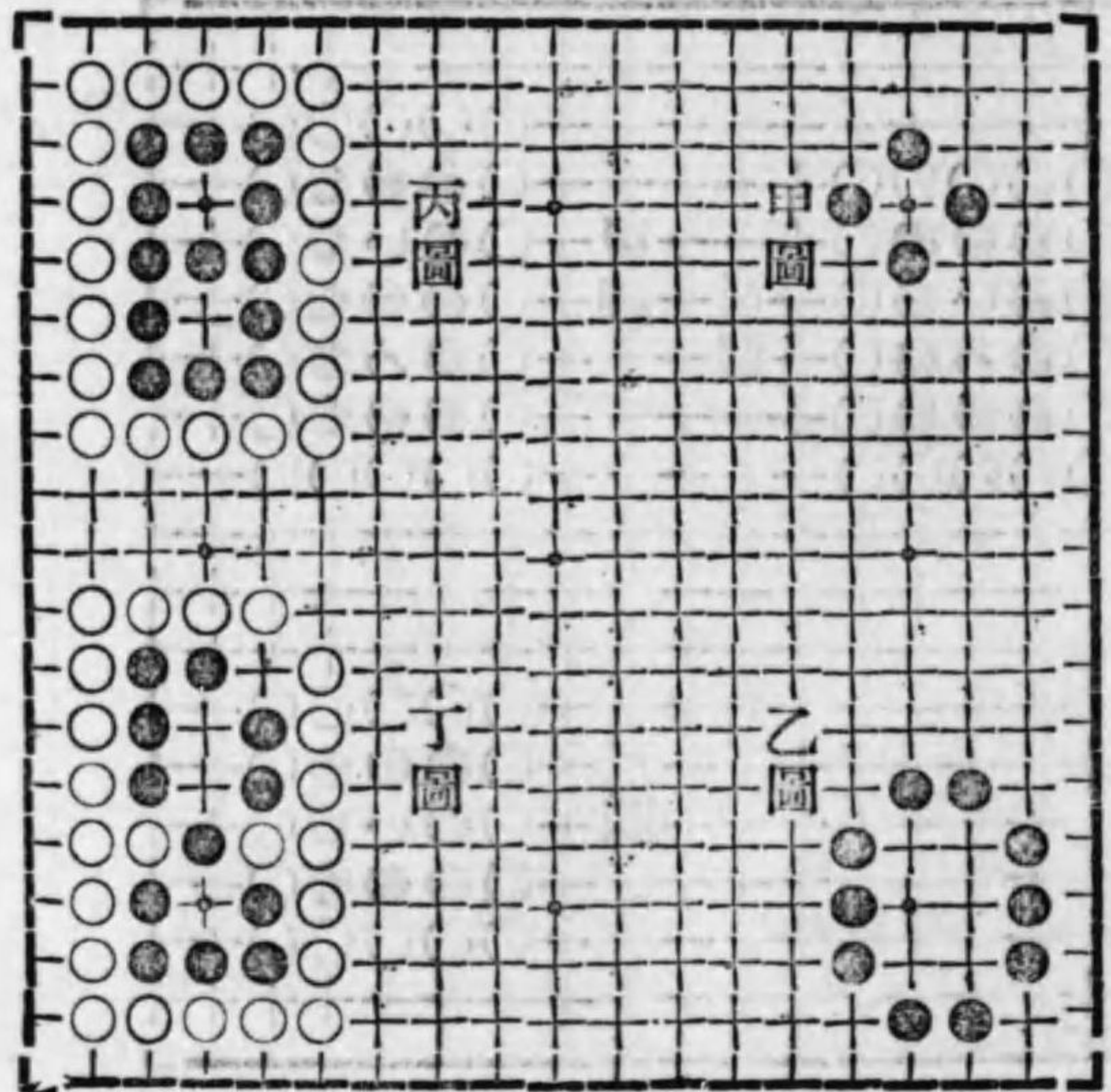
● 盤の研究

甲圖のいと白が打てば盤れるもし黒がろに打てば黒はと打ち白は提られるから黒は即ちろには打つ事は出来ぬ
乙圖にて若し白いに打てば黒ろ白は黒に白ほ黒ほの手順で盤れない故に白はろに打てば黒がいに来てほと打ち盤れる



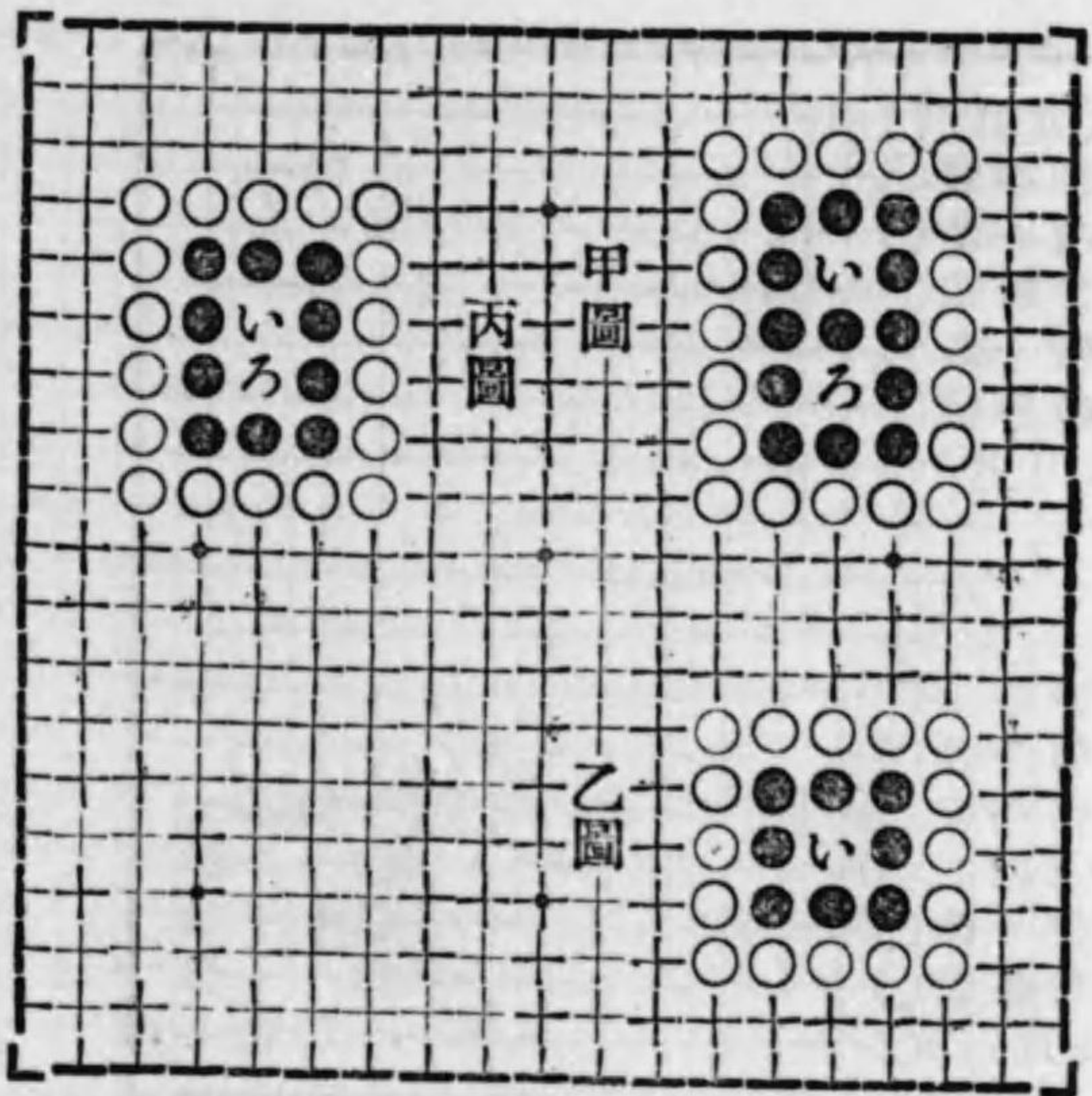
● 路、目、本目、缺目

路 碁盤上に縦横に各十九線を引き各線の交錯したる點を路と言ふのである
目とは石に圍われたる路を指すのである
甲圖は四つの石で包んだ目である而して目が擴大せられたものが地域である乙圖參照
本目 目が出来た場合其目を包む石に接觸した敵の石の位置によりて本目と缺目の二種がある
丙圖は本目の丁圖は缺目を示したのである故に本目とは目が二つ以上離れてゐる石の集合の形である
缺目とは目の形をして居るが目を圍む石の外擴の敵の石が目二ヶ所以上接して居れば缺目になるのである



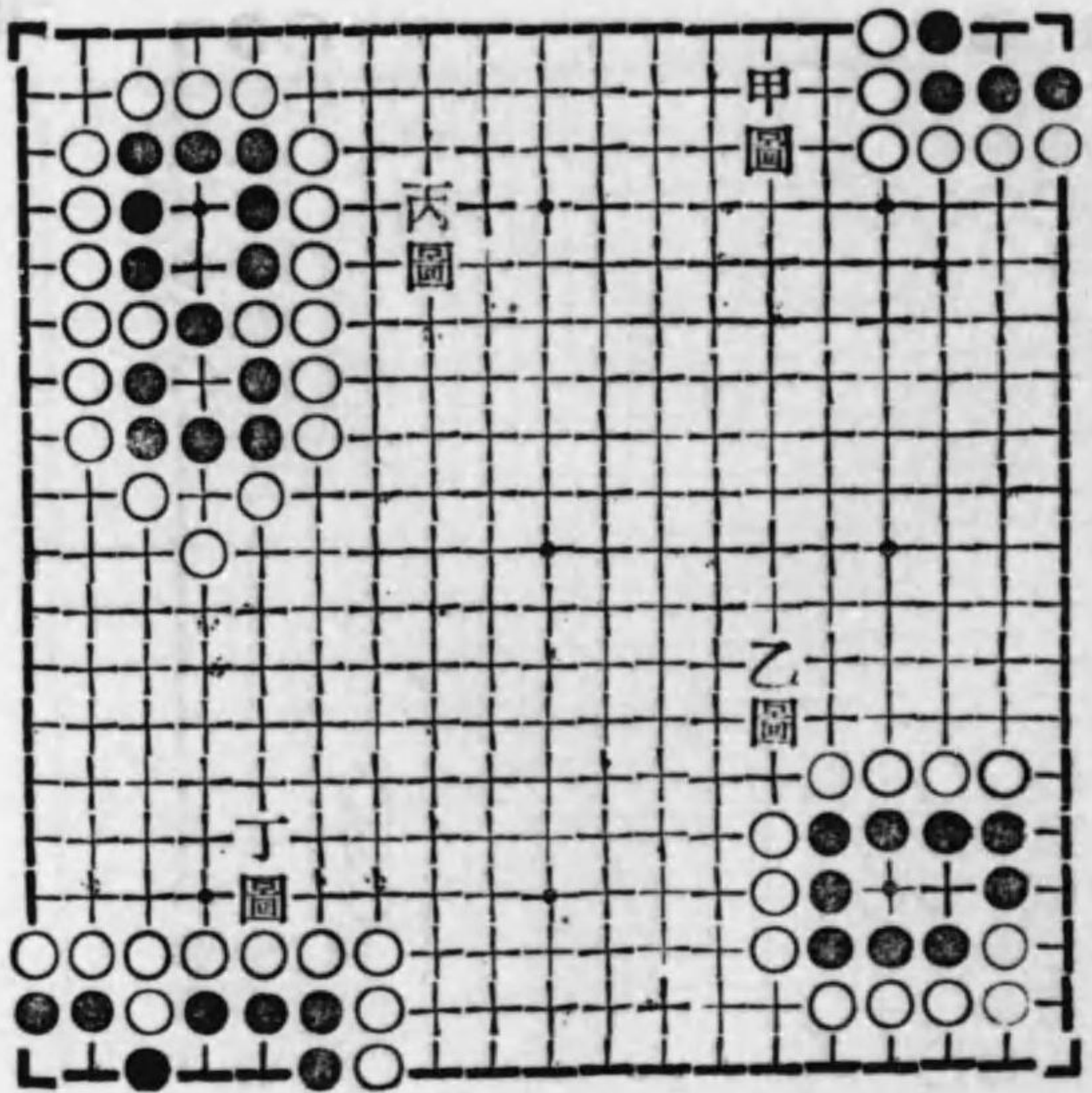
●活死研究

本目があれば活い云ひ本目がなければ死ぬとは一體如何なる意味かと云ふに圍碁の原則として二手一度に打つ事が出来なから甲圖の如き石の集合は如何にしても提る事は出来ない即ちいろの二つの目があるからである然るに乙圖に於ていは目であるが此黒の集合した石は白にいと打つて提られるから死ぬのである丙圖の形で黒は二目あるが離れてないから白にいろに點に打たれて提られて死ぬ故に活とは提られない石の集合で死とは終に提られる石の集合の事を云ふのである



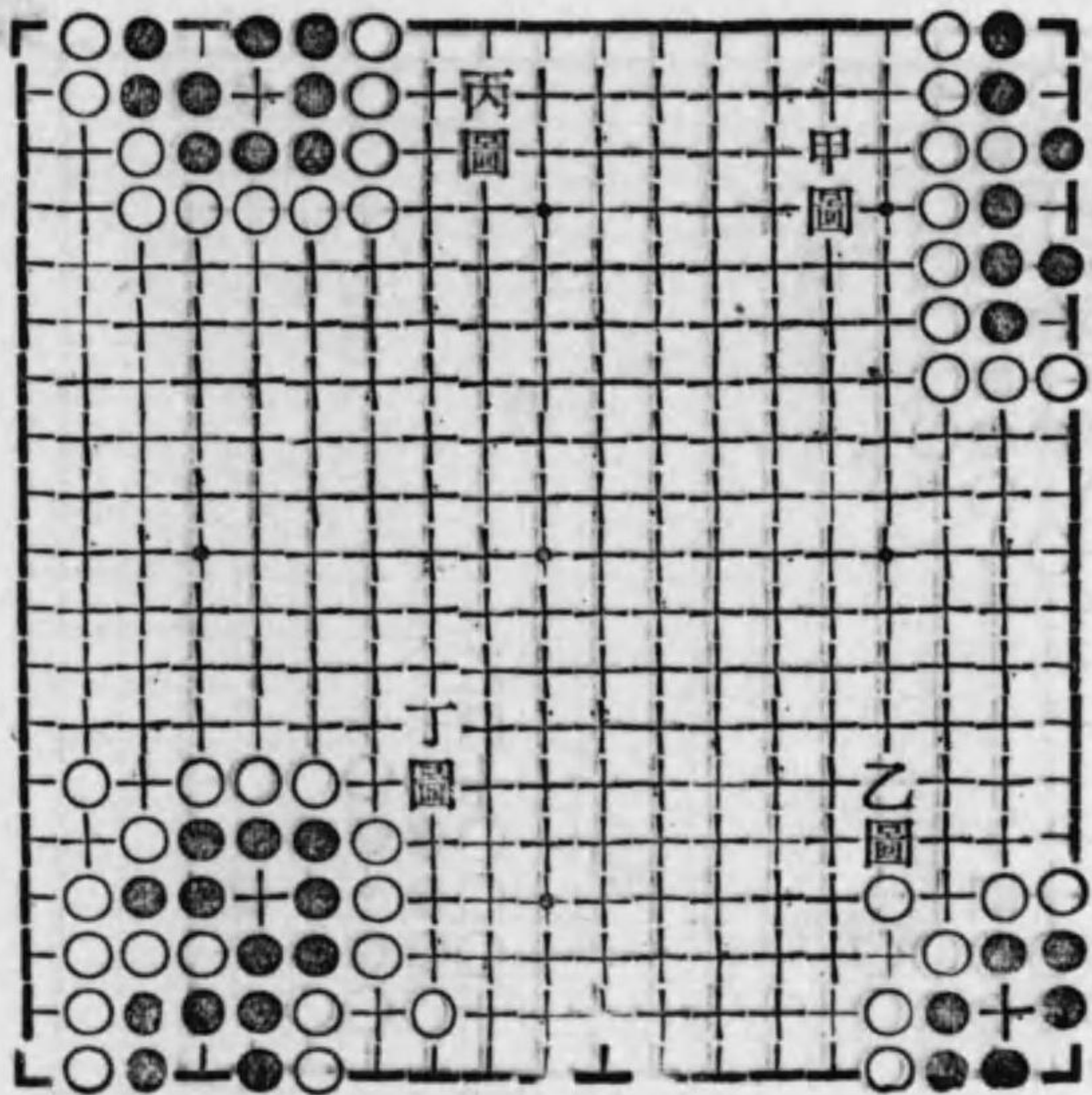
●活死の研究

死とは 味方の石が敵の石に包圍せられて目がなくなつた形である即ち二つ以上の本目がない形である甲丁丙丁は俱に簡單なる死石の形を示したのである
 甲乙兩圖は二つ以上の離れた目なき故死である
 丙丁兩圖は二つ以上離れて目はあるがそれは缺目であるから死になるのである



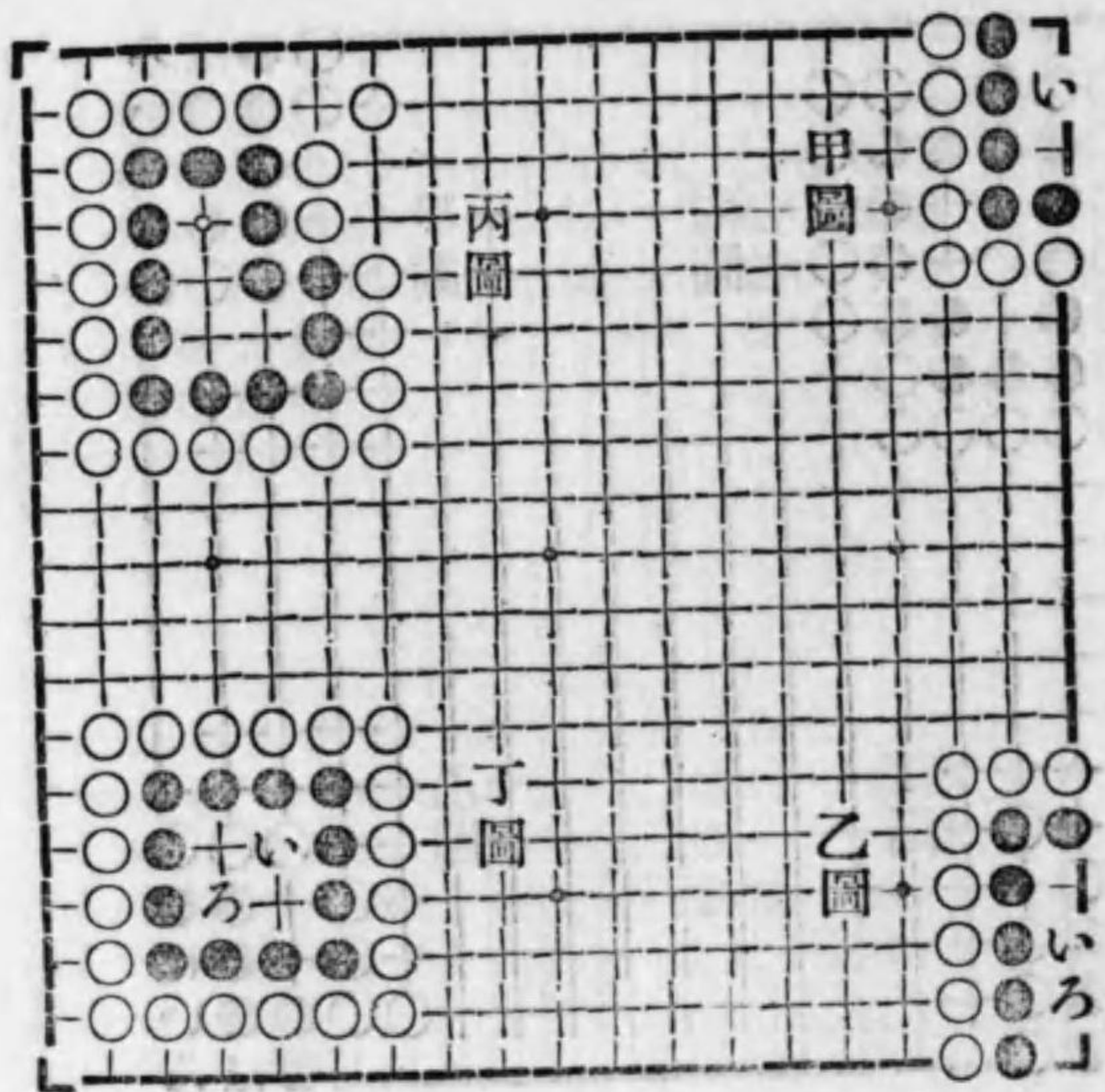
◎活死の研究

甲圖は黒が三つの路を圍んで其外廓を白が包んで居る而して白は其路に一ヶ所しか接して居ないから本目の様であるが實は缺目である盤の端に於ては一ヶ所接して居れば缺目になるのである
活 活とは本目が二つ以上離れてある石の集合である
乙丙丁圖ともに活の形の簡單なるものを示したのである



◎活死の研究

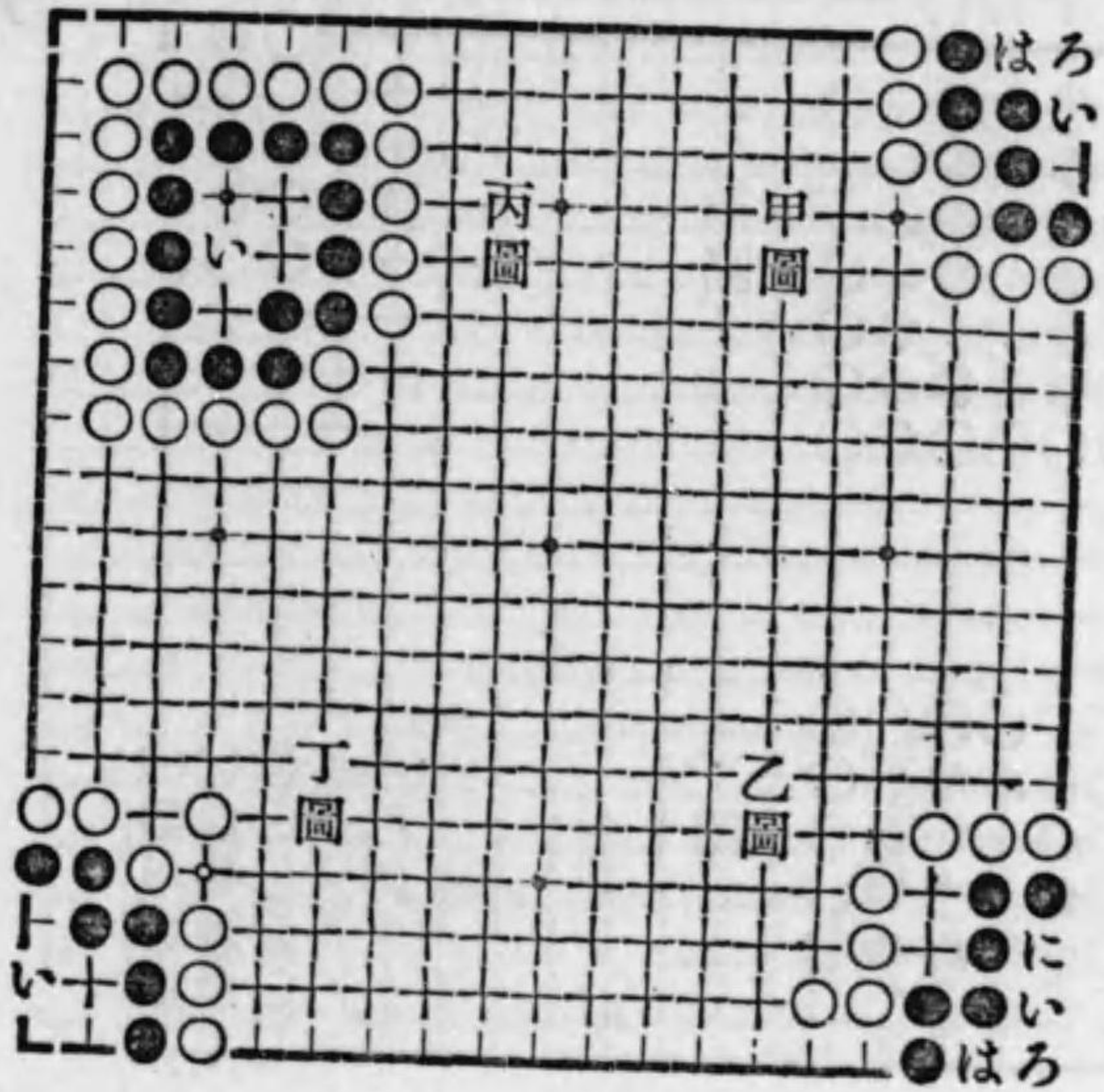
甲圖に於て白が先手でいの點に打つと黒は死ぬ然し黒が先手にいの點に打てば活になる
乙圖に於ては黒は活である白がいと打てばろと打ちろと打てばいと打ち活である故に目が連続して四つ以上あれば活である
丙圖の如きも「曲り四目」と稱して活である
丁圖の如き四目は死である黒が先手でいと打てばとて白にろと打たれて死ぬのである



●活死の研究

甲圖の如く隅の曲り四目は劫になるのである白にいと打たれ黒はろと打ち白ははと提り劫が始まるのである然し乙圖の様に碁碁の白の石が二目以上すいて居たら白黒ろ白はの手順の後黒はにと打つて活になる

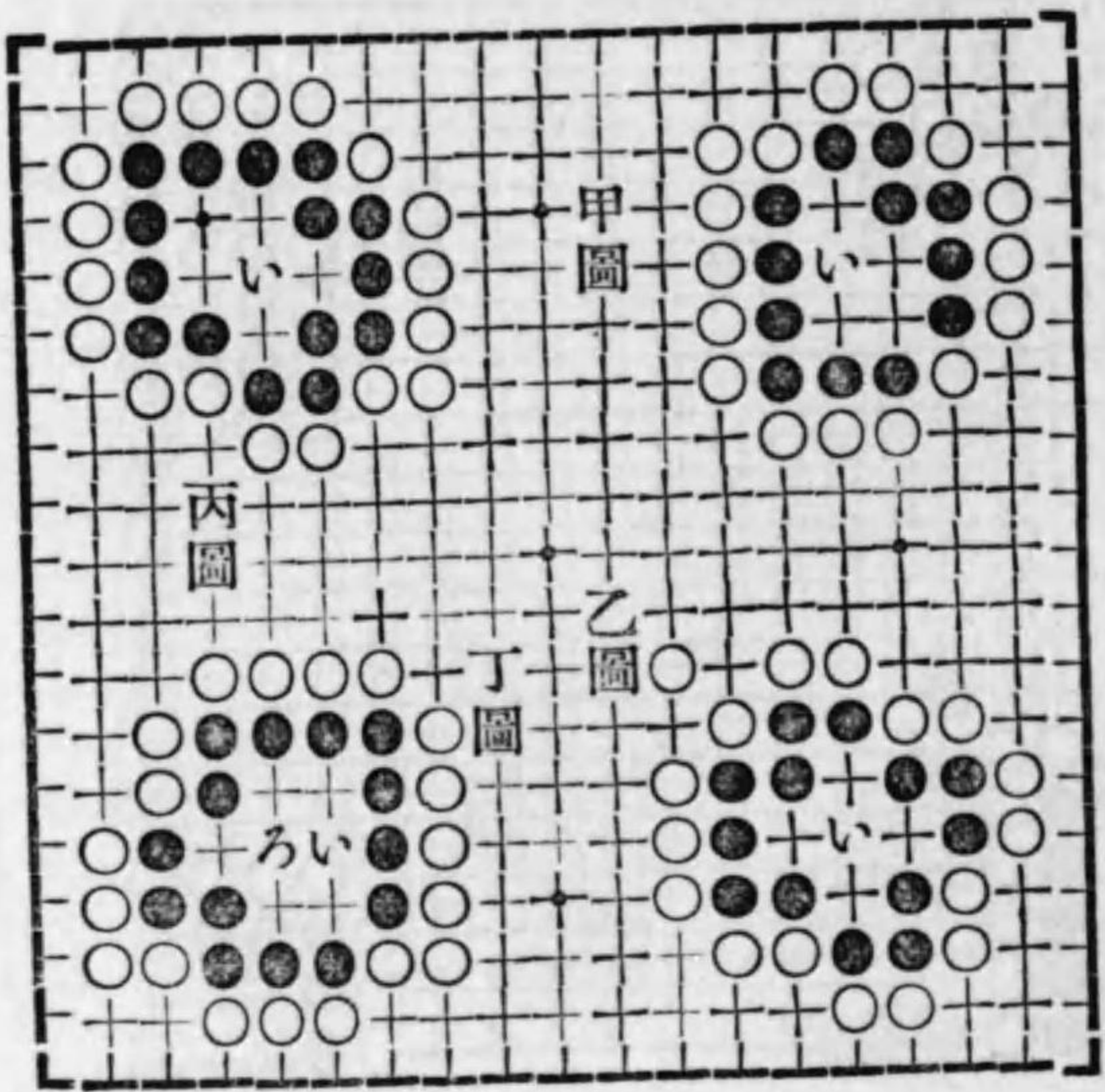
丙圖の如く五目ある形は死である白にいと打たれたら死ぬ然し白が先にいと打てば活きる事は云ふ迄もない丁圖の如く隅に於ける五目は丙圖の時と同じである即ち先に先手で白に打たれたら死である



●活死の研究

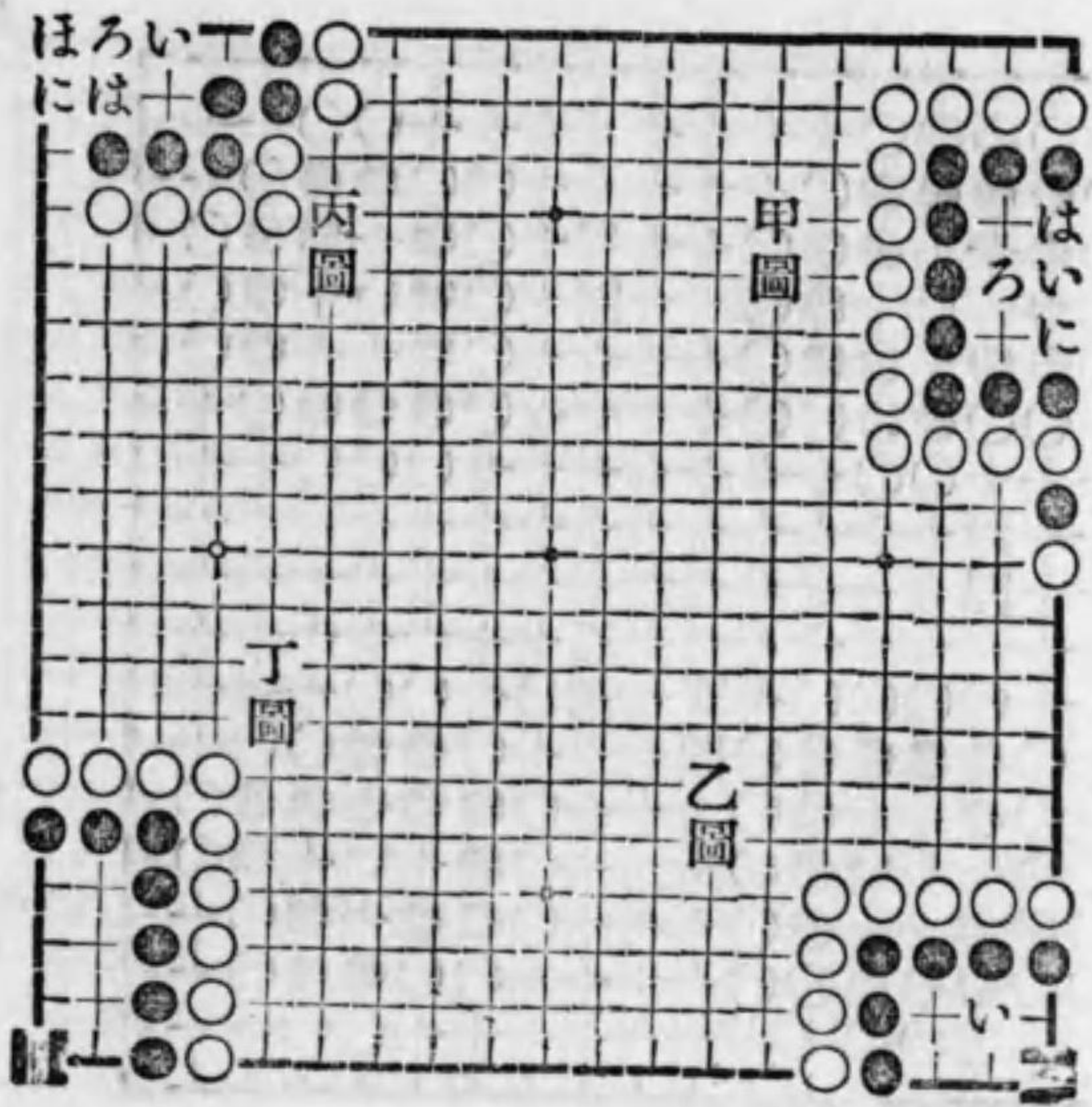
甲圖の如き形は五目あつても死である白にいと打たれたらそれで死ぬ然し黒が先にいと打てば活る事は論を俟たない乙圖の如く五目あつても甲圖の時と同じであつて死ぬ

丙圖の如きも白にいと打たれたら死ぬこれを「花六」と云ふのである丁圖は活なり白に打つも黒ろに打ちて活くるなり



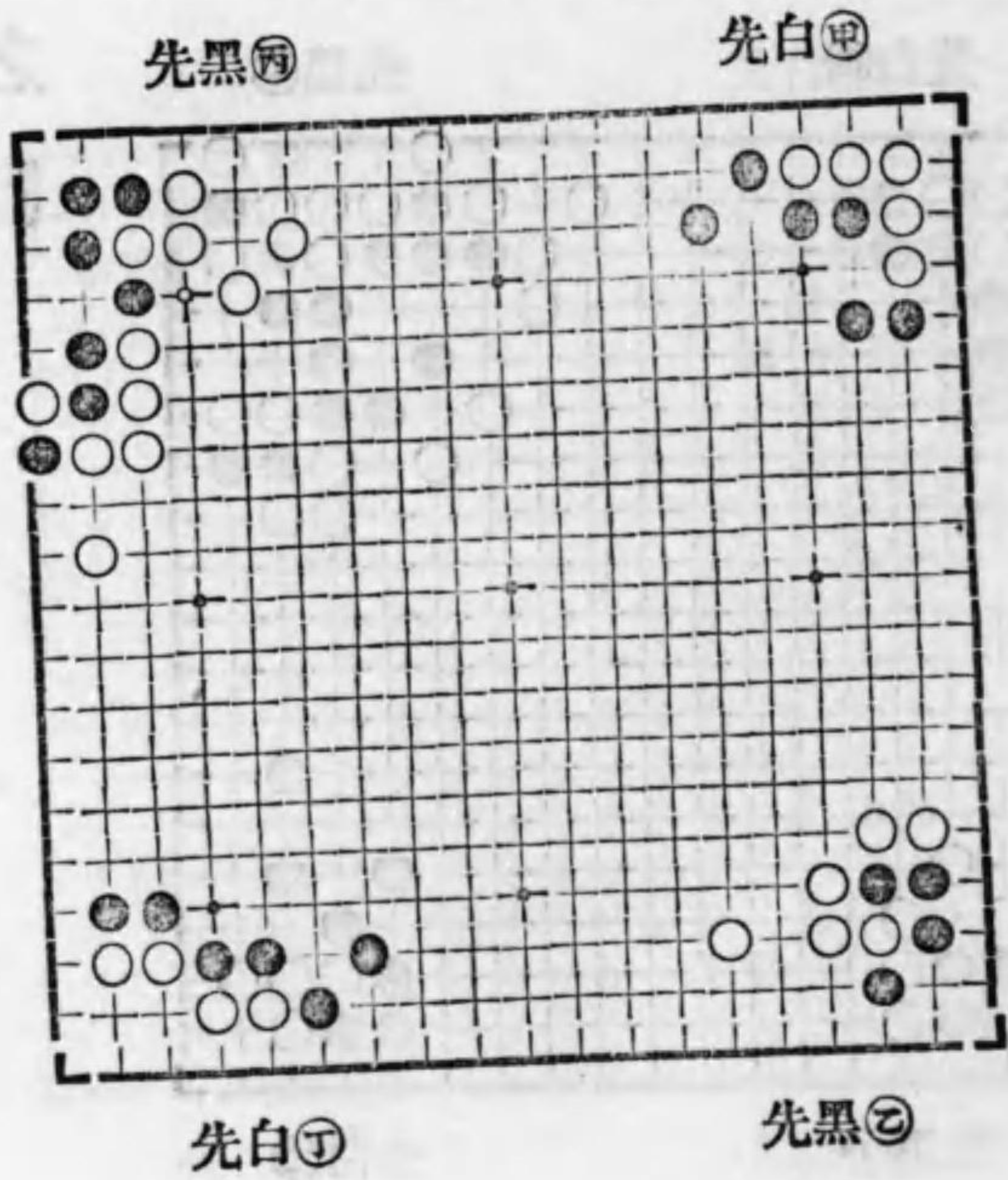
◎活死の研究

甲圖の如き六目の形は活である白がいと打つて黒ろ白に黒はの手順で活る
 乙圖の如き六目はいと打てば死である
 丙圖の如き隅の七目の形は劫になる即ち
 白い黒ろ白は黒に白ほの手順で劫となる
 丁圖の如き八目あるのは持になる



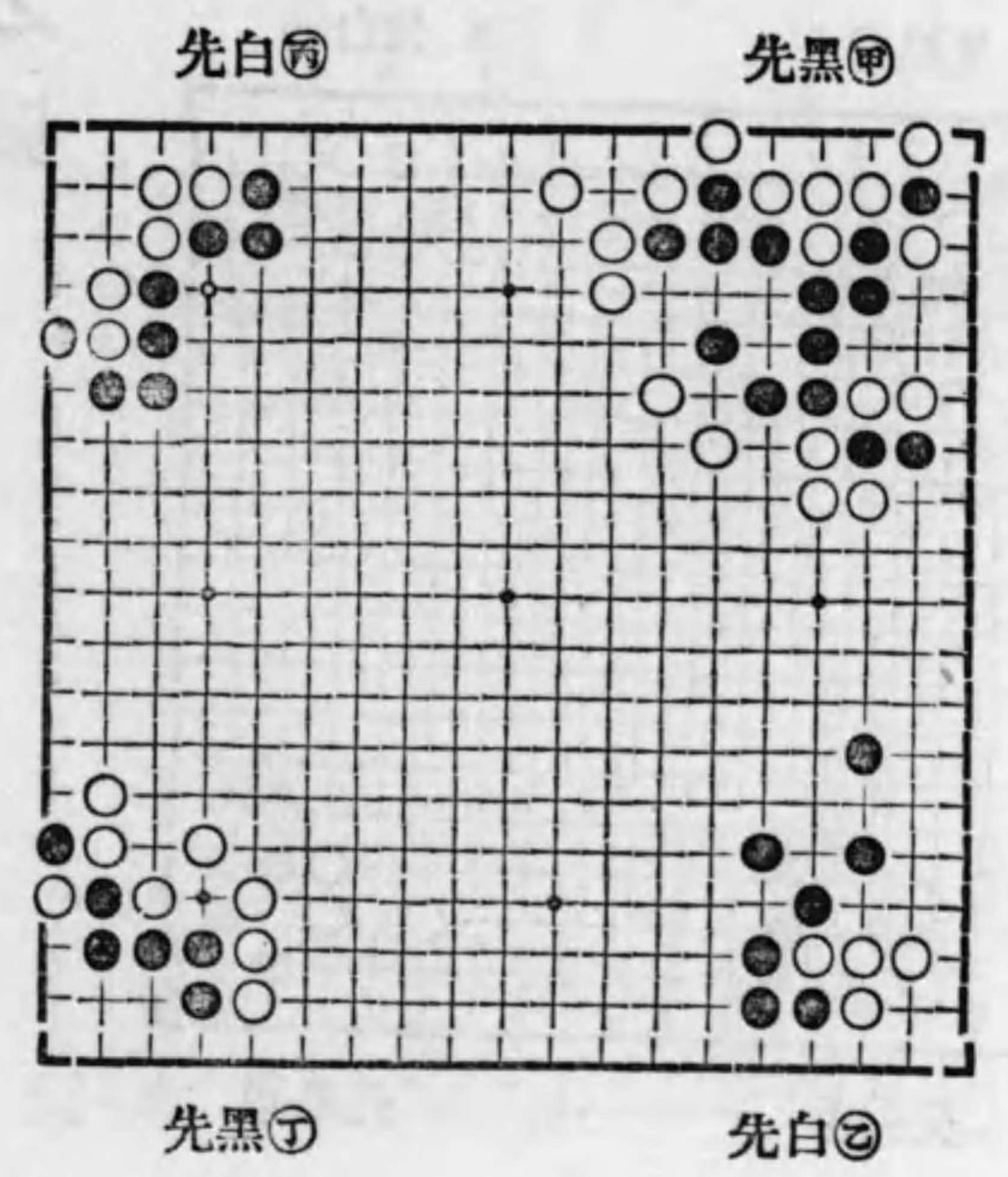
◎詰碁生之圖

- ①イノ一、
- ②イノ十八、ロノ十九、イノ十六
ニノ十八、ハノ十九
- ③ツノ二、ツノ四、ソノ四
- ④ソノ十八、レノ十九、ソノ十九
タノ十九、レノ十八



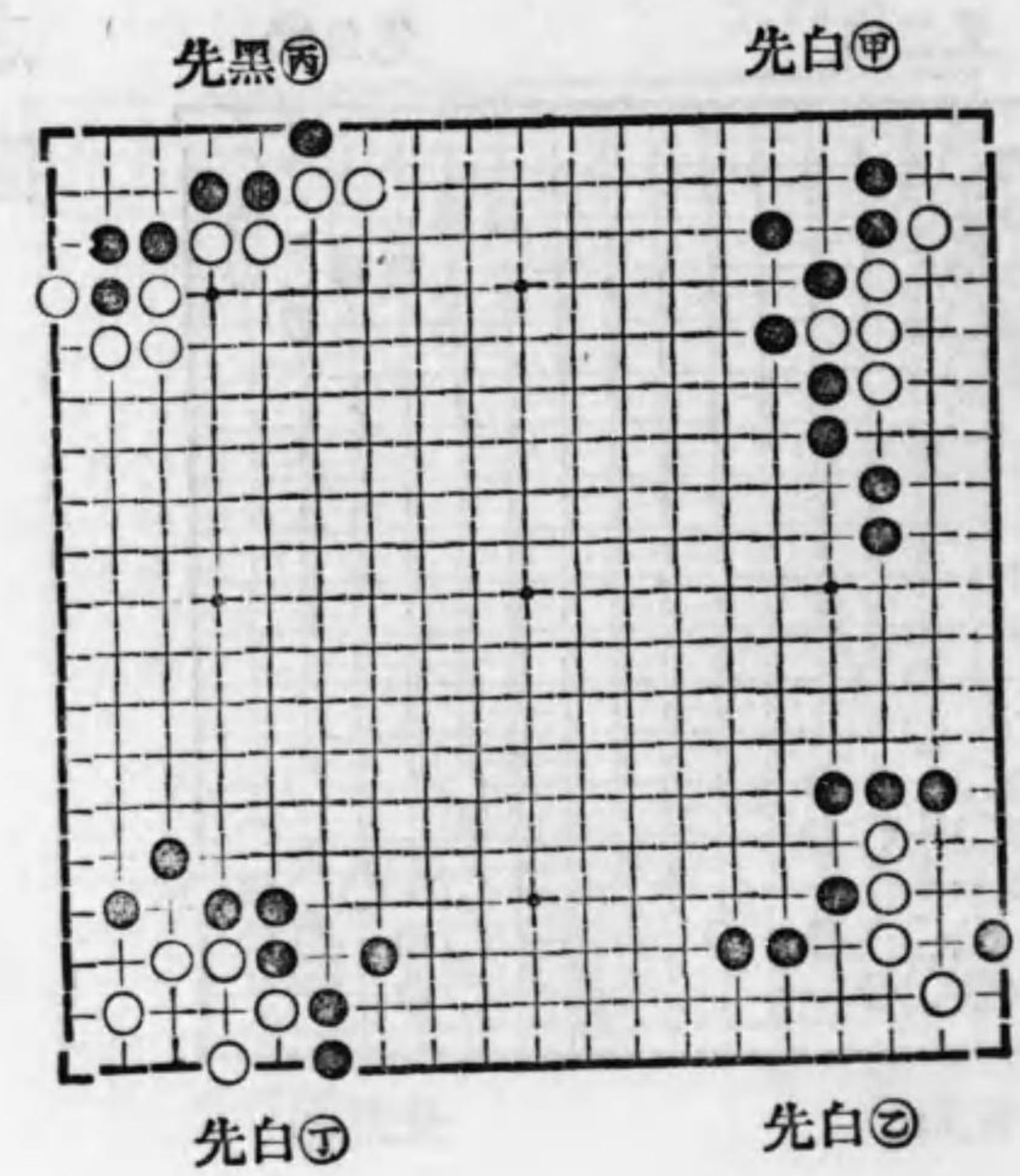
詰碁生之圖

- ① イノ四、イノ二、イノ六
- ② イノ四、ロノ七、イノ二
- ③ ロノ十五、ロノ十四、イノ十五
- ④ ツノ三、ソノ一、ソノ二、ツノ六、レノ一、ツノ四、ツノ一、ソノ二、二目トル、ソノ三、一目トル、
- ⑤ ソノ十九、ツノ十八、ソノ十八



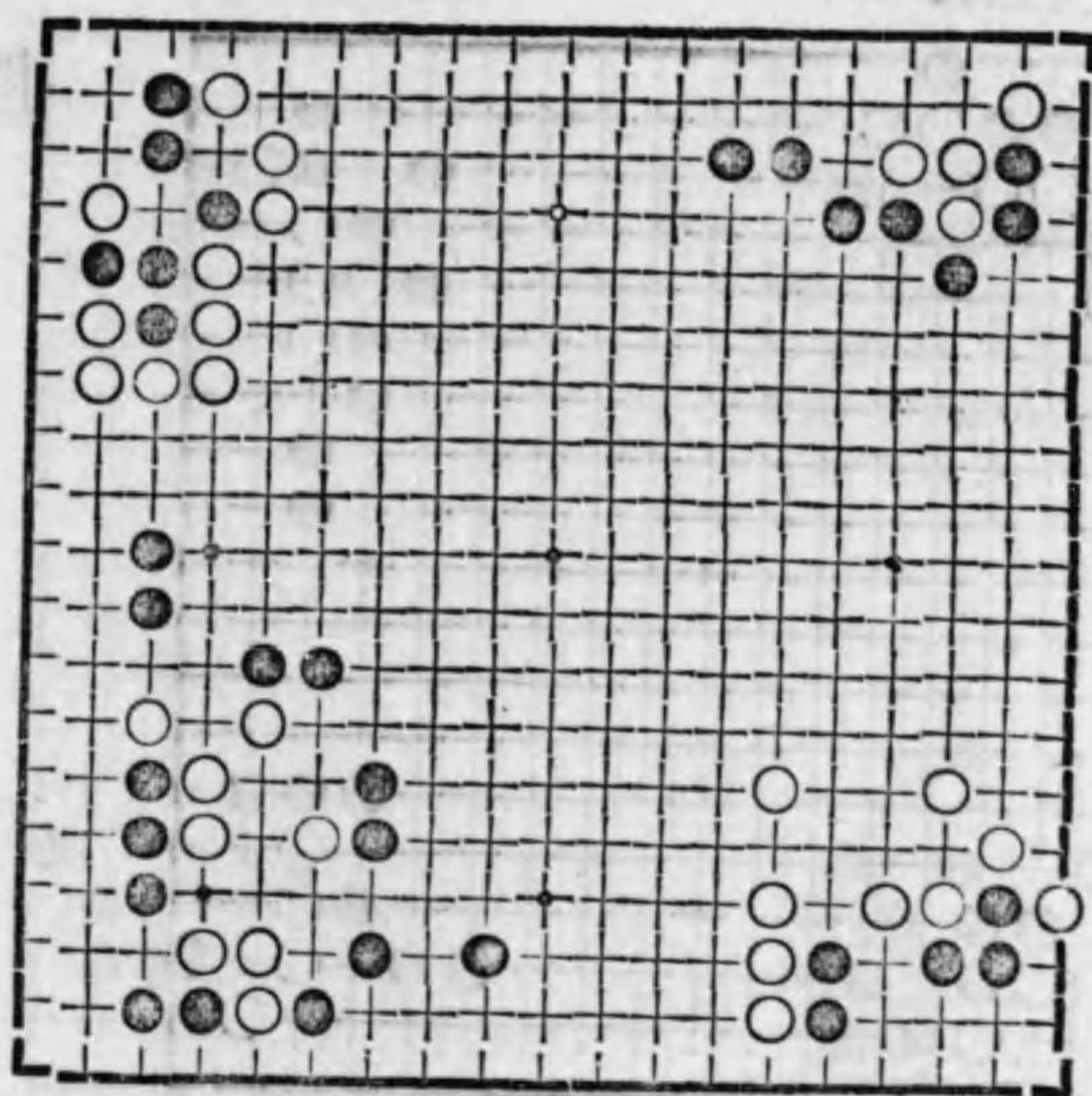
詰碁生之圖

- ① ロノ二、ロノ一、ロノ七、イノ二、ロノ五、イノ三、イノ六
- ② ロノ二、ロノ七、イノ四
- ③ ロノ十五、イノ十五、イノ十六
- ④ ロノ十六、イノ十八、イノ十四
- ⑤ ニノ十八
- ⑥ ロノ十五、イノ十五、イノ十六
- ⑦ ロノ十六、イノ十八、ニノ十八
- ⑧ ロノ十六、イノ十六、イノ十四
- ⑨ イノ十六、イノ十五、ロノ十九
- ⑩ ロノ十二
- ⑪ ソノ一
- ⑫ レノ十九



詰碁生之圖

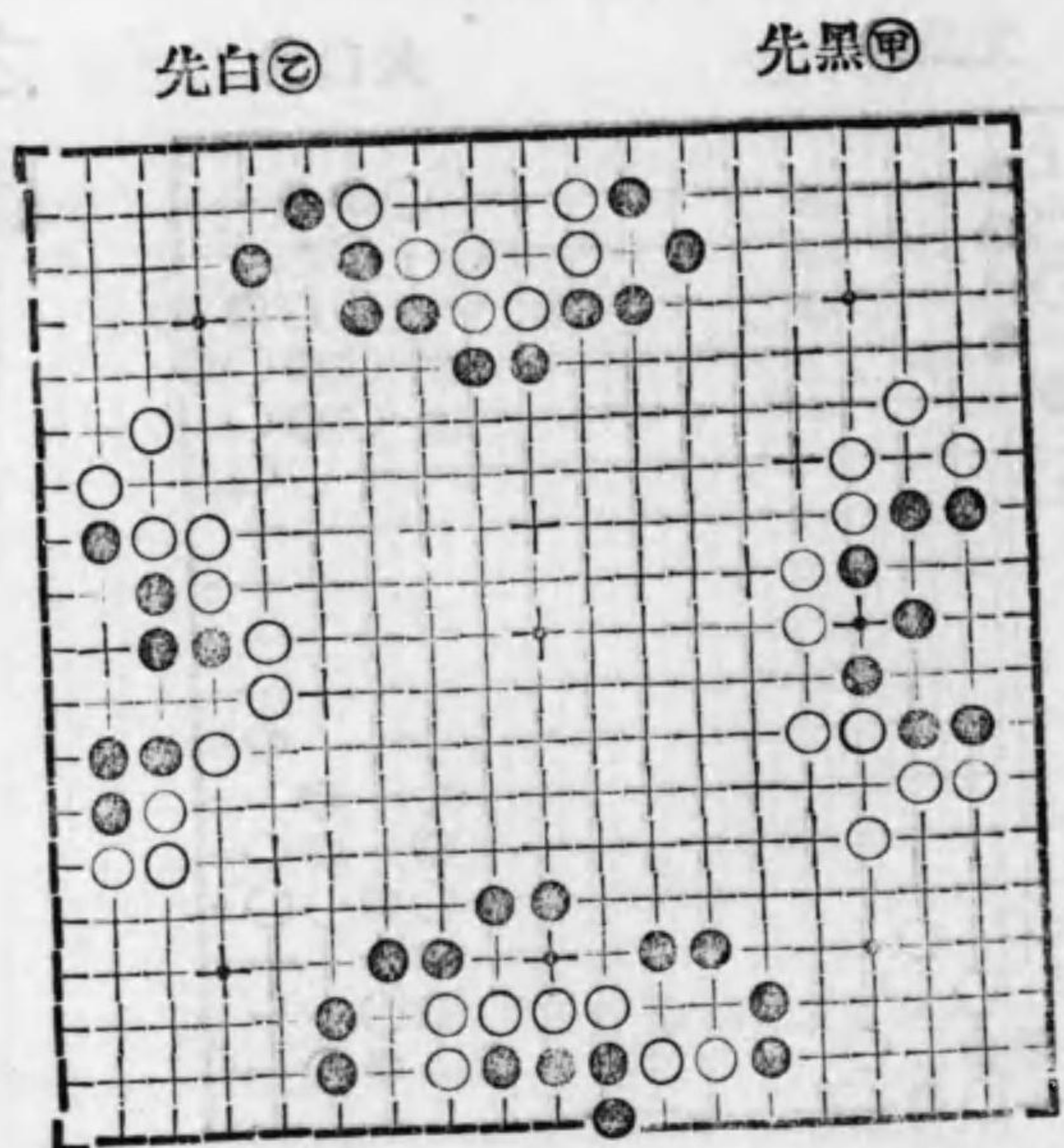
- ① イノ三、ロノ五、ハノ一
- ② ロノ十九、イノ十八、イノ十七
ホノ十九、ニノ十九、ニノ十八
ニノ十七、ハノ十九、ハノ十八
- ③ ツノ四、ツノ三、ツノ五、ソノ
二、ソノ一、ソノ三、ツノ二、
ツノ一、レノ一
- ④ レノ十七、ソノ十七、ソノ十八
ソノ十九、ツノ十八、ツノ十七
ソノ十四、ソノ十五、ツノ十五
ツノ十九、タノ十六、ソノ十六
ソノ十二、ヨノ十九、ソノ十一



先白① 先黒②

詰碁生之圖

- ① ニノ十
- ② ヲノ一、ヌノ二、ルノ二、リノ
一、ヌノ一、ルノ一、ヌノ三
- ③ ヌノ十九、ヲノ十九、チノ十九
- ④ ツノ九、ツノ七、ツノ十一、ツ
ノ十、ソノ十一



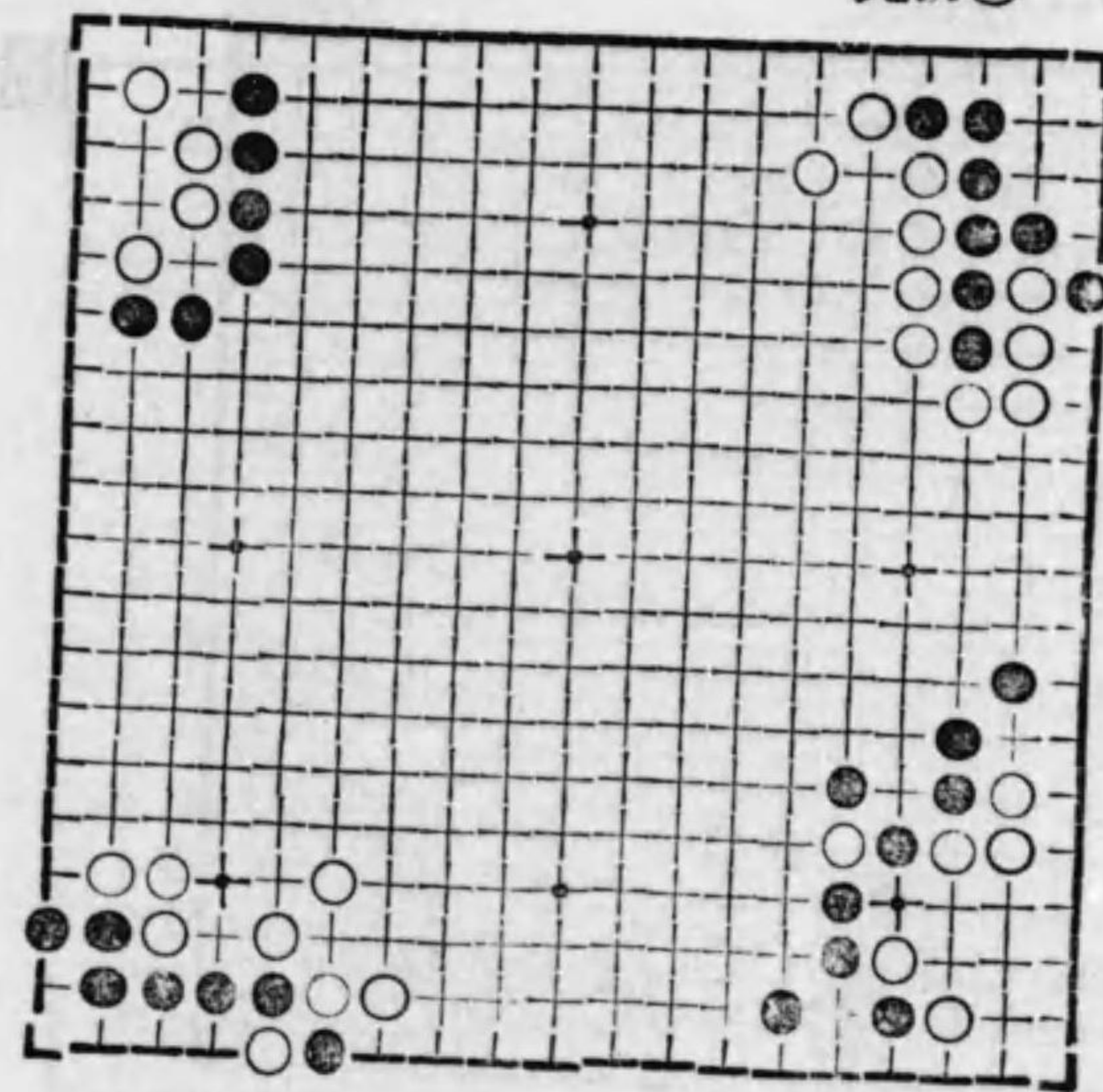
先黒① 先白②

詰碁死之圖

- ① ニノ一、ロノ二、イノ三、イノ四、ハノ一、ロノ一、イノ二、ホノ一、ニノ一
- ② ロノ十八、ニノ十六、ヘノ十五、ハノ十七、ハノ十九、ロノ十九、イノ十九、ロノ十七、ニノ十九、ハノ十九、ニノ十八
- ③ ロノ十八、ハノ十九、ニノ十七、ハノ十七、ニノ十六、ロノ十六、ロノ十七
- ④ ツノ一、レノ一、レノ二、ツノ一、ツノ三
- ⑤ ツノ十九、タノ十九、ツノ十九

先黒②

先白①



先白⑤

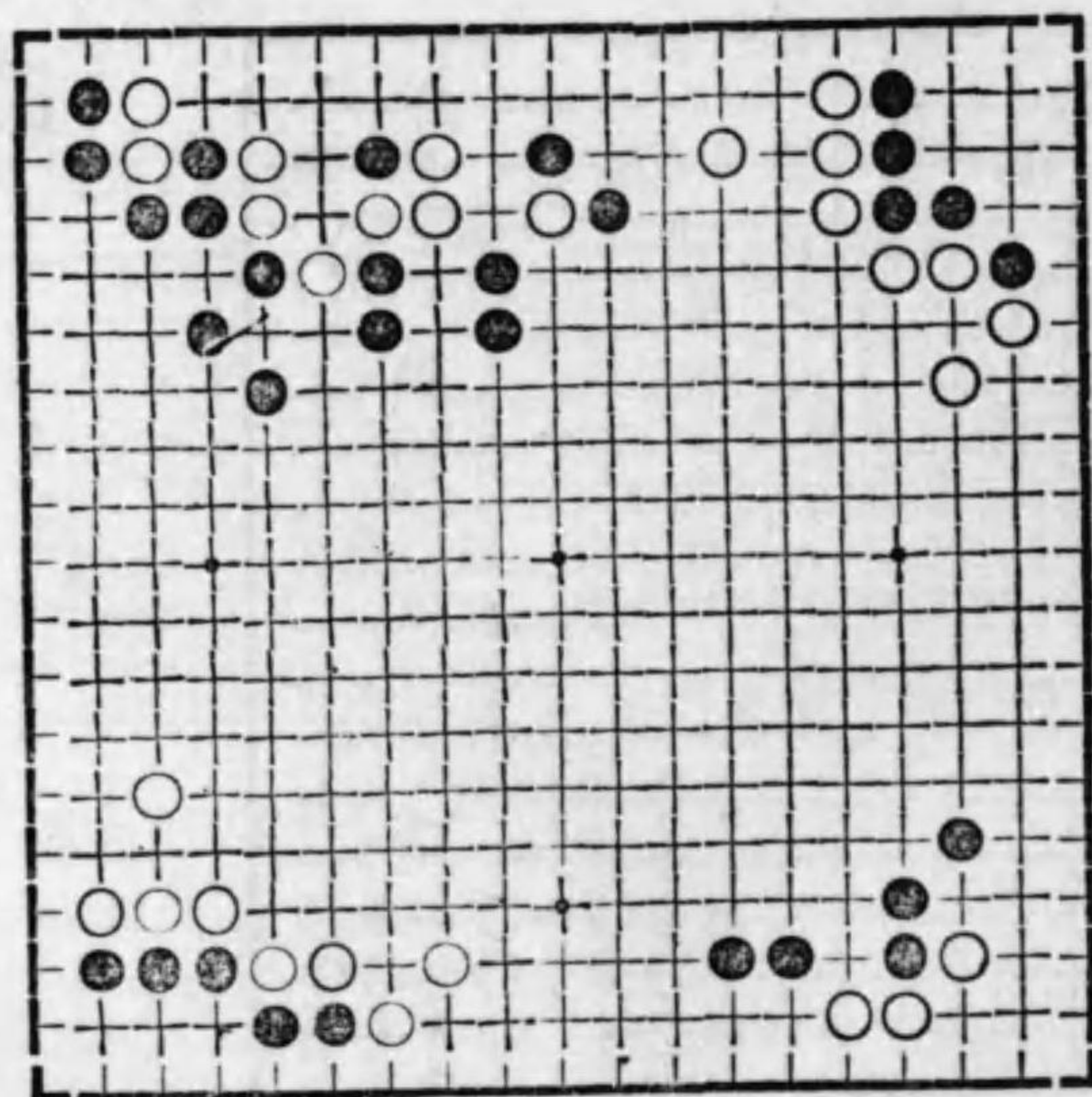
先黒④

詰碁死之圖

- ① ロノ三、ロノ四、ロノ一、ハノ二、ロノ二、イノ二、イノ三、イノ四、二ノ一、ハノ一、ホノ一
- ② ロノ十七、ロノ十八、ロノ十六、イノ十八、ヘノ十八、ホノ十九、ハノ十九、ハノ十八、ロノ十九
- ③ リノ二、ワノ二、ヲノ一、タノ二、ヨノ一
- ④ リノ二、タノ二、カノ二、ヲノ二、カノ三、ヨノ二、カノ四
- ⑤ カノ十九、タノ十九、ツノ十七、ツノ十八、ツノ十九、レノ十九、ワノ十九、ツノ十八、タノ十八、レノ十八、ヨノ十九

先白①

先黒④

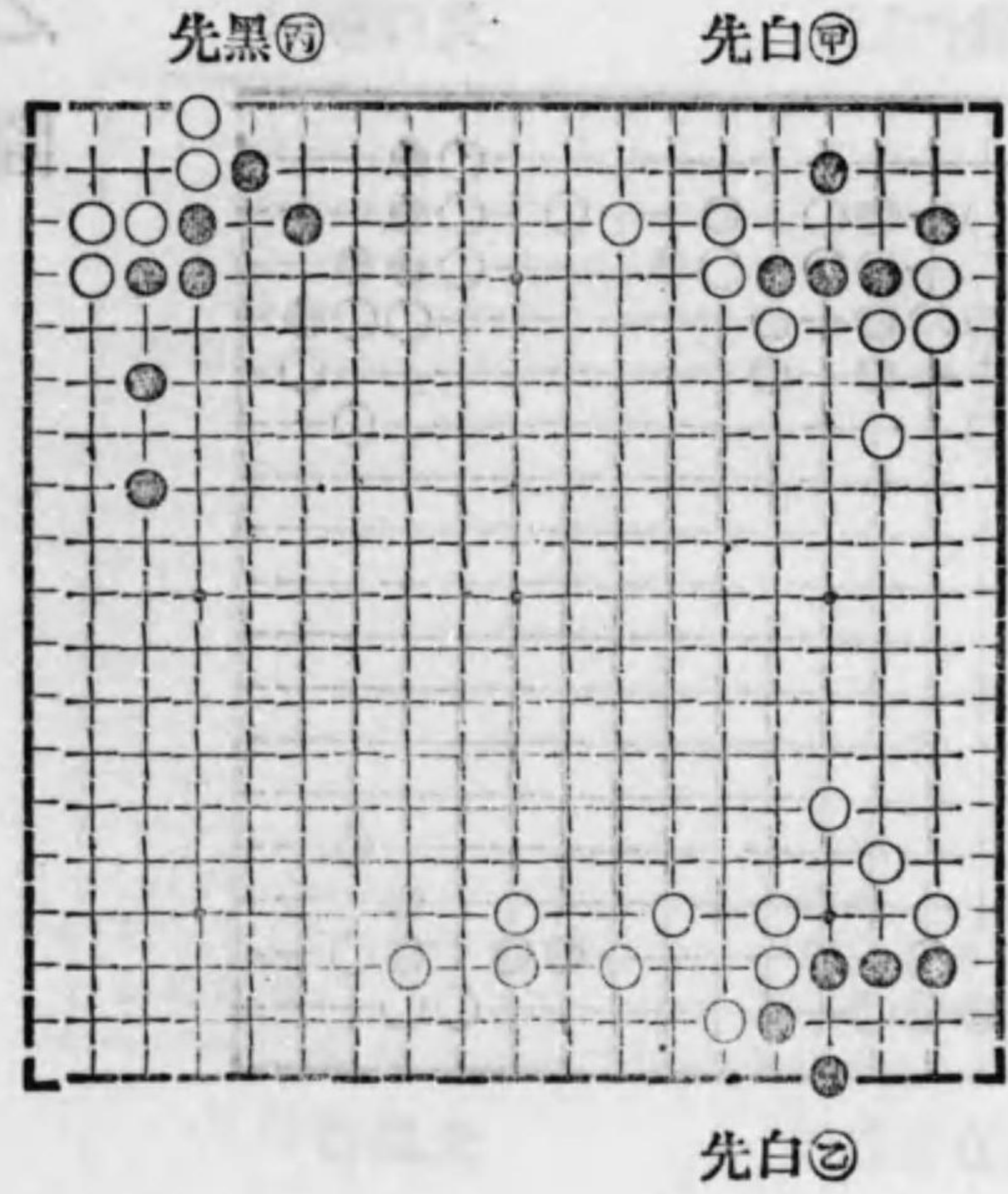


先白⑤

先黒②

詰碁死之圖

- ① ロノ二、イノ三、ハノ三、ハノ二、イノ二、ニノ三、イノ四、ハノ三、ホノ二
- ② イノ十七、イノ十八、ロノ十九、ハノ十九、ヘノ十九、ロノ十八、ニノ十八
- ③ ツノ二、ツノ二、ヨノ一、レノ二、ツノ五

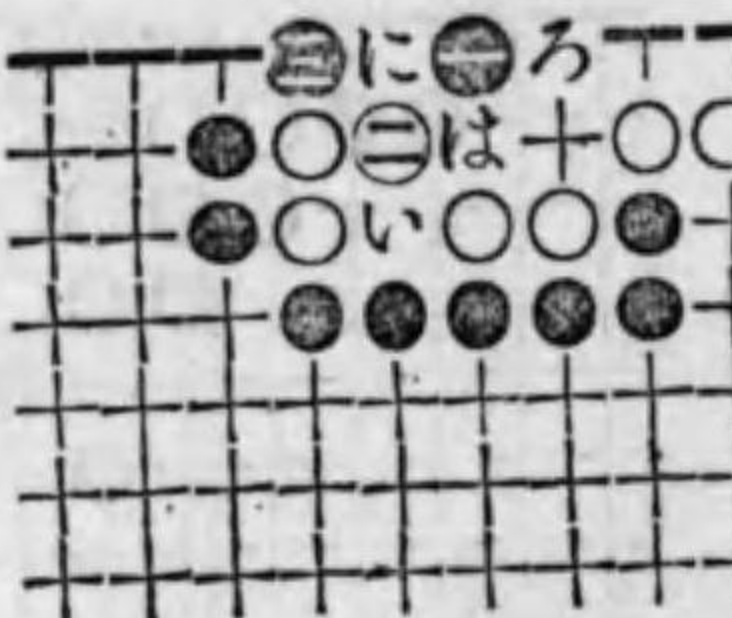


生死の手筋

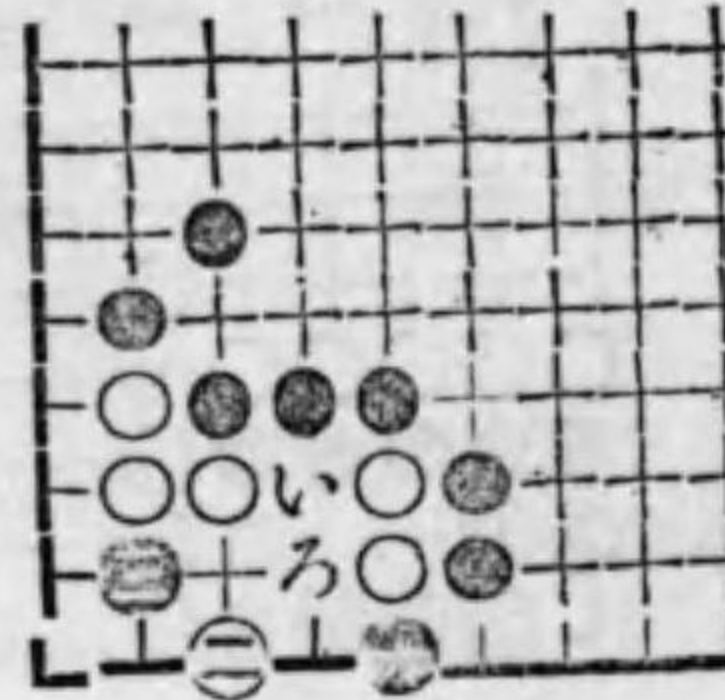
第一圖 黒一の手が所謂筋である若、此手を三に縛ねたら白に一と打たれて活きられる。又黒三の手が善い此手は白が二の手を「い」「ろ」「は」の何れに受けても斯ふ打つて善い此圖で白が「に」に打つたら黒は「い」「か」「は」にサシコムで勝つことは勿論である。

第二圖 此形では第一圖と違ひ黒が一と縛るのが善い二の處から打つと白に「い」と續かれて劫となつてしまふ又初學者の中には「い」の出から打つて白に「ろ」と受けられてから一と縛る癖があるがそれは

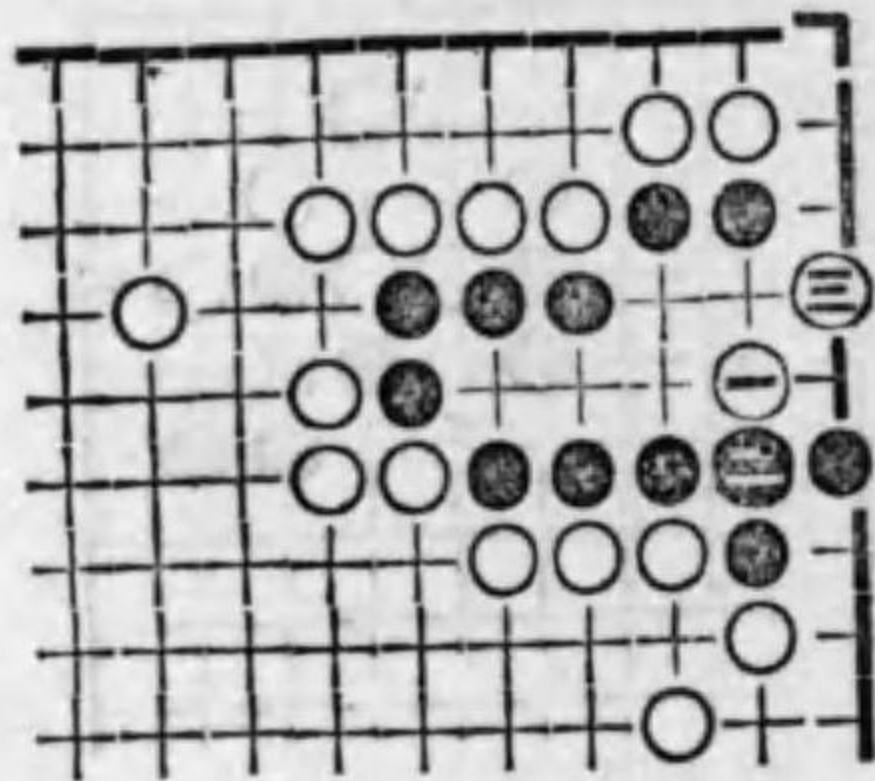
第一圖 先黒死



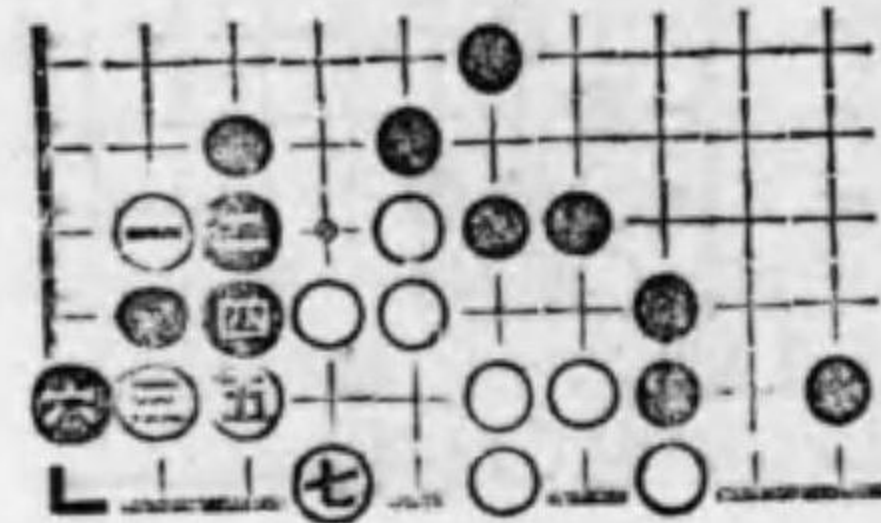
第二圖 先黒死



第三圖 先白死



第四圖 先白活



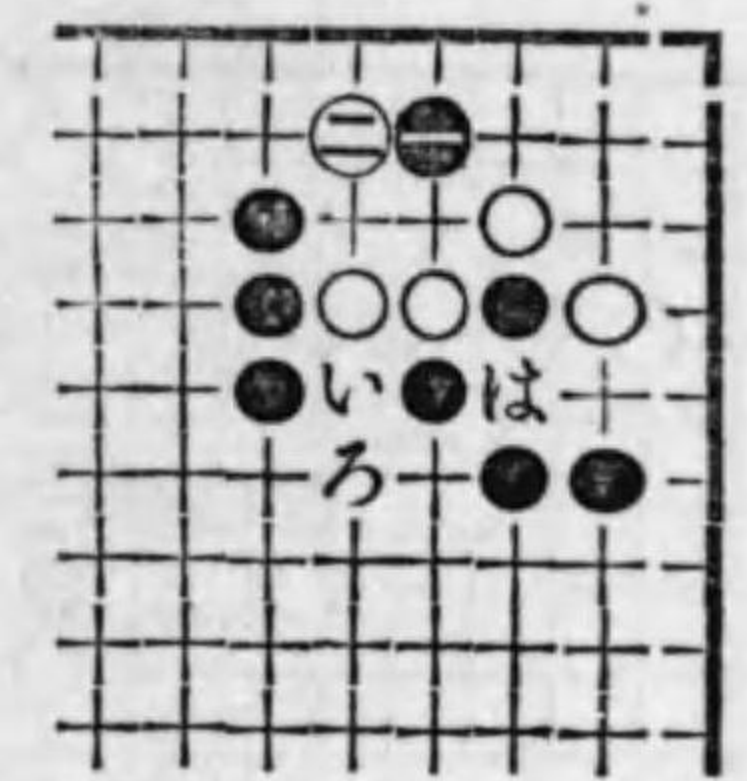
白に二とカケツガれて取る事が出来ぬ様になる。

第三圖 白三の尖ミが手筋である常に出来る型ゆる心得べき手である尤も此圖は角隅から六の目通にある黒のカケツギが甚だ宜しくない形で此石が二の處にシツカリ續いてあれば決して死ぬ事はない斯かる石の形が生死に大關係あるは注意を要する。

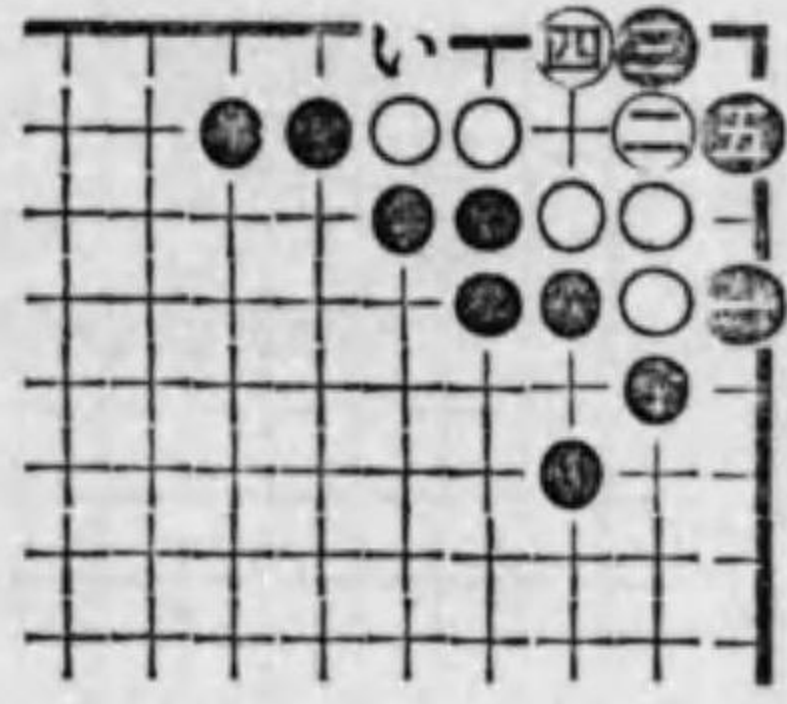
第四圖 白一とツケコシて又三と預けるのが活を得る捷徑である。

第五圖 黒一の斜走に對し白二の頂越(ツケヨシ)が手筋で白には「い」に出で黒「ろ」の時「は」に一目の提が利くから活きるのである。

活白先黒 圖五第



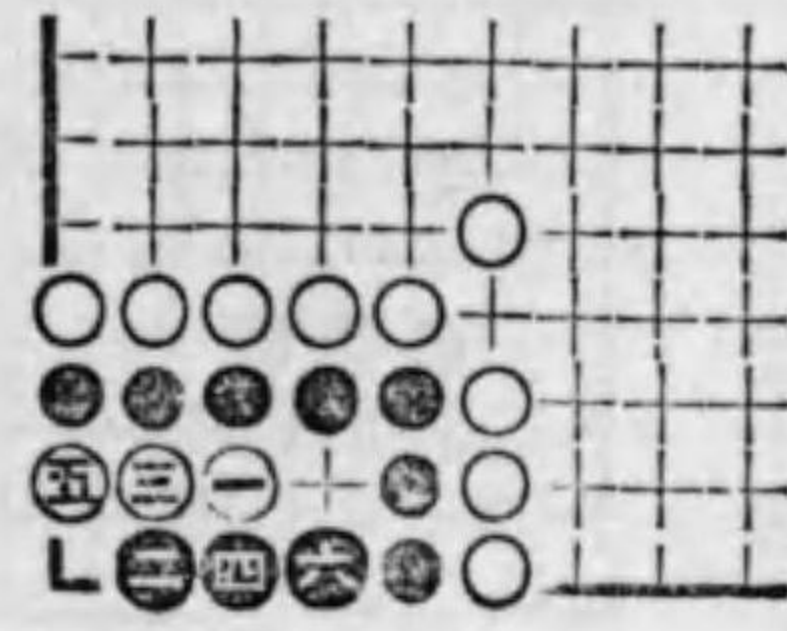
劫先黒 圖七第



劫先黒 圖六第



持先白 圖八第



第六圖 黒一のオキが手筋である白四の手で「い」に抛りこんだなら黒は四の處にアチテ矢張劫である。

第七圖 黒一の方から縛るのが善いのである若「い」の方から打つと白に四とカケツいで活きられてしまふこゝが前の第六圖と違ふところで能く比較研究して欲しい又白が二の手で四に打つと黒は五の處に打てば矢張同様となるし、又三の處に飛ぶと黒から

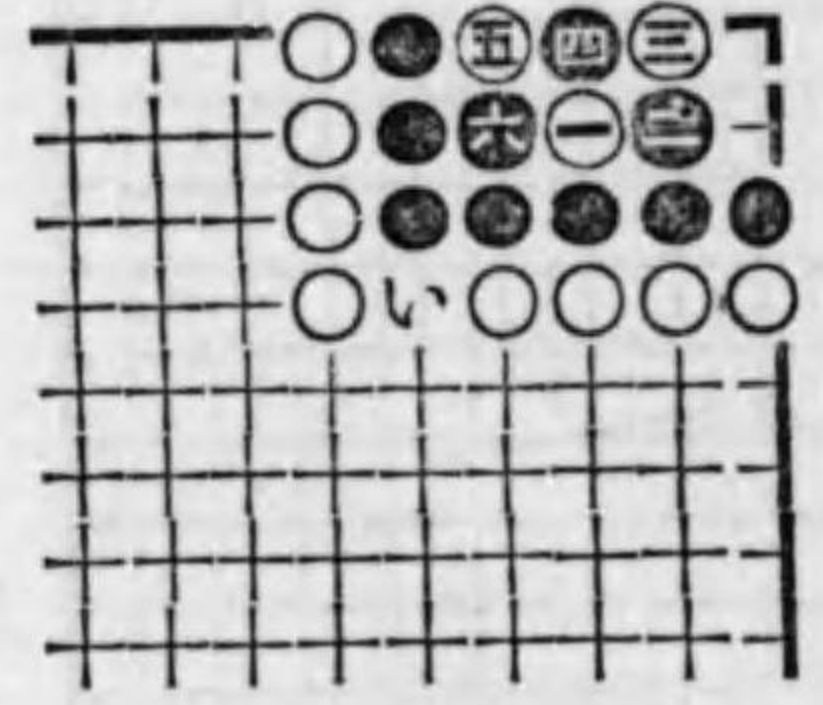
「い」に縛ねられて死んでしまふのである。

第八圖 白一のオキ一番善い點は即ち白が先手持になる二の處に打つても持だが白が後手になる。

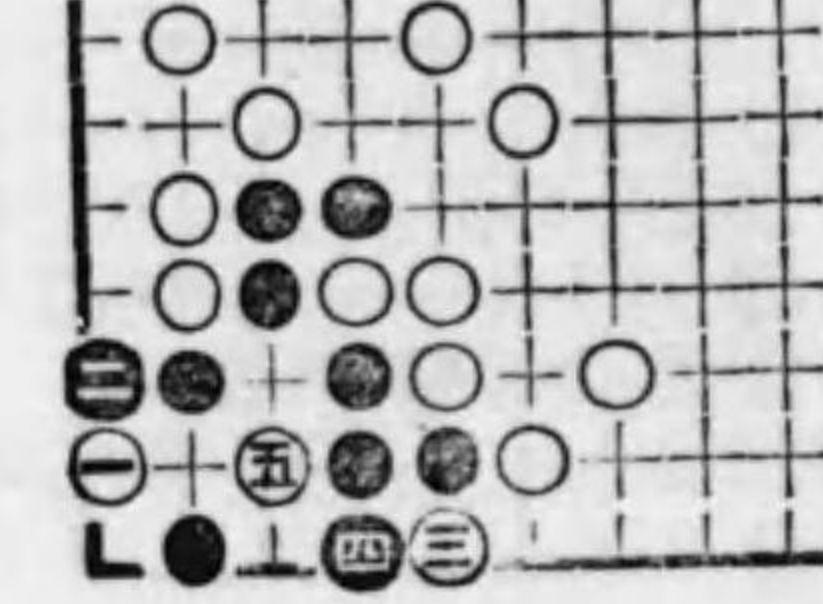
第九圖 此型は「い」にダメがある事が前の第八圖と違ふのでこれあるが爲に此黒は取れぬ即ち活である。

第十圖 此形は互先などに能く出来る姿で白打着の手順注意すべきである。

活黒先白 圖九第

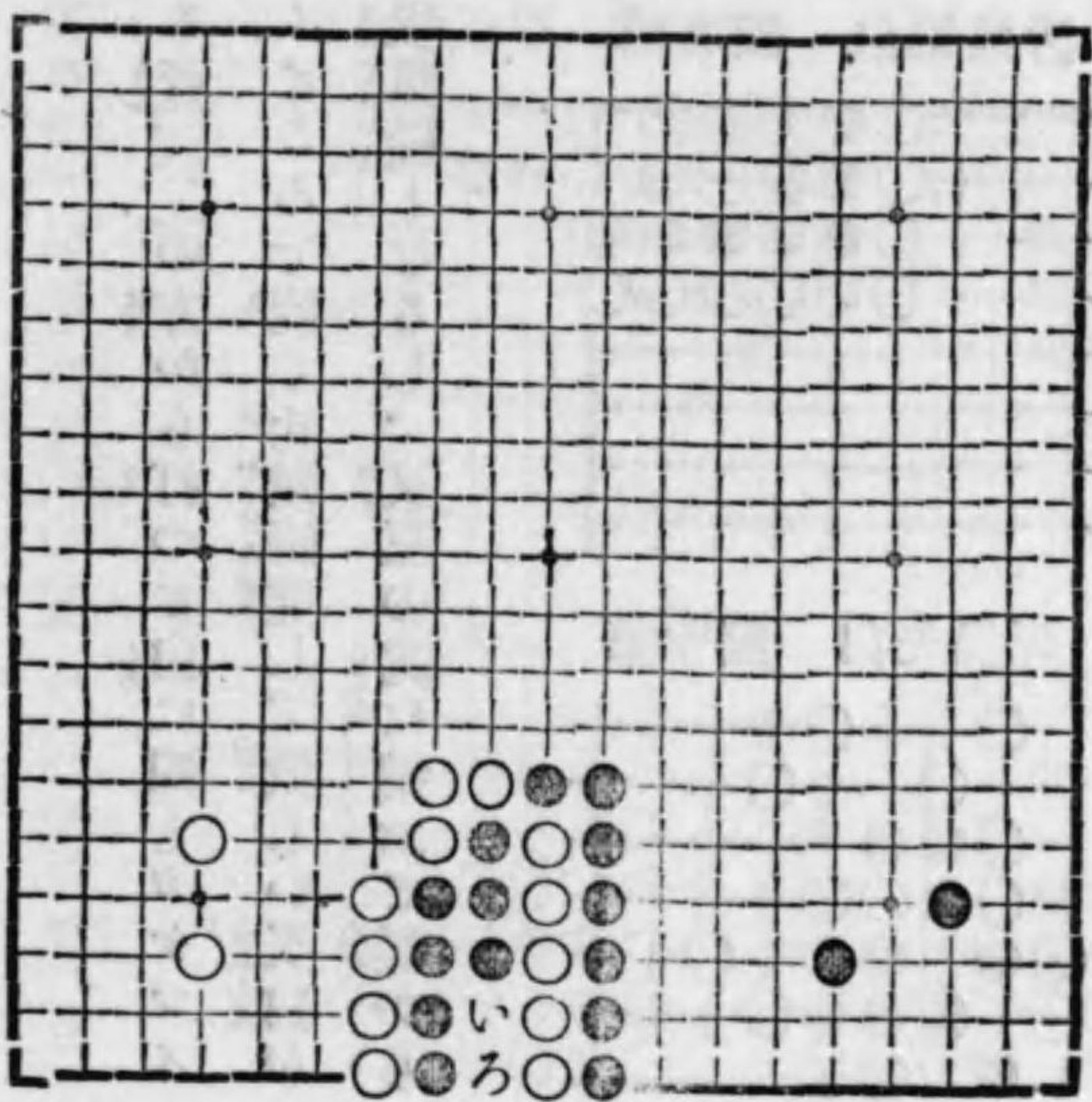


死黒先白 圖十第



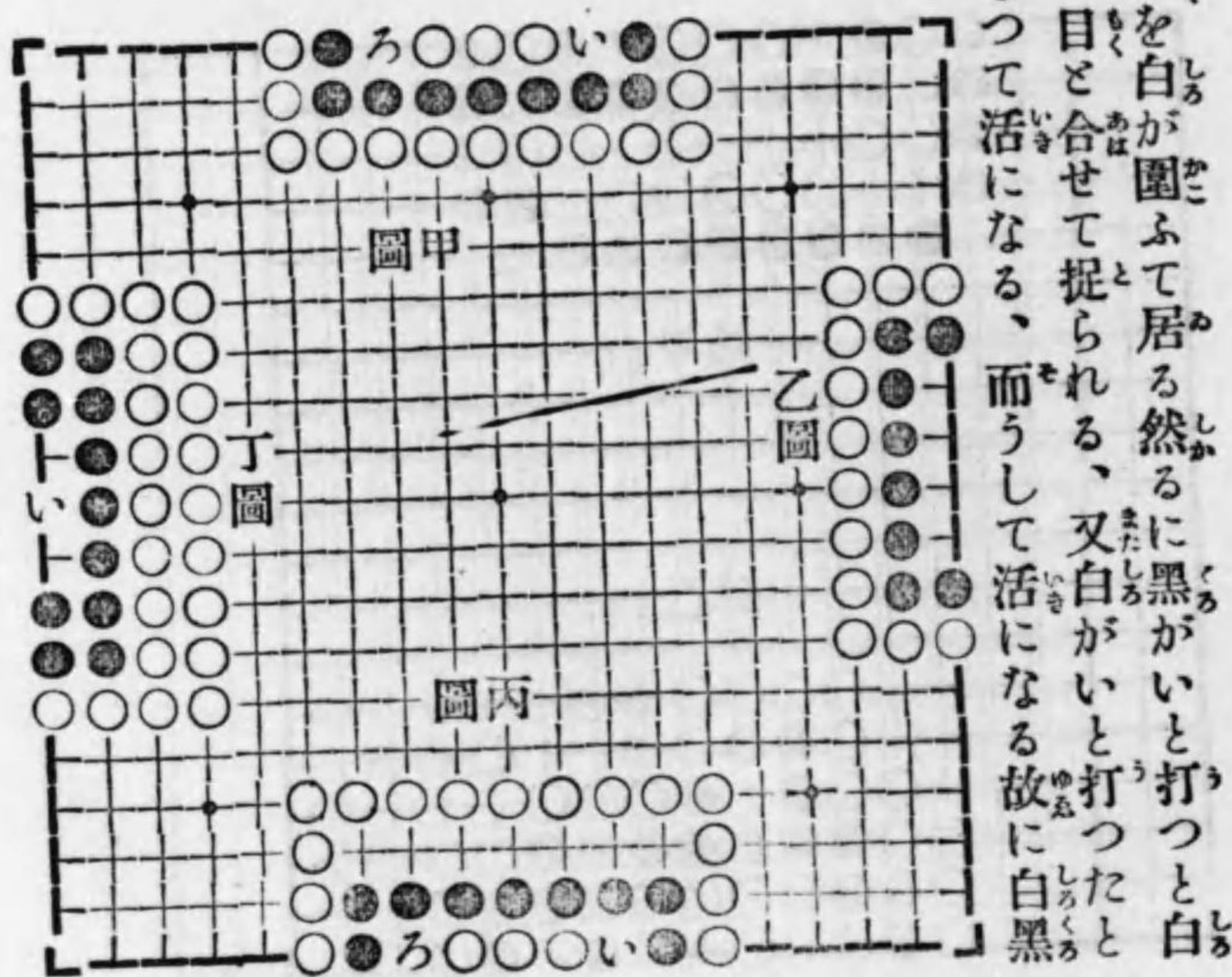
◎ 持の研究

持とは圖の如く白は黒の七目を圍んで居るし黒も白の五目を圍んで居る然るに今白が黒の七目を捉らうとしていへ打つとすると黒から却つて反對にろと打つて白の石を捉つてしまう故に白はいなりろの所へは石を打つてはならぬ又黒も白の五目を捉らんとしていへ打つと白にろと打つて捉られる故に此いろの所は双方から手出をしてはならぬ所である此ま、終まで捨て、置けばよい即ち持と稱して此儘にして置くのである。



◎ 持の研究

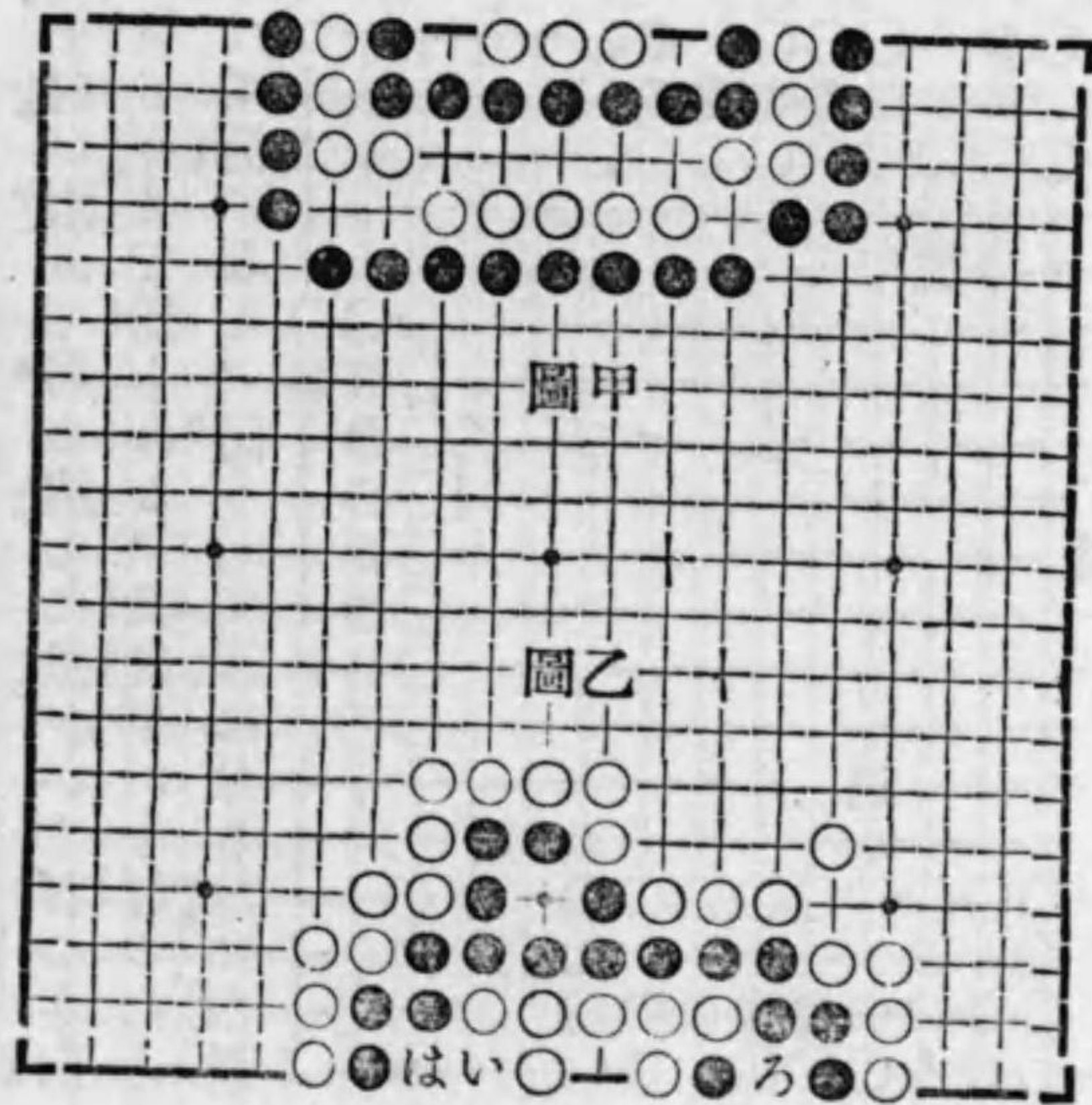
甲圖は黒が白の三目を圍ふて居る其外廓を白が圍ふて居る然るに黒がいと打つと白にろと打つて黒は此九目及びいと打つた一目と合せて捉られる、又白がいと打つたとすると黒にろと捉られて乙圖の如き形になつて活になる、而うして活になる故に白黒ともにいと及びろには手を着けると先に着けた方が損になる即ちいろの點は双方から手を着けず其まゝにして置いて持となるのである丙圖の如く外廓の白が黒を圍ふて隙間があつて黒がいと打つた時白はろと打つて捉る事が出来ないが終りになつて隙間がなくなるとすると黒はろと打つた白の三目を捉つて丁圖の如き形となり白よりいに中手を置かれ死ぬから黒は決していと及びろに打つてはならぬ白はいと及びろに打つと最後に乙圖の如き形となつて黒を活かすから白もいと及びろには打つてはならぬ即ち持である。



● 持の研究

甲圖は白の三目を黒の九目が圍ふて其九目の黒を白の十三目が圍ふて其又外を黒が圍ふて居る然る時は此十三目の白は目がないから死ぬ持が破れた事になつた白の三目も黒に捕獲された事になる故に持が出来た時は外廓の石の目のあるかないかに注意せねばならぬ。

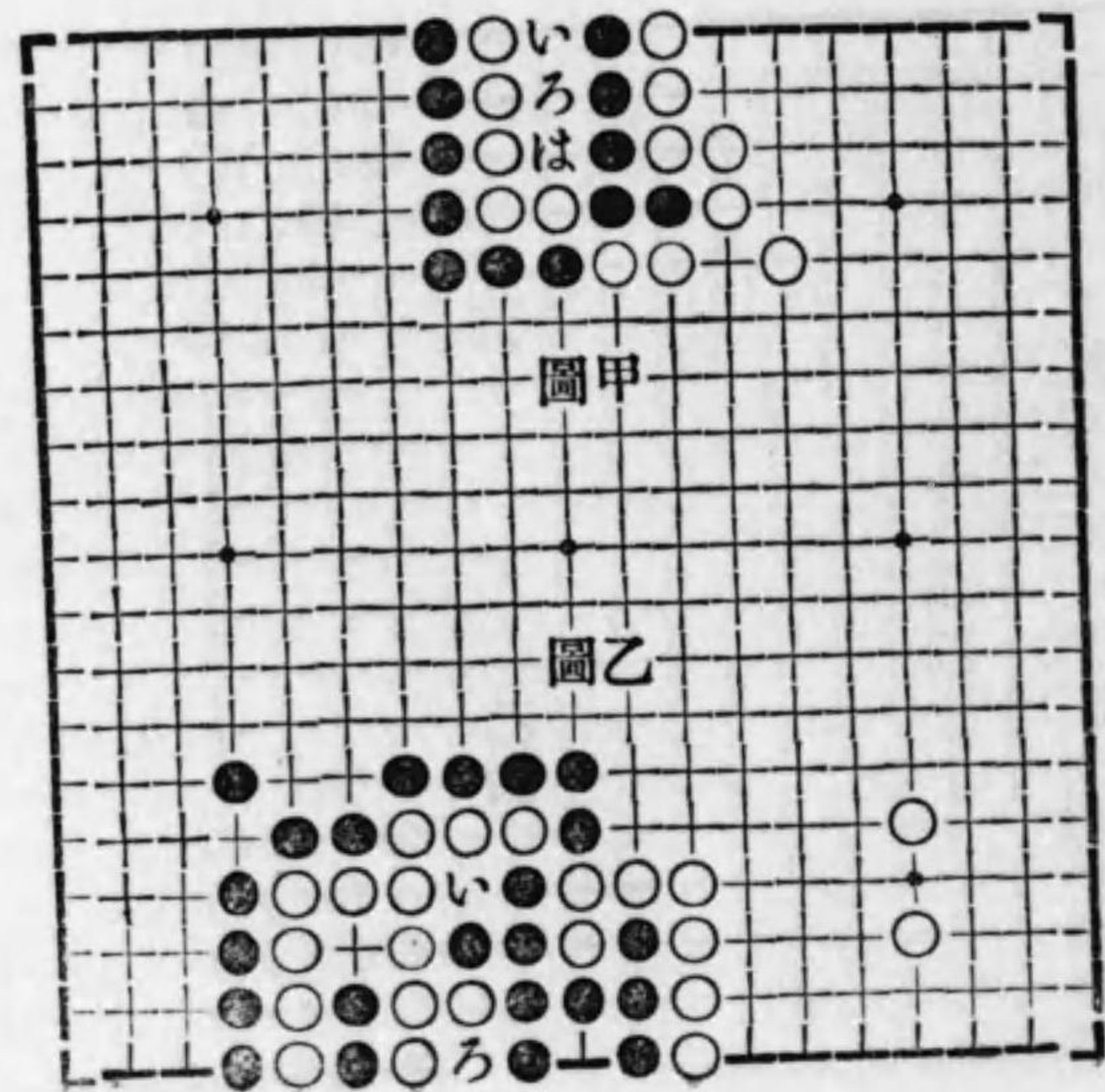
乙圖の如き形は持であるがこんな形を劫附きの持と言ふ今黒と中の七目の白を劫らんとしていと打つと白は落とす劫になつて黒がろを捉ると白は落とす劫に捉りいつ迄経ても解結がつかない即ち持である。



● 持の研究

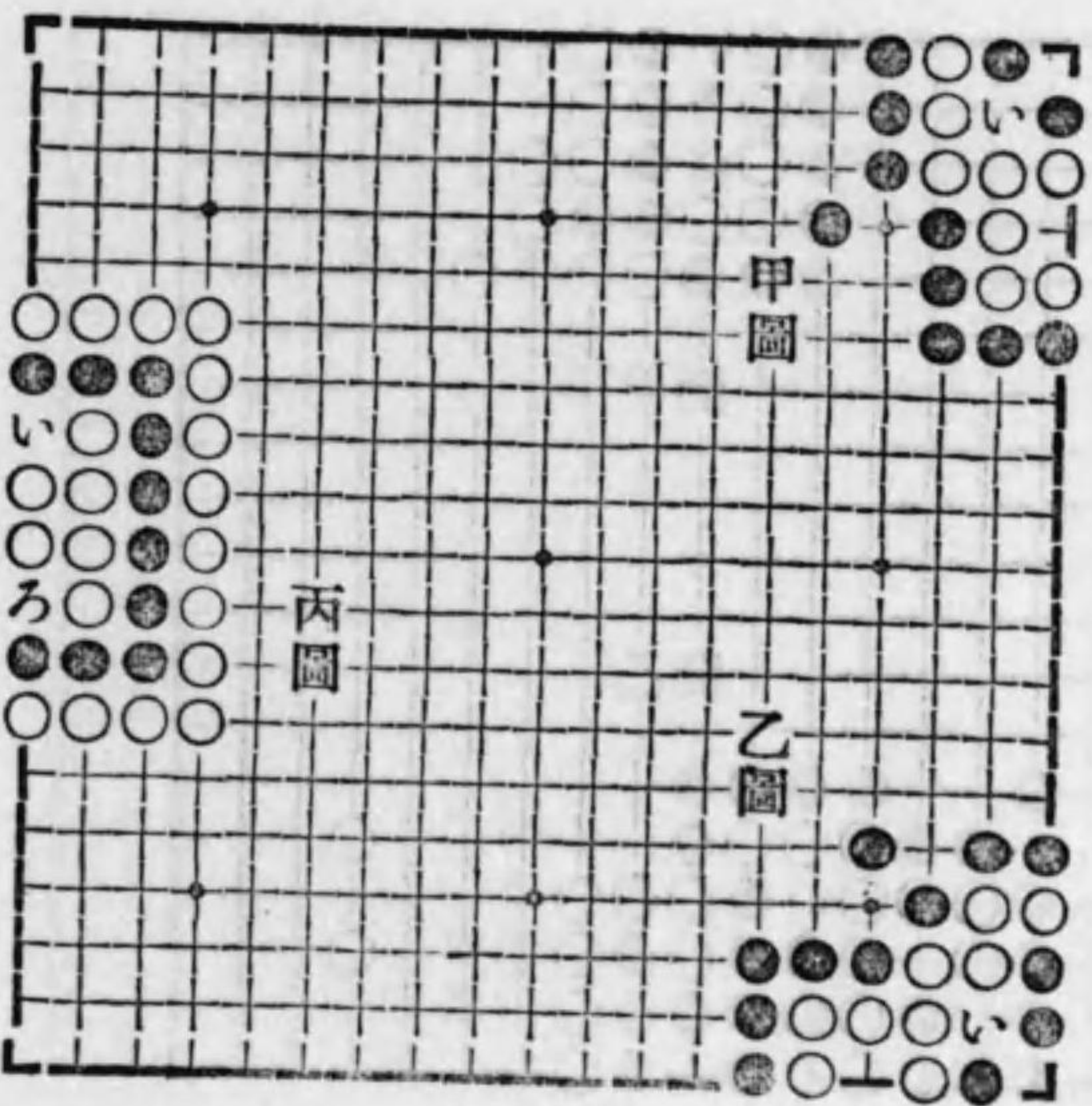
甲圖の形は勿論持であるいろはの路は黒白双方手を入れた方が損であるから決して双方とも手を入れてはならぬ若し黒が白の五目を捉らんとしては打つたとすると白は相手にせず居る黒が又ろと打つて來たら今度はいと打つてアベコベに黒を捉つてしまふ故にいろはの路は終まで其まゝ置くのである。

乙圖の如き形も持であるいろはの路は双方より石を入れる事は出来ない先に手を出す方が捉られてしまふから其まゝで終まで置くのである。



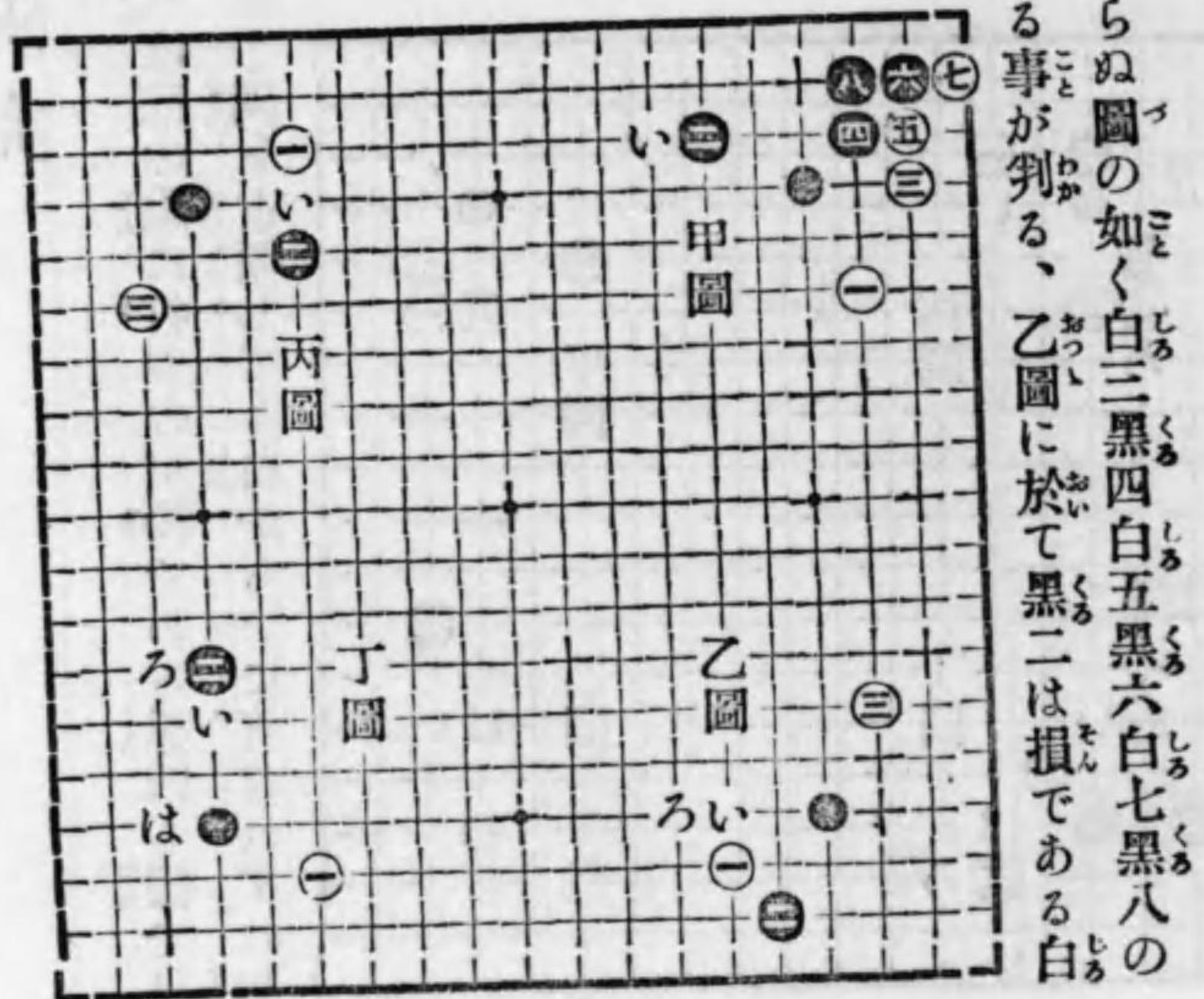
● 持の研究

甲圖のいの路は黑白ともに双方より入れる事は出来ないから持である。
乙圖のいの路は黑白ともに双方より入れる事は出来なから持である。
丙圖のいの路は黑白ともに双方より入れる事は出来ないから持である。



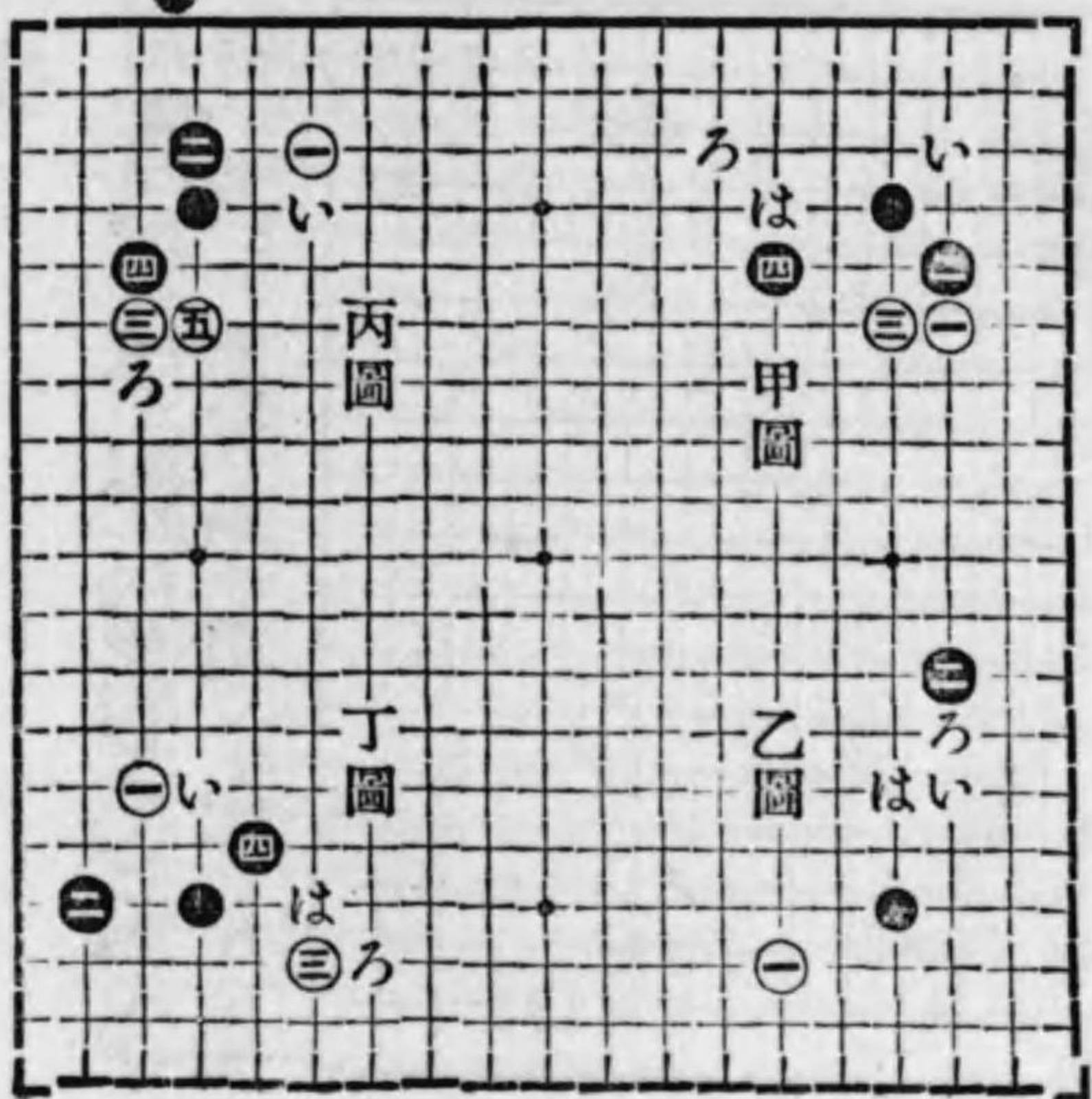
● 損な打方の研究

甲圖に於て黒二は損であるいに打たねばならぬ圖の如く白三黒四白五黒六白七黒八の結果から見れば黒二はいに打つ方が得である事が判る、乙圖に於て黒二は損である白の一に直にいと附けると白は此一を其まゝに捨て置けないに打つて助けねばならぬから三と打つ餘裕はない然るに黒二と打つても何にも白一に打撃を與へないから白は三と打つ故に黒二は損である、丙圖の黒二もいに打つべきで二にては何の効力もない白に直に三に打たれて損である、丁圖の黒二はい又はろに打たねばならぬ白にはに打たれては此隅は容易に白に荒される若しい又はろに打てば假令荒らされても大した損にならぬのである



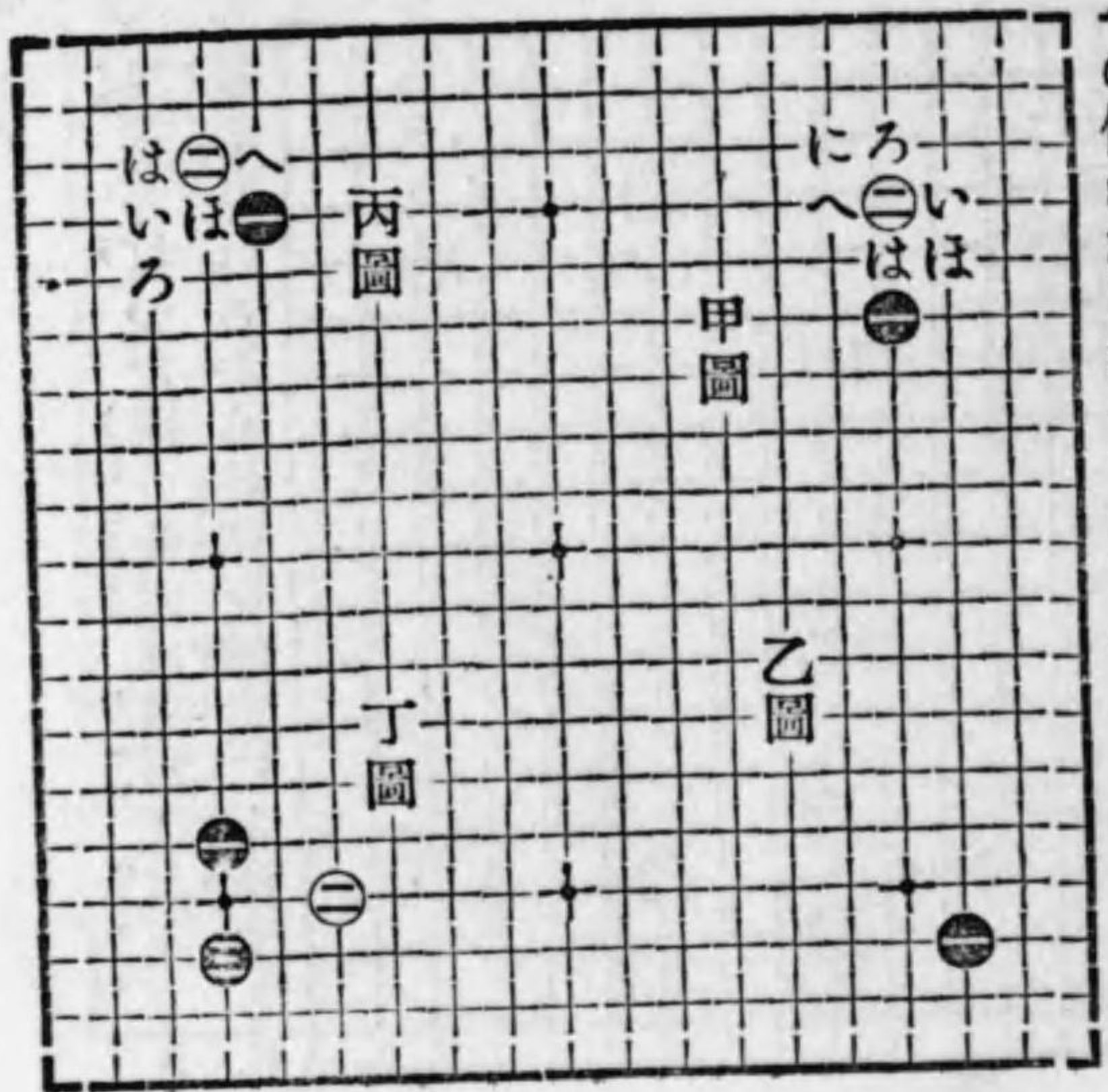
● 損な打方の研究

甲圖の黒二は初めに打つは損であるろは又は三の點に打つのが得である黒四も損では打つべきである斯く黒は隅の置石と二四と隅を占領しても白からいに打たれては隅は直に荒らされて折角の地域もなくなる乙圖の黒二はろ又ははに打たねば損である白にいに打たれては面白くない、丙圖の黒二も何にもならぬ損の手である白三黒四白五となつても隅に僅かの地域しか占める事が出来ず白の石には何の打撃も與へない故に黒二はいろ又は五に打たねば損である、丁圖の黒二も何にもならぬ損な手であるいろ又ははろに打たねばならぬ黒四も損である敵の白石には何の打撃も與へず味方の利益にもならぬのである



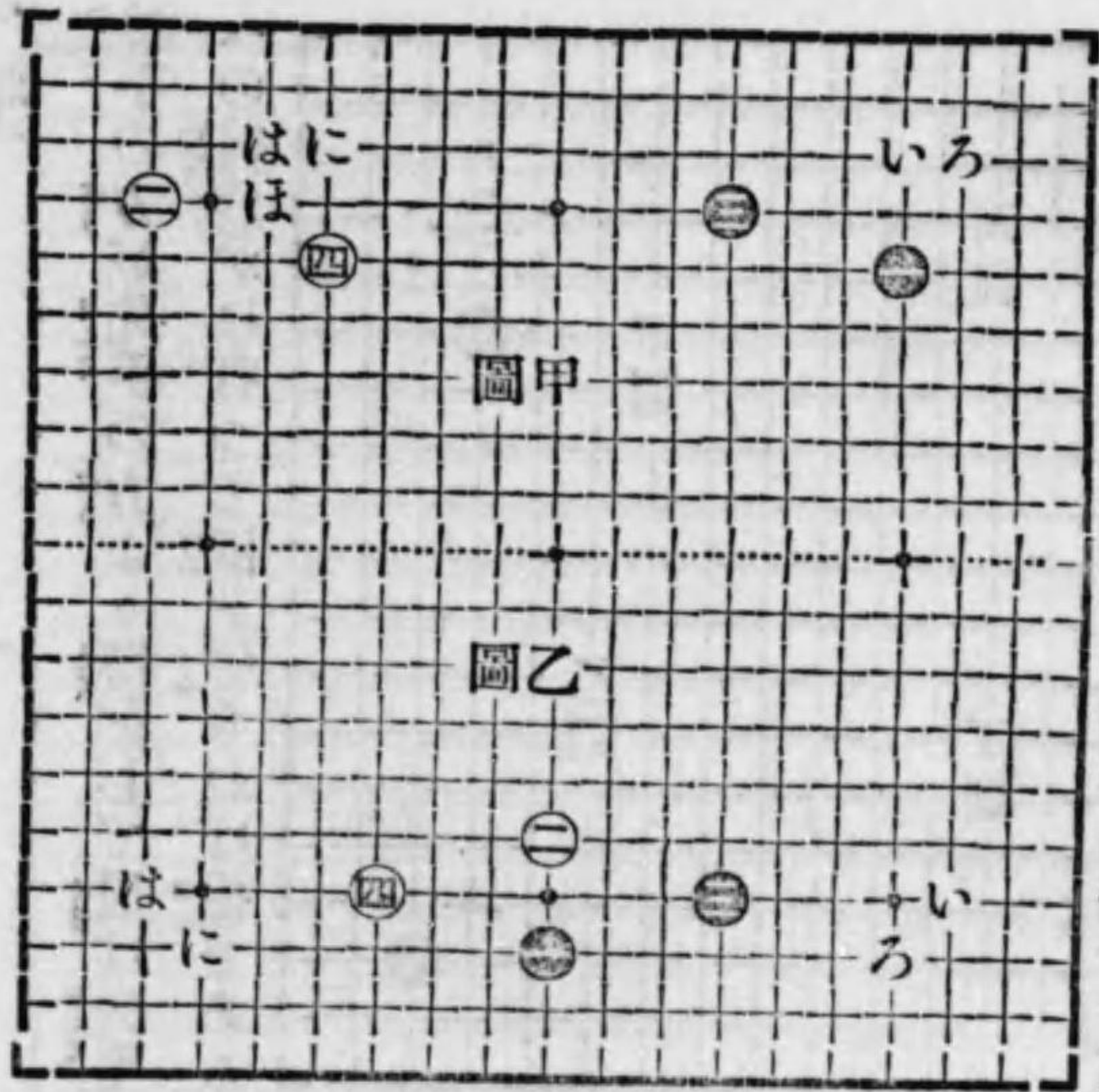
● 損な打方の研究

甲圖の黒一は損である白に二と打たれると後手の方が先手の方より得をして黒は先手の効力がない故に此黒一は必ずいろはにへの何れかに打つて隅を守らねば損である乙圖 黒一は損であるいくら隅を守るの必要だとしてかく打つては跡の打手に困る故である、丙圖の白二は損である黒にへ又ははに打たれて大變壓迫せらるる故にいろはの何れかに打つのである此いろはの點に打つたとするも白黒互格の形勢である、丁圖の白二は損である黒に三と打たれ確實に黒は隅を占領したのに白は何の得もゆかず勢力のない孤獨の石になるのである。



● 損な打方の研究

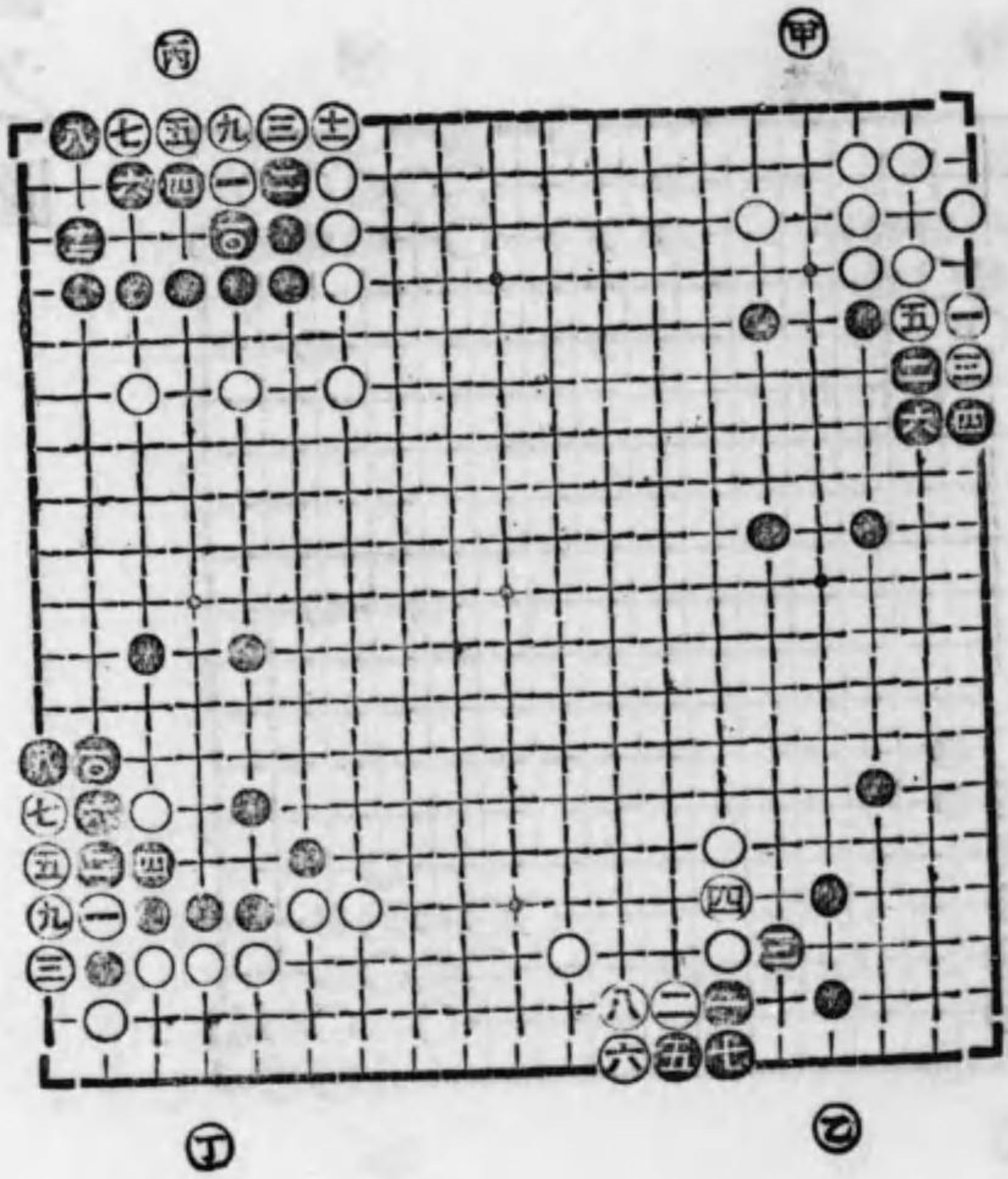
甲圖に於て黒一白二はよいが黒三はいけない黒三と打つた所で此隅は確實に占領できない即ち白にいろの何處に打たれても此隅を荒らされるから此隅を確實に占領するには此三の手でいに打たねばならぬ白四もこれでは隅の防禦にならぬ黒にはほのいづれに打たれても荒らされるからこれも此四の手で此隅を占領するならばにほに打たねばならぬ、乙圖にて黒一白二黒三白四はいづれも損な手である斯の如く打つては白黒共に不得要領である圍碁の根本の意義を誤つて隅を顧みない事になるからよろしく互に隅を早く占領する爲にいろはにの邊に打つべきである凡て碁の打始めは隅から打つのでかくの如き一、二、三、四の手は大損な手である。



いろはに
はほ
四
一
二
三
四
一
二
三
四
一
二
三
四

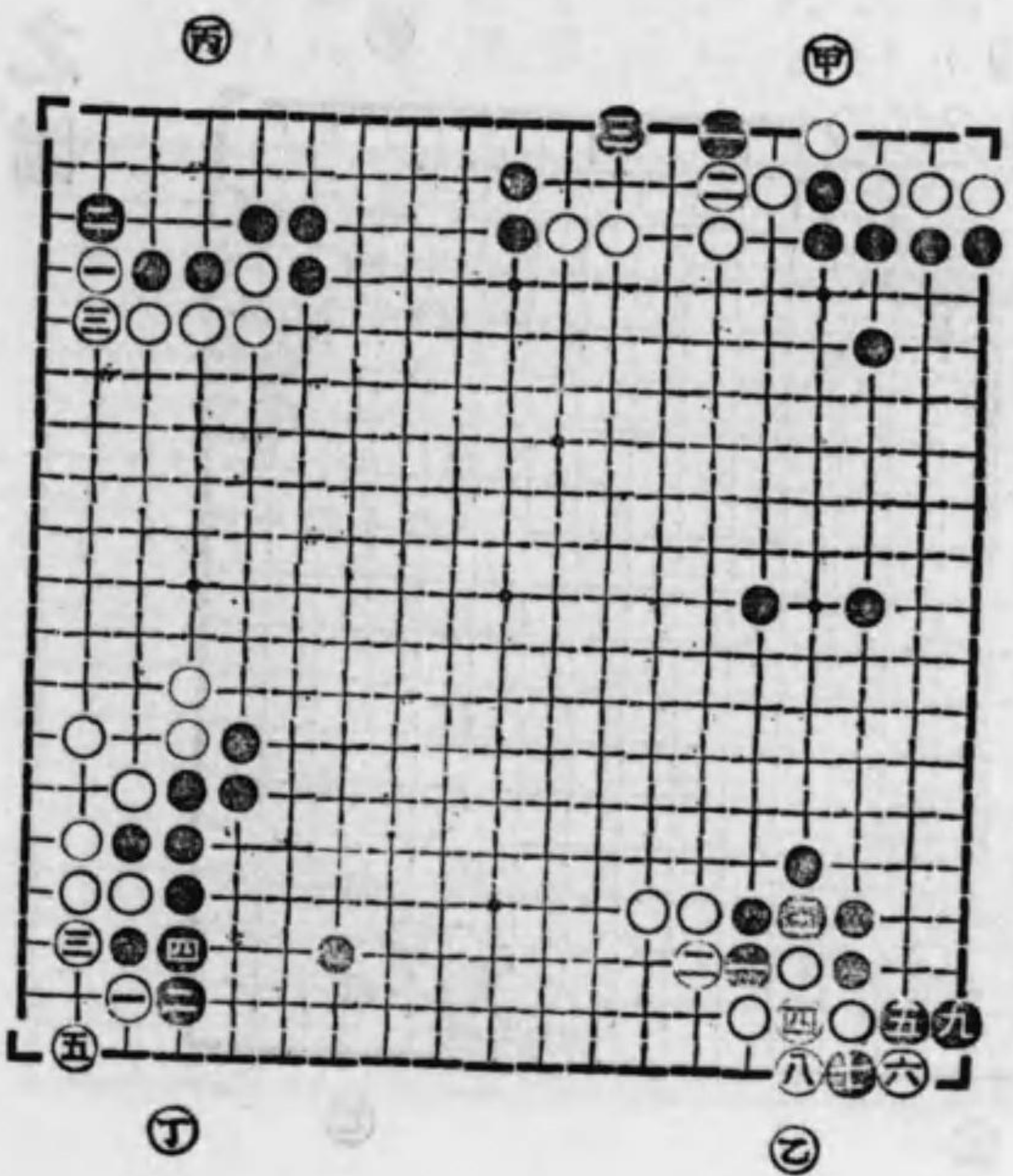
● 寄手損徳之圖

- ① 白先五目徳先手也
- ② 黒先十目程徳味最吉先手也
- ③ 白先七目徳先手なり
- ④ 白先十四目とく先手なり



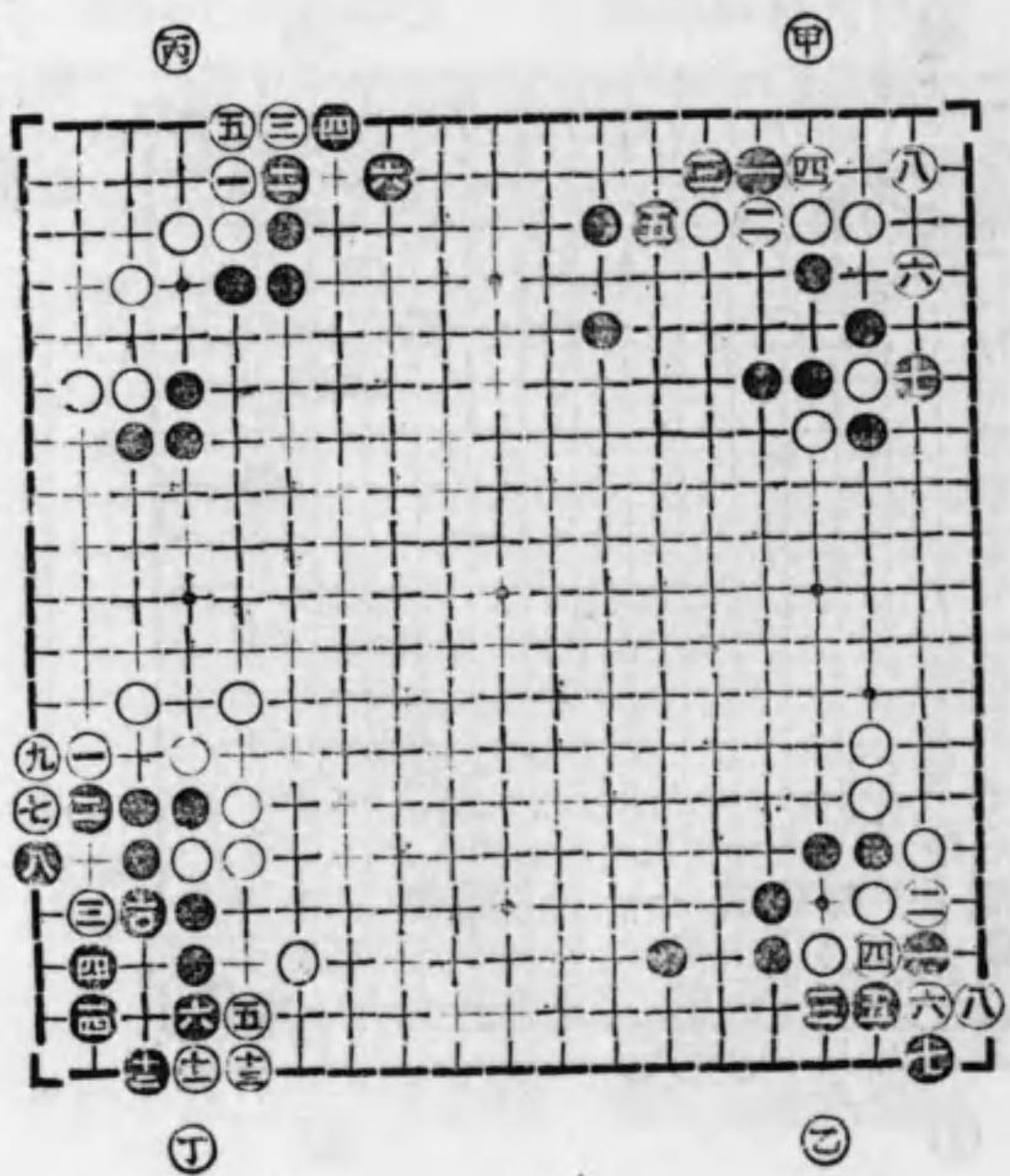
◎寄手損徳之圖

- ① 黒先八目徳後手なり
- ② 黒先十目とり後手也
- ③ 白先十七目に當る味大吉後手也
- ④ 白先十四目程とく但し五の手は先九目と知べし後手也



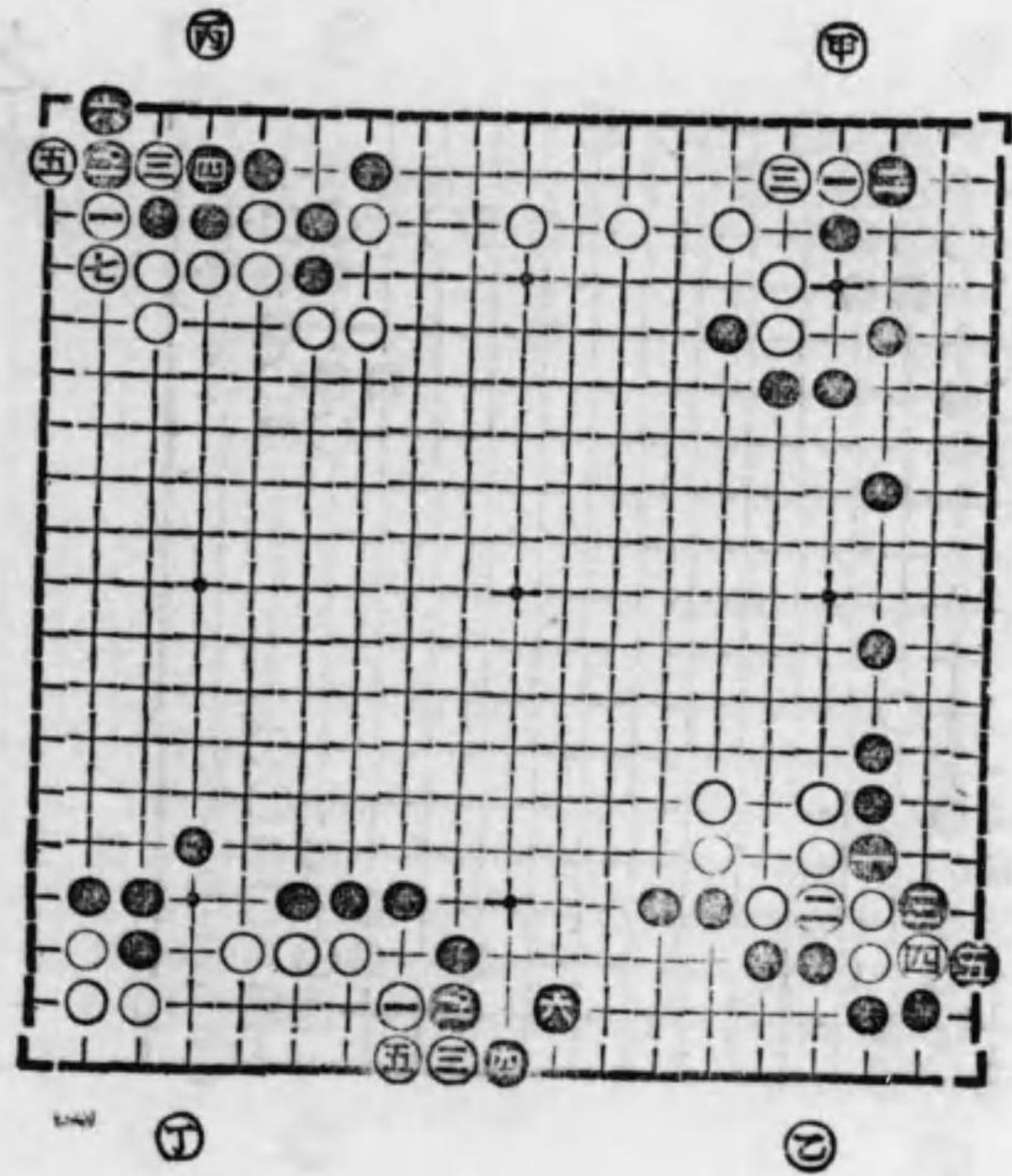
◎寄手損徳之圖

- ① 黒先五の手形によりて白の六の處へ打べし大に徳先手なり
- ② 黒先十一目程徳先手也
- ③ 白先粗四目程とく先手也
- ④ 白先六目徳先手也



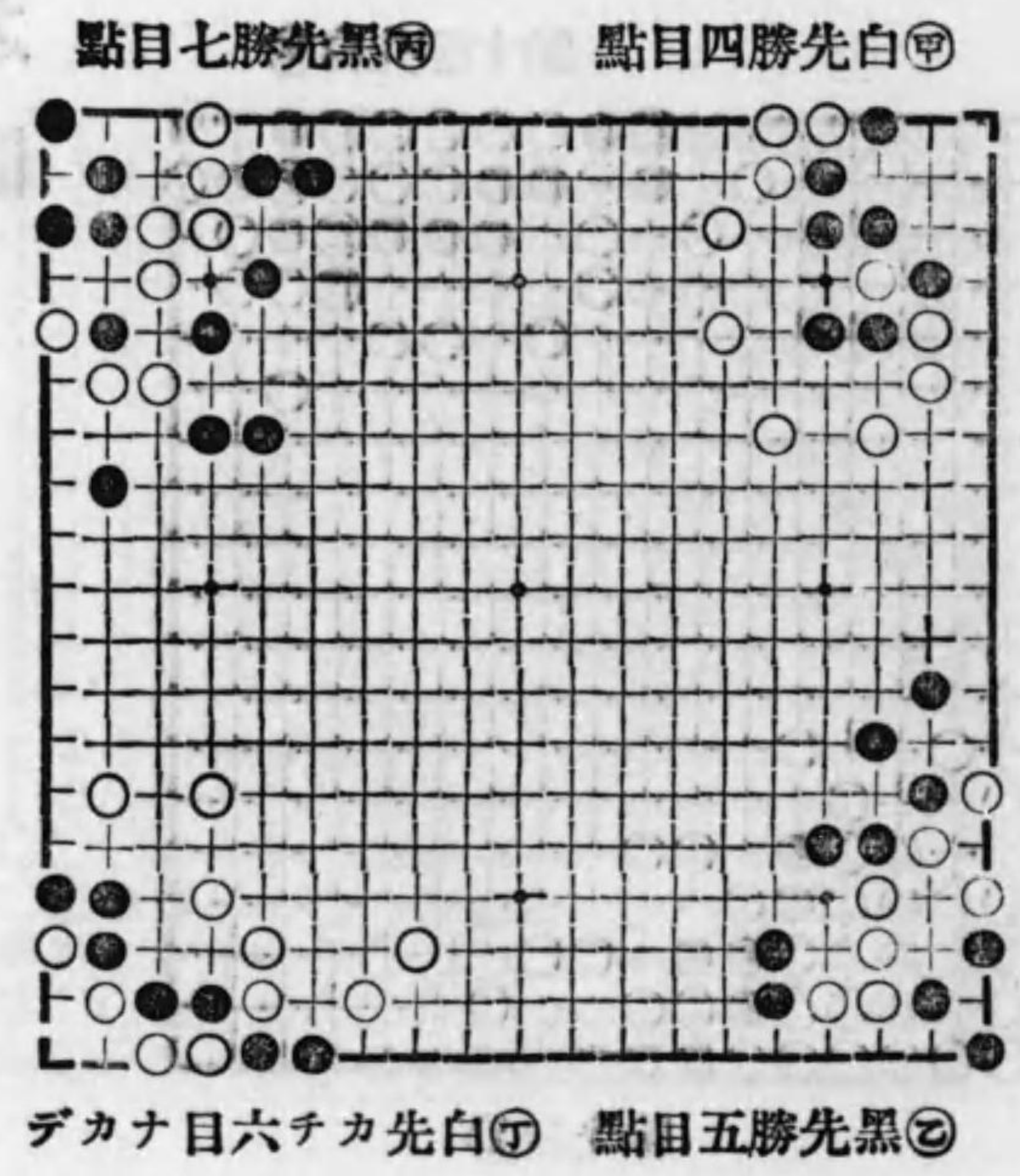
●寄手損徳之圖

- ① 白先徳後手也
しろまさきごてなり
- ② 黒先八目徳なれども味宜しから
くろまさきやくとくなれどもあじよろ
ず後手なり
ごて
- ③ 白先十目徳後手なり
しろまさきじゆくとくごて
- ④ 白先凡五目程徳手也
しろまさきおよそむくぐせんでなり



●詰碁點之圖

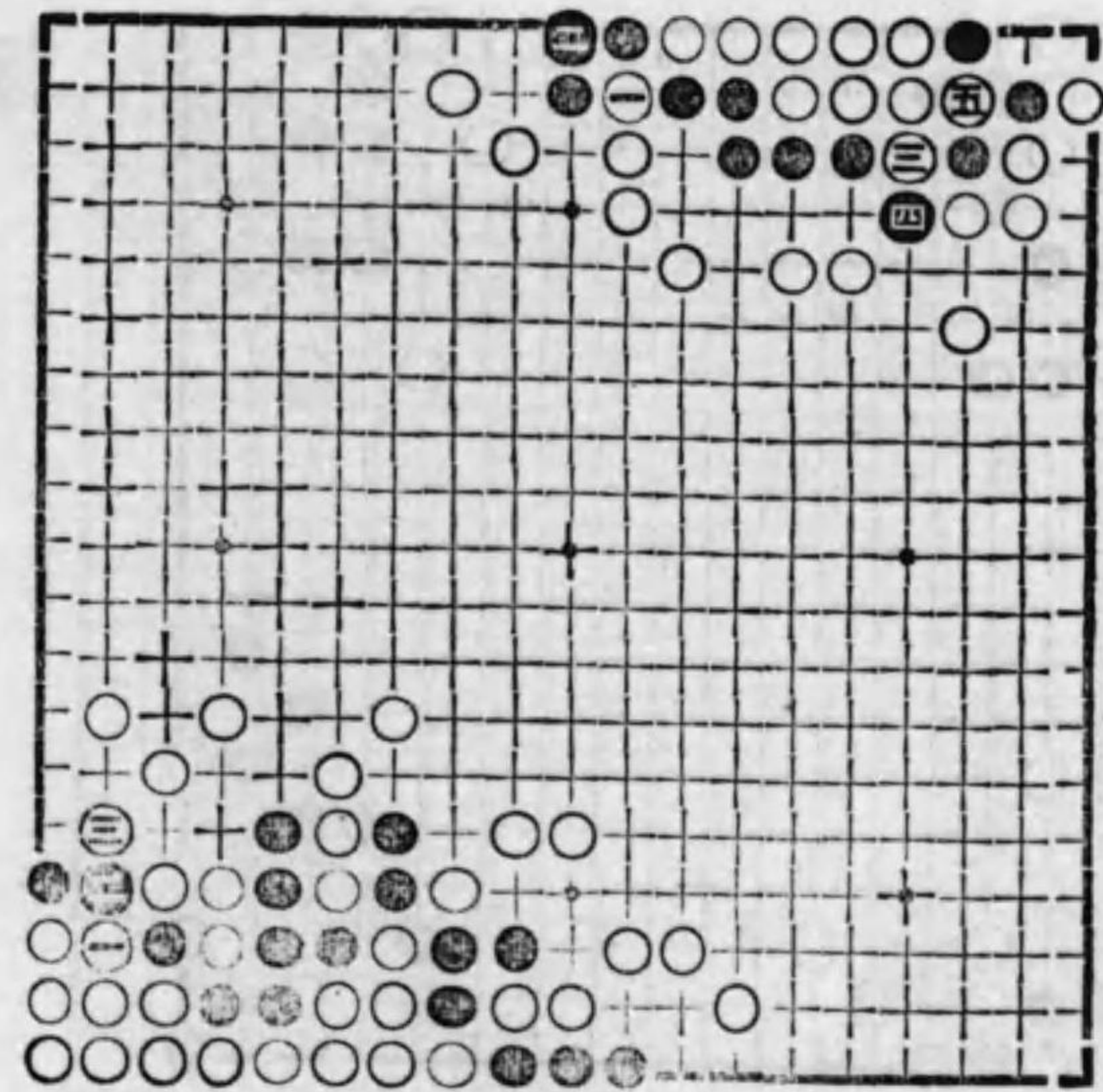
- ① ロノ二、ハノ二、ロノ三、イノ四、イノ五、ニノ四、イノ三、ハノ四、イノ二
- ② ロノ十七、ロノ十六、ニノ十九、ハノ十九、イノ十八
- ③ レノ五、ソノ四、ツノ四、ツノ六、ソノ一、レノ二、ツノ二、レノ一、ツノ四、ツノ三、ソノ二
- ④ ツノ十八、ツノ十九、ソノ十九、ツノ十九、ツノ十八、ソノ十九、タノ十九



詰碁點之圖

甲 六トル
 八ノ二
 十ノ三
 土トノ一
 乙 四トル
 七ニノ二
 九ホノ二
 土チノ一
 土ホノ一
 丙 レノ十八

甲 白先勝十點

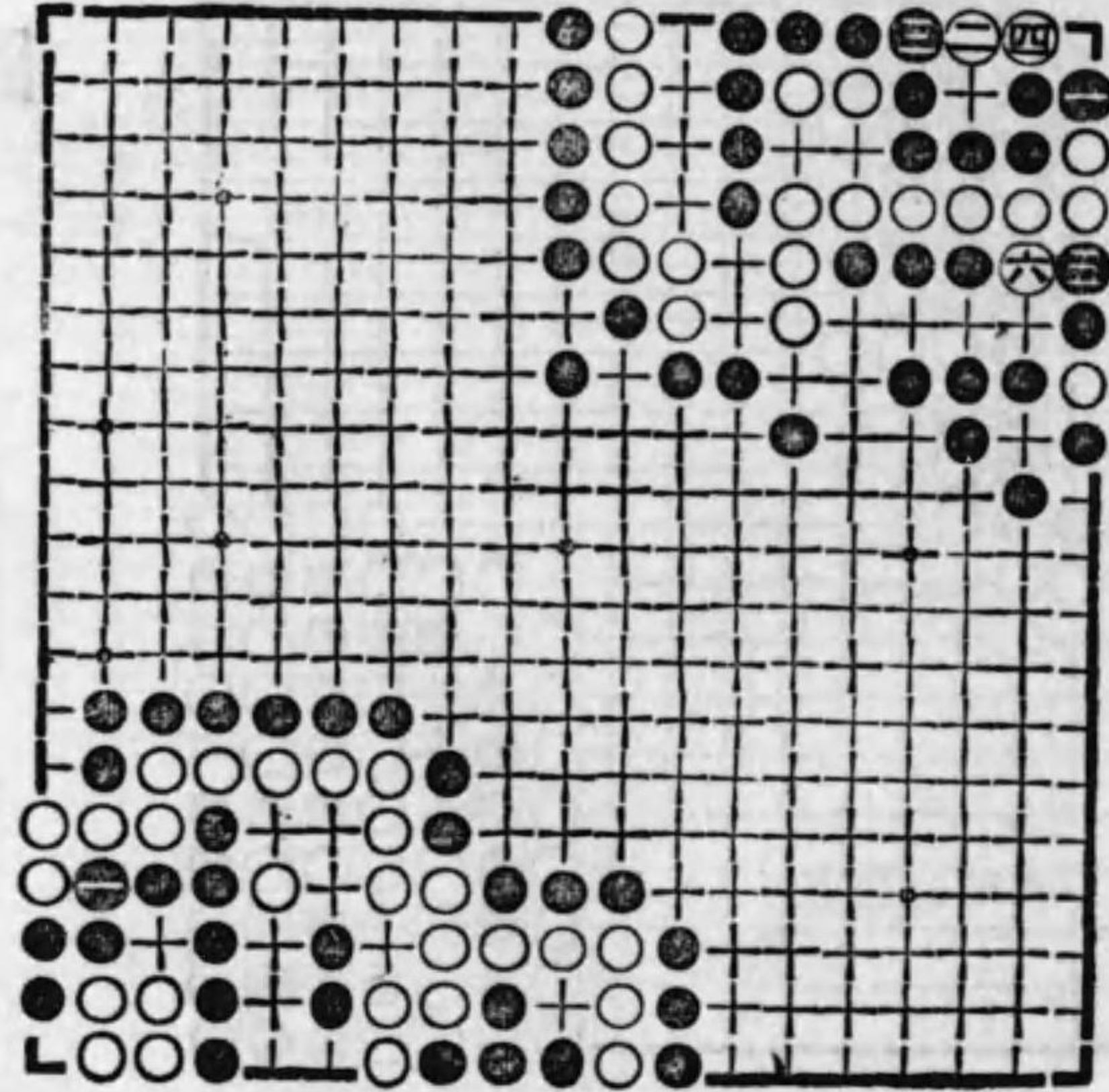


乙 白先勝

詰碁大點の圖

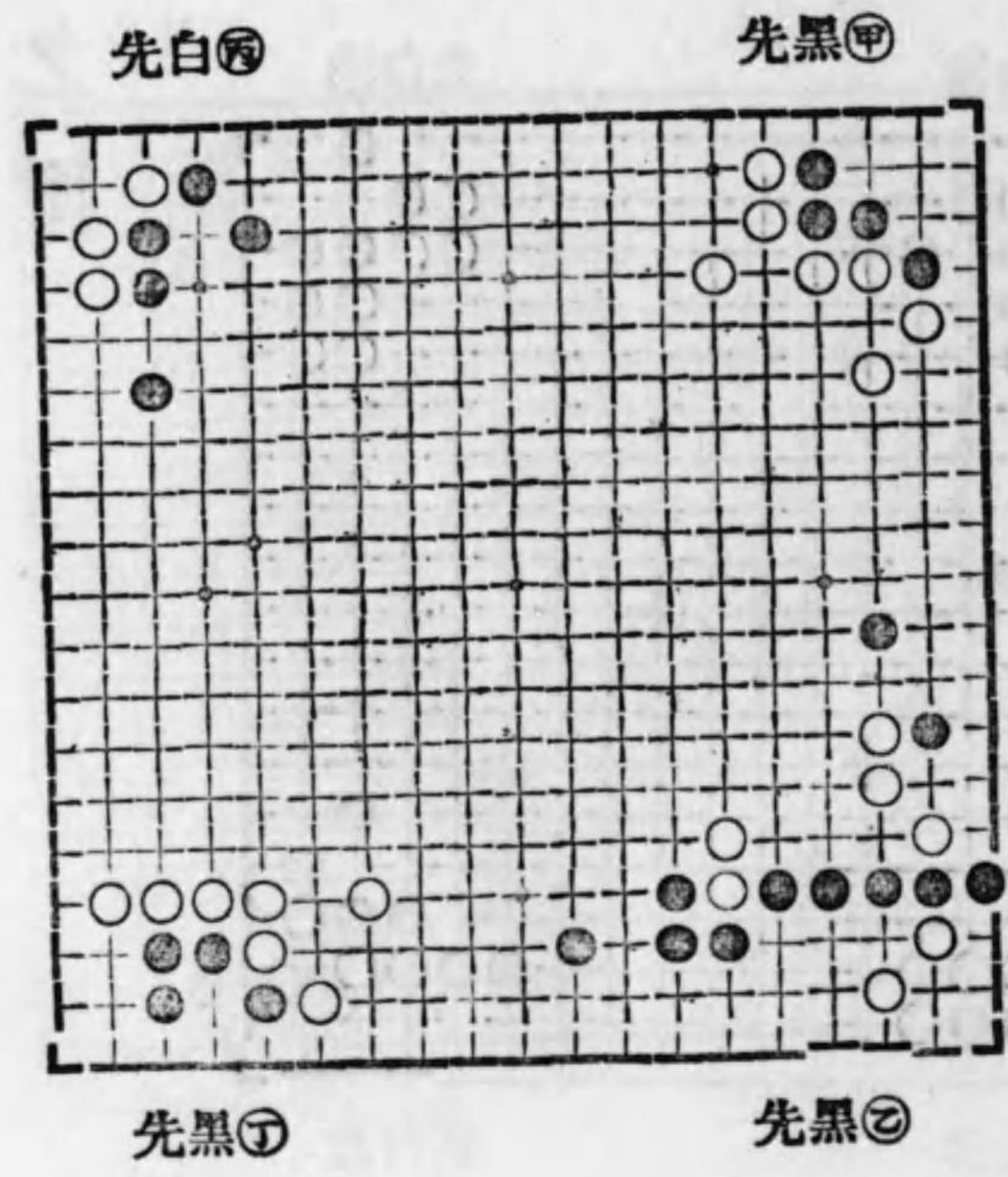
甲 七點 一目トル
 空眼を皆攻て後點をとり攻るとき
 は大點の方勝なり以下皆倣之初心
 の者へ此大點小なかでの理辨へざ
 る故攻誤るなり今爰に圖に示す

甲



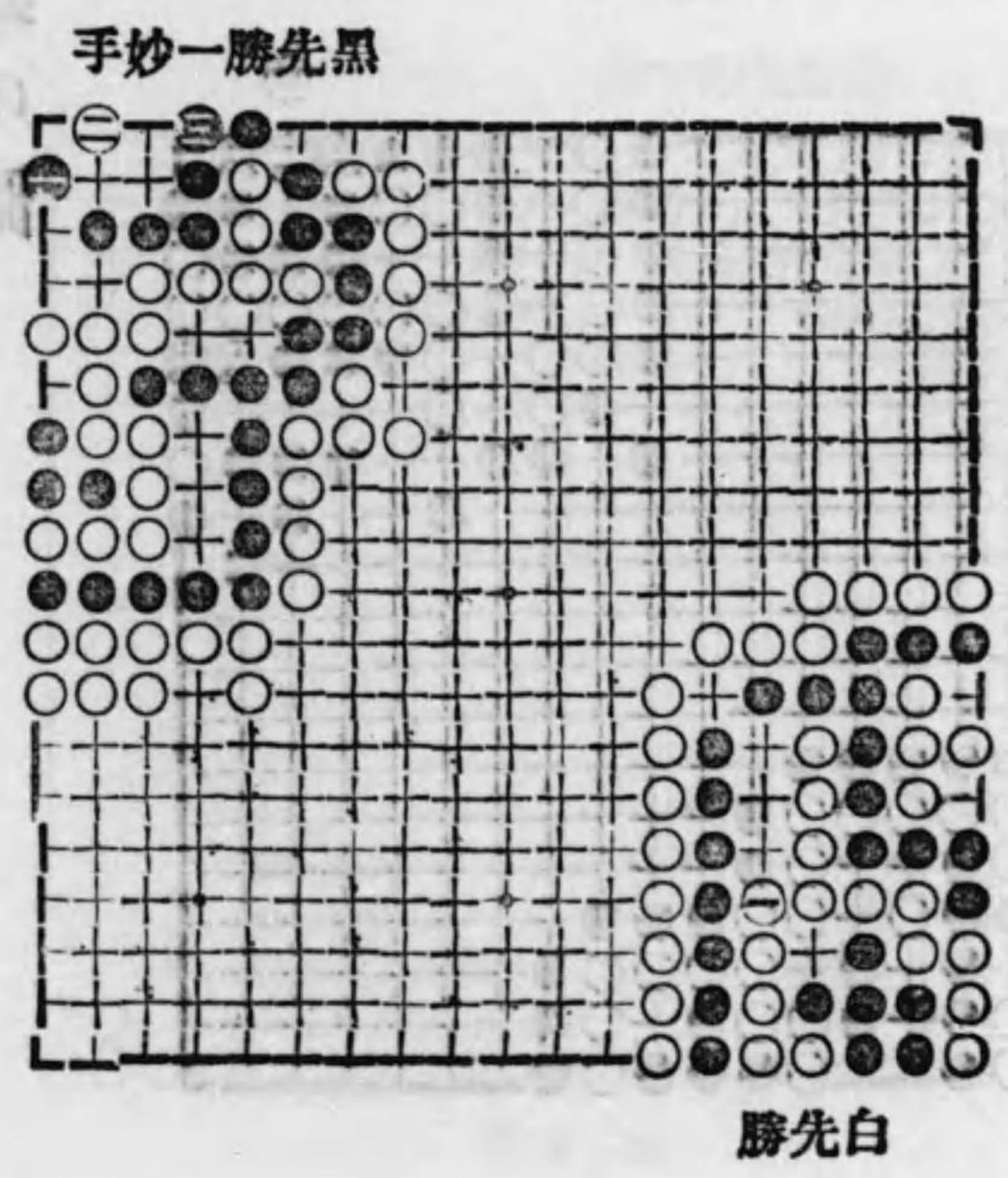
① ロノ二、イノ四、イノ三
 ② ホノ十九、ヘノ十八、イノ十八
 ③ イノ十七、ニノ十八、ニノ十七
 ④ ハノ十七、ロノ十八、ハノ十九
 ⑤ イノ十九、トノ十九、ホノ十九
 ⑥ ニノ十九、ニノ十七、ニノ十八
 ⑦ ロノ十八、イノ十八、ロノ十八
 ⑧ ハノ十七、ヘノ十八、ヘノ十八
 ⑨ ホノ十九、ロノ十八、ヘノ十八
 ⑩ ニノ十九、ロノ十四、ロノ十二
 ⑪ ハノ十五、ハノ十二、ニノ十六
 ⑫ ニノ十七、イノ十八、イノ十七
 ⑬ ロノ十九、レノ一、ソノ一
 ⑭ タノ十九、ソノ一、ソノ一
 ⑮ ツノ十九、ツノ十八、ツノ十九

詰碁劫之圖



一七一

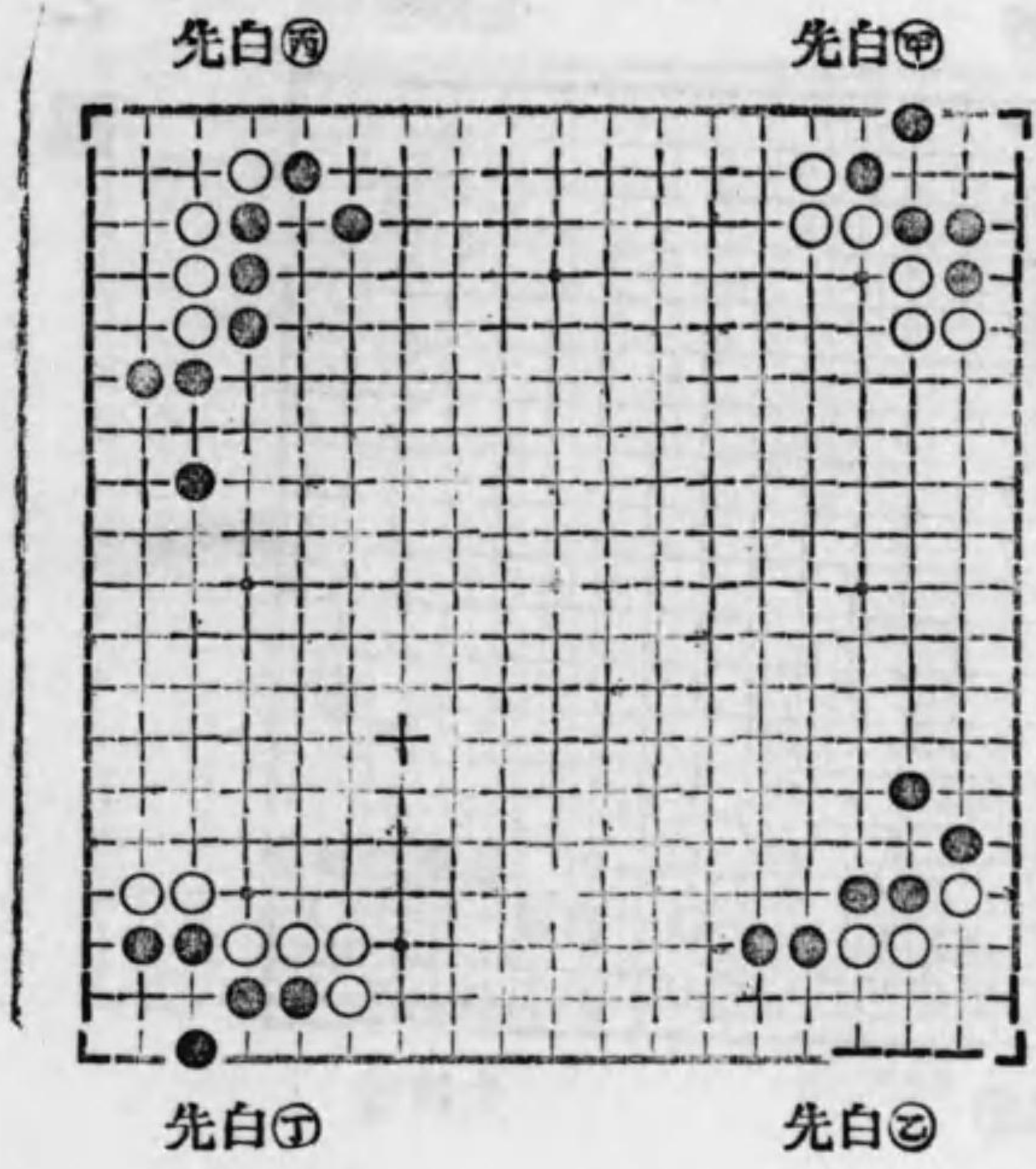
詰碁大點の圖



一七〇

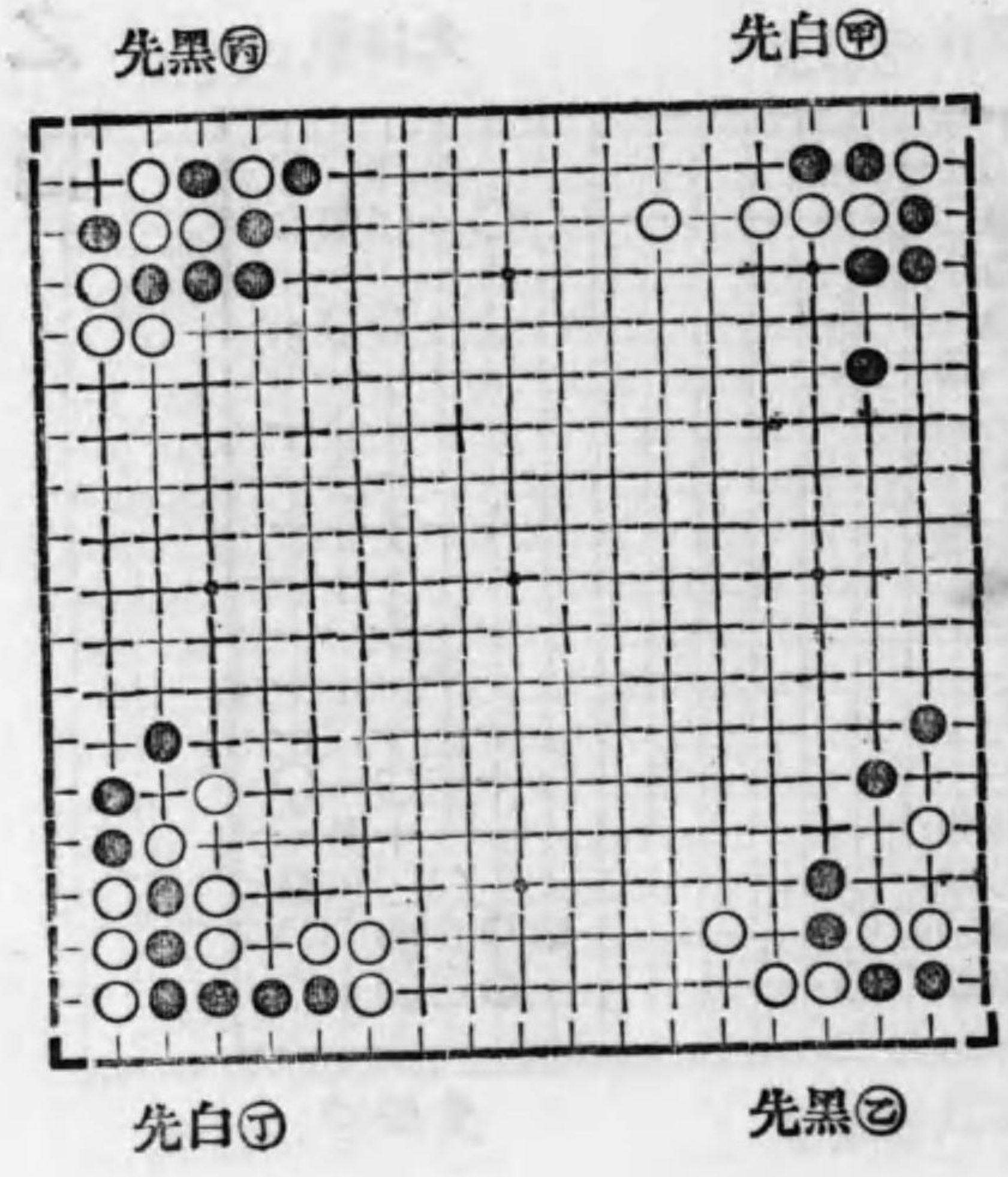
詰碁劫之圖

- ① イノ二、ロノ二、ホノ一、イノ一、ニノ一
- ② ロノ十八、イノ十六、イノ十七
- ③ ソノ二、タノ一、レノ一
- ④ ツノ十八、ソノ十八、ツノ十七
- ⑤ ヨノ十九、ソノ十九



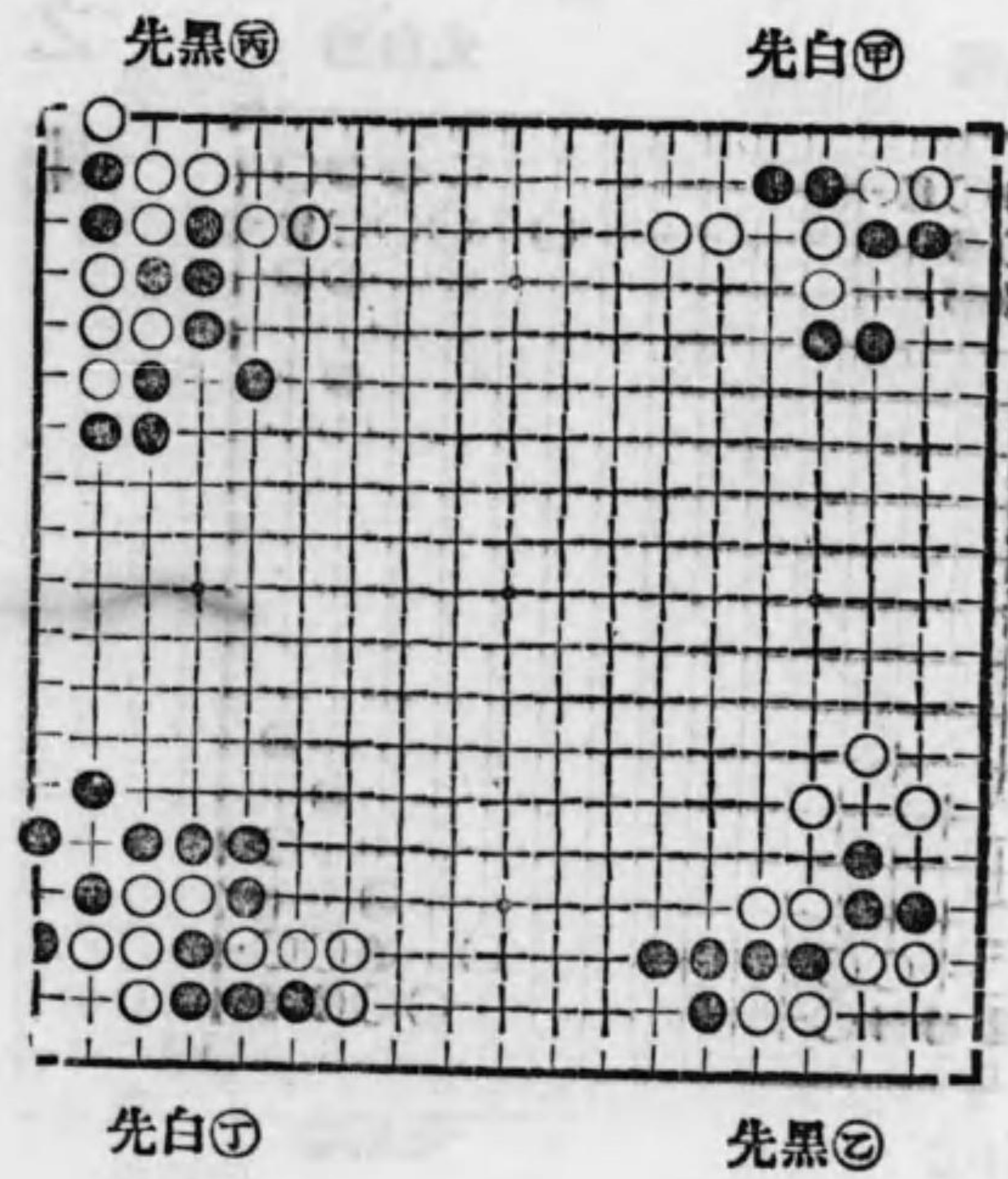
詰碁攻之圖

- ① ロノ一
- ② ロノ十六、ハノ十六、ハノ十五
- イノ十六、イノ十八、イノ十七
- イノ十四
- ③ ソノ二、タノ一、ソノ一、レノ一、カノ一
- ④ ソノ十九



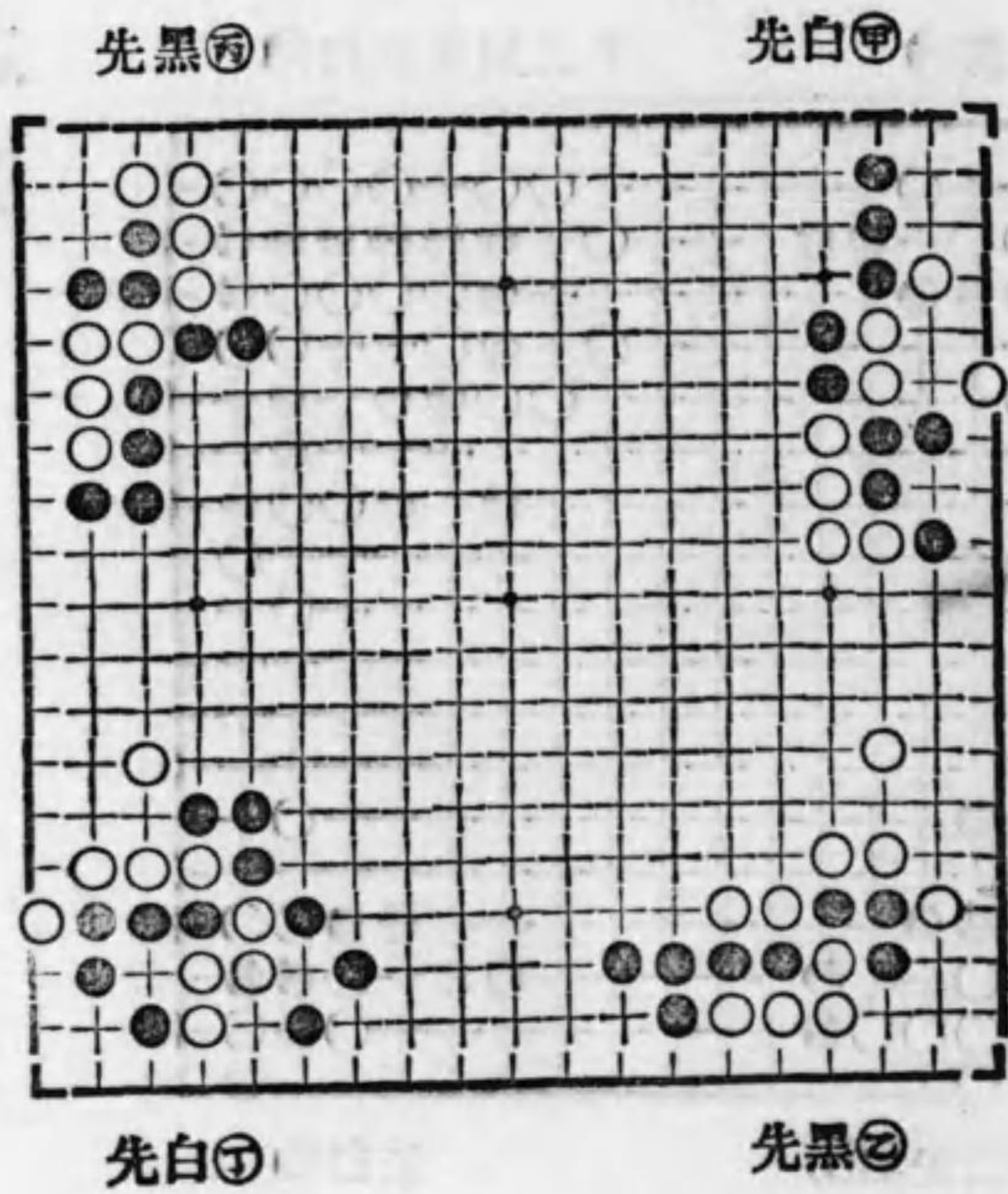
詰碁攻之圖

- ① イノ二、ハノ一、ハノ四、ロノ四、ロノ五、ロノ六、ホノ三
- ② ロノ十八、ハノ十八、イノ十七
- ③ ツノ二
- ④ ツノ十九、ツノ十八、カノ十九



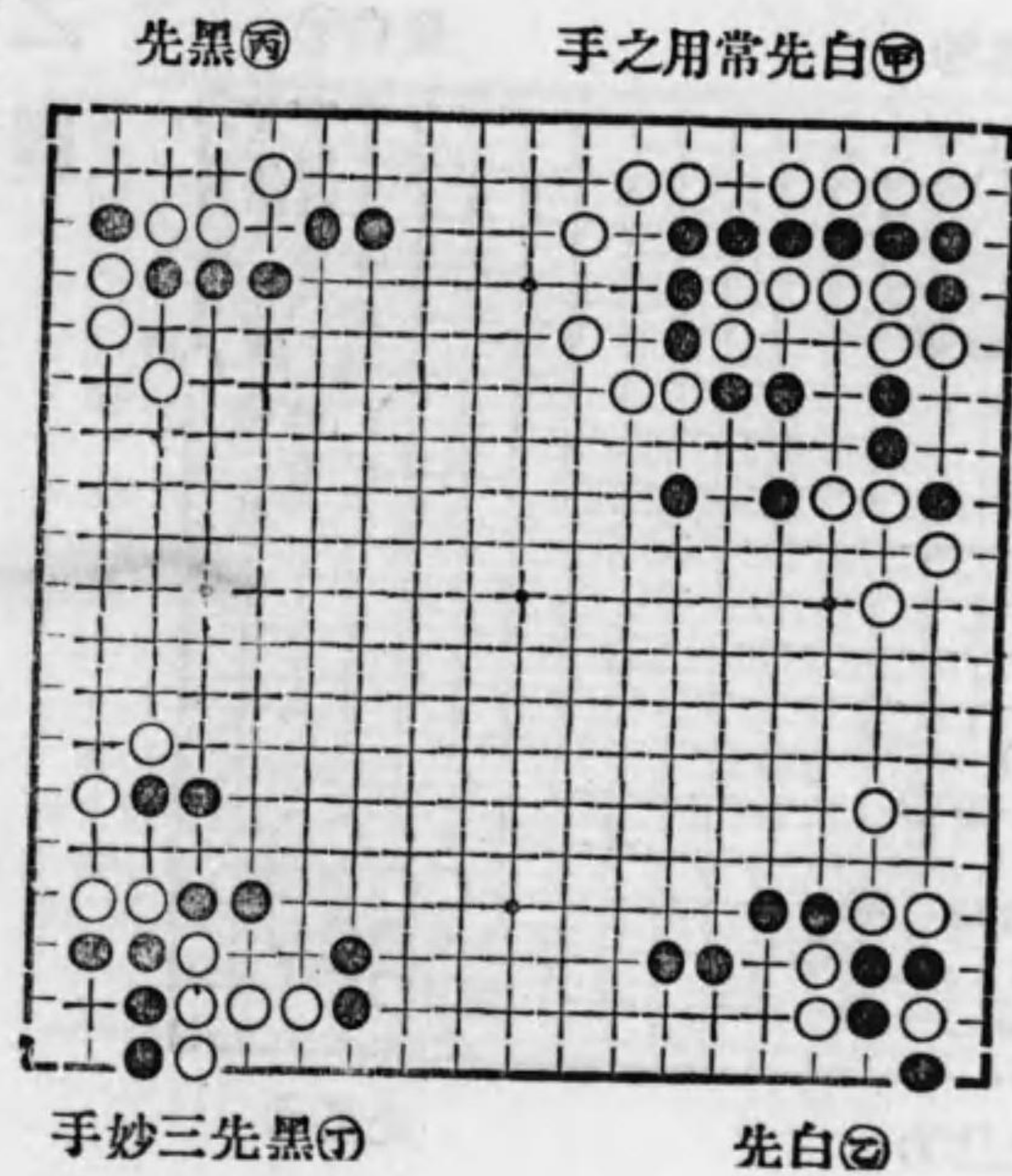
詰碁攻之圖

- ① イノ八、イノ九、ロノ十
- ② ロノ十八、ロノ十七、ハノ十八
- ③ イノ十八、ロノ十九
- ④ ツノ四、ツノ三、ツノ二
- ⑤ ツノ十八、ツノ十八、ツノ十九
- ⑥ レノ十九、ソノ十七、ツノ十九
- ⑦ ソノ十八、ソノ十九、ツノ十五



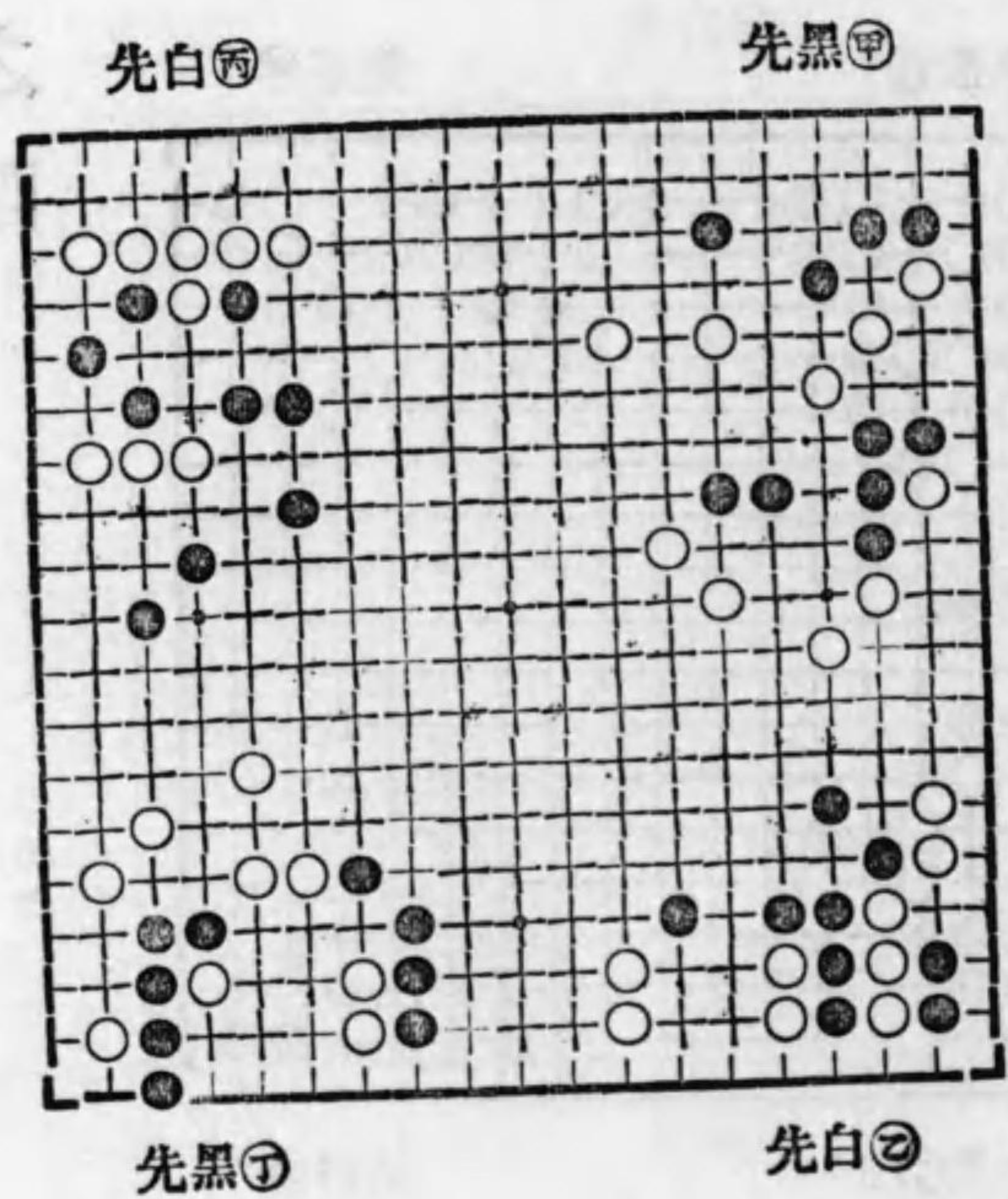
詰碁攻之圖

- ① イノ八、ロノ七、イノ五、イノ七、ヘノ二
- ② イノ十八、イノ十七、ニノ十九、ホノ十八、ハノ十九、イノ十九、ロノ十八
- ③ ソノ二、レノ二、タノ一
- ④ ツノ十六、ソノ十五、ソノ十九、ツノ十八、カノ十七



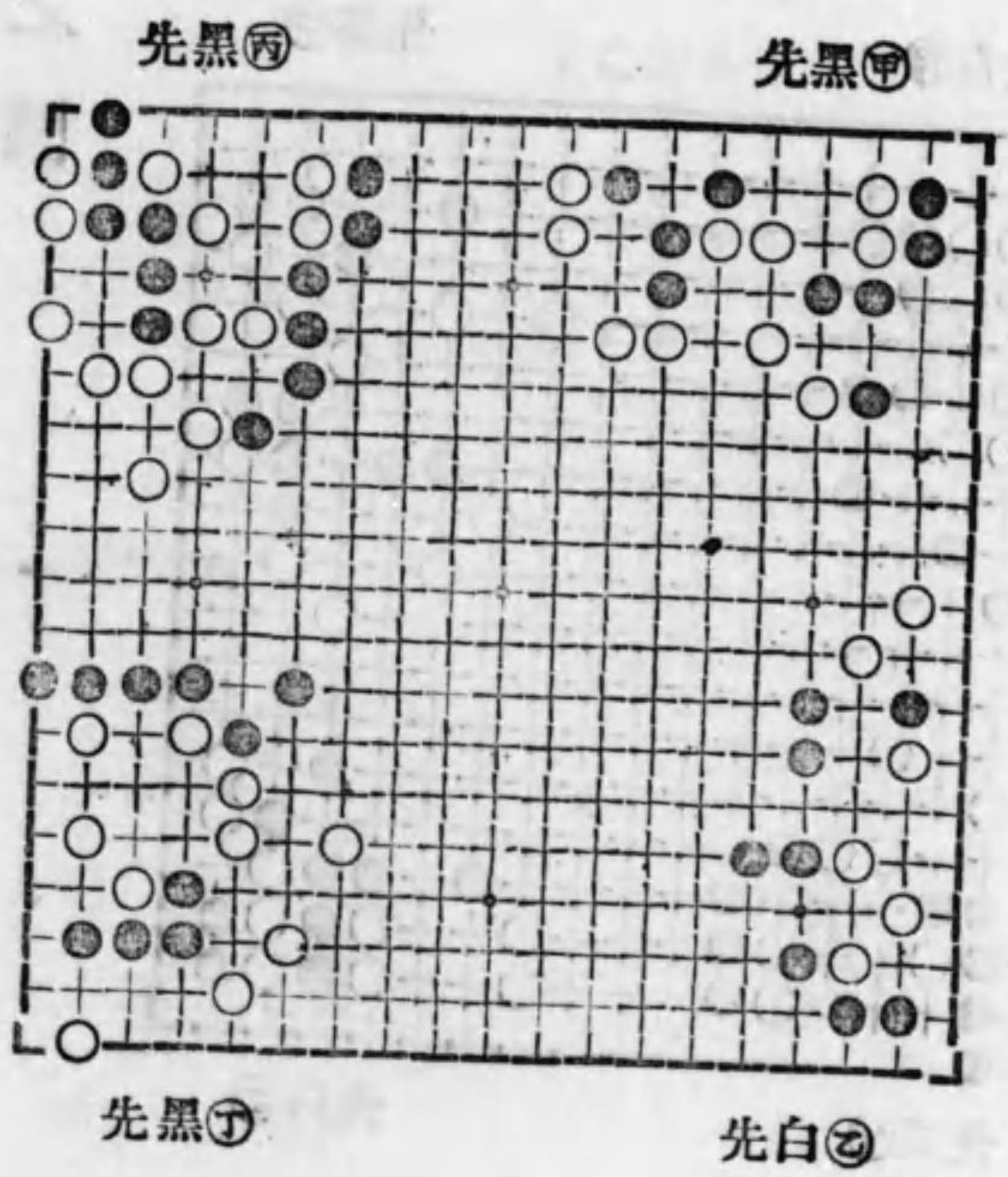
詰碁盤之圖

- ① ロノ五、イノ五、ロノ六、ハノ四、ニノ五、ハノ六、ホノ六
- ② ニノ十九、ロノ十六、ハノ十九、ヘノ十七、トノ十九、ヘノ十八、ヘノ十九
- ③ ツノ五、ツノ四、ソノ四、ツノ六、レノ五
- ④ カノ十六、ヨノ十六、カノ十七、ヨノ十七、カノ十八



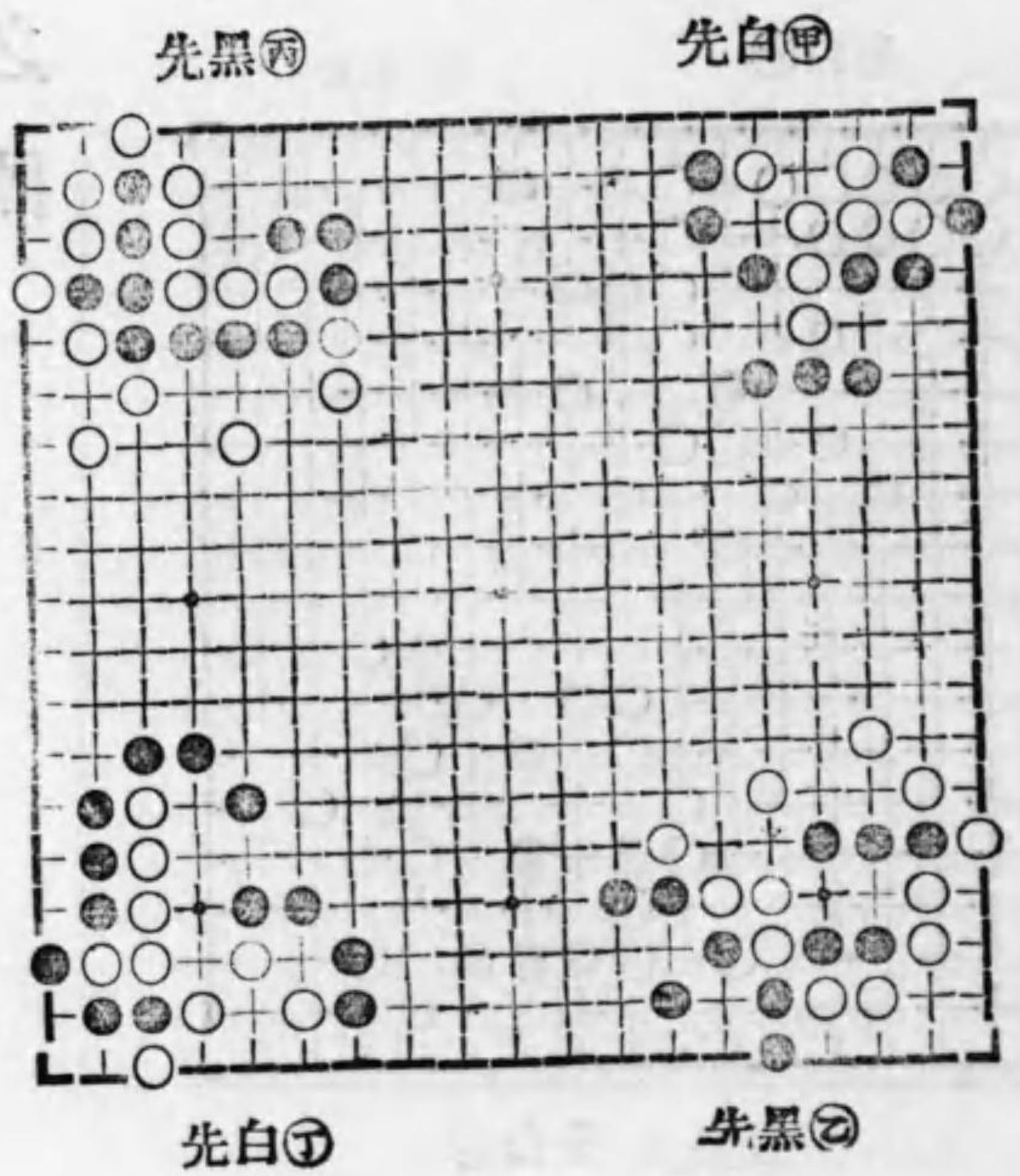
詰碁盤之圖

- ① ホノ一、ニノ二、ハノ一
- ② イノ十二、ロノ十四、イノ十四
ハノ十三、イノ十三
- ③ タノ六、ヨノ六、タノ一、タノ
二、カノ一
- ④ タノ六、ヨノ六、タノ一、ヨノ
二、タノ四、カノ四、タノ二
- ⑤ レノ十四、レノ十三、ソノ十四
レノ十五、ツノ十四



詰碁追落之圖

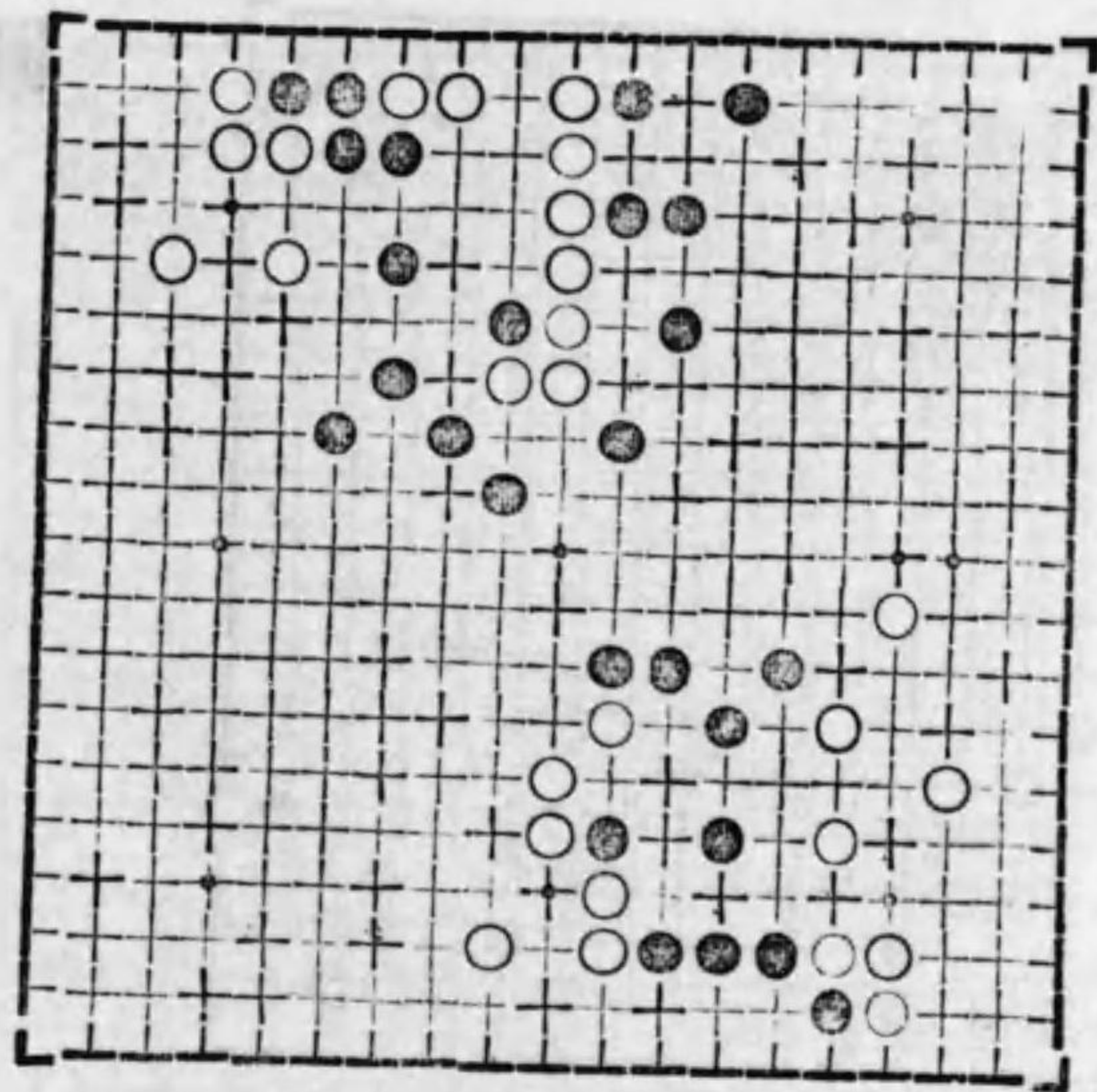
- ① イノ二、イノ一、ハノ一
- ② ロノ十八、ロノ十九、イノ十八
イノ十七、ニノ十九、イノ十九
ロノ十八
- ③ ソノ一、ツノ一、ツノ三、ツノ
五、ヨノ二
- ④ ツノ十八、ツノ十九、ツノ十六
ツノ十四、タノ十九



詰碁の之圖

- ① ツノ四、カノ四、ツノ六、カノ六、カノ五
- ② トノ十四、チノ十四、ヘノ十四、チノ十三、チノ十六

先白①

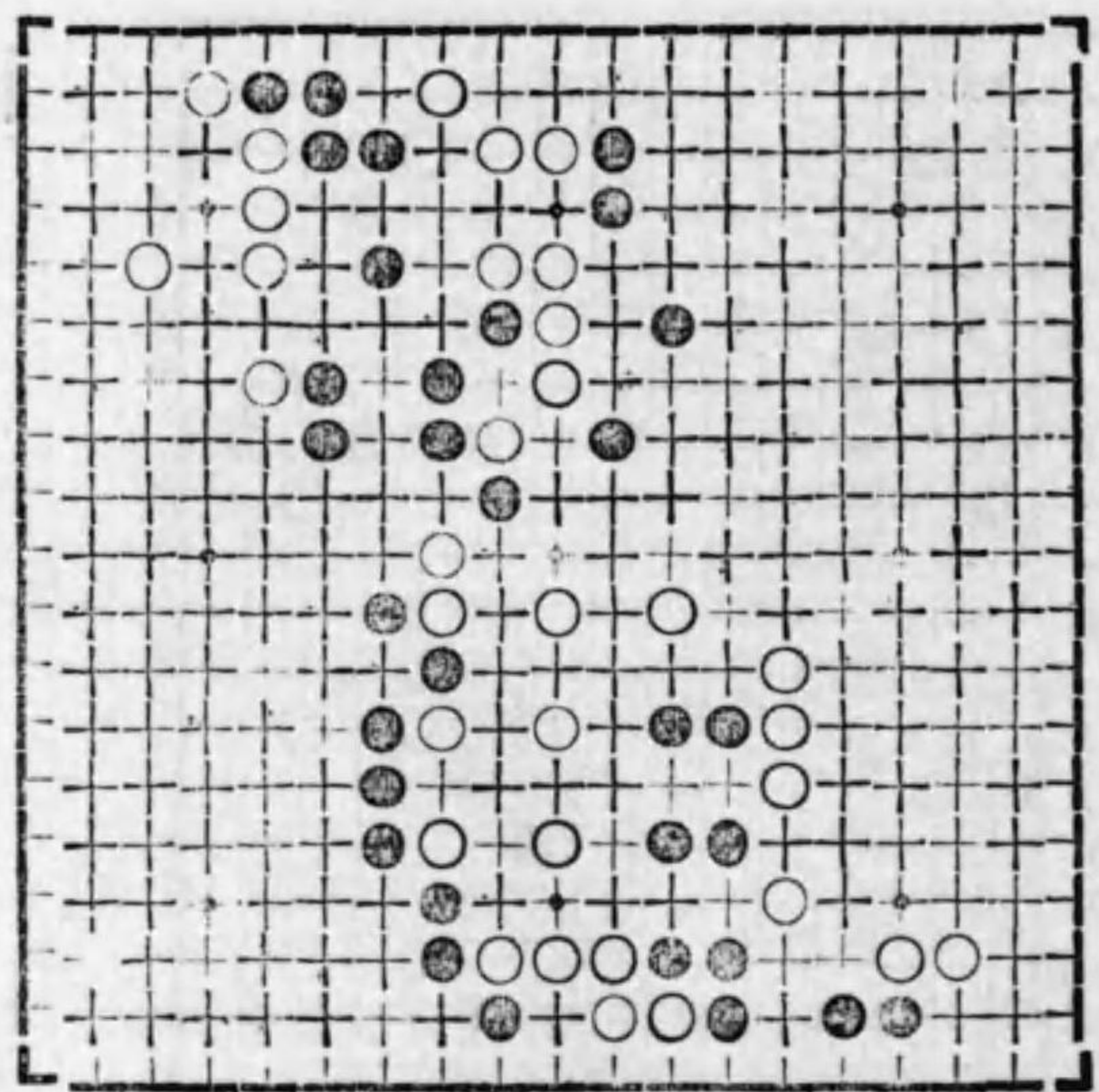


先白②

詰碁爽之圖

- ① ツノ四、カノ四、ツノ六、ツノ五、カノ五
- ② ヌノ十四、ルノ十四、リノ十四、ルノ十二、ルノ十六

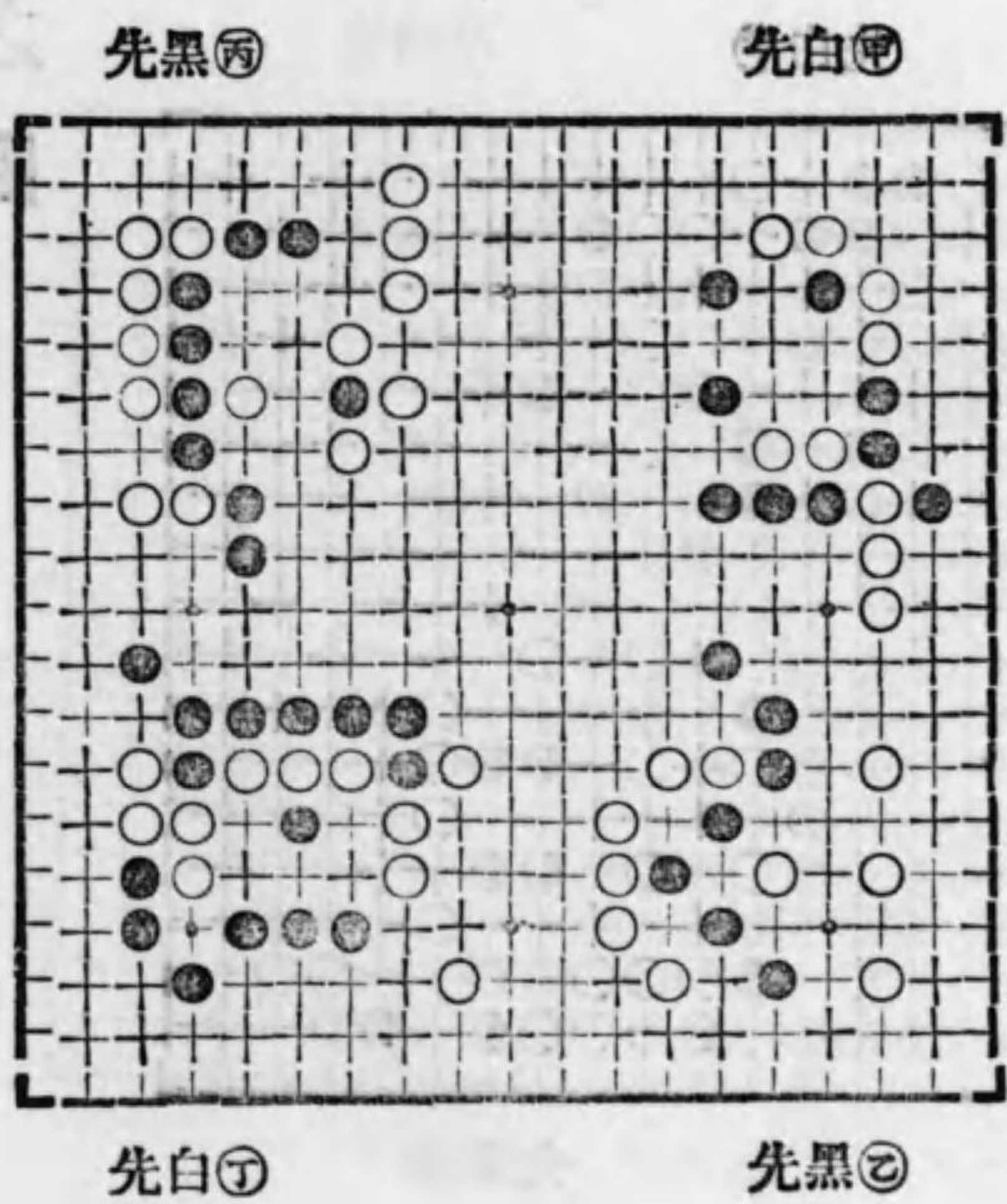
先白①



先黒②

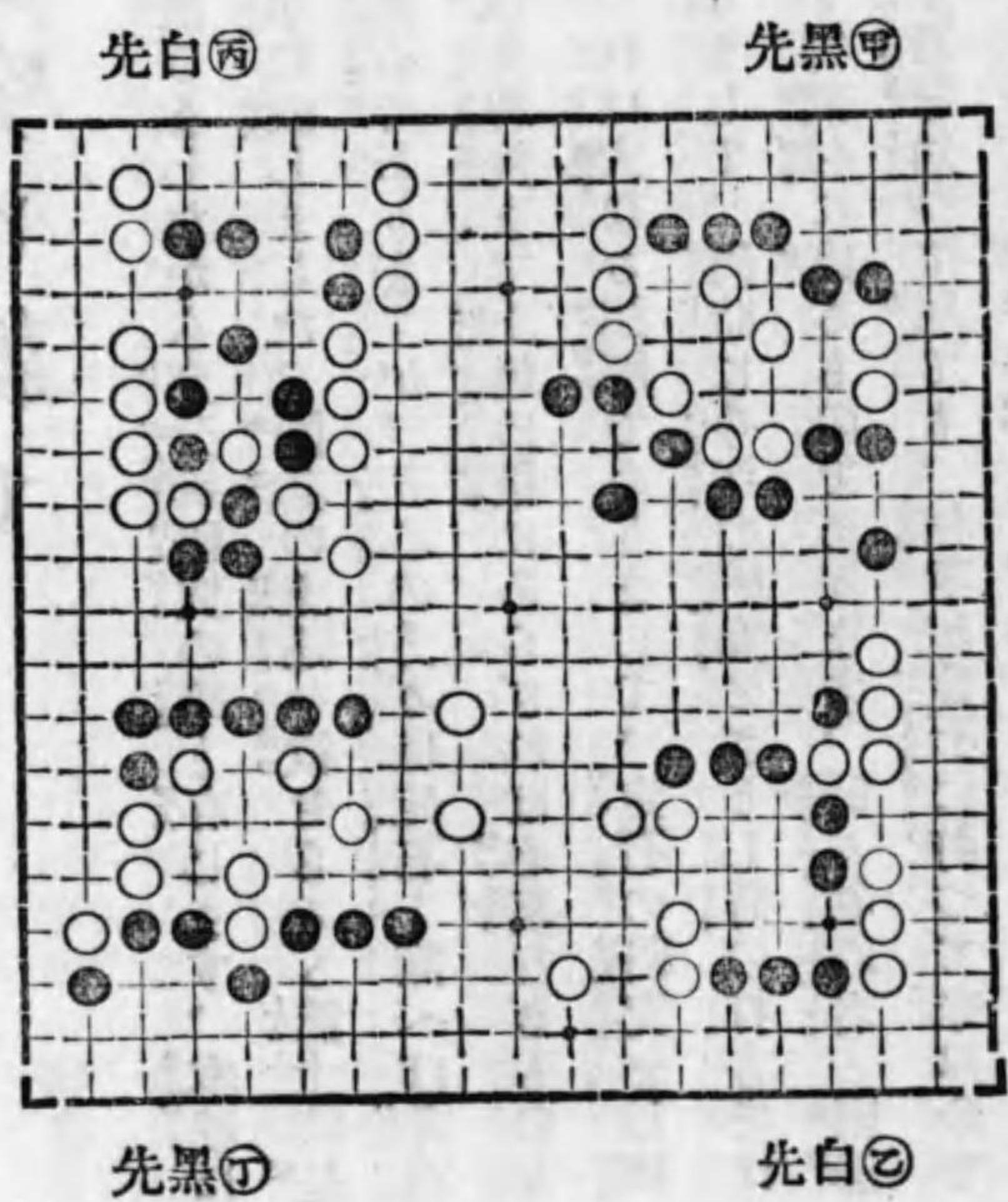
詰碁爽之圖

- ① ホノ五
- ② ニノ十五、ニノ十四、ホノ十四
- ③ カノ六、ヨノ四、カノ五、カノ七、ヨノ七
- ④ カノ十五、ヨノ十四、ヨノ十五



詰碁斷之圖

- ① ホノ六、ニノ五、ヘノ六
- ② ホノ十五、ヘノ十五、ホノ十六、ヘノ十六、ヘノ十四
- ③ ヨノ四、タノ四、タノ五、ヨノ六、カノ四
- ④ ヲノ十四、ヲノ十三、ヲノ十三、ヲノ十五、カノ十四、カノ十五、ヨノ十四、タノ十四、カノ十三



定石の研究に就て

置碁の定石は略前號に掲載いたし置きましたから充分御研究の事と存じます、本號にも亦互先定石の概略を掲載いたす事に致しました、圍碁の上達を欲せらるゝ諸士は是非共研究せざる可からざるものは定石でありますが、初心の方々は定石と謂へば非常に六ヶ敷きものゝ様に想ひ、且つ或る程度まで上達の後にあらざれば必要なきものゝ様に思はるゝ方々もありますが、夫れは大なる誤解でありまして、定石の研究をし初めますると非常に面白いものでありまして、同時に今迄の研究せざりし時の打方ではなるほど上達の遅きも故あるかなと御氣付に成るものであります、時々初心者と圍碁の話を致しますると、自分が何程定石を知つて居ても、相手が定石に打つて來ぬので何にもならんなど云ふ事を耳に致しますが、誠に間違つた話でありまして、夫れは俗語で云ふ喰はずきらしい、味知らずであります、他の事に例へて見ますと、茲に一人の男が柔道の研究を初めたとして見まして、未だ許しを得るに至らないからとて、他の

素人と闘ふ場合、何方が勝か負けるかと云へば、殆んど議論の餘地なき事でありまして圍碁の定石も亦同様であります、定石を少し心得あれば少し丈、又澤山覺ゆれば澤山丈の實戦に効を奏する事は議論の餘地なき所であります、申すまでもなく定石は古來より今日に至るまでの名人上手が研究に研究を盡くされた最上の打方でありましてこれ以上は名手なきものとされて居ります、恰も大審院の判決例と同じ意味になります、其れ程のものを何故に現代の圍碁の研究者が等閑に附せらるゝかと云ふに、前に陳べました様に非常に六ヶ敷きものとの想像からであらうと存じます、なる程最初の時は一寸六ヶ敷き様でありますが、茲に圍碁の上達を欲せらるゝ諸君の最も注意を要することは圍碁の出版物又は先輩等に定石の打方を示されたる場合、尙之れが變化の説明を實見されたる場合に、成る程定石は最良の打方だと認めらるゝ事は萬人一様であります、そうして見ると諸君は定石なるものが六ヶ敷くして理解し能はざる程の低き頭の持主にあらざる事が判明します、然るを圍碁は上達したし定石は等閑に附するは何故かと云ひ度くなり、之れを多數の方々によりまして調査して見ますると、